## 山岳



XLVI-XLVII



### Щ

### 岳

第四十六·四十七年



## Щ 岳 第四十六·四十七年 目 次(一九五一・二年度)

(芸絲 佐藤 クー 身)	九三	(第二圖) "	
à		北尾根四・五峯鞍部から見た四峯岩壁	北尾根四
<b>写空 ファ・・・ 7 個</b> ・	繁雄… 凸	北尾根五峯から見た四峯岩壁(第一圖)石 岡	北尾根五
東部 ガレフーレ 聞		MATTERHORN & LA VILLA REY	MATTE
ン・現在の聞い		GUIDO REY	GUIDO
メノレノツェ 丘痔り間	HI	化雲岩のキャンプとトムラウシ山 〃	化雲岩の
· モ	三	銀杏原からの南望 〃	銀杏原か
白馬・親不知國境主稜槪念圖	三	銀杏原キャンプ (C) の朝 〃	銀杏原キ
五峯又白側尾根よりの四峯ルート圖(第四圖)	FI.	白銀莊を出發して稜線へ 〃	白銀莊を
	-	キャンプ (C5)	化雲岩のキャンプ
奥又白尾根からの四峯正面概念圖(第二圖) 51	山岳部… ス	北大	十勝・大
明神岳五峯東壁略岡(第一圖)	玉	カマル・ホテルの炊事場 〃	カマル・
	i	ット踊 〃	チベット
銀杏ヶ原第四キャンプの圖	ivei i	アトポラ・デパール前の石像 〃	ニアトポ
大雪山十勝岳附近の圖 宣	<u></u>	ボダ・ナートのチベット佛教寺の大塔 〃	ボダ・ナ
ネバール・ヒマラヤ略區	九	カトマンズ繁華街の寺群 〃	カトマン
	Л	ポラ・デパールの五重塔 〃	ニアトポ
揷圖	Æ	サインタン山群をのぞむ 〃	ゴサイン
アンナブルナ (八〇七八米) (フランス山岳連盟)100	榮三郎…	ネシュ・ヒマール山群 堀	ガネシュ
仁田河内岳附近から見た聖岳日 高 信 六 郎…111 白鳥山より白馬岳方面を望む岸 田 權 二…110		版	

位.

木 ル 紀 行

西 堀 榮  $\equiv$ 郎

安嶺等 に實現 の目的を達成するための準備工作の一であつたことは申す迄もないが、 大生物誌研究會」が結成されて、三度ヒマラヤ遠征が眞劍に採り上げられた。 られる見通しと彼地の事情を調査してくることであつた。 な目的は何かと云うと、 本年二月幸いにもネパールへ入國が出來たのは每日新聞社の厚意によるところが大きいのだが、 御承知の通りであるが、 京大旅行部を母體とするAACKは一九三二年、一九三八年の二回に亙りヒマラヤ遠征を計畫したのだが當時は遂 遠征 のはこびに到らず、 へ探檢を記録した。 の計畫を日本山岳會 今年か來年にネパー 私としても非常なよろこびなのである。 戦後講和發效の明るい見通しを得らるゝに際して舊AACKのメンバーが母體となり「京 其後AACKは京大探檢地理學會との協力の下に内蒙古、 へ移譲するの議がおこり、 ル・ヒマ ラヤ 今日では既に會の計畫として着々進捗の段階にあることは各 ヘエクスペディションを派遣するについて、 私の歸國後愼重協議の結果、 私が此の度ネパ 白頭山、 樺太、 1 N では私の入國の主 赴 この京大の ポナペ、 その許可 いたの 大小與 の得 Ł 2

パ て、 から 0 度 前 h 勢力が衰退するに從つて、そこに革命が起りネパリ・ナショナル・コングレスというのがその結果として生れた。 命以前は恰度日本の徳川時代のように將軍政治が布かれておつて、外國人が入國してくると必ずそのあとに軍隊が 印度に踏みとゞまつて、ネパール入國の機をうかゞう傍ら、 D 人として木原均博士に同行して渡印する機會を得、 それとは到來しなかつた。 て來るから外國人は入れてはいかぬ 7 へ來てみてますますはつきりした。 から非常に難しいと云われていたし、 過 デモ その國王を戾して、もう少し穩和な政權が出來るようにというので、また政治異變があつて昨年の二 その人達が革命を起した直後には、 味は話によるとチャンドラ・ボースなどの一味だそうで、從つて多少過激な思想を持つていたように聞いている つまり國王と今の皇太子は印度へ逃げて了つた。 激派 昨年 7 ード氏、 ングレ クラシーの宣言がなされ、議會政治が行われるようになつたのが、恰度昨年の二月十九日であつた。 秋以來印度へ渡ること、 ネパ ラフール ス (先程のナショナルがとれた) 氏等にわれわれのヒマラヤ遠征の計畫に對する意見を徴した。 處が幸いにも本年一月カル 出來ればネパールへ入國することが屢と考えられたが、そんなうまい機 というのは御承知の通りネパールは一昨年十一月頃に革命が起つたが、 という所謂鎖國政策がとられていた。 ングレスの人達は牢屋に放り込まれて、それがずつと今年の一月末まで及んだ 當時三歳の今の國王の孫に當る方だけが首都 戦後は勿論戦前も入國した日本人は算える程しかない有様で、このことは印 が出來た。こういう現在の政權が出來ると同時に國 この好機を最高度に利用する考えのもとに學術會議終了後も一人 併しそれも行き過ぎであるというので、 カッタで印度學術會議が開催されるに際し、 印度政府の要人に面會し、 處が印度の獨立に影響され、 カトマンズに残 併しネパールへ入ることは以 またヒマラヤン・クラブ 印度からの掣肘 日本側代表者の 王 から 月に漸くネ 會 つて來て その その時 祖 は お 0 0 60

所謂

0

IJ

. ナシ

3 ナル .

7

のである。

な方法では到底入國はおぼつかないことが解つたので、今度は少し手をかえ何か直接行動に出るような方法はないか 許可願を出したつて、どうせ行かれやせぬにきまつている。というようなことを盛に聞かされた。 商とかが正式の入國許可願を出して大勢待つている。中にはしびれを切らして旣に歸つた人もある。お前も今頃から 人を入國させるようになつたが、なかなかそう簡單には入れてくれない。私が恰度カルカッタに行つていろいろ事情 そういう國家情勢にあつたから、國内はまだ十分に治まつているとはいえない。それがために一應開國はして外國 ニューデリーには大勢の異邦人がネパールへ入りたがつて待機している。 例えば新聞記者とか貿易 これでは尋常一様

そんな人に面識はないのだが、兎に角竹節さんに紹介狀を貰つてきているのだから、その人に連絡をしてみようと思 第一回アジアオリンピック大會の時に、ネパールチームのキャプテン銀マネージャーをしていた人だ。 .い私は每日新聞の竹節さんから一枚の紹介狀を貰つていた。それはクリシュナ・ハナドール・バーマと云う人宛 併しそれだけではどうも頼りないので、もつと荒い手を打たぬといけないと思つて、それには兎に角國王

と考えた

備のために是非ともネパールへ入國したいから許可してほしい、その結果ネパールと日本との友好關係が强化された だが、 ラム・シャーハ・ジュンガ・バハドウール・デウン王というもの凄く長い名前で、鳥渡手のつけようもない長いもの 仕方がないので、その十程並んでいる名前をずつと書き並べて、自分はヒマラヤン・エクスペディション の準

と首相とに一應手紙を出すのがよかろうと考えた。そこで國王の名前をしらべるとトリ・ブフーヴァン・ビラ・ビ

ら非常に嬉しいというようなこと、それから末尾に自分は色々なお土産物を持参するということを書いて發信した。 ところが待てど暮らせど返事は來ない。これはとても駄目だと諦めておつたところ、恰度一月の末になつて漸く向う

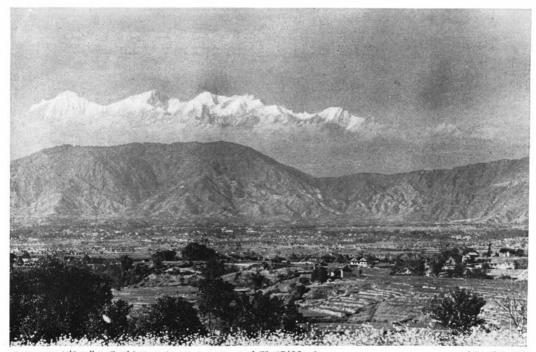
から一枚の電報が來た。その女面には「ヴィザ・アンド・アコモデーション・レデー・ワイヤー・ユア・スターティ

し駄目だつたら面白くないから、 ング・デート・ミート ・パトナ・クリシュナ」とあつて、實に私は大變嬉しかつた。 もう一度確める電報を打つた。その返事がまた仲々來ない。併し二週間程後にやつ が一體そんな事を言つたつて若

港パトナへ迎えに來てくれ、二月十二日午後零時三十分双發のダグラスでカトマンズへ向つた。 時にそれらが警察と組んで飛行場並に放送局などを占領してしまうという暴動が起つた。そこで首相はネールさんの 進派の連中が警察を買收して、 た譯だ。とにかくこんなことがあつて、そのクリシュナという人が國王並びにコイララ首相の使者として北印度の空 いう人のお嫁さんがお産をして、そんな事から遅れて來られなかつたので、それぞれ理由があつたことを後で理解し 遲れるのは當り前だということが後になつてわかつた。二回目に返事が遲れた理由は、 ところに來て援助を請うたのかどうか知らないが、とにかく印度に來ておつた。こういう大騷動の眞最中だつたから あとで聞いたのだが、これには遅れた理由がちやんとあつた。 牢屋を全部明け渡してしまつた。 所謂牢屋に入つていた者は皆脱獄してしまつた。同 最初に返事が遅れたのは恰度一月の終りに先述の急 迎えに來るべきクリシ ュナと

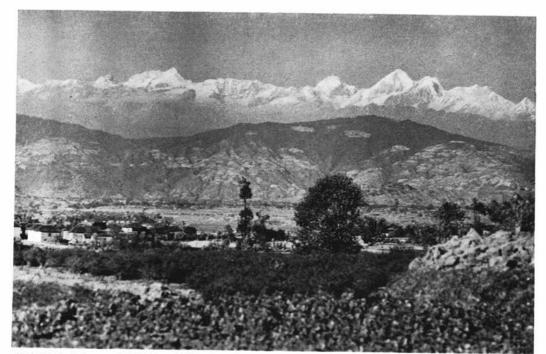
更にトラッ が、そのネパール國有鐵道というのは國全體で僅かに十粁しかない。その十粁程の汽車の終點からトラックに乗り、 あつて、 るには勿論徒歩か、 ートからはまた自動車があつて首都カトマンズへ入る譯である。このようなルートしかなくて、その高い峠を越え 從來ネパールに入るルートは、 約七分の一トンぐらいの貨物ならば空中ケーブルで運ぶことができる。これがネパールの動脈ともいうべき クを降りてから七千フィートの峠を二つも越してタンコートという處まで徒歩で行く方法しかない。 或いは駕籠か馬に乗る手しかないが、たゞ荷物だけは、恰度その徒歩で行く間に空中ケーブルが 印度のラキソールという國境に近い町から輕便鐵道みたいな汽車に乗つて行くのだ タン

ものと考える。



カトマンズ市の北にそびえるガネシユ・ヒマール山群 (7406m.)

西堀栄三郎



耕地のあるカトマンズ盆地をかこむ山々をへだてムゴサインタン山群 (8014m.) をのぞむ 西堀 栄 三郎

が出ることがあるそうだ。

突然森林のない平地が展ける。

カトマ

ンズの

盆地についたのである。

人口は約九百萬程もあつて、

面積も大阪から西

0

方の

ネパ

ールは御承知の通り印度の北方にある小國ではあるが、

十ルゥピー、 たのだが、 ズー往復の外に、も一度パトナ、カトマンズ間を一往復するのである。 時間程でカトマンズへ行く。週に四回のスケジュールである。そして一回とはカルカッタ――パトナ―― カトマンズまで飛行機の便がある筈だからネパールへ入つてみないか」と言つて下すつたのが大きな刺戟になつ 私がネパール入國の 早速東京のBOACに聞いたところが、そんな航空ルートはない、それは何かの間違いだろうと 即ち邦貨で約四千圓程であるから値段も割合安いので、 現地へ行つてみると松方さんの言われた通りちやんとあつて、カルカッタからパトナへ飛び、そこから 計畫を樹てるようになつたのは、 日本を發つ前に松方さんが 私の計畫も案外容易に樹てられた次第である。 これは大變便利である上に、 「今度印度に カトマ 行くの ンズまで五 カトマ わ

ら見えるのはダウラギリ(主峰八一七二米)、アンナブルナ(同八〇七八米)、マナスルウ い年月寫眞で眺めていたヒマラヤにはじめて接した喜びは到底十分現わし得ない。 あることがわかつたが、 十五分ほど飛んだ頃前方の窓を眺めると眞白い山々、ネパール・ヒマラヤの波打つ巨峰が眼に入つてきた。 1 は恰度見えないが右窓からはガウリ・サンカール(七一四五米)やエヴェレスト山群 下を見るとまさに大ジャ ナ空港を飛びたつた機は、 3 ガ Щ 群 (主峰八五八〇米) 私達がかねてから目標に考えていたマナスルウ山群は窓際になつて見えにくかつた。 ングルにかくろうとしている。虎や犀や野象の生棲する密林でカトマ のたうつような大河ガンヂスの流れを下に見ながらほゞ真北に向つて行く、 が望見された。 併し幾何もなくして雲霧は氷雪の山を包み視界から去つて行 ガネシュ・ヒマール(七四 (同八一二五米) の山 (主峰八八四〇米)、 ンズにさえ猛獣 左の窓か 併し永 恰度二 カン

中國 明治維新直後のように近代文明の門口に立つている感じだ。飛行機が發着しはじめてから三四ケ月位だが、 .地方位はあり、決して侮つたものではない。先に述べたように昨春漸く鎖國政策を解いたばかりで、恰度日本の 國王の提

唱する五ケ年計畫と自動車道路が完成すれば、この國は急激に近代化するだろうと思う。

トマンズは信州の松本か京都と同じような感じで、人の顔も日本人と良く似ているからネパールへ來たような氣

人を大變なつかしがつてくれた者もあつた。 り目立たなくなつたのか、群衆にとりまかれる心配はなくなつた。ある英國人はカトマンズは住宅よりも寺が多く、 カ」の出身者が多かつたために名附けられたものだが、彼らの中には第一次大戰中に日本へ來ていた者もあり、 つているという程だが、兵隊の數も亦修道僧に負けず多い。 のネパール料理を食べている間も、 た。その多くは少年なのだが、私が滯在していたホテル・カマルで例の辛い野菜やカレー汁、マトンの肉だんごなど がしない。旣に初めての日本人が來るというニュースが傳わつていたのか、あちらこちらで群衆にとり圍まれて困つ 般人よりも修道僧の方が多いと云つている。なるほど寺の數は極めて多く市街の寫真をとれば何處かに必ず寺が入 まわりにならんで見ている。そこで早速ネパールの服装に變えてみたら今度は餘 所謂グルカ兵というのはカトマンズ西方の一村落 日本

でやるので、宗教の關係からか動物も一切使役しない。自動車の數はカトマンズ市内に六百豪許りで、それもこの國 の二つの發電所の機械と同様印度から遙々人間が背負つて運んで來たものである。 面白いことは車が全然ないことだ。 あるのは自動車と自轉車だけでそれ以外の車はない。 貨物の運搬はすべて人力

る ら穀物が澤山とれる。 ネパールの産業は現在の處農業が主で、これは大體タライ地方という印度平原に續いている平原で行われ、こゝか つまりネパール人の方が印度人よりも遙かに耕作に對して忠實であるといい得るかと思う。米なども印度へ輸出 最近ではジュートなども出來るので、その反當りの出來高は印度のそれより遙かに上廻つてい

2

è

中に こゝは氣候が非常に温和で森林もあり、 に連つて、それが先程の七千フィートの峠がある山地まで續いている譯で、それを越えると盆地地帶が展けてい しているくらいで、 1 の高原が續いている。ネパールは大體こんな地形だから、 あり、 これが矢張り帶狀に東から西へ點々とつながつている。 森林の開發などもまだ全く著手するだけの力がないようである。 農産物は相當澤山できる。その平地を過ぎて北へ進むと今度はジャングル地帶が帶のように東西 文化の中心もそこにあるという中間地區で、 産物としては その北側が所謂 クライ地方の農産物以外ほとんど見るべ ヒマラヤ山脈で、その先にはチベ カトマンズのような都市もその

きものもなく、

は將軍政治の時代にほとんど外國人を入れなかつたために、 0 つけられてなかつたからであつて、今後探して行けば、おそらく世界でも最も興味深い地下資源並に水 0 天然資源 區にあるだけで、 低い國なのである。 |業としてはジェートの工場が二つばかりクライ地區にあるだけで、あとは小さなマッチ工場程度のも のある國になるであろうと確信をもつて言えると思う。 中部地區に入ると非常にチベットの影響をうけた寒村が點在しているばかりで 地下資源とか或いは水力電氣の開發事業がまつたく手を だが現在のところではまだ一 般にいつて甚だ程度 ある。 力電氣その他 併 のが タライ これ

氣候も似通つているから養蠶もとり入れたい」と語つた。國防大臣のカイサー・ラナ氏は一九三九年に日本を訪問し たことがある。 から カン M 日には首相官邸を訪問した。 ング氏はわれわれの探檢に非常な關心を示し、木原博士の種なし西瓜や米の研究に興味を寄せ、 つて おり、 その時お目にかりつた秩父宮殿下のことが話題となつた。 所藏 の圖書中にはヒマラヤ關係の文獻が數多くあつたことが忘れられない。 コイララ首相は「日本のすぐれた手工藝技術を習いたい。 同氏の豪華な書庫には明治天皇の御寫真の 天然の桑の木もあり、 農林大臣のカネクマ そうした知識

たりとまつてしまつた。だからまた元のようになることもそう難かしいことではないと思う。 つていた。事實日本の製品は戰前には澤山ネパールへ行つていて、非常に下層の人々まで日本製品が行き 渡 つて い 能だから近い將來そのための機構を相互に作るべきだ。またネパールからは豐富な鑛産資源を日本へ輸出する」とい を輸入したいと述べた。經濟顧問ボーシュ・シャルマ氏は「今後ギヴ・アンド・ティクでやれば戰前以上の貿易が可 シャルマ氏が示してくれた統計の數字によつても年々その額が上つていることがわかつたが、戰爭になつてびつ

つた。 物することができた。 がカトマンズへ飛んだのは先程も述べたように二月十二日だつたが、元來私は七日間のヴィザしかもつていなか 併し結局足かけ九日間を有效に使つて、餘り遠出は出來なかつたけれどもカトマンズの市内と近郊とを大體見

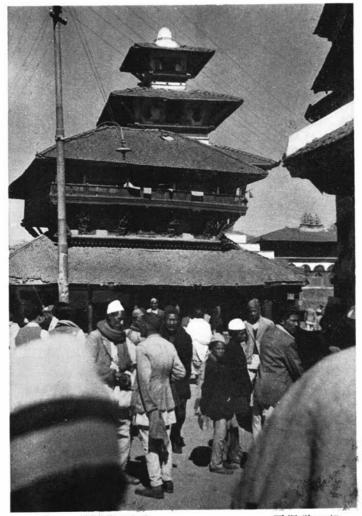
寺を調査して歡喜されたのは當然だが、門外漢の私には十分その價値が判らないのは殘念である。 に澤山あるものだと唯あきれる許りだ。曾てネパールへ入られた天沼俊一博士が古代建築學の立場から、これらの寺 百三十三寺あるとのことである。最初に案内されたパシュバティナト寺は小高い丘の上に在つた。猿が澤山遊んでお カトマンズとは元來「木造の寺」の意味だそうであるが、全く寺院の數の多いのには驚かされる。 牛が奈良の鹿のように自由にうろついている。丘を登れば寺があり、下を見ればまた寺だらけで、よくもこんな 一説には二千七

うである。 つけたり、水の中に何か食物を入れたり、變な仕草をしている。 丘を越えてバクマティ河の方へ下るところに温泉の湧いている靈域があり、行者があやしげな水をなめたり、 早速カラーフィルムに好適と思つてカメラを向けたらどなりつけられたが、先方もあわてて脱いだ靴も忘 傍に血が流れているのはいけにえにした羊の血 頭に

れて逃げて行つた。



カトマンズ市の東方バトガオン市にあるニアトポラ・デパールの 五重塔 西堀栄三郎



カトマンズ繁華街の寺群

西堀栄三郎

いるらしい。これらの動作には皆それぞれ意味があると説明されたが、宗教のことに詳しくない私には全くちんぷん も來ていると思つて見ていたら、 んぷんだつた 原には水浴場と火葬場とがいくつもある。 彼女らは熱心に小さな砂の圓錐を澤山作つてならべながら、 カリガートというらしい。 對岸に良家の數人の子女が 何か口の中でとなえて ピクニッ

宗教に關係のあるものが半分以上を占めていると思う。 の金閣寺より遙かに厚い金がつかつてある。 寺々は質に立派なものが多い。パシュバティナマングラという寺は金で造つてある。 ットから來た女の信者が澤山集つているが、彼女らは赤と黑と白とで飾つたフェルトの靴をはき、 ーのようなものを着てザンギリ頭なのだが、日本の尼さんの方がすつとやさしさを感じさせる。 正面の大きな牛の像もやはり黄金がはつてあつて大した代物である。 確に本物の黄金で、焼けた京 商店街の商品も 紫茶色のオー

家の人々ばかりだつた。 うから、 1 のほかに今の王家の屬するシャーハ家、 ナからの飛行機に同乗した真珠の首飾りや耳飾りをつけ、赤いサリーを着た美しい十人程の貴婦人たちもシャー についで目につく建物は革命前に政權をもつていたラナ家の立派な邸宅群である。大きな樹立、 **曾ての權勢が偲ばれる。** の中に白塗りの豪壯な館が建つている。 とのラナ家の一族は約二千人、使用人を含めると想像に絶した數になるという。 現首相の屬するブラーマン・ターパ等がそれに次ぐ大家族である。 若い三男坊くらいまでそれぞれこんな立派な邸宅に住んでいるとい 廣大な芝生の 印度のパ

子類はすごく甘いもの許りで、砂糖だけを加工したものやメリケン粉や雜穀の粉を使つたもの、 とは思わない。 中流以上の人々は多く國民服を着る。 ネパール 人の顔は印度人とは明らかに異り、 私もトピィ帽の服装で高官連に會つたが、これを着ていると誰も私を日本人 むしろ日本人に近い。 食事は印度の食事 牛乳を使つたもの、 に似

油 であげたものなどがあり、五十糎もある大きな菓子もある。 甘過ぎて味はみな同じようだ。ナッツ類も澤山ある。

8 10 のだが、 おいと刺戟とを求めたものが多い。 なかなか良いものだつた。 ある貴族の家で出されたラクシ酒という酒は林檎からつくつて赤い色をつけた

寝るときは床に厚い蒲團を敷くのだが、これには最も金をかけて、凝つているようである、

ネパールの床は日本の

み くも數名の召使をつかつている。 疊のようなもので、 八一九時頃に朝食、 ネパール人の家庭生活はすべて床にあぐらをかいて營まれる。 十二一二時の間に晝食、 彼らは例外なく大變立派な英語を話し、その生活習慣は毎朝起きがけに 四一五時頃に夕食をとるという、 印度或いは英國式である。 中流以上の家庭は甚だ清潔で、 紅 たゞ土 を飲 少

曜日が休日となつているのは面白

式が始まる。 て、坊さんのする通りの真似をしている。式が濟むと戸外に出て竹の柱に縄を張りめぐらした中で火をたき、 嫁は赤いサリーを頭からすつぼりかぶつているので顔は見えないが、 した。その日の式は婿が嫁の家に泊りに來る式である。翌朝坊さんが異邦人には全く譯のわからない儀式をやる。 菓子なども中々豐富だ。 と男女別にして部屋が分けられているのは面白い。 私は偶然にもある中流階級の結婚式に臨席するの機會に惠まれた。二百人ばかりの人が來ていたが、來客はちやん こゝで御兩人の衣裳を結び合せてぐるぐる回る。 こ」でもう一 花嫁は私にだけ挨拶にきたが、なかなか綺麗である。 晩宴會が始まるのだそうだ。 ディナーは木の葉の皿に盛られた料理がふんだんに出 この式の間は絶えずエキゾテ これがすむと駕籠でピクニ 同じ赤い布をまとつた花婿は眞面目 私は彼らの習慣に從つてプレゼントを " イツ クに行き、 クな樂隊が單調なプ その るし、 顏 りに婿 te 花

カ

カ

ンズの

街の兩側にある商店を一

軒々々のぞいてみた。

金物屋の鐵類は殆どすべて印度製で、

眞鍮ものは地金

プカドンドンをやつている。

(10)

思う。

山は神聖なるのになつているから、

るの た。 り賣りをしている。野菜は野天賣りだ。 をこねたようなものもつくつていた。 を印度からもつて來て曲げるだけをこちらでやつているらしい。大きな鍵類は自國の産だ。石鹼だという、 は雑貨が多いようだ。 布類も極めて安物ばかりである。 食料品店、 履物屋にはスリッパの類が多く、 **街にはチベット人が澤山いて、彼らは毛皮をもつて物と交換をし、** 菓子屋も多く、穀類は米が主である。 タイヤの古いのを張つたゴム靴もならんで どの店でも大きな天秤では 買つて歸

ない 學課 集めて教育している點は注目に値する。 ーへ家の子弟も學校に來るようになつたが、 科學が二百人、人文に三百人の生徒がいる。 サンスクリット、 ネパ ルパール、夜間の三校だけだ。ラナ家やシャーハ家の子弟たちは從來まで皆家庭教育をうけるので學校へは來ない。 が、まず三〇%以下だと思う。 私 1 から北印のパトナ大學と連絡がついていてそこで勉强をする。 |の中には小學校から必ず英語が入つている。英國の印度統治時代の名残りである。 .の入國の他の一つの目的はネパールの教育制度の視察ということだつた。初等教育の普及度はあきら か ル 人の教師がやるが、 歷史、 地理などである。 教師はほとんど印度で教育されたものばかりである。 小學校二〇一二五校、 高校ではこの他自然科學、 米國のミッション・スクールが一校あつて、これらの上流階級の子弟を 教授は研究することを實質的に禁じられていた。革命後はラナ家やシ 中學校五校、高等學校が數校、 私が訪問したトリチャ 過畫、 音樂などがある。専門學校以上のものは 學課は、 専門學校はトリチャ その他は全部ネパー ンドラ・ 小 中學校で英語 カ レッ ヂには自然 ンドラ、ド ル で 國 15

ナ家時代には禁じられていたスポーツは全般に盛になつており、二十年もすれば國際的にも相當なものになると

宗教的な對象としてしか考えられていない。

ゴサインタン山群

(主峰八〇

には澤山 74 米 は、 の人がお詣りに行くのでカトマンズの人は誰でも知つているが、その他の山のことになると餘り知らず、大 麓のゴサインクンドという池にシヴァの女神が毒を消すために行つたという傳説があるため、 每年八月

ラヤの麓にいながらスポーツとしての登山ということには、まだ殆ど興味を感じていないようだ。

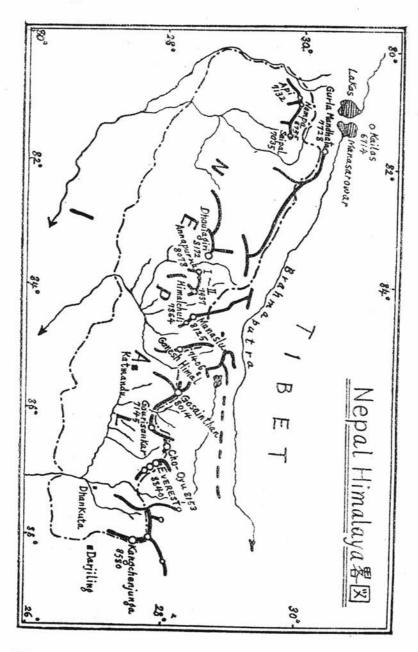
Ł

立派な山群である。その右にはるかエヴェレスト山群が見えるがどれがエヴェレストかわからない。 ル もよいというような氣のするものばかりである。 偉大な山姿をみることが出來る。これらはすべて七千米以上の山々であり、どれ一つでも登れたら、 ラヤがよく見えた。ガネシュ・ヒマール、ランタン・ヒマールやゴサインタン山群は盆地のどこからでもその眞白 り見えないものとあきらめていた。しかるに私の行つたのは冬季であり、よく晴れた日が續いていたために毎日ヒ コニーからもよく見える。 カ トマン ズ盆地 からヒマラヤが見えるかどうかという問題はあまり文獻には書いてなかつたので、ヒマ このガウリ・サンカールは二人の神様からとつた名前にふさわしく二つの峰が ガウリ・サンカール山群はカトマンズの廣場際にある高等學校のバ 何ものを捨てて 説には ラ ヤ はあま

v

ストが見えると言い、見えないともいわれている。

來ないとのことであつた。 かすごい山である。このマナスルウの左の方にアンナプルナ山群がかすんで見える。これもまた大きな山群であり、 もし私が强力な望遠鏡をもつて盆地をかこむ、七、八千フィートの山に登つてみたらどんなによい資料が得られたか フランス隊の偉業がしのばれる。 急な三角形をしたヒマル・チュリ山を前衞として後方右にちよつと見えるのが主峰マナスルウであろう。 れわれの志しているマナスルウ山群はカトマンズ市の南方ゴグバリ村へ行く途中ではじめて望見することが出 カトマンズの人々に聞くと三月以降から十月末まではほとんど白い山々は市中からは見ることが出 カトマンズから山を見たい人は十一月から二月までの間でなければならないそうである。 この西方にダウラギリ山群があるわけだが遂にカトマンズ滯在中には望見すること なかな



問題、 した。 相や教育大臣に 出ている。 カト 觀兵式場の兵器は野砲四門と鐵砲だけだつたが、 日本の商品の話などを熱心に語られ、 ンズを離れる前日の二月十九日は第一回デモクラシー記念日であつて、 記念のパーティで國王は「日本の皇族はどうしていられるか」とか、ネパールの未開發資源や家内工業の 内示された。 日本のネパール探檢隊には殊に賛意を示されて計畫の支援をコイララ首 軍隊の意氣は高く、 小さくても獨立國だという感じがにじみ 觀兵式が擧行されたので國王に謁見

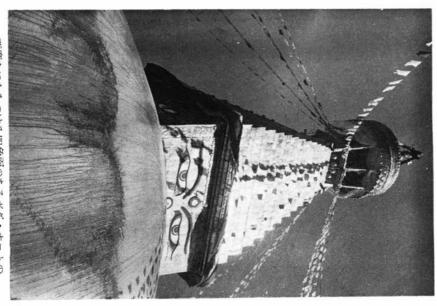
遠征隊を招致しようとする心組があつても、 われ ネパール・ヒマラヤに入つているという具合に、從來全く神祕のヴェールにとざされていたネパール 隊のアンナブルナ遠征とか、一九五一年の英國のエヴェレスト偵察、 0 「引に自說を押し通す譯にいかぬところがある。つまり現在はそのようなジレンマの中にヒマラヤ・エクスペディシ チ ネパ 2 われ をあちこちにぼつぼつ許している現狀では ールは最近開國になつてから各國のヒマラヤ 1 0 • 眼 オユウなど、皆ネパールを經由して入つており、 前に接近した感じである。 併しネパールと印度との關係はなかなか微妙であつて、 印度からそれに賛成しないような意志表示があると、 ないかと思う。 • ェ クスペディシ その他にも英國のテ 今年のスイス隊のエヴェレ ョンを許すようになり、一 ィルマン氏などは戦後たし ネパール 九五〇年の スト遠征並びに英國 ネパールとしても の出 側で喜 々が急激に フランス か二回位 んで

日本のエクスペディションの入國許可願が、ごく最近になつて實を結び正式の許可狀が到着して、 は二月二十日、 應果し得たものと大變嬉しく感じている。 カトマンズを飛びたつてパトナへ向つたのであつたが、 と同時にこの機會を與えられた毎日新聞社に心から感謝している。 歸りがけにネパールの政府へ出して來た 私が命ぜられた使

命

は

私







ホテル前広場で魔除けにおどるチベツト踊



カマル・ホテルの炊事場・王様について世界を廻つたコック(左) 但しその料理はわれわれの日にはあわない

西堀栄三郎

が似通つているという點からだけでも、私には非常に良い印象に感じられた。おそらく日本のエクスペディションに あたつても、非常な便宜を與えられると固く信じている。 に戰爭し合つたけれども、いつも自分達は日本の友人だつたと言つてくれた。單なる社交的儀禮かも知れないが、顔 ある人々などは大變日本に好感を寄せている。恰度彼らが年齡的にいつても今指導者層になつていて、戰爭中はお互 ネパールは日本に對して特に親近感をもつているように思われるし、先にも述べたグルカ兵の中で日本に來たことの

ムの幻燈が数多く映寫された。―編者) (本稿は一九五二年六月十九日の小集會に於ける講演に加筆されたものである。尙當日は講演に續き西堀氏撮影のカラー・フイル

# ネパーグ・ヒマラヤ關係文献抄

- Auden, J.B.: Traverses in Nepal; H.J. vol. VII, 1935, pp.76-82
- Bruce, C.G. and W. Brook: Nepal; G.J. vol. 65, 1915, pp. 286-300.
- and Tibet. (2nd ed., 1932, revised by Burrard and Heron). Burrard, S. and H.H. Hayden: A Sketch of the Geography and Geology of the Himalaya Mountains
- Hamilton, Francis,: An account of the Kingdom of Nepal; Edinburgh: Constable, 1819
- Hayden, H.H.: Of Nepalese Himalayas; G.J. vol. 23, 1904.
- Hodgson, B.H.: Essays on the language, literature and religion of Nepal and Tibet, etc.; 2 vols., 1874
- Hooker, J.D.: Himalayan Journals; 2 vols., 1854.

- Landon, Perceval: Nepal; 2 vols., London: Constable, 1928. pp. XXIII+358, pp. VIII+363.
- Landor, A.H. Savage: Tibet and Nepal; London: A&C Black, 1905, pp.X+283.
- Longstaff, Tom: This my voyage; London: John Murray, 1950, pp.324.
- Mason, K.: A note on the Nepal Himalaya; H.J. vol. VI, 1934, pp. 81-90
- Massieu, Isabelle: Népal et pays himalayens; Paris: Alcan, 1914, pp.228

Mason, K: Notes on Eastern and Central Nepal; H.J. vol. VII, 1935, pp. 83-86

- Medlicott, H.B.: Geological traverse in region of Katmandu; Records Geol. Surv. Ind., vol. VIII,
- Morris, C. John: Gurkhas; Delhi: Manager of Publications, 1933, pp.169.
- Morris, C. John: A glimpse of unknown Nepal; H.J. vol. VI, 1934, p.77-80
- Tilman, H.W.: The Nepal Himalaya; A.J. vol. LVII, No.280, May 1950, pp.305-312.
- Tilman, H.W.: The Annapurna Himal and south side of Everest; A.J. vol. LVIII, No. 282, May 1951, PP. 101-110.
- (尚 1950 年のフランス隊によるアンナプルナ遠征に闘する交献は本誌後頁のヒマラヤン・ノーツ欄を参照さたい。)

Ш

男の祕かな願い、それは初登攀であり、

Ш

への情熱は、

滑岩流

(昭和二十三年)、

イドンナップ岳

(同年)

の冬期初登頂、

札内岳よりカムイエクウチカウ

Щ 脈

國境稜線を長驅南下する新ルート

# 多の十勝岳・大雪山縦 走

#### そこ 12 至 3 T

て、

或

0

全面的に肯定されながらも、山登りに單なるスポーツ以上の何ものかを求め、且それを信じてきた。それは、この北 ている。そしていくたの先輩は、二十數年來北海道の山々に、樺太・千島・アリューシァンにまで原始の自然を求め 困難と苦痛を通して自然との喜ばしい關係を創り出そうとする努力。われわれは、 未知の山々を拓いてきた。 原始の森に訪ずれた者の運命なのでもあろう。 時代が遷り、 ま 新しい装備、 そして、激しい自然の中に自己の生活を投げこもうとする意欲、 新しい登山方法が採りあげられ、 北 海 道 大 山登りとはこんなものだと思つ 學 スポーツアルピニズムが Щ 岳 部

現役部員十二

昭和二十五年冬、

名によつて、極地法によりコイカクシュ札内岳より國境線を北上するカムイエクウチカウシ山への新ルートおよび

(昭和二十四年)と部の主力がそ」がれ、

それは、大雪山の茫漠とひろがる雪原の唯中にとり殘された天幕の十數日に亙る生活が満たしてくれるであろう。

新ルートの開拓ではなかろうか。

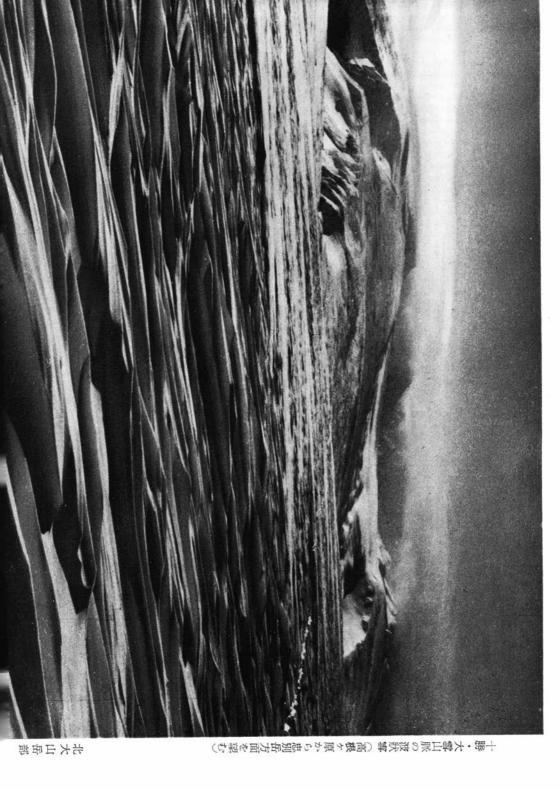
戰後、

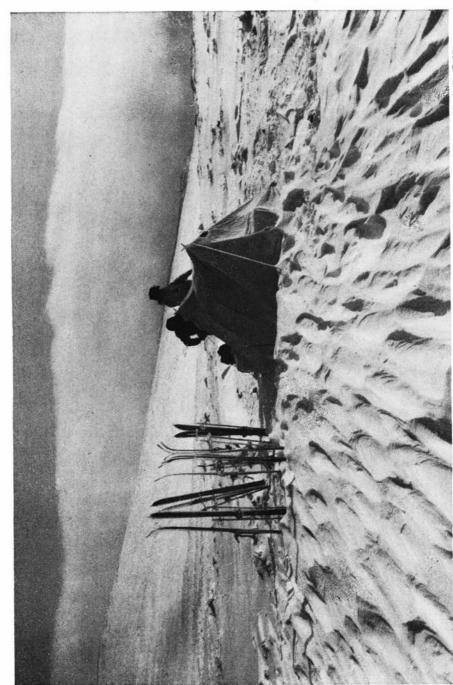
幌尻岳の第二登頂に始つた日高

雪山彙の、 感じた者がいたとしても、 は ばならない。 部員の訓練を兼ねて、 がとられないかぎり、 八三九米峰への完登が成功に終つた時、 の未登頂 和二十 すでに生じつ」あつた部の沈滯を豫感していた。 極地を髣髴させる高原の魅力は、 0 そこで新しく十勝岳・大雪山縦走がとりあげられ、検討された。 山である中ノ岳があげられたが、 五年度の冬山の低調な現實によつて、いやおうなしに思い知らされたのだつた。 ひとつの大きな山行をやろうではないかと話し合つていた。その對象としては、 部の前進は望めないことを痛感したわれわれは、 千八百米を前後する廣茫とした幾つかの高原を、 部の雰圍氣はひとつの頂點に達していたと考えられる。 われわれの心を把えた。 山そのものに魅力がない。 しかも新制大學への切替えと共に、 たとえ、 舊制最後の部員が主體となり、 また日數や經費の問題 その處 山らしい 日高山脈の屹立する稜線に對して、 々に聳えるド 山がないという理由で不滿を こ」で何らかの 年限短縮に對する不安 も考慮 そしてこの時、 1 4 群 に入 日高 新制 to 越 Щ の教養科 n えて なけれ 脈 對 われ 0 大 しつ 唯

3 を捲いて松山温泉に下つた苦鬪は、 會により前後七回も企てられながら、悪天候に災いされて、敗退を重ねてきた。 は決して爲すところが無かつたのではない。 寛が、 ーテ このように、 る形式、 海道で最も大衆的な山の一つである十勝大雪山系の冬の縱走が、 單獨で十 つまり悪天候に耐えて長い日數を頑張り得る態勢を整えなければならないことを强く感じた。 よる行動 十數年の試みがすべて失敗に終つている事實は、この行程が、二週間程度を行動範圍とする小人數 五貫の荷を負ひ、 の限界を越えているために他ならないと考えた。 刮目に値するものであつた。 十勝岳白銀莊を出て、途中雪眼に惱まされながら、 すでに昭和十年から十七年にかけて、 これが十勝岳からトムラウシ山を越えた 最 何故今日まで残されていたのであろうか。 從て、 今回の計畫 戦後では、 北大山岳部により二回、 トムラウ K 昭和二十五年春、 あたつては Щ を越え、 サ 特に困 旭川 水 部員森 0 それ Щ あ 10 岳

八十粁にわたるキャラバンの旅は魅力のあるものにちがいなかつた。





北大山岳部

化雲岩 (1954m) のキャンプ (C5)

とデポー旗の活用に大いに意を用いた。 な岩場もないこの計畫の成否を決定するものは、天候と、 目標のない地域の進路の決定であるが、 充分な食糧の貯藏

いものであることを感じた。 ればよいということでけりがついたが、 ることが出來るであろうか。 ことが、 養科の新部員の訓練という點に關しては、 部の將來に、 單なる登山練習以上に部の精神的結合という意味を持つ合宿にもまして、 この點に關して、 長い傳統を持つ十勝岳合宿に對す愛着は、とくに先輩においては思いの外强 基礎訓練を行うべき例年の十勝岳合宿をやめて、 何回となく激しい議論がかわされたが、 結局、 春に十勝岳で合宿をや 何ものかをつけ加え 冬山に全力を傾ける

# 、計畫の概

要

だつた。先ずサポートの方式については、 撤收までの最大所要日數とを考え合わせる時、 く方法は、十勝岳から八十粁に餘る縱走路と、 れを完成させるか、 B からこれを援け、 地 點 くて昭和二十六年度の冬山の目標として、十勝岳・大雪山縦走が採りあげられ、 D班は白金温泉から美瑛川を溯行して銀杏ケ原に直接登つて設營し、 (白金温泉) 銀杏ケ原で縦走班と合流し、以後はこれを背後から援けていくという方法を採つた。 から出發し、 行動・装備・食糧・氣象などの分擔に應じて、具體的に研究されはじめたのは九月になつてから **縦走班はどこまでも尾根すぢを忠實に歩き、** 普通に行われているような、 隊員の數と實行動を十日として、 われわれには、 いさ」か手に餘るものがある。 背後から順次キャ C班は美瑛川支流を溯つて、オプタテ これに對するサポート 四日に一日の行動可能日を豫定して 如何にして合理的 ンプをのばして援助してい そこでわれわれは、 班 は、 かつ確實にこ つまり、 前半は側 同

岳合宿の經驗から、 ついては、黑岳まで迎えに登る班が欲しかつたが、班員の不足のため不可能となり、 交換する)と五日分位の食糧は、常時持つて歩き、それ以外の食糧その他を補給するのであり、最初のオプタテシ か」つてくるのであるが、 山手前と、 とサ ら忠別岳あたりまで援助していく豫定であつた。要するに、縱走班は、自分の天幕(銀杏ケ原で乾した新しい天幕と が登つて來るのを待つことが出來るわけである。 到着するであろうし、 る行動計畫であつても、稜線と澤とでは、行動の可能性は澤の中の方が大きく、 到着前にキャンプ豫定地で待つていられるように、 ちがいで不可能になつたため、 キー合宿を終つて待機していたE班の援助の下に出發という手筈であつた。この場合、最も懸念されるのは、 Щ そのとき、 ポート班との連絡である。 北東の鞍部に荷上げすることにし、 數十本のデポー族をはりめぐらして、そこに置いて歸ることにした。銀杏ケ原から先は、普通の方法で、後か D班が撤收後層雲峡にまわることになつていたが、實際は、 最後の、忠別岳でサポート班と別れる時は、各自九貫以上になるという有様で、縱走班にひどく 重 **縱走班はそこまでの停滯用として、一週間分位の食糧は餘つているようにしてあるので、サポ** 大體四日に 若し萬一、縱走班が豫定通り到着し、 計畫の性質上致し方のいことであつた。 一日の行動可能日を豫想し、 直接の連絡は出來なくなつた。 最初の豫定では、 縦走班は美瑛川中間キャンプまでの荷上げを手傳つた後、 また、 短波の無線電話が使用出來る筈であつたが、出發間際に、 兩班の出發を按配することにした。 オプタテシケ山北東方鞍部に上げる食糧は、 その上に立つて食糧が計算された。しかし縦走班および サポート班が何かの故障で遅れることがあつたと しかし、 更に、総走班が層雲峽温泉に到着した時の連絡 縦走班が白金温泉にやつてきた。 種々の條件を考えて、 サポート班の方が先んじて豫定地に 電話で白金温泉に連絡 兩班が同時に豫定地に到着 サポ 白銀莊に登り、 ート班が、 大體 行動は、 一週間 1 一細な手 縱走班 縱走 出來 心 十勝 ス

A・B班の分は、優に一ケ月は暮せる量が上げられる筈になつた。

かっ あり、

丰

ンプ豫定地

٤

それに對する荷上げ量は次のごとくである。

もしれない。

割りきつた者も、

割り切れない者も、それぞれに、

なった。 になっていたのであるが、 次に隊の構成であるが、 よりよき隊を構成することを考えた結果、 從來の通り、 現役部員によつてすべてが計畫され、 O・Bの木崎が加わり全體の責任をとることに 推進されてきて、先輩はたゞ相談相手

縱 走 班 Î 野田四郎(舊2) 越野正(新3)木村俊郎(新2)

サ ポート班

井上正雅(舊3)白濱晴久(舊2)有波敏明(舊2)

班 杉野目浩 (舊2) 岡本丈夫 (新1)森厚(新1)

C B

> 班 班

木崎甲子郎(大學院、隊長)

早稻田收

(新3)

野口裕

(新3)

(舊2)(中村と交代)

山崎英雄(舊3)網倉俊雄 中村利一 (舊2)中島秀雄 (舊3)三尾龍民(舊2) (新2)石谷邦次(新2)千葉幹雄

E D

班 班

の情熱と學問との相刻は、たえずわれわれの心をいため、常に議論されながらも解決の得られない問題なのである。 合で不参加の者、または短期間のC・E班にまわらねばならなかつた者もある。 われわれが學生であるかぎり、

以上のように決定したが、これは部の現狀としては、決して滿足出來るものではなかつた。試驗あるいは實驗の都

登山が個人の恣意的なものである以上、この矛盾する二つの意志を統一する原理を求めようとするのは無理なことで

山に生きようとする者の耐えて行かねばならない試錬なの

 $C_1$ 美瑛富士鞍部 (ウィンパー變形三人用)二十八貫。

- C。オプクテシケ山北方鞍部(同右)九貫。
- C。銀杏ケ原(カマボコ形六人用)六十貫。
- C。 白雲岳(クレッパー變形三人用)三十貫。

B.C 美瑛川上流(家形四人用四張)百六十二貫。

食糧、裝備の購入・函詰・梱包に慌しい毎日が過ぎていつた。

こうして計畫が進められている一方、資金の面に關しては、先輩の寄附、

あるいは毎日新聞社の援助が本極りにな

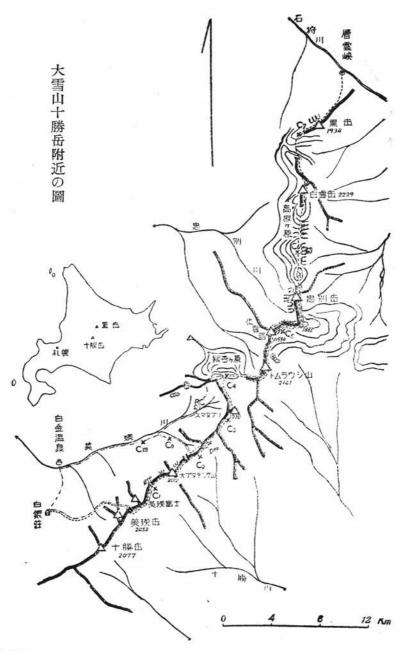
これよりさき、十一月末には、木村・中島の兩名が、美瑛川より銀杏ケ原に登つてい豫定地の偵察を行い、また地

元白金温泉との交渉も濟み、出發を待つばかりとなつていた。

## 一、行 動

こむ仲間ではあるが、今宵ばかりは、何時になく紅潮した頰に夜風が冷い。 家人・先輩・僚友の見送りを受けて、新聞社のフラッシュの中に動き出す。常ならば、ひつそりと列車の片隅に乗り 昭和二十六年十二月二十日 夜行にて桑園驛より出發、先發および合宿中のE班を除いて十三名。原田部長はじめ

30 役場で朝食をごちそうになり、バスで白金温泉に向う。ぎうぎう詰めこまれて、葉のまばらに現れた雪面が走り 晴 早朝、 美瑛驛に降り立てば、先發の早稲田、野口が手を振つて出迎える。手筈は 整 つてい



十二月二十二日

快晴

-8°C

川邊の宿からテレスの道に上つて眺めると、

だつたろうか。A・B班は泊り、C・D・T班は眞暗の中を温泉に歸り着いた。 現した時、ナイフでえぐつたような襞を見せてなぎ落ちるバットレス、いつも十勝岳の合宿で知つている美瑛岳あた の馬橇が遅れて、歩きはじめたのは蟗近くだつた。時たま樹間にちらりと白い肌を見せていたオブタテシケが全貌を あつあれかと頷くほど小さく、純白に輝いている、遠いなあ、ふつと誰かがつぶやく。途中まで荷を運んでくれる筈 テシケ山の連山が、雄大な量感を示して眉を壓し、タンネの梢はるかに、目指すトムラウシ山が、あれと指させば プ(Cm)に着いた頃は、すでに四時をまわつていた。はんの木の燃えない焚火にむせながら夕飯を終つたのは八時頃 りからこうは見えず、新しい山を發見した喜びに胸がうづく。何時かまたこれにまみえる日もあろうと。 中間

けが暖い。C・D・T班はCでまで荷上げ、T班のみ温泉に歸る。 雪の中、冬の日暮れは早い、とつぷりと闇につゝまれたタンネの森の中に、ヘッドランプのちら~~する黄色い光だ ーをひきずつて、一人引返していつた。B・Cまで行けず。大きなタンネの下に荷を置いて引返す。しん~~と降る 凍りついた澤の中を雪まぢりの風がまき上る。有波がスノーブリッヂを渡りそこねて水に落ち、丸太棒のようなスキ 十二月二十三日 曼後雪 輕く荷を持つてB・C豫定地へラッセルに出かける。 やがてタンネの樹林もまばらに、

5 線に望まれる。夜は赫々と燃え上る焚火を圍んで濡れものを乾し、お茶を飲みながら、これからさきのことを語り合 がちだ。B・Cは、廣々とした谷間のタンネの疎林の一隅、晴れ上つた空の彼方には、真白な銀杏ケ原の稜線が一直 十二月二十四日 C班は、 B・Cへの本流から、途中で別れて、C。豫定地に荷上げをし、歸つてきた。T班は白金温泉から白銀莊 小雪後晴 −9°C A・B・D班共にB・Cへ荷上げ。 平均八貫。 新人のD班はどうしても遅 n

十勝岳・美瑛岳・美瑛富士・オプタ

に登る。

十二月二十五日

から卷き上げてくる風は、息も詰まるばかりだ。行く程に風は益と强くなる。 T E班 風雪  $-13^{\circ}$ 昨夜來の風がまだ强かつたが、六時半ラテルネの光をたよりに出發する。 引返しに決し、 荷をデポ 泥流に出ると下 ーして歸る。

日は明るいうちに飯が食えるぞとばかり、エゾ・トド・白樺などが切り倒され、たちまち薪の山が出來上る。二米も タンネの大木の四本ばかり並んだ下に、焚火場を掘り、そのまわりを圍むように天幕がしつかりと釣下げられた。 残つているだけではあつたが、ぐん~~行程が捗る。 に變つてしまつた。 ·B·C班 雪。 燃えない焚火に苦勞して雑炊を作り、Cmを撤收してB・Cに向う。 風も無く、灰色の空からしんくしと雪が落ちてくる。 途中でC班は、手を振つて林の中に消えていつた。 昨夜の星空は、一夜のうちに五寸の新雪 昨日のシュプールはかすか B・Cでは K

掘り下げられた焚火場の火のまわりで、B・C完成の喜びが笑聲となつてひゞきわたる。

標高千百米ばかりの地點、ひらけた澤にキャンプ(Co)とする。

薪は

水も便利、 「露營も樂し」である。

A・B・D班と別れて三時間あまり、

十二月二十六日

月のような氣分だ。 まつた。十二月末に、こんな天氣にはそうざらに出會すものではない。 しだいにクラスト T・E班 大雪山群がはるかに雲海の上に顔を出し、 快晴 į 吹き上る雪烟は逆光に輝き、 東の空が白む頃、E班と共に出發する。 偃松についた巨大なエビノシッポに、 一同奇聲をあげて喜ぶ、美瑛富士が大きく眼前に迫つてきた。斜面 美瑛岳の岩峰に七色の虹がかゝる。 昨日とはうつて變り、美瑛岳を捲く頃は氣温も上り、三 スキーでは少し無理だつたが、 幸先よろし。 E班と別れてから、 國境稜線にぐん~~上つていく 鞍部まで强引 ぐつと重く に登つて は

なつた荷に、 スキーをひきずつてCI豫定地へと歩き續けた。

快晴

米 ブタ た。急斜面をジグザグに切つてぐん~~高度を高めていく、午後三時、尾根を登りつめた處で引返す。 てのしかゝる。 だ。メルヘンウィーゼならぬメルヘンタールの一時は、過去未來を昇華した陶醉のそれだつた。仰げば右手には、オ ンネもまばらに、 テシケの連山が逆光に紫色に鈍く、左手は銀杏ケ原に續く稜線と、突几と聳えるかぶと岩が、銀白の岩肌を見せ 銀杏ケ原への尾根を間違えて一時間ばかり無駄骨を祈つたが、澤も狹まつてくる頃、 影を長く落して、ラッセルも輕い。 今日は銀杏ケ原に上れるとばかり張切る。太陽が輝き始めた。廣い谷間の、深々と雪を冠つたク 雪は結晶のひとつひとつがキラくへと寶石をまきちらしたよう 尾根にとりつい (標高千六百

D 班  $C_m$ を完全に撤收して、B・Cに登つてきた。これで役者は揃つた。

見、その族竿を持つてきたわが肩をなでつゝ、その效果の最大なるを願いつゝスキーを歸す。 0 南斜面に約二十米間隔に一列に立てた四十本の赤旗の末端に當る。 晴後曇 鞍部に着いたのは午後二時、偃松の雪面に箱を置き大きなデポー族を立てる。この旗は小スマヌブ いま 赤黄とあやしくも可憐にはためく旗を

天幕を張る。 を 歩々々オブタテシケに登つていく。心配した北東のリッヂは風が無いために思つたより樂だつた。こゝから廣い斜面 T班 地圖と磁石をひきくらべて下つて行くうちに雲海の中に入りこんでしまい、視界がきかず、C。豫定地を斷念して 薄曇後ガス 風は殆ど無く下は一面の雲海だ。 荷はいつこうに軽くならず、スキーを後にひきずりながら一

·B·D班 曼時々小雪。−24°C 再び銀杏ケ原へ荷上げに。天氣はあまりよくないので、昨日のデポーで引返

をとつて、スキーの雪を拂い、てんでにクリスチャニア、 いだ尾根を、 澤までは、 下りには十五分はかゝらなかつた。 その横を『お先に失禮』とニャく~したのが輕く抜いていく。登りには重荷にひしがれて一時間半も 岳樺のまばらな快適なゲレンデだ。自信のない者はシールをつけたまゝ、足に覺えのある者はシール ボーゲンと競つてすつとばす。 時には悲鳴とともに雪烟の

喘

早く銀杏ケ原のキャンプを設定しなければ、 だし、こゝらあたりで一荒れきて、一日のうのうと寢ていたいと思う氣持が出てくるのも無理はない。しかし一日も のとれない今となつては、不安が消え去るわけもない。 こうして一週間過ぎた。連日の荷上げで、漸く皆に疲れが出てきたようだ。荷も半分以上は尾根に上つていること という焦り、 T班がわれわれより早く來る筈はないと思いつ」も、

C 班 休養停滯。

十二月二十八日

7-プタテシケに登りに來たC班とばつたり出會つた。むしように嬉しくて、たゞ『御苦勞さん 〈~』という だけ だ だが、天氣が次第に惡くなつてきたので、まだ晝ではあつたが、泊ることにして二人引返す。デポーまで來ると、 旗を追つていくと、 銀杏ケ原のサポートが遅れているから、あまり無理をしないで、晴れた日を待つて銀杏ケ原に登つた方がよいと 晴れたり曇つたり、小スマヌブリの手前で、眞白な斜面にデポー旗が點々と並んでいるのを發見した。 東側の鞍部で二箇の食糧函を見つけたが、これ以上は持てないので、取りに歸ることにして進ん 0

その

ウ ス の唸りが聞え始める。 · D 班 曇ガス後風雪、 だが、 夜が明けると共に、星はかくれ小雪がちらつきだした。しかし雲は薄く青空がすい 五時頃外へ出て仰ぐと、滿天の星だ。各天幕にぼうとローソクの火が點り、

のこと。話も盡きないが、遅くなるので、名残りを惜しみながらC班と別れて天幕地へ向つた。

(27)

灰色の雪原は皆目視界がきかず、處々にデポー族を立てつゝ、原の南端の崖沿いにシュカブラを踏んで東へ。途中D 定。A・B班は個人装備をまとめていよ〈〜銀杏ケ原だ。千六百米のデポーから登るにつれて、風は漸く雪を伴い、 て見えるようだし、西の空は青空が擴つている、天氣豫報では風雪特報が出ているが。しばし躊躇つたが、出發に決

幕の高さまで積む。 班を歸す。午後二時半頃、露岩のある小高い斜面を背にし、風を避けた、やゝ吹き溜り氣味のあたりにカマボ 標高千八百米、豫定地より少し手前らしい。風が一番氣懸りだつたので、充分掘り下げて、ブロックを天 連日の强行に疲勞困憊した一同は、雪を拂つて天幕に入るや、乾パンをかぢつて寢袋にもぐりこ

十二月二十九日 風雪

んでしまつた。

停滯 連日の行動にいさゝか消耗していたので、嬉しい停滯だ。一日中のんびり寢ている。

をひいていた白濱が、よくなりそうもないとこぼしている。 れ、と棲て過す。風邪氣味の者には注射を、消耗した者にはビタミン劑を打つたり飲んだりする。氣象通報で天氣圖 A·B班 停滯 ラデオの豫報も、今日明日は惡いことを告げている。どうせ荒れるならかためて一度に吹いてく

目、やつとの思いで汁粉を作り、天幕にもぐりこんでしまう。 D 班 C班の二人がサポートを終えてやつて來たが、焚火は燃えず、みぢめな日を過す。焚火場を改造 した が 駄

十二月三十日 風雪

T班 停滯

外へ出てみると見事に埋つている。壁が高過ぎたのだ。ブロックをかき落して雪を除ける。 停滯 朝起きると眞暗だ。天井が下つて低い。 調べてみると、 四ケ所も支柱が折れている。しまつた。 張綱を締め直すと何とか

B 班

使つて雪を拂い、用を足して天幕にもぐりこむ。これで何日荒れても大丈夫と、氣持も落着いた。夜は氣 分 にくつつけて作る。やがて吹雪の中からぼうつと黑い影のように三人が歸つてきた。イグルーの中で悠々とブラシを 造材屋 A班はD班の置いて歸つた荷をとりに出る。その間B班は食糧倉庫と便所になるイグルー (林)、 簸醫者 (醫)、山師 (鑛) などから駄じやれが働れとび、にぎやかに暮れた。 8 ö

D 班 幸いにも吹雪。 今日は焚火をあきらめて、寝て暮す。

#### 十二月三十一日

が、案に相異して、雪が氷化しているだけで、あつけなく上に出てしまつた。あとはD班のシュプールを辿 シールのすり切れるのを氣にしつゝ鞍部に下り、銀杏ケ原への登りにかゝると、 0 いている。早速ヤッホーと呼びかけると、何やらどなつているらしい。どうやら荷上げに來たD班らしいと見當つ キャンプでは、二十三日に別れて以來の懷しい面々に迎えられて荷を下す。 やがて向う側に消えてしまつた。銀杏ケ原への最後の登りは、春には巨大な雪庇が出來ていると聞 曇時々雪、 スマヌプリを越えると、銀杏ケ原は鞍部を隔てて眞向いである。カンカンにクラストした斜面 今日もあまり好い天氣ではないので、いよく~こゝで年越しかと思われたが、 銀杏ケ原の稜線に黑點が三つ、 ガスが晴れてきた つるだ 1: V

くてガソリンが て、うでたり、たれを作つたりしているうちに、 もて餘している身のことだ、注文をとつて、もりだのかけだのと洒落たのが間違いのもとだつた。 に出し、ベンチレーターを全開し、換氣に懸命だつた。有波は狀態最も悪く、 ガス後曇。今日は大晦日だから、蕎麥のかわりの饂飩をパク~~食おうということになり、どうせ暇を 漏れているらしい。そうこうしているうちに、 眼が痛い、頭痛がすると言いだした。 一同心悸亢進が甚だしく、遂にラディウス ィグルーに這い出して暫くは昏倒狀態 ラディウスのパッキング 九時頃からか はイグ が悪 1

げていつた。久しぶりの邂逅に話題は盡きない。夜はT班をカマボコ天幕に招待して、大晦日の夜の大コンパは、チ が三つ現れた。こちらにやつてくるようだが、じれつたい位近ずかない。D班はT班と入れかわりに、 んD班のかもになつてしまつた。T班がやつてくるのが見えたと言う。二時頃、銀杏ケ原の一端にポツンポツンと點 スが仲々入らない。D班はもうキャンプの前まで來ていた。よろ~~這い出てくるA・B班の青ざめた顔は、さんざ 上がやにわに起き上つて、『ヤッホーが聞える。D班だ』と叫んだ。ぎよつとして彼の顔をのぞきこんだが、正氣ら てふら~~しながらも、皆の瞳孔反射を調べ、脈搏をとつてメモし、ビタカンファーを打つなど大童だつたが、遂に しい。きゝ耳をたてると、なるほどかすかではあるが聞える。あわてて外へ出ようとするが、凍つたオーバーシュー のびてひつくりかえつてしまつた。チョコレートやウィスキーボンボンなどを配つて、うつらうつらしている頃、井 コレート、羊羹、氷砂糖、キャラメル、蜜柑等々話と共に盡きず、果ては山の歌の大合唱に一九五一年も暮れてい (あり、他の一番元氣な者でも、頭を持ち上げると眼まいがして動悸が激しくなる程だつた。井上は自身眞蒼になつ B・Cに引上

昭和二十七年一月一日 風雪

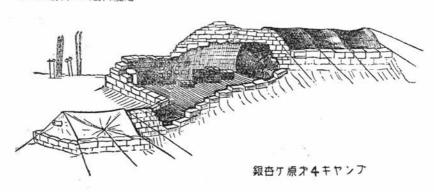
つた。

は、凍りついたのか、十米位までしか針が動かない。入口に下げてあつた温度計も割れてどこかへ飛んでしまつた。 A·B·T班 一九五二年は、 風と雪の中に明けた。偃松の枝を立てた門松も吹きとばされ、ロビンソ

から滴が落ちるので、天幕にもぐりこんでトランプに過した。 D 班 朝ちょつとよかつたが、朝食の終る頃から急にくづれてきた。いくら火を起しても、屋根にしたタンネの葉

一月二日 曇小雪

A·B·T班 A・B班は千六百米のデポーまで荷上げに下り、T班はカマボコとウィンパーの間のトンネルを完成



させ 壁には、 悠と立つて歩けるトンネルの壁際には、 ンプまで上げてしまう。 ごみ捨て場と便所になつている。 豐富な食糧と、 アイゼン・ワ ポーでは、 完成したイグルーを眺めては悦に入る。 B・Cから登つて來たD班に會い、 カン・ピッ 二つの天幕の間の ケルなどがつり下げられ、 函の一つに腰を下して煙草をくゆらしなが 食糧函がずらりと並べて積み上げられ、 イガ 12 I とト ンネル 荷は全部銀杏ケ原の 片隅 (上圖參照 は深 は完成した。 く掘 5 悠 n

### 月三日 晴後ガス

きたト 峰 沼に下 から 300 を現わしては、吸いこまれるように消えていく。 部を越える頃は、 ていた白濱の豫想通り、 きり見える。 遙か から A à 沼 の堅雪の上にウィンパー六人用を張る。 ·B·T班 J. 0 に廣茫と展開する。 れが五色ケ原、 ラ 原 ゥ 0 坦々たる雪原を登り氣味に化雲岩の豫定地に着く。 化雲 彼 2 の鞍部を再び越えて銀杏ケ原に下りて來た。 方に遠く望まれ 天氣も最高潮だつた。 岳の 雲は高 その向うに忠別岳、そして高根ケ原と、 丰 やがてさんくくと陽がさし始めた。 63 ァ ンプを設定すべく出發。 イゼ オブ To ンにかえたりまたス タテシ A · T班 大きな荷を負 ケ山、 夕焼けに映えるニペソツ、 と別 旭岳も、 れたB 旭岳・白雲岳は雲の上に白く輝 昨夜天氣圖をひねくつて考え キーをは 43 班 陽がさ」ないま」にすつ は 次々と紺 卷き上るガ 1 こ」では、 ガ いたりしてひさご これからのル ムラウ スの 青 舞 0 2 石狩 了下 ス 稜線に姿 0 吹きさ 北の は 3 0 1 連 て 面

われる眞紅のデポー族に導かれて、銀杏ケ原のキャンプに歸り着くと、D班がB・Cから上つて來ていた。 にピンクに染まつて、それもやがて灰色にあせた頃、殆ど消えたシュプールを辿り、次々にガスの中からひらめき現

#### 一月四日

こすりながら化雲の天幕に急いだ。 ている地面に、 るくなつたので、それとばかり飛び出す。忠別岳まで荷を運ぶことにする。 · T 班 ガス後風强く小雪。氣象係の豫報では、今日も惡くない筈だが、一向によくならない。十一時頃急に明 シールはみるみる切れてしまう。歸りは激しい風雪の見舞を受け、ともすれば感覺を失い勝ちな顔を カチカチのシュカブラと、 强風に露出し

青空にガスが観れ飛び、 B·D班 ガス後時々晴、 銀杏ケ原では、風が蔭を落して、西から東へ、雪烟を卷きあげて移動して行く様は見事だ。 運ぶものは運んでしまつたしのんびりと雜煮など作つて樂しむ。夕方外へ出てみると、

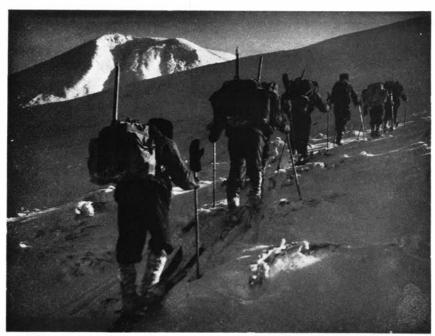
### 一月五日 終日激しい風雪

出て天幕の除雪をするが、若し潰されたら、イグルーを擴張して移轉するまでだと覺悟を極め、一日中食つては歌い В · D班 ベンチレーターがぶん~~唸つている。 こわれたようなロビンソンが二十二米を示していた。時々外へ

#### 一月六日 晴

駄辯つて過ぎてしまう。

をのぞくと、 互の姿が點々と、 えれば、べう~~たる高根ケ原の雪と氷の高原だ。こゝでいよ~~サポートも最後のA班と別れることになつた。お A·T班 綺麗に晴れ上つている。 今日も駄目だとの豫報係の御託宣なので、あきらめて、十時頃から炊事を始めるべく、雪をとろうと外 シュカブラの彼方に消え去るまで、振り返つてはストックを振つて別れを惜しむ。T班はまた三人 『それあわてろ』と雜煮で腹ごしらえをして出發したのが十一時。 忠別岳を越



白銀莊を出発して稜線へ・背後は美瑛富士



銀杏原キャンプ (C4) の朝

北大山岳部



銀杏原からの**南望**(左端の前山はスマヌプリ・右の一番高く見えるのがオプタ テシケ山(2012m.)・その右美瑛岳・中央より左に遠く見えるのは十勝の山々)



化雲岩のキャンプとトムラウシ山(トムラウシ山の向側が銀杏原) 北大山岳部

立てて、北へ北へと白雲岳を目指して進む。 だけとなる。 その荷物は十貫近くあるが、傾斜が無いので行程は捗どる。 午後四時頃、 白雲岳手前の瘤でキャンプ。 凍つたシュカブラの上を、カラく、と音を 風は無く、 天幕は使い初めの

В · D班 埋れた天幕を掘り出したり、 カバ ーの無い爲、 じつとり濡れたD班の寝袋を乾すやらで一日すぎてしま

クレッパーだ。惡かろう筈はない。

#### 一月七日

つた。

て、物も云わずに歩く。白雲岳を越え、 T班 晴後ガス。今日も晴れた。 いつになつたら輕くなるかわからないいまくしいい 北海岳を越え、黑岳の小屋の前に天幕を張る。 とうとう來た。 ックザ ックをゆ ありつたけの す b Ŀ げ

ガス。 ガスが晴れそうなので、撤收して出發したが、再び灰色のガスに埋められてしまつた。 食糧を出して、天幕は喜びではちきれそうだ。

る。 をたよりに、 B・D班が迎えに來たらしいが、もう歸つたのか人影もない。Ciに歸りついてみると、 所々にデポー旗や竿を見つけては 意を强くする。 トムラウシを越えた處で新しいシュプールを 發見す カマボコはすつかり埋れ

來た時の記憶

て、屋根が雪面より下になつている。

水 てど暮せどA班は來そうもない。 1 B の聲と共にA班が歸つて來た。短い別離にもしろ話はにぎやかだ。夜はカマボコに集つて成功の前祝いコンパ。 D 班 ガ ス。 A班を迎え旁々トムラウシに登りに出かける。 きつと今日はのんびり寝ているのだろうと、 風もなく、アイゼンが素手でつかめる程暖い。 引返して一服しているところに、 ヤッ 待

#### 一月八日

T班 晴後曇 今日はいよ/~層雲峽だ。 のんびりとパッキングをすませ、 餘つた食糧は石室の前に置き、 荷も心

てはや半月だが、まるで昨日のようだ。年來の宿望はこれで完成される。充ち足りた想を夫々の胸に抱いて、 も輕く黑岳へと登る。振返つて見たところで、トムラウシは見えず、僅に白雲岳のドームが窒まれるだけだ。 黒岳の 出發し

大ゲレンデを、大きくボーゲンを描いて下る。

A·B·D班 晴後曇 撤收。朝の銀杏ケ原は素晴らしい眺めだ。埋れた天幕を掘り出し、住み馴れたキャンプを

後に、ふりかえりふりかえり、銀杏ケ原を下つてきた。十二日ぶりのB・Cは、雪に埋れては 匂までも出發した時のまゝだ。折からラデオのニュースは、縱走班が層雲峽に到着したことを知らせている。 いるが、中はタンネの 野田・

越野・木村達の彈んだ聲が聞えてくる。顔を見合わせてニャリとした。

身の丈あまる荷をつけて、里馬力も物すごく、一擧に白金温泉に下つてしまう。二十日間に亙つた

山の生活も、 浴槽の湯氣と共に洗い流されてしまつた。

一月九日

夜半、縦走班の三人がやつて來た。

一月十日 美瑛驛發。

一月十一日 札幌驛着。

四 装備および食糧について

を生じてしまつた。更に支柱の竹ベニアは膨潤してはげてきたり、直角近くまで曲つてしまつたものもあつたが、こ カ 7 ボコ型六人用天幕は、 防風壁を積みすぎたこと、および位置の選定を誤つたせいもあり、三日目にして支柱は折れ曲るという失態 昭和十二年ペテガリ岳攻撃の際、 强風に潰された經驗を持つため、風を恐れて、 底を深 P

Ľ

失敗だつた。 グランドシートも寝袋もじつとり濕り、低くなつた處では水溜りが出來る程で、不愉快な思いをした。 ち快適な生活を續け得たが、 これを解決出來ないでいる。 滯在の場合、 7 n ットの裏側にビニールのカバーをかけたが、これはその間に水蒸氣が凝結して、かえつてマットが濡れる始末で、 は支柱が十数年前の古いものであつたため、 **寝袋その他の防濕が常に問題になるが、** カマボコ天幕の場合、 今回は、 ビニールのシートをグランドシートの下に敷いた結果、 その彈力性を失つていたからだろうと考えている。 シートを倹約して背中の當る部分だけにしたため、 空氣マットのような優れた敷物を持たないわれわ 縦走班は終始乾燥を保 多期尾根上の また、コルク 最後の頃は、 れは、 未だに 長期

に依賴して、五號罐に一罐四三〇 次に主な装備を擧げる。 ガソリンは、三人で朝夕二回雜煮を作り、お茶を飲みうるだけの量を一日分、 カ ボコ型六人用 張。ウィンパー六人用 C.C. 宛罐詰として、夫々の函に食糧と共に詰めて運んだが、これは秀逸だつた。 一張。クレッパー變形三人用 約四○○ C.C. 一張。 ウィンパー變形三人用 とし

張。 取付式) 夏用家形四 六箇。 ザイル三十米 人用 四張。 ビニール 一本。 鋸 シート三枚。 五本。 纶。 = 背負子。ブラシ(馬用) ル クマ " 7 九枚。 ラディウス 六箇 四 笛。 ス =

携帶用ラデオー。乾電池(單一)二十本。B電池一

2 7 ン風力計 -温度計 三本。アネロイド 15 D メート 1 = ガソリン 四十三立。 ァ ル = 1 n 四

求

食糧に關しては、 大體われわれが例年使用しているものがやゝ豐富にあつたというにすぎない。

獻

立

尾	尾	澤		
根			1	
停	根			
滯				
用	用	用		
5	雜	*		
E		味	朝	
		噌		
ん	煮	71-		
同	同	チ乾 ーパ ズン		
右	右	キヤラメルー	晝	
うどん	雜	y X		
ん	煮	ザ米シ		
111	3	ミ味	y	
カ	カ	カ噌		
×	ン	ン計		

分けしておくことも何時もの通りである。各箱には、内容のリストが入れてあり、その控を各リーダー が 持つ てい したものはばらで箱に詰めた。 養學的に見た保健食の條件を滿たしている。 子、味の素を配し、黄粉、晒餡で單調を避けるようにした。 次の梱包については、主食、副食を別々に、三人の一食を一包とし (但し乾パンは一人一食一包)、敷のはつ きり 熱量については、行動日、約三千四百カロリー、停滞日、 箱はボール箱を用い、キャンプ毎、各班毎に詰め、キャンプ毎にポスターカラーで色 約二千四百カロリーを有し、蛋白質約九十瓦であり、

射藥を用意した。長期間の「飽き易い」ことを防ぐために、味のつけ方に變化を持たせ、カレー粉、胡椒、

レモンを適時使用、蜜柑は一人一日一ケの割で、別にビタミン錠劑と注

七味唐辛

各食後の茶は、紅茶、コーヒー、ココア、

た

氣象が登山の成否を決定する重要な要素の一つであることはいうまでもない。まず計畫の基礎において、その地方

五、氣象について

m	₹,	チ	バ	味	野菜	おら	プラッ	豚	乾	乾	米	餅	品
	1				は玉	ん	F		5				
	ガ	1	A		5		7			r			
	y					だ	1		E				
	,				ん草ぎ	揚	1						
煮	ン	ズ	1	喑		げ	Ŧ	肉	ん	Y			2
24	九	t	<del>=</del>	三貫二	八	Ξ	$\vec{}$	七	十三	$\equiv$	六	五.	親
百	水	共	<del>+</del>	=	貫	+	貫		二貫	+	31-		
fi.	100	100	*:	百	八				Ξ				
+	Y	Y	y	五十	百	Ħ.	百		百	=	五.		
匁	۴	K	۴	匁	匁	枚	匁	貫	匁	貫	升	斗	五
		1/12	1/12	+	+		+	+	Æ.	Ŧ.	=	=	-
		水	林				五	五	+	+			1
		V	V							pu			金量
		۲	F	匁	匁		匁	匁	匁	タ	合	合	力
	牛	හ	2	黄	サ	煉	粉	蜜	唐	カ	砂	紅	fi
	ヤ		5		ッ					ν			
	ラ	3	l		カ				辛				
	×		あ		ע					1			
	n	L	ん	粉	У	乳	乳	柑	子	粉	糖	茶	4
	百	三	四	=	小	=	四	四	四	Ŧî.	-	八	無
	五.	百八			瓶			百三			貫	*	
	+	+			九			+			百	V	1
		pu .						=	-				1
	個	本	袋	袋	個	籬	離	個	函	涵	匁	K	青
	1/3							-					7
	個							日					7
	Hel							個					食量

の氣象の資料を集めることが最初の仕事である。 「中央高地では四日に一日行動可能の日がある」との前提の下にすべての準備がなされていつた。 今回の計畫では、 旋風の來襲する週期と、 毎年の十勝合宿の經驗か

山に入つてからは、 毎日ラヂオの氣象通報による天氣圖の作製と、 日々の氣象觀測を行つたが、後者は器具の破損

のため、後半は殆ど資料皆無の有様となつた。

夜は月が われる。 可能性が た。この時の旋風は皆、北海道南方あるいは南部を通つているが、これがもし宗谷海峽を抜けたとすれば、停滞する をとつた日は、十二月二十三日夜から二十四日、二十七日、一月二、四、五、七、八日であつたが、七、八日を除い 張り出して來て、季節風は、特に山上では猛威を振うのである。 期で繰り返えされる。 ては、いずれも大陸の高氣壓は比較的に發達しなかつたので、氣壓傾度は緩く、例年に比べて、惠まれたわけであつ 陸沿岸地方に低氣壓が發生して(旋風)日本附近を通り、東又は北東に抜けるという現象が、大體四日から七日の週 静寂の銀杏ヶ原を皎々と照していた程だつた。後で氣象臺に行つて聞いても、 七、八日には、 强いので、 大陸と千島・南洋との間に、 風は一層弱かつたかも知れないが、化雲岩より南は、ぐすぐすした天氣がかなり續 旋風が北海道より西にある時は、季節風も止むが、發達しながら東方に去ると大陸の高氣壓が 氣壓傾度がかなり急であり、當然猛吹雪が豫想されたにも拘らず、兩日共午前中は時、 所謂西高東低の氣壓差が出來て季節風が吹き始める。 入山中に、北西の季節風が强くなるような氣壓配置 その筈はありません、下でも そしてその間、 いたものと思 大

近を通りオ れが千島方向に進むと、季節風はかなり强くなる。 に述べたように、 1 " ク海に至りこくで衰えるものと、 旋風には大體、本道の南部で太平洋にぬけ、北東に進んで著しく發達するものと、 またこれに不連續線を伴う時、 この二つの型が著し 前者は、 南側が開いている化雲岩より南が 太平洋に出ると急に發達

降つていたし上空は大荒れの筈です、と首をかしげていた。

特に天氣が惡くなり、大雪山群は、化雲岩-石狩岳の線で、不連續線から守られるために比較的天氣は良いと考えら 遅くなるので、 n がより悪天候となる。 以上のように説明され得た。 また、 旋風が本道の北を通る時は、 オ ホーツ このように化雲岩を境に、北と南で天候に差があることは、 ク海に停滞しぐずついた天氣になる。 體驗 から歸納的に導かれた一つの あまり發達しないので强い風が吹くことは少いが、 この場合、 結論 (假說) 風は南西となるから、 であると言いえよう。 今回始めて明瞭にな その性質として、 やはり化雲岩以南 0 7: こと 足が

以上のことを考え合わせて、 われわれの計畫の基礎になった、 平均四日に一日の行動日が得られるという豫想は大

幾分蛇足の憾みがないではなかつた。

體正しかつたと言えるが、

たゞ化雲岩以北の行動に於ては、

白雲岳のキャ

ンプに一週間分の食糧を用意したことは、

時は、 K 度 事實を知り得たにすぎない。 よつて見當をつけておかなけ 々經驗した。 次にわれわれが最も知りたかつたのは、この山の地形に應じた、實際に役に立つ觀天望氣の法であつたが僅に次の 惡天の光であることは、よく言われていることだが、 これは上昇氣流による霧であることは明らかなので、實際惡天候の兆かどうかは、 天氣が崩れてくる時は、 ればならない。 十勝岳の方から崩れる。 濃霧の際、 風が收つてくるに從つて晴れるという傾向 雲海が不安定で舞い上つてくるような ラヂオの

## 六、ふりかえつてみて

型式を採り上げた。 勝岳大雪縦走という目的を、 けつして極地法の練習のためでもなく、 確實にかつ安全に完成するために、 Ł マラ + われ への訓練でもない。 われは、一般に極地法と言われているこの この山行自體のためであり

か> 0 から 割かを加算した、 れるのであるが、 も餘つたが、 われわれが最もおそれるのは、 われわれは極地法なるものに習熟しているわけでもない。 面 K ため惡天候を豫想される日の行動を强行しなければならなかつたということの中に、 で連絡出來る豫定であつたので、まず大丈夫と考えてはいたものの、それが不可能となつたまゝ決行されてしまつた 0 はその運用と人による。 った。 好轉を待つて前進する。 この よければ、 で、 k 過去の失敗の體驗 開しては、 ーとしてのあり方を教えられた者にとつて、それが本質的なものではありえないことを知つているだけである。 いかない。 山行自體が、 銀杏ケ原 そのことは、確實な登頂を期するこうした型式の登山では、 牛刀となり、それより悪い天氣が續けば敗退となる。登山とは所詮そうしたものか 割に條件が良かつたと考えられる今回のみを標準とはされない。 山岳部という精神的な結合の一環をなすわれわれの仲間である以上、何をつけ加えることがあろう。 ひいてはそのことが、銀杏ケ原のキャンプ設定に誤を侵した原因となつたとも云えるであろう。 に出るまで、焦燥は消えなかつた。行動表は種々按配してあり、結果としてはうまくいつたが、その きわめて漠然としたものにしかなり得ない。 天候にしても、 必然的にとられた方式のもとに行われたのであり、 から必然的に採用されたこの登山方法が、 今回の山行で一番懸念されたことは、 個々の苦心や勞苦はあつたにしろ。 鷄を割くに牛刀を以てしたのではないかという懸念である。 それを量的に表わし得ない現在、克服すべき最悪の條件とは、 しかし登山という行爲を通じて、 食糧は豊であつたし、 從つて、それによつて作られた計畫は少しば 縦走班とサポート班との連絡である。 充分に滿足出來る態に驅使され得たであろうか。 當然あるべきことであり、 愼重に考慮された行動表に從つて動き、 最悪の條件のもとで云々、とよく言わ 精神的 計畫自體の矛盾を認めないわけ な負擔は重 そのメンバー 勿論食糧は三分の一以上 も知れない。 平均の惡天日數に何 最初は無線電 4. 8 あるいは か ではな り狀況 天候 人の それ

この方法の强みであ

感じ、 な衒いではなく、 のを考えさせる。 は、 ることに異論はない。 に外ならない。 こ」では、 なものだと思われてはたまらない氣がする。 畫 感じないですむ。 いと思う。多くの人數と、 の實施上當然のことなのであるが、 それを求めていかうとする。 白味 縦走の完遂と、 がない、 このように、 たとえば、 困難と苦痛を通して自然と身近かな繋りを持ちたいという、 われわれの間で祕かに交わされる、 と洩らした言葉に、 しかし、 新人の訓練すなわち登山人としての成長という見方に、 豐富な食糧は、 登山は確實にしかも安全でなくてはならない。だが不安や困難を克服することに喜びを D班がラッセ ある班員の、 この矛盾した兩面を、 ラッ この行程が順調であつたためというより、 セ ルを一 慎重な計畫と相まつて、各人には精神的にも、 あつけなくて山に登つたような氣がしない。 ルも登山の重要な一面と考えているわれわれにとつて、山登りとはこん 度もせず、 一度死物狂いの山登りがしてみたいという言葉の氣持は、 われわれはいかに統一的に把握していくべきであろうか。 唯シュプールを辿る單なる荷上げに終始したことは、 山を愛する者の心の底に沈んでい もつと深い、 ひとつのアイアラニイーを求めた 不安と緊張 肉體的にも、 登山の本質というも の無 さほど負擔を 60 山登りに

な裏ずけをもつた登山を、 わ 廣く登山という立場から考え合わせると、 れわれは、 われわれはいつも、 この方法が目的を果すために、 部員の登山人としての向上、登頂の成功、 多角的に發展させていきたいと希つている。 その中に矛盾するものを持つていることを認めない 特に大きな山行ではいかに强力なものであるかを知つた。 あるいは部全體の成長などを考えて、 わけに それととも 常に内面 は 4. か 的 15

われわれは忘れることが出來ない。 この登山は、 先輩、 僚友の山につながれた友情と、 毎日新聞その他各方面からの援助の下に行われたこと

十勝大雪縱走行動表									
	白 全 運 衆	Cm I	BC	超音点 C4種	(C ∰ C5 <sup>©</sup> (	高根 Ce原	黑 選		
22						Ť	, , , , , ,		
23	===	===	5						
24			9	† <b>=</b>		ア版(級走短 サポート A 想 ・ C・ ・ D・ ・ E・			
25	0.0			+		E:			
26									
27	白美	*							
28	自 領 策 在 亡 C,			=					
29	15	25	*7	*A *B					
30		Co CaCa */	C:=::	*8					
31		奈 ラテ山	*0						
ï			c <sub>1</sub>	*A *B *A *B	-				
2			** 6:=:=	*					
3			中C4 慰 元 02 A	-	2				
4		D 24	1	* B * D					
5				-	=:>				
6				* B * D * B.					
7				*0	==>				
8				===	1				
				490-7					
9									

0 北

プ ス

と南

四、山岳詩人としてのギド・レイ 三、登山家としてのギド・レイ

附錄第一

ギド・レイのおもな山歴

第二 ギド・レイのおもな著作

二、ギド・レイの生涯 一、アルプスの北と南

日 高 信 六 郎

歐洲の中央部に東から西にわたつてつらなるアルプス山系のうち、ふるくから世にひろく知られたのは、 北のス 1

ス側であつた。

小屋が陽をうけて、靜かな山人の生活を思わせる。彼らは牧夫であり木樵であり獵師であり、氷と岩とになじんだす。 ド・ソーシュールやラスキンやティンダル、クーリッヂやウィンパーやマンメリーなどによつて、觀察され研究され ぐれたガイドでもある。これらの山村や山岳は、比較的ふるくからイギリス人やスイス人によつて訪ねられ探られ、 大觀するとよくわかる。下の方には牧場がひろがつて、牧牛の鈴音が樅の林のかなたから聞こえ、屋根に石をのせた の塊りや尖峰をかこんで、沈默をまもつているありさまは、ツェルマットからたやすく登れるゴルナーグラートから ここには北から南にきれ込んだ谷があり、その奥は氷河となつて岩峰につらなる。廣い雪と氷の世界が、 巨大な巖

探檢され記述されて世界に知られている。

闘十六時間に精力を使いはたし、 では一日の長をうたわれている。 山人を生んだ。 た岩片におおわれ、荒凉たる感じを與える。そこに住む山民のくらしはくるしく、ひらけることもおくれている。 つむじ曲りだが氣前がよく、いつもひな歌を口ずさんで、氣がむけば命がけの岩のぼりを平氣でやつてのけるような からうける强烈な太陽の光は、あまねく山と谷と人とをてらして、こゝに特有な負けずぎらいで入なつつこく、少し Jean Antoine Carrel はその代表的な産物である。 るにその南がわは、急に切り立つて谷にのぞみ、その谷は、太古以來の自然力をうけて山はだからくずれ落ち 山は比較的里に近いが、けわしくて雪が少ないから、山民は自然氷雪よりも岩に親しんで、岩のぼり かのウィンパーの協力者となり、競爭者ともなり、晩年登山客を守つて風雪との死 マッターホルン直下の氷河のほとりに命をおとして、山案内の眞骨頂を發揮したカ

わがギド・レイ

Guido Rey は、アルプス山南に生まれた登山家であつて、數多のすぐれた登山家を出したイギ

リスあたりの大家とはまたちがつた特異の存在として、深くわれらの心にふれるものを持つている。

# 二、ギド・レイの生涯

業に骨を折り、青少年の誘導につとめ、自分は謹嚴な獨身生活を送つて、一九三五年に七十四年の生涯をおわつた。 精をかたむけ、そのいそがしいあい間に、山にのぼり文章を書き、藝術家とまじわり、畫や寫眞に興をやり、慈善事 立てるつもりで、 で工場を持つほか、親戚にあたるセラー家の工場の製品を手びろく扱つていた。父は次男のギドを自分の後つぎに仕 ギド・レイは一八六一年十一月二十日北伊トリノ市に生まれた。父ジャコモ・レイは土地一流の綿糸布商で、 土地の學校がすむとすぐロンドンにやつて商賣を見習わせた。彼は間もなく父の業を繼ぎ、家業に

れ出で、はぐくまれ、きたわれたと云うべく、この點はなはだ惠まれている。 他の多くの著名な登山家とくらべて、彼はあらゆる點において山とふかい因緣をもち、山と山人との精をうけて生

ます彼の生地トリノはポー河の上流にまたがり、四方山にかこまれた氣もちのいゝ城下町である。北にはグラン・

にはフランスとの境をかぎる山なみのうちに一きわ眼立つモン・ヴィゾ Mon Viso(三八一九米) ラディゾ Gran Paradiso (四〇六一米)山塊のかなたはるかにモンテ・ローザ (四六三八米)の頂きをのぞみ、 が朝日夕日にて

り映えて、町の人々の誇りともなり友ともなつて、この山都に育つ子供たちの心をひきつける。

本據をこゝに置いていた。 ノはまたピエモンテ地方の都會として、後年イタリヤ統一の大業を負う運命をさずけられたサヴォ ィア王家が

羊や山山羊を狩ることは、 サヴォィ ア王家の領土はもとずつと廣く、今の佛領サヴォア、ドーフィネなどをも含んで、アルブスの兩がわに擴 山岳戰や峠の守備は王國として最も重んぜられていた。その關係もあつて、山野を跋渉し山中に羚 由來この王室の御家藝であつたから、山とは深い因緣があり、登山に趣味をもつ人も少く

なかつた。 中でもイタリアを統一したウムベルト王の皇后マルゲリタ女王は、この頃の女性としては珍らしい登山家で、モ ーザの頂上をきわめたこともあり、つねに登山界のために精神的物質的援助をおしまなかつた。今日モンテ・

DI ザ頂上の山小舎をはじめあちこちの高山に、皇后の名を冠した小舎がある。

テ・ロ

界レコードを破つたことはあまりにも有名である。公はまたすぐれた航海者探検家として世界のすみずみをきわめ、 その足跡は南極地方にも及んだ。 きから山岳に傾倒し、 最も有名なのは、最後のイタリヤ國王ヴィットリオ・エマヌエレ三世の從弟にあたるアブルッヂ公である。 のちにはアラスカ、アフリカなどに五千米突級の高山を征服し、 マッターホルン早のぼりの記錄をつくつたり、 マンメリーといつしよにツムット尾根をかけた カラコラムのブライド・ピークに當時の登高世 若いと

流れているのを感じたり、落日をまえにふるい故國のフランスの山々に見入り、轉じて近くモン・ヴィゾを仰いで山 て、この山上に羊を守る親類のおぢいさんの家をたずね、生れてはじめて山氣にふれ、「登山」の貴いいくつか 「靈氣に打たれた次第は、彼の晩年の小著『アルブスのあけぼの』にしみじみと畫かれている。 イ家の祖先は、そのむかし宗教上の迫害をのがれて、フランスの南部から山谷をさかのぼり、 ナ地方に足をとゞめた新教徒の仲間であつた。八歳のギドが父と兄とにつれられ、驢馬の背に荷物と相のりし 牧羊にかこまれながら、 牧夫のおぢいさんから先祖流轉の歴史をきかされ、自分の身うちに山人の血が 現在 の國境 に近い の教

を徳とした。この一むれの從兄弟たちの間から、

後年世に名をなした登山家があらわれた。

祖 先の血にも増して彼を山に近ずけたのは、 伯父にあたるクィンチノ・セラ Quintino Sella (一八二七—一八八四年)

の影響である。

よつたものであり、 養成にも熱心であつた。 國心とを振いおこし、協同互助の精神を養つて國家統一後間もないイタリア人の結合をはかつた。 75 登山家でもあつて、一八六三年に大臣の身で、イタリア人として最初のモン・ヴィゾ登攀を敢行して世人を驚 に重きをなし、 彼は登山の普及奬励に全力をつくし、 ラは富裕な實業家の家に生まれ、 數回大藏大臣として難局にあたり、 カレルが成功すれば、つゞいて彼みずから登頂を試みる計畫であつた。 名案内カレルがウィンパーとマッターホルンの初登を争つたのは、 地理學者鑛物學者として有名であつたが、 イタリア山岳會をつくつて自ら會長となり、登山によつて青年の元氣と愛 イタリア統一の前後に大きな功蹟をあらわした。 同時に經濟財政通として當時 實に彼の獎勵と援助とに 彼はまたガイドの 彼はまた一流 Ó 政 界 0

ドは中途から引きかえす組に入れられ、 きにしてしまつた。それから二年のちにはモンテ・ローザにつれて行かれたが、 いて教えられ、 夜なかに起こされ、 でボー ぼりをやつた。 彼は每夏大ぜいの親類の子供たちを山に近い別莊に集めて朝夕生活を共にし、 のようにして、 Monte Bo(二五五六米)につれて行つてもらつた時である。前日山麓まで相當の距離を歩いて足をならし、 その子供たちの一人であつたギドがはじめて山らしい山にのぼつたのは、十三歳のときこの團體登山 强行をついけて別莊にかえる。 ギドはこの伯父から山に對する限りない愛着と、 途中水を飲まされず、草木や鑛物について講釋を聞きながら頂上につくと、見える限りの山につ ひどく屈辱を感じたが、これも後から考えると尊い教訓であつた。 この山のぼりは少年の心身をきたえると共に、 登山家としての心がまえを教えられ、 途中で天気がわるくなつて、若いギ 休暇の終りにはかれらを率いて山 かれらをすつか 生それ カ山好

ウデンツィオ Gaudenzio の雨セラ、マッターホルンの冬季登山から始めてコーカサス、 アルフォンゾ (ダン・デュ・ジェアンの Alfonso のセラ三兄弟、モン・ブラン、モンテ・ローザなどの冬季登山に成功したコラディノ、ガ Dent du Géant 初登を遂げたアレッサンドロ Alessandro' アラスカ、 コラディノ Corradino ヒマラヤ登山

ギド・レイの若い頃の歐洲登山界をながめて見よう。

家として又山岳寫眞家として餘りにも有名なヴィットリオ・セラ

Vittorio Sella 等。)

登山史に新時代を持ち來たしたといわれるアルフレッド・ウィルスのウェッターホルン登攀は一八五四年、ウィン

開祖マンメリーの劃期的なグレポン登攀は一八八一年、セラ兄弟とグラハム W.W. Graham のダン・デュ・ジェア パーのマッターホルン初登は一八六五年であり、一八五五年すなわちギドに先立つこと六年に生まれた近代的登山の

ン登攀は一八八二年で、ギド二十歳のころである。

歐洲アルプスのめぼしい山が登りつくされる頃になると、コーカサス、アラスカ、アフリカ、南米などの高山が歐 かくて歐洲における新らしい登山は急速に發展して、けわしい峰やむつかしい山稜はつぎつぎに征服されて行つた。

洲登山家によつて開拓されはじめた。この頃はまた歐洲先進國の海外發展、植民地開發の時代でもあつて、これら高

山登攀のパイオニアたちは、期せずして當時の時代精神を具現したものと云うべきであろう。

即ち彼のいわゆるアクロバチック登山の初期であつて、歐洲アルプスのおもな峰や困難なルートは殆んど登りつくさ れていた。 このように、ギド・レ しかしまだ初登攀の餘地が残されていて、彼も相當數の處女峰登りと、注目すべき新登路の開拓をなし遂 イが山のぼりをはじめた頃は、 いわゆるクラシック登山時代の終末期であり、

げたのである。

(48)

F

1

フ

1

ネに入つては、

メイジュ(三九八二米)を征服し、

聖なる山 要するに、 の殿堂に参する信徒の心構えを持ちつゞけながら、 彼はふるい時代と新らしい時代とにまたがつて、山を敬い山を愛し、敬虔な態度と謙讓な心をもつて、 新らしいテクニックを驅使して、新らしい登山の場とし

てあらわれた岩峰に挑む若さを持つていたのである。

ス連峰 そのころ漸く統一を成しとげたイタリア王國の人たちが、 の望をかける新興國民の氣持ちは、すなわちわが愛國詩人たるアルビニスト、 ic わけ入り、 その頃はまだオーストリア領であつたドロミテの危峰を「失地回復」 新らしい感激に燃えて、 ギド・レ 「自然的國境」としての 0 イの心でもあつた。 ٧ 1 ボ ル と仰いで、 ルプ 祖

バ ける注目すべき登攀、 どの名山のぼり、 チック登攀時代であつて、各期それぞれ趣のちがつた登り方をしていることは注目に値いする。 ギ イの登山には三期を劃することが出來る。 第二期は一八九〇年代(かれの三十代)のモンテ・ 第三期 は一九〇〇年以後 (かれの四十代) 第一期すなわち一八八〇年代(かれの二十代) のシャ D モ ーザ及びマッター ニー及びドロミテにおける ホルン並 びにその は伊佛ス 4. わ ゆるアクロ 1 近 K ス 13

伴侶となつた。 九四五米)であつた。 彼にとつて最初の手ごわい山は、二十歳のときに登つた佛領ドーフ この時のガイドはアントニ 才 • カ ス クニ エ IJ Antonio Castagneri で、これから生涯彼の好 ィネのグラン・ペ ル ヴー Grand Pelvoux

2 の後の十年 間 は 從兄の ファレッ サ ンドロ · ラに手引きされ、 カ ス B = 4 IJ p 7 + = + " Jean Maquignaz

その附近のチャマ どの名案内と、 ピエ v ラ E ンテ地方の山群をさぐつて、グラン・パラディゾにのぼり、 Ciamarella (三六七七米) ベッサネーゼ Bessanese (三五九七米) に新登路 バール・デ・ゼクラン E (四一〇三米)の困難な登攀に成 ン・ヴィゾを東面から初登し、 からのぼつた。

功したが、頂上で日が暮れ、その直下で野宿した。また友人で單獨登山者として名を擧 げた フィ オ リオ

d'Arves) (三五〇九米) にのぼり、 Carlo Ratti の兩人と、案内なしでアルヴ南峰(エグィユ・メリディオナル Aiguille Meridionale

南稜に新登路を開き、ベルナー・オーバーランドの最高峰フィンステラールホルン(四二七五米)の頂上で、スイス クニックを示すなど、新進氣鋭のアルビニストとして頭角をあらわした。その他スイス境のリスカム(四五三八米) クーリッヂが最もむずかしい登山と極印うつた難所を片付けて、 高度の登山

の名ガイド、アルマー Christian Almer と出會つている。

くの登山を共にした。 ーネ Luigi Vaccarone と親しくなり、一八九〇年代におけるモンテ・ローザ山群とマッターホルンの注目すべき多 彼は早くからイタリア山岳會員になつていたが、この頃會員の中でも學識山歴ともに群をぬくルイヂ・ヴァ カ

one Rey の名をのこし、 ンテ・ローザでは、 最高點デュフール峰 Dufourspitze(四六三八米)に南稜からのぼつて「レイ尾根」 Crest-ニフェッチ峰 Punta Gnifetti(四五六一米)を東稜からのぼり、 同名の峠 Colle Gnifetti

(四四八〇米) の雪崩にさらされた危い斜面を横切つて、最初の峠越えを敢行した。

7. やが て彼はマッターホルンの魅力にひきつけられて數年の間ほとんどこの山とその附近の峰に全力を傾 17 つくし

と、友は『そら、すぐマッターホルンが見えるぞ』と云つた。果して橋をわたると、切り立つ兩がわの崖 して、褐色の巖がいかつく、碧いまでに清い氷河を装つて高く高く天際にそびえている。一瞬釘づけされたように立 はじめてアルペンストックを手にして、トゥールナンシュの谷を歩いてのぼつた。 が はじめてマッターホルンに見参したのは二十二歳のときであつた。從兄のアレッサンドロ・セラにつれられ、 グラン・ム ーラ ンの 急湍をすぎる の正 一面を壓

J 死 入つたこの頃の人たちは、新らしい装備をはじめて身につけ、汽車から降りていきなり高い山に挑むというようなや り方は夢にも考えなかつたのである。 直前まで、彼とこの山とは切つても切れぬ因緣のきづなにつながれた。 キニャツに會つて、岩のぼりの手ほどきを受けただけで満足せねばならなかつた。 息をとめて、 彼の眼は遠いかなたに吸いつけられたが、たまらなくなつて數歩かけ出した。 彼がマッ ターホルンの頂上を踏んだのは、それから幾多の試錬と經驗とをつん しかし彼はこの旅では、 山を敬い山をおそれて山に 有名なガ この瞬 間

した。 愛弟マ した。 もつともその間に一度(一八八五年) 友人とガイドなしでマッターホルンのぼりを思い立つたが、 このことは彼に深刻な打撃と反省とを與え、それからの彼の登山は愼重をきわめ、 リオが友人と二人ぎりで山に出かけ、 モン・ブラン山群のコル・デュ・ジェアンで墜死した悲報をうけて中止 ガイドを伴うことを原則 出かける間際に、

だ十年ののちであつた。

せず、 の兩マキニャツをつれて、 無念さは想像に絶するものがあつたろうと思われる。 ていた計畫を思い切ることは、 ねばりは驚嘆に値する。 たが、 命がけの三時間をすごしたのち、 八九三年に、 四日後には同じみちを攀ぢて四千百米のところまで登つたとき、はげしい石なだれにさらされ、 引きつゞいて再擧をくわだて、三千七百米のあたりで夜をあかし、 イタリア尾根からはじめて頂上にのぼつたのであるが、その三年前には、ダニエレとアントニオと しかもこの時彼はその計畫を友人にもほかのガイドにも祕して出かけた程なのだから、その マンメリーが完登し得なかつた東稜フルッゲン尾根に挑み、 數時間まえに考えた程つらいものではなかつた。 思い切つて危険をおかして下山した。 しかしかれ自身は『この時に當つて、 八日間に三回のアタックをくりかえした 雪と雷に迫われて敗退した。それにも 結局理性が熱情に打ち勝つたのだ。 悪天候にはゞまれ あれほど以前から熱望し 岩かげにひそ て引きかえ

にのぼつて、この尾根をくだる計畫を試みたが、ガイドの不慣れで手間取つた上に、ひどく雪に降られてモノになら なかつた。 ところが未知の稜線突破の熱情は全く消しきれず、六年後の一八九六年には、ヴァッカローネと他のみちから頂上

尾根の空際に見出したツェルマットの人たちによつて、英人フルッゲン 尾根から登頂す、 との電報が 涙をのんで引きかえし、月あかりに夜を徹して、翌朝敗殘のすがたをホテルにあらわした。 戰苦鬪四時間 年前に引きかえしたところに残したザイルは白くさらけていたが、今回は落石がなく、遂にマンメリーが直登を斷念し てスイス尾根 行する氣が起り、先年のガイドと打ち合わせて登路の偵察をやらせ、自分は居室の天井から垂らしたザイルにぶら下 あげ、その一角からザイルをおろさせ、それにすがつて登る計畫を立て、例の二人のガイドと尾根を攀ち登つた。 つて日夜腕を鍛えたのち、ガイドから有望との電報が來ると、勇躍して途にのぼつた。今度はガイドの一隊を頂上に その後もこの懸崖の幻想はかれの脳裏をさらず、日夜かれを苦るしめぬいたが、遂に一八九九年のある朝忽然と決 ののち頂上直下百米の岩棚までたどりついたが、それから先のオーヴァハングがどうしても登り切れず、 へへつつた地點(約四三○○米)に達し、頂上組のガイドが繰りおろした二百米のザイルにすがり、 (この日一行のすがたを 世界中に飛ん

つた。これは老巧なマッターホルンにしかけただまし討ちであり、このいくさは正直なものではない。アルピニズム に、登りと降りと兩方からフルッゲン尾根のあらゆる地點にふれ、 前々日到着したテラスまで下降して溜飲をさげた。しかしその翌日の彼はゆううつであつた。『私は何人よりも先き しかし何としても口惜しくてならず、一眠りしてからイタリア尾根を頂上までのぼり、用意の繩梯子をつりおろし いわばわがものにした。 しかし私は滿足出來なか

1-

た

5 したのではない。』 0 權 勝たなければならなかつたのだと感じた。 威ある批評家は、 負かされた方に分があると云うだろうと感じた。 いや、こんどもまたマッター 私は初日から正面きつて私の偉大な相手に打 ホルンが私を負かしたので、 私が山をまか

たり、 か ルを利用してナイフリッヂをくだり、空際の懸崖にかくる雪庇をわたつて頂上に達し、三年ぶりで思いをとげた。し さえあれば體操をしたり、 まつたのち出かけて、 のため退けられた。この間に競爭者があらわれたりして、気をもまされたこと一方でない。それからの一年間は、 しブルイユ側 彼は一八九六年から引つゞき三年がゝりで目的を達した。最初の年には三日の間、二年目には六日の間麓で天氣を Pointe Blanche-Tiefenmatten ridge (三八九〇米) のぼりも、 あらゆる準備をといのえたうえ、 ターホルンからダン・デランにつゞく鋸の齒のような峻峰の一つに處女峰として殘されたポアント・ブランシ におりる長い悪路ではついに露營を餘儀なくされた。 いずれも稜線には達したが、雪庇と惡天候とにはゞまれ、さらに反對 ザイルにすがつたり、丘陵を歩いたり、坂路に自轉車を走らせたり、 西がわのダン・デランよりの稜線にとりつき、 かれの根氣と熱情とをしめす好機會であつた。 前の年に固定しておいたザイ の西がわから試みて、 地圖や寫眞を研究し 暇 雨

八九八年に、 彼は英、米、北阿からバビロンにかけて、長い旅行に出かけた。

のシ ヤ 九〇〇年には山にもどつて、グラン・パラディゾの東壁をのぼり、 リ尾根の初くだりを遂げ、ツムッ ト尾根からマッ ターホ ル ンにのぼり、 ヴァリスに轉じてワイスホルン(四五一二 夕暗におわれてイ タリ 7 から わ K 下つ

ところが彼はこの頃おもい病にかゝり、二度も手術をうけた爲め、二年のあいだ登山から遠ざからねばならなかつ

まなかつた。 かし彼はおとろえた手足をさすつて、果して二度と山のぼりが出來るだろうかと疑い、好きな山に對しても心たのし に變らず素樸な敬愛のことばをかけ、 その間は毎年マッターホルン直下のジェメン かてて加えて、年來の山友ヴァッカローネは、彼とふたりで登つた山のうえで吹雪に遭つてぬれたのが マッターホルンの岩峰は幾多の思い出を藏して日夕かれを見おろしている。 Jomein にのぼつて夏をすごした。 かれの親しいガイドたちはいつ

**す、『少くとも今一度は四千米をこえる頂きに戻つて行きたい』と念じた。** かれの山歴にとつては全くの空白時代であつたが、また實にかれの登山に一大轉機をもたらすもので

五年の聞くるしんだあげく死んでしまい、ますます彼をゆううつにした。しかし彼はそれでも望をすて

もとになり、

かまつて行くと共に、すつかりギドにほれ込んでしまつた。丁度としごろになつた息子のウゴが登山癖にとりつかれ あつた。 ジォメンの宿であつた。 クオレの著者として知られるエドモンド・デ・アミチス エドモンドはギドの文才をみとめて、その著書に序文を書いたりして、二人の交情は Edmondo de Amicis と知りあいになつた

たのを見て、内心しんばいしていた時だつたから、よろこんでその指導を彼にまかせた。 この頃ギドの病もようやくよくなり、體力に自信をとり戻したので、再び山に入つたが、今度はいままでとは趣を

かえて、

近代的岩のぼりに向つた

に燃えさかつた山に對する熱情のせきを切り、 彼はこの二年の休止期の間に今までの登山を一應清算し、それを二冊の著書に要約してしめくゝりをつけ、 マンメリーによつて開かれた新らしい時代のいぶきを吸つて、 その間

くの人に顧みられなかつた岩壁と尖峰とに向つてつき進んで行つた。 Ш 友としては、今まで苦樂をともにした老巧なヴァッカローネを失つたかわりに、二十も年したの新進ウゴ

アミチスと結ばれた。ウゴとの交友は年とともに深くなり、 かれの死にいたるまでかわらなかつた。『アルピニスモ・ ーの峰は全くはじめてであった。

アク 會誌によせた一文に躍動する限りない敬慕の情とは、讀むものの心を打たずにはおかない。 D 15 チュー の序文や本文のなかに現われる、 ウゴに對する著者の深い友情と、 か れの死 後ウゴ 沙 1 IJ 7 Щ

岳

かくてかれの登山の第三期は一九○四年にはじまる。彼はすでに四十三歳に達していた。

思いのかぎりをつみ重ねていた私には、 ŀ たかも一度取りにがした時をながめるかのように、つよくながめ入つていた。 したものが 深いふかい感動を覺え、すつかり山の魅力のとりこになつてボカンとしていた。しかし私の身うちには何かしら變化 派する脊稜上のヴォーフレド峰に向い、一度は吹雪に阻まれたが、敷日ののち大ぜいの案内人夫をつれ、樂しいテン の一夜をすごした後、處女峰として残されたこの山頂を踏んだ。 ようやく病癒えたギドは、 『久戀の峰にふたゝび戾るこの最初の山旅に出て、私は新鮮な感覺と、 あつた。 氣がついて見ると、 夏になるのを待ちかねて、ウゴと共に、ジォメンから登つて、 云いたいことが山ほどあつた。』 精神上のたのしみはより强くより内省的となり、 その折りの感激を彼はこう書いてい はじめて山にのぼる時にだけ感ずるような これらの山々にむかつて、年ごろから 觀察はより深くなつて、 マッターホルンから南に

きは、 危峰の名を告げることを敢てしなかつた。二人はもちろん、 はメール・ド・グラスの西にならぶグレポン以下の岩峰である。 九〇四年の夏、 いつこう心配にならない』と、 この二人は、 アンデュロ、アマトの兩マキニャツをつれて、シャモニーに向つた。 滿幅の信頼をかけた父の文豪に對して、ギドは深い責任を感じながら、 マックーホルンの麓に育つた二人のガイドも、 出發にあたつて、『むすこが君といつしよにいると 目ざすところ 目的 +

わかい山友がはじめてのむすかしい山旅にいさみ立つのを見、イタリア人らしい自負心にいきり立つガイドを率い、 らためてマンメリーの本をよみ返えしたギドは、 いつも山旅に出かける間ぎわにおこる気 おくれを味つたのち、

自信と元氣とを取りもどして汽車にのつた。

に山中最後の夜をすごした。 の足で、 ついでシャルモー(三四四五米)の岩峰をかけ、 るのを待つて、まず最も手ごわいグレポン 賑かなシャモニーの町を素どおりして、 メール・ド・グラスの氷河をつめ、コル・デュ・ジェアンにたどりついてイタリア領にもどり、そこの小舎 メール・ド・グラスのほとり、モンタンヴェールの宿に陣取り、 (三四八二米)にかゝり、二十時間を費して岩のぼりのスリルを滿喫し、 最後にダン・デュ・ルカン(鮫の齒) (三四二二米) にのぼつたそ 空のはれ

れの麗筆によつて『アルビニスモ・アクロバチコ』中壓卷の一節をなしている。 のみか、いそいで下るうちに日がくれて、せまい岩の棚に窮屈な一夜をあかした。寒くひもじい海抜三千米のビヴァ たより時間をとつたため頂上についたのは午後四時となり、 立するプチ クではろくに眠ることも出來なかつたが、 その翌年(一九〇五年)も主從おなじ顔ぶれでシャモニーに出かけた。こんどはメール・ド・グラスの東がわに兀 ・ドリュー(三七三三米)をめざし、 ギドの空想と詩興とは星夜に高くさまよつて止まるところを知らず、か シャルプアの小舎から登りはじめたが、氷河の具合がわるくて思つ グラン・ドリュー(三七五四米)をかける望みを失つた

のフランス青年の失敗に同情し、 ミッドも かれらには鼻歌まじりの骨やすめに過ぎず、前日この山を志して成らず、深夜に小舍まで降りてきた二人 グィユ・ヴ ェルト(四一二一米)にモアーヌの稜からのぼつた。 アルピニストの修錬を論ずる餘裕があつた。 兩ドリェーを壓して立つ堂々たるピラ

をちらせた愛弟マリオを弔つた。 歸路は又もコ デ • 3 T, ァ ンのみちを取り、二十年まえの八月一日、 そこの岩壁のした氷河のうえに青春 の華

の新らしい岩のぼりは二年の試錬を經てその熱情はようやく高潮に遠した。折りも折り、一九〇六年に又もや

てほめられ、自信をとり戻した。

稜にその名を冠するほどになつたことは、師匠株のギドを悦ばせたが、おいおい老境に入るという自覺と、いつにな 引きされて岩のぼりの味をおぼえたウゴは、すんずんとアルビニストなかまに頭角をあらわし、 翌年には父を失い、その次の年にはエドモンド・デ・アミチスが逝つて、かれの心はますます傷んだ。 病にとりつかれ、外科手術や轉地や湯治に手をつくしたがなかなかなおらず、一方ならず心身をくるしめた。その上 つたら再び山にのぼれるかという懸念とで、 焦燥の日を送つたのは無理もない。 マッターホ 他方かれに手 ル

漸く一九〇八年になつて病氣がよくなり、アルゼンチンに出かけ、引きつゞいて南米諸國を訪ねまわつた。

一九一〇年の夏山は三たびわがギドをアルピニストとして迎えた。こんどは同じ岩のぼりでも、 風雨にさらされた石灰岩の怪奇をきわめるドロミテ地方の尖塔であつた。 花崗岩のエグ 1

とはまつたく趣を異にして、 と不可能との交錯するあたりに展開する、 危峰に親しんでいるウゴであり、ガイドはこの地方名うてのチタ・ピアツ、 行を共にするものは、六年まえ彼によつて岩のぼりの手ほどきを受け、今は一かどのクライマーとしてドロミテの 短時間ながら緊張し切つた岩のぼりのあらゆる流派の師匠』であり、 『新らしいアルピニスムの講述者、 マッ 困 難

ートバイを乗りまわす近代人であつた。 ターホルンあたりの古風なガイドとは違つて、山の講演をしたり、新聞に寄稿したり、政治や經濟に興味をもち、 長い病氣あがりで、五十に手のとゞくギドの注文は『岩壁とチュニー(ガリー)と 塔 とを試みたい、しかし出來

れば一番すばらしい奴を』というのであつた。

に立つて、 先すローゼンガルテン Rosengarten 新らしい種類の岩壁にスカルペッティ(岩靴)を働らかせ、苦闘の末頂上に立つて、ウゴから肩をたゝい 山群にむかい、 小手しらべのカティナッチョ Catinaccio では、 ギドが先頭

(57)

をつたつてその頂きに立ち、奇峰観立するドロミテ特異の山なみに眼をみはつた。 てマルモラーダ 次いでヴァジョレの三姉妹峰 Vajoletthurm(二八〇四米)をかけて、よそでは味わえないスリルを滿喫し、 Marmolada(三三四二米)の南壁を攀ぢ、ピッツ・ダ・チール Piz da Cir の長いながいチムニー

翌一九一一年にはウゴと兩マキニャツをつれて十年ぶりにマッターホルンにのぼつた。實に五回目の登頂である。

は、これが恐らくかれの初戀の山との最後の交歡であろうと自覺していることとて、むかしなじんだ岩壁や、 心を燃やした山に戾れば、今さらのように胸がときめくのであつた。しかも二度の大病を經た五十歳のかれにとつて

この山を見すててシャモニーやドロミテの岩峰に新らしい山のぼりの妙味を見いだした彼にとつても、

最初にかれの

思い出をこめた山小舎に對して、愛惜の情とゞめ難いものがあつたことは察するに難くない。

次の年(一九一二年)はドロミテに戾つて、サン・マルチノ・デ・カストロッツァ San Martino di Castrozza

の村をかこむ岩峰の一むれをねらつた。この年ウゴは脚をいため、ギドは疲れていたが、サン・マルチノの老巧なザ

ゴネル、ベッテガの雨ガイドをつれて、まずチーマ・デラ・マドンナ Cima della Madonna(二七三五米)南壁の

岩場にかゝると、元氣をとり戻し、チモン・デラ・パラ Cimone della Pala(三一六七米)では、ドイツ人のパー

を抱きながらも、 ンマルチノ Pala di San Martino (二九九六米)の東北稜では、『はじめて山にのぼる初心者のもつ新鮮な好奇心 ティをしり眼にスピードをかけ、羚羊のよおだとの讃辭をうけてイタリヤ登山家のために氣をはき、パラ・ディ・サ これが最後かもしれぬと思う人のもつやるせない熱情に胸おどらせて』むずかしい岩場にすごすひ

と時の短かさを嘆するのであつた。

る観雲が、 頂 上のあたゝかい陽をうけて横たわりながら、この山をめぐる墺領ドロミテのはてしなくつゞく岩峰の北 イタリアの平野から吹きあげる暖かい風に追いまくられて、さわぎ立つ景色に眼をそゝぎ、 祖國に向ける

ギドは参戦論者として筆に口に愛國の至情をほとぼらせたが、

開戦後間もない一九一五年には、

みずから志願して

n

0

死因となつた。

燃えあがる愛情と、 の岩を見すてて、平原に下るだろう。こゝでわれらは樂しくもあり元氣でもあるが、下では又わびしい現實の生活に 山岳に寄せる限りない愛惜の念に胸をうたれて、『われらの旅はおわつた。間もなくわれらはこ

もどるのだ。あわてて降りることはないではないか。

もいい、雲につゝまれて夢みることはすばらしいではないか』と『アルビニスモ・アクロバチコ』の最後の章をむす があるだろうか。ウゴよ、もう少しこゝにとゞまつていよう。ゆつくりと頂上で休み、一生のうちのわずかの瞬間 んでいる。 『このような平和な一瞬をまたとくり返えす機會があるだろうか。 ふたゝび君と世界の絕頂でいつしょになること

これがかれのむずかしい山のぼりの最後であつた。

一九一三年には東ドロミテのトファナ Tofana (三二二〇米) アンテラオ Antelao (三二六三米)

登つているが、これらはむずかしい岩のぼりの部類には入らない。 かれ五十二歳のときである。

間

もなく歐洲に大戦がおこり、

いたらしめ、ドロミテの山や谷は戰場と化し、 伊墺兩國のわかいアルピニストは愛好する山岳を舞臺に死鬪を展開し

ィタリア國内の参戦論者のつよい言説はついに同國を英佛側に立つて獨墺と戰うに

路で顚覆して重傷を負い、それがもとになつて心臓をいため、山のぼりが出來なくなつたばかりでなく、ひいてはか 赤十字のために自分の自動車を提供し、自分で運轉して戦線をかけまわり、祖國のために盡した。 その間自動車が惡

共にしたガイド、アンデェロ・マキニャツ Angelo Maquignaz の小屋をうつし、 たゝく内外の登山家を快く招じいれて山話をかわし、望遠鏡をのぞいては、わがチェルヴィノに挑む若人の足どりを 「マッターホルンのだんな」(シニョーレ・デル・チェルヴィノ)とあがめ親しまれ、好きな山の本を耽讀し、 彼はこの少し前に、マッターホルンに面したブルイユの小高い丘の上に別莊をたて、その庭には彼と多くの山行を 夏をこゝに過して、山人たちに 戸を

むけ、 國者たるかれの心をいたましめた。獨身純情の彼は家業に精を出す以外、人にすゝめられても政界に出ようとはせず、 はでな世間にそむいて、 かく山では快適の生活をおくる彼であつたが、一九一八年には慈母を失い、その上戰後イタリヤの世相は謹嚴な愛 かれらの心を高根に引きつけるにつとめた。 過去に親しんだ山々の回想にひたりつく、山と岳人とには胸襟をひらき、青少年の眼を山に

たどりつく、思い田の登攀をくりかえすのであつた。

歸り、一月たゝぬうちに病重つて立たなくなつた。心の友を失つてギドの心はますます重くなつて行つた。 その身體が病にむしばまれたことを覺つて、一九三三年の早春、その開拓のために多大の力を蠢した北阿ソマリーに 人はいつか深い友情にむすばれて、二つの山莊の間にゆききが絕えなかつた。登山に遠征に探檢に名をはせた公も、 を常とした。公とギドとは山を愛する點において相通するものがあり、妻子をもたぬ孤獨の生活も似ているので、二 彼は若いときからしばしば英國に往來し、交友も多かつた。すでに一八九一年から英國山岳會の會員となり、たび じよおにマッターホルンを熱愛するアブルッヂ公は、暇さえあればブルイユの奥ジオメンのホテルに夏をすごす

と谷との最後のわかれになるだろうとの豫感をいだいた。その上そこで彼を待ちうけていたものは、さらにかれの心 九三四年の夏ブルィユにのぼつた彼は、いよいよ身體の工合がよくないことを感じ、恐らくこれがなつか たび會誌に寄稿したが、一九二〇年には名譽會員に推された。

をしたがた

ールナンシュ溪谷遊覽開發株式會社」の手になる別莊やホテルやケーブルカーの計畫がすゝんでいた。 ・ルナンシュの谷には、 それまで幾度もいく度も、山靴をふみしめ、或は馬車にのつて「山に入る」思いに胸おどらせながらのぼつたトゥ 自動車みちの工事がするみ、 靜寂をきわめた山ふところのブルィュのむこう側

胸をいたくする。 さらに悪化したことを覺つた彼が、その年の十一月九日付でイタリア山岳會々長に送つたつぎの手紙は、 彼は『うえまで路がついたら、 わしはこの土地を見すてるだろう』との言葉をのこして、トリノに歸つた。 讀むものの 病狀が

『親しい大事な友よ。

やにしたのは、こんどで二度目なのだ。君があんなに熱情をこめて「マッターホルンをよく見つめろ」と書いてよ 私は以前から病氣のはげしい發作になやまされつゞけている。醫者はこれにいろいろな名前をつけているが、それ この警告がきょ入れられ守られるといいのだが。 は私にとつてはむごい豫告という名をもつている。しかもこれが私をはげしくいためつけ、私の生涯をめちやめち こしたのに對して、もつと早く返事をだし、ブルィユの老山人からの禮を云わなかつたことを許してほしい。 君の

位だ。 を侵入者たちに賣りこかしていると思うと、たまらない……… 私が熱にうかされている間に、山のうえで行われていることのおそろしさが私をくるしめたことは云 私の親しいふるい友だちであるおとなしい牧夫たちが、かれらの親ゆすりのたしかな資産である美しい牧場

つて、移住して行くだろう。そおだ、何よりも山岳の將來のために私をおそれさせるものは、 永年のあいだ、 あのやさしい鈴の音を美しい谷間いつばいにみなぎらせた牧牛が、 その場所を別 こんな風にふるい文 種 0 べ にゆす

化を新らしい町の人たちの企業と取りかえることなのだ。汲めども蠢きぬ寶であり、一度こわしたら二度ともとに 戻らない繊細をきわめた資産であるところの山の自然の大きな美しさを、かれらは全く知らないのだ。

こんなに早く君とわかれることを許してほしい。いつも變らぬ友情をもつて、重ねて私の感謝を君におくる。 しかしこんな議論をつゞけることは私にはあまりにもつらいし、書きつゞけることは私を疲らせる。

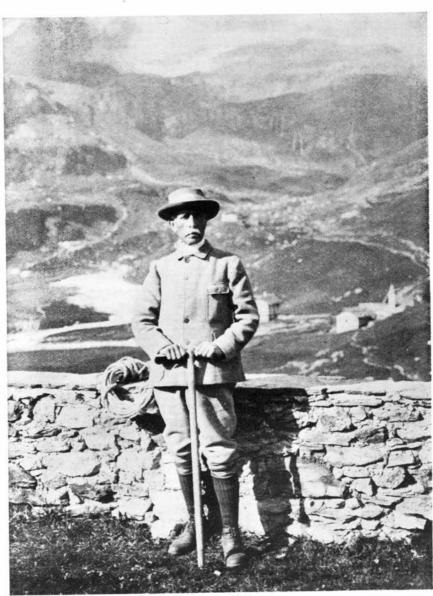
よなら、さよなら。」

のねうちがあるだろうか』となげくのであつた。 トゥールナンシュの谷やマッターホルンを俗悪な町の人たちの攻撃から防ぐことが出來ないようなら、私の仕事は何 とづれて、彼に手わたした。ギドは熱にうかされながら、『ありがたいが、私はこれをお受けすることは出來ない。 その頃フランス政府は彼にレジオン・ドノール勳章をおくることとなり、フランス山岳會の役員がかれの病床をお

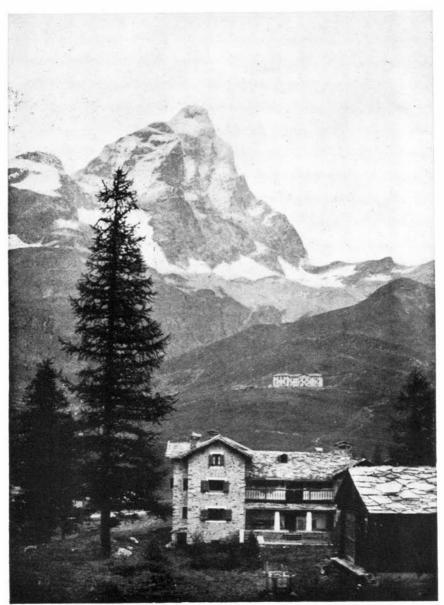
色族に覆われた「マッターホルンの詩人」の棺をかついで墓地に向つた。 ミチスにみとられつ、七十四年の生涯をとぢた。葬式にはマッターホルンの麓から大ぜいのガイドがおりて來て、三 その翌年すなわち一九三五年六月二十四日、ギド・レイは、その生れた家で、 かれの忠實な山の弟子ウゴ・デ・ア

## 二、登山家としてのギド・レイ

にあらわれてその傳統をうけつぎ、 ーやドロミテの尖塔にいどむ若さを持ちつゞけた點に於て特異のものがある。彼みすからも、新舊兩時代の間にま 歐洲の登山界においてレイの占める地位は、 しかも四十を越してから新らしい岩峰登攀の妙味をさとつて、ひたむきにシャモ かれの山歴 (附錄第一参照) を見てもわかる通り、 古典的登山の終末期



GUIDO REY.



MATTERHORN & LA VILLA REY.

抱いて山に對している。 たがつていることを認めており、 當時における新らしいテクニックを驅使しながら、 山の傳統を重んじ、謙虚な心を

むずかしい登山や初登攀をとげたことは驚嘆に値する。 業家として夏の二週間だけしか登山にあてる餘裕がなかつたに拘らず、 れの登山は二十歳前後から五十三歳まで三十年あまり、その中二度の大病のため約六年の空白があり、 その山歴の長さと、重要さと、 あれほどいろいろの山にのぼり、 永遠の若さには敬服のほかは あれほどの 忙し い實

次の一節は、 いそがしい日常生活のひまを縫つて山にのぼる人たちの心を打つ。

出發の昻奮の下で忙しくなされる準備、 時麻痺させてしまつたこの自覺をわれわれが取り戻しているのに、 高 か いところで過ごした自由な數日ののち、すでに岩にも慣れきつて、 されたときに感じる心配、 われ われのように慌しい登山者にとつて、 急ごしらえのトレーニングによる疲れ、 われわれを日常の事務生活に引きとめて置こうとする雑多な煩事、 毎年山での數日がどんなものだか、 遂に平原に歸らんがため山を離れる深い悔恨。」 惡場にのぞんで心身の力の自覺、 功をいそいで目的を達せず、それについく失望、 あなた方にはわかるまい。 都會生活が一 都會

晩年の山 彼は登山のテクニ " クにおいて、すぐれた素質をあらわした。

友ウゴ・デ・アミチスはいう、『私がクライマーとしての彼を知つたのは、

かれの稀にみる筋力と氣力と

何という立派な教師であつたろう! 上ながい病氣とひどい外科手術とで弱つていた。 が衰えはじめたときであつた。 知り合いになつて一緒に山のぼりをはじめたとき、彼はすでに四十歳であつた。 若もののようなすごい力は持たなくて、山でわざよりは體力を集中することを それにも拘らず、 筋力と鍛錬とで自信滿々の若ものにとつて、 その

必要とするようなひどくむずかしいところを切りぬけるのには、若ものよりはずつと骨が折れたが、中くらいのむず

の均勢 ろいろやつて見たがうまく乗りこせないでいると、それまで默つて待つていたギドが、やさしく『わしがやつて見よ ほんの僅かの部分しかモノにすることが出來ないものなのだ。……クライマーとして私が特に感心しているところは かしさのところでは、 ゴ)が三十一歳のときギドと二人ぎりでドロミテの岩山にのぼつたとき、 で自分を確保し、手はたゞバランスを保つために使うのみで、むやみに延ばさないことである。……』そして彼 これが本営の山男と單純な體操家とを區別するところのものだが――中くらいむずかしいところでは、 あの巧まぬ自信、 だまつていながら、 あの山に對する信頼 血氣にはやる後輩をおさえた。 これらは大部分生れながら身についているもので、練習によつては 先頭のかれが岩にかじりついて、長い間 彼が身につけていたあの身がるい動作 足の あ

レイみずからはこう云う。

うか』と先頭に立つて、やすやすと悪場をかたずけたことを記している。

らゆる突發事件に應ずる心がまえをしていなければならぬ。かくして立派なパーティのなかに、 る 理想が生まれる。これは連帶と協調とから成り、民族の歴史では、自己が危險を感じたときにのみ見られるものであ 意志につながれている。 影があるく人のあとに默つて忠實について行き、ごく小さな身ぶりでも眞似するように。個人の意志はすべての人の た思慮のない意見や、 アルピニストは精神的にも物質的にもパーティのバランスを破つてはならぬ。私がバランスというのは、ちよつとし あの平靜とあの信賴とを云うのである。各人は前にすゝむ人のために忍耐づよく蠢さなければならぬ、 むずかしいところを登るときにも、 思いがけないときにちょつとザイルを引つばることなどによつて、深刻にみだされることの 各人はいつ何どきでもほかの人たちを助けねばならず、彼のしてほしいことをしてやり、 降りるときにも、 パーティの安全は全くバランスにからつているのだから、 移動する社會の真 あたか

30

たのである。

ル に山靴という正攻法だつたことを思えば、 その頃は、ド ロミテではスカルペッティをはいていたが、ピトンやカラビナを用いることはまだ誰もやらず、ザ 彼ののこした業蹟の偉大さに頭が さがるのである。

このような登山技術を身につけながら、 かれの登山ぶりは慎重をきわめた。

後者の場合に悪場であやうく墜ちかけたことがあるだけで、それ以外には、 を數名つれて山に入つた。例外としては若い時代のグラン・パラディゾの一峰と、 愛弟を山に失つてのちは、 原則としてガイドを伴い、 しかも裕福な身分であつたから、 かれの數多い登山を通じてアクシデント アルヴの南峰ぐらいのものだが、 いつも御氣に入りのガイド

の勇敢なことは、 いものに出會つていないことは、 いう『問題は慎重と恐怖、 かれの足跡をたどつて見ればすぐわかることであり、 勇氣とかるはずみとの限界である。どこで踏みとまるかが要點だ』 かれの慎重さを物語るものである。 理性的判斷を失わぬところにかれの眞骨頂 ٤ しかしかれ

ある。

ザイルを下げて暇さえあると腕力をきたえた。 やポアント・ブランシ 山に入つてからの慎重さは、 またいつも山に關する研究を怠らず、 ュの悪場のぼりを目ざした頃は、 かれの平素の生活振りと對應している。 坂みちを徒歩や自轉車でのぼつて脚力を養つたり、 登山期が近づくと身體の鍛錬につとめた。 彼はその地位收入にくらべて驚くべく簡素な フルッ 天井から ゲ ン尾根

かも最初の年には八日の間に三度おなじ岩壁を上下したし、 くて山に入ると執拗なまでの根氣づよさをあらわした。 ポアント・ブランシ 前入未登のフル ッゲン尾根を九年がゝりで七回 ュでは三年つゞけて四回目に成功し

か n の山に關する研究が詳密をきわめたことは『モンテ・チェルヴィノ』の歴史的記述の部分を見ればわかるし、

その山に寄せる熱情は著書の各ペーデにあふれている。

餘念ない彼であつた。二度の大病のため登山を許されなかつた六年の間は、夏の山莊にマッターホルンを仰いで思い あつた。ことに彼を永久に山頂から遠ざけるであろう老年が漸く近づくという自覺が、ますます彼の山に對する思慕 忙がしい實業家のかれに許された夏の二週間の山のぼりのほかは、トリノの町から見える限りの山々に思いをよせ 山の本をよみ、 かれの研究は止むところを知らず、登山から遠ざかつたことによつて、かれの登山熱は昂まる一方で 山の地圏を按じ寫真をしらべて、過ぎた山行をなつかしみ、來るべき力鬩にそなえて研究に

初登攀の餘地がのこされていない譯ではなかつた。 ィの壯年の頃には、 歐洲アルプスのめぼしい峰やむずかしいルートはほとんど登りつくされていた。しかし未だ

かれの云うところを聞こう。

をつのらせた

つているからだ。 い氣もち、それは先人がわれらのために手をつけずに殘してくれたものは、とてもむずかしいものだと云うことを知 がアル ピニストの心に及ぼす魅力は不思議なものである。とほうもない慾望とゾツとするようなおそろし

ち足りた金持ちのおうようさから、残して行つたものを探し求める謙讓な忍耐づよい女である。それは卽ちわれわれ ルブ 入れる穗よりもずつと尊い。勝利の最初の收穫をおさめたふるい時代のアルピニストはボオズであつて、その掌はア を拾うあの女のようなものである。しかし彼女が骨折りと忍耐とによつて拾いあつめた一にぎりの麥は、 『われわれ近代のアルピニストは、バイブルの詩的な傳説にある、富めるボオズの畠で刈りとる人々の後から落穗 スの收穫のもつとも立派な最も秀でた穗でいつばいになつている。 新らしい時代の人々は、ほかの人たちが、み 富者が

れていた。

しかしこれはくだらぬ議論である。

アルピニスムの真髓はふるい流儀のなかにも新らしい流儀のなかにも

そしてわれわれは、 であつて、アルブスのごつい畝の間に稀にのこる貧弱な落穗をやつと見つけ出し、骨を折り身をかゞめて拾い上げる。 ねうちがある。」 美しいモアビトの女なるルトのように、年老いた畠の持ち主から同情をもつて眺められるだけの

山岳とアルビニスムに對するかれの考えは次の一節によつて明らかである。

を回復しようとする疲れた人たちにも。 山を研究の對象とする學者にも、山にインスピレーションを求める畫家や詩人にも、はげしい疲勞を欲する强健 『山はかくも偉大にかくも慈悲ぶかいから、すべての來るものを歡迎し、すべての人に對して一樣に好意をあらわ 都會のむしあつさとわずらわしさとを逃れ、この肉體的精神的健康の限りなく清い源泉を汲んで元氣

に心安らかにして悔なき美くしい思い出の寳庫を準備するものである。』 よろこび、幻滅を伴う人間的なものであり―――ほかの熱情と同じく、人の精神を昂めそれを成熟させるものである。 めることや考えることなどと同じく、人間的で自然なことである――すべての熱情と同じく、あらゆる弱さ、 るべき奮鬪にそなえ、壯年のときにはあらゆるよき力をたくわえて、逃れ去らんとする若さを持續させ、老年のため 『峰をよじることは、人生の目的ではなく、一つの手段である。―この手段は、 『アルピニスムはこの健康の最も力つよく最も熱烈な一つの型式に外ならぬ。……アルピニスムは、 若いときには精力をきたえて、來 歩くことや眺

古典的な正統登山に出發したギド・レイは、四十を過ぎてから新らしい種類の岩のぼりに熱中しはじめた。 彼は新舊いずれの流派にも偏していたわけではなく、次のような意見を吐いている。

『新らしい登山術はアクロバチックと呼ばれ、このことばはあたかもアルピニスムの下品な型式のようにさげすま

67

神が昂まりわれらの手足がより强くなつて、無事にもどつて來さえするならば、手で登ろうが脚で登ろうが、肉體的 含まれている。人が山を征服し、それによつて感激と健康とを得るならば、またわれらが山に登るとき、 われらの精

精神的の力づよさが證明されるのである。』

やるように、眼がさめていたら膽をつぶすような困難をのり切るのだ。』 推進力をうけ、人はいわば一つの暗示の力のもとにあつて行動し、驚くほどうまく立ちはたらく。 この企畫をやろうと決心した時につよい刺戟となつた競爭意識と自負心とは、こゝでは全く働かない。 をふれないでおこう』と云いながらも、『自分の考えでは、この力闘の瞬間には、 アルピニストの心の最もデリケートな神祕の一つで、その扉を開くことは適當でない、……われらの愛情の祕密に手 なぜこの岩壁を攀じる無謀さを自覺せぬのか、なぜこゝで引き返そうとしないのかとの自問に對して、 とは云うものの、 新らしい岩峰のぼりのスリルが彼を魅惑したことは確かである。グレポンの難場にかゝるとき、 われらの道義的自我は介入しない。 夢遊病者が夢中で 『これ こそは 肉體は最初の

かと思うと、プチ・ドリューの岩のぼりのあとで、 エグィユ・ヴェルトの尾根をのぼりながら、 次のようにひとり

剖分析するのにつかれ果てて、より廣大な感觸とよりあかるい眺めとにゆつたりするのである。 思われた。 ついた美しさの典型をふたゝび見出した。そしてそれを享樂することは、心をおちつけ心を高尙にするもののように 念碑をながめたあとのような、 の山について、私は、 『アクロバチック登山のあとで、今度はむかしのよき時代のアルピニストが好んだクラシック登山だ。 人の精神は、絶えずおそい來る困難とやみくもに聞いながら、 スツキリした線と力づよい細部とを持ち、きわめて自然に大衆の調和をたすけるあの巨大な記 ゆつたりとした休息の氣もちが記憶にのこつている。私は頂上で、大アルプスのおち 自分の自負心や弱點の小さい秘密までを解 2 0 日のこ

舍のつみ薬、

清冽な泉などは、

近代の俗人たちの氣には入るまい。

そこに歸りついて、そこのもつとゆるやかな斜面をもつ山を、 慾を靜めるに充分であつた。今日でも心の奥ではこの泉はまだ涸れておらず、私の岩のぼりの時代がすぎたら、 きかをわれわれに教えてくれた初期の大登山家たちの氣に入つた。それは私にも氣に入つて、永年のあいだ私の冒險 『こんな風に規則正しく合理的な登山は、おとなしくすなおで、 私はそれが出來るだけおそく成就することを祈る。』 ゆたかに清いものと見なおすだろうと思う。これ われわれよりもずつと賢こく、 如何に山を愛すべ また が私

彼が山 .の冒瀆についてきわめて敏感であつたことは前に記した通りであるが、大衆的登山には反對ではなかつた。

のひそかな願望の一つである。

むしろ山を修養の殿堂として多くの人に紹介し、 登山熱の普及につとめたのである。

ル ピニスムは 彼はいう『山の神祕があばかれ、あらゆるみちが探りつくされると、アルピニスムの仕事はすんだように見え、 おわりになつたとさ」やくものさえある。 いや、 登山の使命はこれから始まるのだ。 少數の人たちの特 ァ

権であつたものは、

萬人の資産とならねばならぬ。

が、人生の進歩はいたずらな利己主義をゆるさない。 化することはあるまい。 だから山が再び力つよく一風變つた詩人である人たちの手に戾るのは正しい。 あつたことを想いおこすがいい。 先蹤者がはじめて見たときと同じように、 先驅者が山を大事にする氣もちは氣高いもので無理はないし、 へマな奴は容赦なくはねつけ、無謀なやつには手ひどい罰を課する。天幕の下岩の床、山小 かれらはかたくなで力つよい人たちであり、 その孤高さを失つていないことを見出すだろう。 アルプスは、 アル 詩人が高山の汚されぬ孤獨を愛惜するのは人情だ ピニストのものになる前には、 何も心配することはない。 われらに多くのわざを教えてくれた。 アルプスは決して俗 Ш 諸君 人のもので Щ

『學生や職業人のアルピニ ストは、 ある意味では原始的で剛健な山人の素朴さにかえる傾向がある。 これが私を悦

ばせ感動させる。

ことにある。

『眼ざすところは、山をやさしくするのではなく、山徒が山にうち勝つ力、 危險をはかり美しさを味う能力を養う

をつれて登り、大吹雪に出くわして五十時間頂上の小舎に閉ち込められたのち、無事下山したこともある。 た。筆に口に彼等を導いたばかりでなく、みずから團體登山を主宰し、ある時はモンテ・ローザに二十人の若い學生 彼はイタリア山岳會の最も熱心な支持者として後進を導くにつとめ、特に若い人たちの養成修錬には熱 心 で あつ 彼はまた良き山友にめぐまれた。 、日本の山の高さと峻しさと深さとでは、このように云いきつて安心することが出來ないのは悲しいことである。)

ミチスがずんずんと彼をぬいて一流のクライマーとなり、めざましい山塍を加えて行くのは、 ネは得がたい心の友として幾多のむすかしい山行に苦樂を共にした。後年その父にたのまれて仕立てたウゴ・デ・ア 兄のアレッサンドロ・セラは登山の手ほどきを教えて、一人前のアルピニストに仕立ててくれ、先輩のヴァッカロー 幼年の師としてクインチノ・セラ伯父は彼を山に親しませ、真に山を愛するものの精神を吹きこんでくれたし、從 アブルッヂ公は彼の晩年傷心の生活にあたゝかい理解と友情とをそゝいでくれた。 漸く老境に入る彼を樂

來、今日でもイタリア山岳會に屬して、かれらの福祉に貢獻している。 兩者のあいだには美わしい友情が流れた。一八八九年に彼の盡力で、養成と共濟とを目的とするガイドの 山のガイドたちは、かれの登山に從つたばかりでなく、かれの友として遇せられ、山中でもブルイユの山莊でも、 組 合が出

ルで滯在客にせがまれ、 かれの著書の中には、 ガイドだまりにつれて行つて、かれらのひな歌をきき、高調に達してガイドも客も一齊に合 ガイドの生活や名ガイドの生涯などについて温情掬すべき章句が澤山ある。 ブル イユの ホテ

K 唱をはじめ、 は 若く美しい姉妹のソプラノがガイドのバスと相和して星夜にのぼつて行くあたり、讀む人の心を打たす

アルプ Ш は彼にとつて至高の殿堂であるばかりでなく。 スの連嶺や、 「失地回復」の對象であるドロミテ(當時は墺領)の山々を仰ぎ、その頂きを踏むときイタリアではからなる。 熱烈な愛國心の對象であつた。イタリアの 「自然的國境」

ない頃の 人たる誇りと、その向上發展の念願とに、 山 によつて若人の心身をきたえ、 クインチノ・セラとその流れを汲む人たちの眼ざすところであつた。 祖國愛のもとに協同の精神をうえつけようとするのが、 かれの胸はふくれ、 か れの筆は悲調を帯びる。 イタリア統一 成つて間

北伊 (『アルピニス 講演が の平 次歐洲大戰勃發の前年、 原 おわると、 との間の雲霧と陽光と烈風とのはげしい戦いにこと寄せて、 モ・アクロバチコ』の最後の數章をなすもの)では、 か れらは期せずして總立ちになつて講者のまわりを取りかこみ、 彼がオーストリア領トリエステのイタリア登山家の集りで行つたドロミテ登山 祖國から切りはなされた連嶂と、それにつらなる ほとばしり出る愛國のしらべ 臨席の墺官憲をして一指も染 は聴衆の心を打 の講 演

めさせなかつたという。

か

れの愛國心は彼を驅つて戰場をかけめぐらせ、

その間に起つた不幸なアクシデントは愛する登山から

彼を

遠ざ

彼 はぜ 遂にはかれの死の原因ともなつた。 いたくの出來る身分でありなが 5 きわめて質素剛健な生活に終始し、 古武士の風格をそなえ、

いつて、 あった。 傳記 『私のことを書いてはいけない、 の出版を許さず、 著書に自分の肖像を入れることを好まなかつた。 私は山と山人とから教わつた沈默が、 何物にもまして好きなのだから』と

U かし他面人情に篤く、 よく兩親につかえ、友人に厚く、 ガイドと親しみ、文士や藝術家と交わり、 文をよくする

外寫真や繪に腕前をあらわし、社會事業に力をつくした。しかもユーモアを解し、洒脱な趣味をもち、 小舎で落ち合つた登山客やガイドたちと歌つたりおどけたりする一面をもつていた。 山のホテルや

彼に親しいものとしては、妹とその夫ベロッチ將軍ならびに姪のエレーナのほか、一頭の愛犬があつた。 彼は若いとき意中の人があつたようだが、結局一生獨身を通し、その熱情を傾けつくして山を愛した。

# 四、山岳詩人としてのギド・レイ

そのうち最も有名なのは『イル・モンテ・チェルヴィノ』(マッターホルン)と『アルピニスモ・アクロ に屬する。 二つである。 ギ ・レイには多くの著述がある(附錄第二參照)。いずれも山とアルビニスムと山人とを主題とするものであるが、 ともに多くの國語に譯出され、今日ではウィンパーやマンメリーの著書とならんで山岳書のクラシック チューの

彼は早くからイタリア山岳會の會誌などに登山記をのせ、すでに二冊の本を出していたが、まだいつこう世にあら

われていなかつた。

讀んで、 根のぼりとガイドの合唱のことを書いたもので、のちに『モンテ・チェルヴィノ』の最後の章に入れられたもの)を を待つていたギドを驚喜させた。かくてかれの『イル・モンテ・チェルヴィノ』は一九〇三年ミラノ一流の書店から 原稿を彼に返すとき、 その頃文豪エドモンド・デ・アミチスはコリエレ・デラ・セラ紙の文藝週報にのつたギドの紀行文(フルッゲン尾 この無名登山家の文才を認めていた。だから、 『わしはこれを一氣によんだ、よろこんで序文を書くよ』といつて、おそるおそる文豪の宣告 山の宿で知り合いになつたギドから閲覧をたのまれた部厚い

3

なぎる熱情とともに、

つよく讀者の胸を打つ。

田 版され、 たちまち非常な評判をとつて、著者とともに世界的に有名になつた。

この本はマッ

ター

水

ルンをめぐる古來の歴史から説きおこし、十八世紀以降アルプス登山の先驅者の足跡をたどり、

顕末を、 その なり、 確にして精彩あり、 北あらゆ ッゲン尾根に命をかけて九年ののちに漸く志を遂げたことなどを記し、 時代におけるマッ い出 ルピニスモ はじめてこの靈山に見参した感激からはじめて、ツムット尾根をのぼり夜をかけて懸崖を下つたことや、 當時の 1 る角度から研究し觀察し分析し踏査して餘すところなく、 0 征 クリア側がカレルをはげまし、彼を助けて初登を遂げさせようと努力した、 服 貴重な資料を引用して詳述したところなど、 に力をつくした人たち、 アクロバ 山とそれを取りまく自然と人間とをえがき出し、愛山の熱情をにじみ出させて讀者を魅了する。 ターホルン チコ』はこれにおくれること十年、一九一四 山麓の趣ふかい部落と山宿とガイドのことを語 特に英のティンダルとウィンパー、伊のカレルとジォルダノ等の業蹟を述べ 興味津々たるものがある。 その引照は該博、 かれの熱愛する聖山を古今にわたり、 年 に出版され、 b その考證は詳密、 次 それに續 あまり世人に知られていな いで登攀不能とされ 4. わゆる いて自分の登山記と 「アクロ その記述は的 15 東西 チッ いた恐 フル 7 南

登山』という語を世界中にひろめた。 (この書名を選んだ由來はのちに引用する同書の序文参照。)

1

×

1

n

F

山者の 熟し、 ラ ス 第一部はグレポン、 氷 心理解剖、 山に對する愛情は年をとるにつれて深くなり、 河の東西に聳える尖峰の岩のぼり、 自然の觀察、 ダン・デュ・ルカン、 ガイドと山友によせる深い友情などは、 第二部はドロミテに筍立する奇峰登攀の記事である。 プチ・ド 記述のあいだにはさまれている山岳およびアル リュー・ エグィユ・ヴェ 隨所にあらわれるはげしい祖 ル トとシャ E = かっ 0 奥 n 國愛と、 ピニス 0 筆はますます 1 觀 全 卷 登

この ほか彼には幼時を回想した情味掬すべき『アルバ・アルピナ』(アルブスのあけぼの)の小著をはじめ、 山の

ヤー あり心の友であつたヴァッカローネや、 冒瀆と登山道の頽廢とをなげきアルビニスムの眞髓を說く『タルタランの死』や、幾多の山行の記述や、山の先輩 ーホルン山麓のガイドたちの生活を傳えた文章がある。これらの多くはかれの山友で佛山岳會の雄エミール n E. Gaillard によつて佛譯刊行されており、その一つには佛の文豪登山家アンリー・ボルドーが しばしば山行を共にしたガイド、アントニオ・カ ス タニュ リの いい序文を書 ガ

彼はあらゆる意味において「山岳詩人」であつた。

ている。

こんなことの爲めに少しでも時間をとることはガイドが悅ばぬのは當然だから、彼はしばしば岩のわれ目にかくれ大 象を書きしるしたが、特にむずかしいところで刹那におこる感じを書きとめることが役に立つといつている。 のときめきを傳えるのである。 いそぎで書きなぐつた。 はつよい感受性をあらわすと共に、正確に觀察した、 それが時を經てかれの筆にかゝると、立派な文章になつて、 山ではいつも手帖をはなさず、刻々にうつり行く狀況や印 山のいぶきとアルピニス しかし ٢ 0

の巨巖の偉大さを、まだ見ぬ人にわからせるように記述し得るほど力つよいことばを私は知らない』と書いている。 た人は決して忘れることは出來ないし、またあの巖が谷の底から空にむかつて一氣に三千米もつき立つている……あ はその敍述を思い切つて、讀者に親しくこの山を見させることが一ばん無難のように思われる。一 U 彼は山にのぼらずして山を論じたり、山のことを書いたりするものを『海濱に佇んでいながら航海をしたと思つた か 窓の下でそくばくのセレナーデを歌つただけで女を戀していると信じたりする男』にたとえて輕蔑してい 面彼は山の偉大さと敍述の限界とを論じて『マッターホルンが景色のなかにあらわれる度ごとに、 しかれの書いたものは、 觀察がするどく、感覺が新鮮で、描寫はいきいきと、岩のにおいや雲霧のたゝすまい 度でもこの山を見 作家にとつて

けられて一氣に讀まされてしまう。

た自分のむかし 頭上のオーヴァーハングのむこうに靴の底だけ見えているガイドのあらい息ずかいなどが身近かに感じられるよ 山にのぼつた經驗のあるものには本當にピッタリと來る表現にみちており、 ŏ 山旅のことを書いてあるような錯覺さえ起るのである。 讀みするんで行くうちに、

間の 待つ間 0 が下の方から登つて來るような錯覺におそわれる氣持ち、 來事であつたというくだり、 生氣をとりもどし、 まり込んで、ザイルの友のすがたは見えず、はてしない孤獨の感を味い、つゝましく咲く小さな花を見出して一抹 たどりついて握手をかわしたが、默りこくつて一言も云う氣にならない心境、 滿身に元氣がみちわたつて來るあたり、 て氷河の上におりると、 にわれとも知らず氣むくれが出て、過去の經驗を思い出したり、 しかもその敍述には誇張がなく、きわめて正直である。 悪戦苦闘にやぶれて、めざす絶頂を見ながら引きかえし、衣はやぶれ掌は傷つき、 めな姿を、 安易な寝床をなつかしんで、澄みきつた星夜をうらんだり、 その合間 K 山の沈默とそのことばとに耳をそばだて、かずかずの山旅の思い出、 人眼をさけ頭をたれて、 にはいろいろな感想やら批評やら思い出やらを挿み、 底部に下り立つて、つどく友の降りて來るのを待つ間のながさ、 さわやかな山氣にふれてわれに返えり、 懸崖にかくるせまい棚のうえに目白おしにちゞかまつて、長くつめたい夜のあけるのを 宿のうら口からコッソリと運び込むところなど、 惡場わたりのさなかにまたボンヤリと忘我の境に陷る一瞬間、 相客に祝福されて元氣よくホテルを出たものが、二十數時 山小舎の夜なかにたゝき起こされ、 だんだん元氣が出て來るところやら、 半分夢中のまゝランターンのほのかな光りに導かれ ガイドの自若たる氣色をうかどつたりするうちに 警句百出、 せまいクーロアールの岩のわれ目に さては山で死んだ親しい友だちの 一度讀みはじめたらすつかり引きつ しかもこれが實は三十分間 徹夜の强行に眼は血ばしつた 心にくいまで手に入つたも ねむい眼をこすりなが やつと頂 岩場に 0 ムる 出 0

彼は『山はわが詩である』という。

カン 礼 の書いたものはすべて山の讃歌である。 彼は山と一體になつて、山を知るものの心を打つばかりでなく、まだ

山を知らないものをも惹きつけずにはおかない。

これ以上の讃辭を呈することは出來まいと感じ、この本よりももつとひどい奴を書いて見ようと思い立つた。 お母さんたちが、このやさしい婦人のように考えないことを祈る。 誘惑にみちびくにちがいない危險な作品だからですと私に話した。私はアルピニスムのために、すべてのイクリアの 本であつたが、讀んで見て、この本は決して自分の子どもたちに讀ませまいと決めた。それはこの本がかれらを山の いやさしい婦人と話したことを思い出す。彼女はホテルで退屈のあまり、偶然手にとつたのがこの山のことを書いた れの『アルピニスモ・アクロバチコ』の自序のおわりに、『ある日マッターホルンの麓で、 しかし私はこの日このつまらない著書に對して、 教育があり愛想の

人にかくれて讀みふけるようにしてやろうと、 『私は若い人たちが、思い切つた表題に引きつけられ、讀むことをとめられている本であるだけに、なお熱心に、 心のなかで誓をたてた。

『これがその本である』と書いている。

アル 雲霧のあいだに見たマッターホルン、フルッゲン尾根の絶壁、ドリューの尖峰の投影、ドロミテの岩貌とそこに闘う ギド・レイの著書をかざる寫真の多くはかれの撮影にかいり、なかなか優秀なものが多い。 ピニストのすがたなどは、よく氣分をあらわしている。 なかでもブル イユから

かりでなく、山に對する熱情とすぐれた氣力とを要することを思えば、山岳寫真家としての彼は、 の頃の比較的もち扱いにくい機械をもつて、あんな惡場のところで、いい寫眞をとることは、 高く評價されねば 單に技術 の問題

のぼつた。

3

た。諸國風俗の寫真を好んで寫し、日本の衣裳さえかれのアトリエに藏されてあつたという。 彼はまた畫をよくし、風景や藝術寫眞にも凝つて、イタリアはもちろん、英米佛スイスなどの展覽會にも出品し

#### (附言)

、本稿を草するにあたり、レイの著書を参照した外、故人と山行を共にしたサンドロ・プラダ氏の詳細をきわめた『ギド・

二、レイの名は、正しくはイタリア風にグイドとすべきであるが、すでに世上に廣く唱えられているところに從い、フランス レイ――マツターホルンの詩人』(一九四五年ミラノにて出版)に負うところが多い。謹んで謝意を表する。

洗にギドと記すことにした。

三、そのほか本文中の人名山名地名その他の名稱については、必ずしもイタリア語に統一せず、わが國の登山界で最も普通に 用いられている外國語で記した。

またドロミテは正しくは複數にしてドロミチというべきであるが、右の趣旨により單數のまゝにして置いた。

## 附錄第一 ギド・レイのおもな山歴

一、左記はギド・レイが一九〇三年エドモンド・デ・アミチスに書き與えたものである。

『私はヴイゾ(三八一九米)に五回のぼつた。うち三回は普通の登路から、二回は私がしらべた新登路から。

『ベッサネーゼ(三五九七米)に新登路から登り、同山群でランツオ谿谷の最高點チャマレラ(三六七七米)にも新登路から

77

『グリヴォラ Grivola(三九六九米)に北面 の長くけわしい 氷稜からのぼつたが、 このみちは一度英人がのぼつた丈けであ

る。頂上に日沒時に着いたものだから、そこで一夜をあかした。 『グラン・バラディゾ山群のベック・ド・ラ・ツリビュラシオン Becs de la Tribulation(三三六〇米)と、ドーフィネ山

もパーティの先頭に立つた。登路のいちばんむつかしいところで、私をつないだザイルがはずれて、私は片腕でぶら下り、ほ 群中最もむつかしい岩のぼりとされているアルヴ南・・尖・・拳(三五〇九米)に案内なしでのぼつた。この登山で私は

とんど絶壁に爪でかぢりついて助かつた。これが私の登山の一生を通じていちばん危険な瞬間であつたろう。 『ドーフィネ山群では、有名なメイジュ(三九八二米)――そこで著名なアルピニストのツィグモンデイが死んだ――にのぼ

四一〇〇米のところで、食糧もなくて露營した。もしこの夜天氣がわるくなつていたら、とても下降はむつかしいのだから、 り、ついでウィンバーが著書のなかに書いているバール・デ・ゼクラン(四一○三米)にのぼつた。日沒時に頂上にとゞき、

『オーバーランドでは、ベルナー・アルプスの最高峯フィンステラールホルン(四二七五米)にのぼつた。

われわれは避難出來たかどうかわからない。

『モンテ・ローザ山群ではつぎの登山をした。 (1)デュフール峯(四六三八米)に南稜から、曾てイタリア人によつて登られたことのない、ほとんど新登路と云つてもいゝ

(2)ニフェッチ峯 (四五六一米) に四回のぼつた。一回は英人トッパムが一度のぼつたことがある丈けの東稜からのぼり、他

みちを登つた。私の仲間はこの登路を「レイ尾根」と名付けようとした。

の一回は二十人の若ものゝ一隊をつれて登り、五十時間のあいだひどいあらしの中で頂上の小舍に閉ぢこめられた。これは思 かし萬事うまく片付いた。下に降りて見ると、われわれはみな行方不明になつたと騒いでいた。 い切つた企てゞあつたので、私のつれた若ものたちを濃霧のなかで見失う危險があつたし、食料も飲料もなくなつていた。し

Sesiajoch(四四二四米)ベラッヂが滑つて、アラニヤのガイド、ヨッピ・グリエルミナに助けられたところで

非常にけわしく長い氷の峠である。

のチムニーから。

ばれるところを横切るときに、雪崩にまき込まれて命をおとしたところである。 て危險をさけた。この斜面はイタリアの登山家マリネリとガイドのイムセンとベドランチニとが、今日マリネリ廊・下と呼 には、斷えず雪と氷の大なだれが落ちて來るので危險なのだ。われわれは最も雪崩のおそれがあるところを夜のうちに通過し な、最も危険なものだつたと思う。私と同行したヴァッカローネも同じ意見であつた。登路にあたるモンテ・ローザの南斜面 ⑷ツムスタイン峯とニフェッチ峯との間のニフェッチ峠(四四八○米)をはじめて越えた。これは私の登山のうち最も重要

『私はマッターホルン(四五〇五米)に、イタリア尾根、スイス側のヘルンリ尾根とツムット尾根から四回のぼつた。 (5)リスカム (四五三八米) をクレソネーに向つて、ほとんど人の通つたことのない岩稜を通つてのぼつた。

註・その後一九一一年に一度のぼつている。)

Mario Piacenza が登り、ブランシェ Blanchet がこれを降つた。)これは私のアクロバチック登山の「はなれわざ」だと思 『フルッゲン尾根は私が最初にきわめた。その後今日まで未だだれも登らない。 (譯者註・その後マリオ・ピアツェ ンツア

50

生活中最もふかい感激を味わつたのだから。』 の征服した山のうち最も大事なものだ。と云うのは、これに登るために、私は三年の間疲勞と試練と野宿とを重ね、 『マッターホルンの山群で、私はダン・デラン(四一八○米)とポアント・ブランシュ(三八九○米)にのぼつた。 後者は私 私の登山

二、その後の登山は次の通りである。一九一二年まではいづれもウゴ・デ・アミチスが同行している。

連峯の初鞭走。 一九〇四年 レポン (三四八二米)、シャルモー (三四四五米)、ダン・デュ・ルカン (三四八九米) の登攀。ヴ オーフレド

九一〇年 九〇五年 ヴァジョレ(二八〇四米)の岩峯縦走。マルモラーダ(三三四二米)--南壁から。ビッツ・ダ・チール--アダン エガ イユ・デュ・ドリュー (三七三三米) ロエグィユ・ヴェルト (四一二一米) ―モアーヌ尾根から。

サース・マオールを縦走しノルマン・ネルダのルートから降る。パラ・デイ・サンマルチノ(二九九六米)―北西稜から。 一九一二年(チーマ・デラ・マドンナ(二七三五米)―フィリモアのルートからのぼり、ウィンクラーのチムニーから降る。

(80)

一九一三年 トファナ・デイ・ロチエス(三二二〇米)―南壁から。アンテラオ(三二六三米)―南壁から。

附録第二 ギド・レイのおもな著作

"Alpinismo a quattro mani" (四つ這いのアルビニスム) — デョヴァンニ・サラガット Giovanni Saragat と共著

——八九七年

"Sui monti biellesi-Ricordi giovanili" (ビエラの山々にて―若き日の思い出) ― 一八九八年 "Famiglia alpinistica" (アルピニストの一族) ―ヂョヴァンニ・サラガットと共著―一九〇三年 "Il Monte Cervino" (マッターホルン) —一九〇三年、一九二六年

"Alpinismo acrobatico"(アクロバチック登山)——九一四年、一九三二年

"Alba alpina" (アルプスのあけぼの) ―一九一五年

"Ia fine dell' alpinismo" (アルビニスムの終焉) ―一九三九年"II tempo che torna" (時は移る) ―一九二九年

以上

# 明神岳五峯東壁と前穂高北尾根四峯正面岩壁の登攀

#### ` 明 神 岳五峯東壁

A

ま

え

から 告

1: を奮起せしめずにはおかなかつた。 廣 や左下の垂直にたれ下つた氷のリンネを境として、右に 岳連峯の異國的な相貌に、 がつたぼう大な岩壁の物凄さは、 昭和二十四年五月六日、 中でも第五峯頂上の雪帽子を冠つたような雪庇のや 私達は全く魅せられてしまつ 梓川河畔から迎ぎ眺めた明神 丁度、 激しい戦慄と闘志と 二年間にわた

つて、努力してきた屛風岩に一應の終止符を打つた時で

あり、

また明

神岳の岩場は私達にとつては、

全く未知

た。

常々ある種

の憧れと、

怖れとを持つていたことでも

0 あつたので、 一登高目標に決定してしまつたのである。 この素晴しい光景は、 一もなく、 今後の會

岩

稜

會

石

窗

繁

雄

U 岳 あることがわかつた。 2 か シ の峯々は、 U \$ かっ 2 0 し其後、 多いものであり、 五峯東面も頂上直下に垂れ下がる岩壁の 第五峯東面の外には、見るべきもの 文献を調べてみると、岩場としての 五峯の東面に關しては佐谷健吉氏 あるいは規模の小さいもので 他 から

少く 明神

は

ブ

東大パーティによつて、 は勿論のこと第二登すら記錄されていない こと 記錄があるが、 この岩壁に關しては 初登攀されたの 九三二年七 みで、 を知 積雪期 月 0

等の

このことは二十四年夏、 瓢簞池に合宿して、 明神岳東

(81)

面 夏期において地下足袋で、 手つかずに残されていたのも故なきとしないのである。 穂高においても第一級に屬し、これまで積雪期に、全く いたのである。 かとなり、 て登攀の可能性があるだろうか。 一全體をかなり詳しく登つてみることによつて、一層明 ケンを使つたこの岩壁が氷雪をまとつた場合に、果し (ルートの選擇の拙いことにもよる)、 明神岳の登攀目標を積雪期の第五峯東壁にお しかしながらこの東壁登攀の難しさは、 岩壁のみの登攀に十三時間を 三十本のハ

たり、 ルート 批判のみが、 装備による登攀が繰りかえされて、 私達のホームグラウンドたる御在所岳岩場の最も困難な 登攀不可能論が、 どのようなことがあろうとも、 眞面目に持出されたのも無理からぬものであつた。 行動したりしてはならない。 において、 登攀の可能性に對する論議がかわされたのであ このぎりぎりのバランスを維持することが 無雪期においてすらも、 會の最も有力なメンバーの一人か 文字通り血のにじむ 絕えざる研究と自己 飛躍した考えを持つ ァ イゼンと重

0

起る因となるものであろう。

果は單なる副産物であつて、この苦しい過程のうちに、 < ても、 た場合にのみ、それに相應しい結果をうる可能性がある 判斷と精密な計畫とによつて、 決することは出來ない。 出來るのであろう。 眞の樂しみを見出すことが、 聖なる樂しみとに浸ることが出來るのである。 を目前にひかえ、 だけである。人事をつくしたという信念は、 あると、 これが逆になつて、結果のみを追求することが急で 困難な仕事を通じてのみ得られる友情と、 決して切羽つまつたという感じを起させることな 山と人とのバ 風雪の中の孤立したテント 闘志や熱情だけでは、 ラ むしろ有害ですらある。 ンスが失われて、 山登りの眞髓であ 出來る限りの努力を重 アクシデント この問題 危險な登攀 の中にあつ むしろ結 限りない ると思 冷靜な を解

#### $\widehat{\mathbf{B}}$ 岩 場 槪 說

第一 Bは高さ約二○○米、六十度の傾斜で、 圖にて東壁を大略説明する。

B·Cは

A



1932年7月31日(B-C-&-a-A)東大ルート図から想像す。 1949年7月23-4日(B-C-GT-a-A) 1951年5月3日(B-&-a-A)

#### 第一図 明神岳五峯東壁略図

高さ約一五〇米、傾斜五十度、C・Dは高さ一五〇米、

Bのガレ場から中央リッペにとりつく部分が最も悪く、の約二十米のチムニーを抜けた上のオーバーハング及びの約二十米のチムニーを抜けた上のオーバーハング及びほ縁四十度である。ABが最も困難であるが、特にGT

Cは積雪期においてはかなり惡い。C・Dは容易だがFsこれについで、リンネのとりつき約三十米が惡い。B・

るのであるから、肉體的にも、精神的にも荷重であり、なアルバイトをしたのちに、最も困難な部分にぶつつかるが、春には相當なデブリが出ている。要するに、相當嚴冬には徐々に落ちて大きなものにはならないようであ

ど無く、純然たる岩登りである。ど無く、純然たる岩登りである。別用すべきブッシュは殆んら見ると、ブッシュが多いように見えるが、實際には、ルンゼの登攀であるために、利用すべきブッシュは殆んとないことである。遠くかまた安全な退却方法は皆無といわねばならない。この岩また安全な退却方法は皆無といわねばならない。この岩

増した。

### (C) 登 攀 記 錄

(1) 一九四九年七月二十三日 快晴

は 石原一郎―室敏彌。本田善郎―松田武雄の

(七月二十日より七月三十一日まで二十名、瓢簞池畔

に合宿)

4、ハーケン30、カラビナ8、鐙2、電燈1、飯四人携行品 サブザック3、ザイル30m×2 ハンマー

所はないが、リンネに入るとともに登攀は急に困難さをととした。中央リンネ下のガラ場までは特にむづかしいルートはかねての計畫通り忠實にルンゼを登高するこ各一食、カンパン五〇枚、水筒2、カメラ1

ビレーの終るを待つて本田取付く。岩は非常に脆く持つている。テラス左の端にハーケンを打ち、松田のセルフスで、上は八米、七十五度の赤いフェース狀の瀧となつリンネの取付點は約三十度、幅三米のザラ~~のテラ

0 登る。 クラッ Fi. 斜面である が、その上十米は完全なフェース、 認められ、たまらない懐しさに「ヤッホー」を連呼する。 度この時瓢簞池のテントも四峯東南稜を登る六人の姿も し松田プッシュをきかし、 して、これを握り强引に試みるが登れず、 間 の最 米 を左に二米トラバースして幅二米のテラス ハーケン一本 プを石原と交代、 拇指 部部 ここより十數米は比較的容易らしいリンネであ ク狀の白い岩を登る。 に似る)。 のみが辛じてかかるホールドを得て直登。 (この壁は本ルート中最悪で屛風岩第一ル (極めて打ち難し)を使用する。 中央リンネを底通しで極めて脆 石原は下の十数米を直登、 左上へ三米登り幅五糎のバ ハーケン二本打ちニピッ しかも八十度近い急 トップを交代 に達す。 300 直登 2 丁

チ

3

4.

る。 登つたが、 テを約三米トラバースし、 くなり遂にオーバーハングしている。 を直登する。 決める。トップ室と代りバンドをもどり右上のチムニ け 枚程の水平なテラスが 登二米で幅四十糎のバンドに達す。 難なトラバースをくりかえし側壁中の洞穴に入る。 上をきわどいフリッ はオーバーハングで不能のため右に左に二、三米づつ困 今日中に完登出來ない時はここをビバークプラツと (二一時一時間はサンマー 遂にあきらめ、 チムニー内に一本のリッ 7 あり (GT) 2 3 三十米の懸垂でバ 極めて脆い逆層の壁を約十米  $\nu$ でトラバースし、 タイム)) 岩稜會テラスと名づ この左上六米に疊 チムニ 3 が表わ 1 ンドにもど さらに直 右の n ٠. カン その 程太 1

2

これを登ろうと吊上げにてチムニー下端の の上に打重なるように幅六十糎のチムニーが

水

ールドを試

瀧を越す。

この上は七十五度の悪いフェ

1

スが四米、 五米ある。

2

つてリスを探す。右上に三米、それより直登二米にして

乗る足今にも崩れそうなスタンスに立つて必死にな

松田トップで(〇六・三〇) 七月二十四日 曇後晴

チムニー

上より右に十五

米トラバースしリンネの右の枝に入る。

リンネ

は

面 0

ブとガリーを登つて五峯頂上直下S字狀ブッ および上宮川から眺めて印象的なブッ 2 の左 ٧ ユ 上端に (東稜 10 2

草付きである。

右上へ約二十

米登る。

200

10

八米

0

スラ

ら現役パーティの聲が聞える。トップを室と交代、ブッ シュを十五米直登。フェースをトラバース、直角に交つ る。「ヤッホー迎えに行くぞ」ガスに包まれた東稜の方か 達す。ケルンを積んで四人の名前を書いた紙 片 を 入れ

た八米、八十度のリスを登ると五峯頂上は眼前にあつた

(〇九・〇〇)。

で最も困難な部分を登ろうという氣分が强すぎたように 功の後でもあり、各人血氣にはやりすぎ、我こそトップ 後になつて考えると、この時の登攀は、屛風岩での成

な部分を登ろうとしていたづらに時間を費した。 つてルートの選擇に一貫性がなく、しばしば登攀不可能 いたらしい。要するに四人がたえずトップを交代し、從 石原とは初顔合せでもあつたこと等が心理的に影響して 困難な登攀に石岡を含まぬ初めての經驗であり、また

一九五〇年一月五日 晴後雪 なつた。

即ち、恥づべき登攀であるが、他方實に貴重な體驗と

隊員 石原一郎、 松田武雄 (十三名瓢簞池に合宿)

天幕(〇三・三〇)―東壁下(〇七・〇〇)―リンネ

た。瓢簞池池畔での夏山合宿が餘りにも快適であつたた 下引返す (一四・三〇) ―テント着 (一九・五〇) ベースキャンプを瓢簞池池畔に選んだのは失敗であつ

悪化によるが、私達が想像したよりも、 にはとりつけず、同日行つた本田、室、田中、岡田の第 登攀が極めて困難であることが判明した。問題のリンネ 際、こゝからでは吉城屋から出發するよりはやゝましで あるというに過ぎなかつた。失敗の直接の原因は天候の 淺薄にも、その懐古の念に引づられてしまつた。質 積雪期の東壁の

四峯東南稜も完全に失敗した。 (3) 一九五〇年四月三日 晴後雨

隊員 石原一郎一 高井利恭。田中浩一 -森泰造

1

・三〇)雨のため退却

徳澤(〇一・〇〇)東壁下(〇五・〇〇)徳澤(一〇

四月四日

とは確實である。

これを避けるためには、

ビバークをす

るにしても、

東壁を登つてしまつてからか、

ある

いは翌

れば別だが)。

全く暗い氣持で一ばいであつた。

H

風雪でも行動出來る場所にまで登つておく必要があ

從つて、このような岩壁のアタックとして

出來るだけ固定ザイルを利用し、

萬

ると考えた。

は

異

(例であるが、

隊員 石原 郎 1 高井利

田 中 浩 一森泰造 つサ 术 11

徳澤  $(01 \cdot 00)$ 雨のため退 却

(4) 隊員 一九五〇年十二月二十五日一一 石岡繁雄、 石原 郎 松田武雄、 九五一 室敏彌、

年

月五

高 H

(嚴密には第四塞東南稜直下)。 年の 失敗にこりて、 ~ ースキ ンプを東壁直下に設

<

Z

結果は非常によかつたと思う。

最初、下まで、

持

能となり、

またまた完敗してしまつた。

唯

自然の

カ

0

阼

井利恭、

澤田壽

々太郎,

河尻修

4

中で、二晩のビバークは必要であり、また絕對輕装でな 選んだのである。 ければならないので、 つてゆく豫定であつたが、 しかしこゝから出發しても、 天候が惡化すれば、 その必要なしとして、 危険に陷るこ 東壁登攀 現地 10

> 動を起すわけである。 を用意した。 狀態が思いがけなく惡くリンネまでのフィッ 絕對に成算が る以外に自信がなかつたのである。 これでフィッ あつたが、 甚だ姑息な手段であるが、こうす さて、 クスの終りか 實際にぶつつかると雪の 要するに今回こそは 5 本格的な行 クスも不可

定で、残置用ピッケル3本をはじめ、必要な色々な装備

リンネ取付三〇米をフィッ

クスする

BC間で九〇

0

場

合でも、

退却 米、

出來得るようにすることにした。

卽

ういう方法で、 狀態がたとえ昨年のような好條件であつたとしても、 偉大さにひしがれて、言葉もなく退却した。 ねばならない。 ないわけにはゆかない いであるので、 職を持つた私達は二週間 嚴冬登攀の可 完登するには少くとも一ケ月を見ておか (二日續 能性は甚だ少いことを認 きの快晴を知る方法 0 休暇がせ 結局、 雪の カラ せ

そのうちには何とかなるであろうと、 (5)九 五 年四 月二十八日 一五月六 半 ばあきらめた

(87)

H

K の上、火がよく燃えて申分がない。 例の如く、東壁直下にテントを張る。 氣持で上宮川を滿した大きなデブリに啞然としながら、 シートの下に木の枝を敷いたので、實に快適で、そ テントが優秀な上

## 九五一年五月三日

上に二つの無點がとび出し、折からの夕陽に鋭いシルエ いた。そのうち、午後二時二〇分、第五峯頂上の白雪の は見えず、この様子では失敗ではなかろうかと心配して 心の東壁も落石が激しく、逆光で、聲はすれども全然姿 ら切斷されて退却して來たので、氣持は暗い。しかし肝 そのまゝ引返してくるし、 もカメラを落し、また落石でピッケルシャフトを中央か から前穂高岳へ行く豫定で出かけた石岡、 谷の氷のガリー下降で、懸垂三回をしても未だとどかず 前穂高北尾根に出かけた室、 ーも輕いアタックを試みることにして出發した。しかし トを作つて、喜びのヤッホーをくりかえす。まさかビ 松田のアタック隊を送り出した後、 明神主拳、第二拳間のルンゼ 森は明神岳東稜から下叉白 川尻は不覺に 殘留メンバ

> ミルクだ、 ばかりだ。今までの暗い氣持は一度にけしとんで、さあ かり驚ろき、 バークせずに登れるとは思いもよらなかつたので、すつ 食事の用意だと全くテンヤワンヤのさわぎと あまりのアッケない終局に夢かとうたがう

五月三日 快晴 なった。

隊員 石原一郎、 松田武雄

使用)、 パン5枚、捨繩二〇米、アブミ1、ハーケン二〇(一八 ピッケル2 ベーコン一五〇匁、キャラメル一箱、落花生一罐、 マッチ2、携燃3、羊カン5、 携行品 アイスハーケン1、カラビナ6、ハンマー2、 ヤッケ、ツェルト、ラテルネ、 チョコ4、 ハ ローソクラ、 ム一〇〇久

功するという氣がしない。第一の瀧、第二の 筈はないように思うが、失敗のくせがついているので成 草を吸い、テントの外へとびだす。アイゼンをつけ、テ ントを後にする(〇六・一五)。こんな好條件で登れない 起床(〇五・〇〇)熱いみそ汁をすすり、ゆつくり煙 瀧 ٤ 雪

ナ

25

淋

しくかかつてい

る

石原の確保で、

松田、二十米

敗退の

る。

昨年一月敗退の時、

懸垂のビレーとなつたカラビ

洞

に入

0

出

K ス

をつめ、 を氣味惡く思い出す。 で ラッ -6 オーバ ル で 突如、 1 ングの岩壁の下につく。 手掛りを必要とする堅雪の急斜面 音もなくおそいか ムつた表層雪崩

フ

4

"

クスのザ

イルをつけた場所だ。

また闇の中の

腰

# 月

Ç

折から、

太陽は黑いような空にギラギ

ラ輝

とて

石しきりで、特に中央リンネは落石の通路となり、

と岩の境を登つて輕く通過する。

第三の瀧は、

この

斜の大雪田をつめ、

中央リッペの直下に達す(○九

. 四

-ていた直徑一米ほどのつららが突如落下、 原岩壁にそつてトラバースを初めた時、 0 前例となる所であつた。 憩の後、 を登り、 原因となつた洞穴下のフェースをこえ この冬どうしても登ることが出來す無念の よいよ登攀にか 氷のつまつた急傾斜のチム とる。 松田の確保で、 頭上に垂れ下つ あやふく珍遭 穴 石

> そつて約十米逆層のきわめてホールドの小さいフェ も登る氣がしない。 困難なフェースに達したが、 7-を約四米登り拇指ほどの の下の壁を右がらみに登攀を開始する。 何とか中央リッペに取りつこうと決意し、 セ ルフビレーし、 ベーコンをかじり、 石原に登るように合圖する。 ブッ ザッ 2 2 クの の生えた急 重みで登れず、 羊かんを食う。 せまいバ 松田、 斜 面 ンド リッペ 石原 10 1

バースする。夏、 と合し (一二・〇〇) むなく松田に合圖してザイルを握つて腕力のみでよぢ登 てこれをかき落すのに一苦勞する。 い高度を高める。 まい雪稜と岩稜の連りであるが、 る。 このピッチは本ルート中の最悪である。 簡單に登れた最後のリスは氷がつまつ リッペの上端で一九四九年夏の 右上に雪ののつたバンドをトラ 水 雪庇のすきまをぬ しかし時間も豫想外 1 ル ド多く、 リッペ 4 ルート は せ

ちこち氷をはいでいたことを思い出す。 を求めるため岩にハーケンを打とうと、 悲愴な氣持であ リンネ下の急傾

に早く、

輕い氣持でのんびりやり、

なり、

下降しようとするも、

C

0

瀧

が下れず懸垂のピ

2

を登る。

一昨年の一月この上のリンネ入口で、

猛風雪と

トラバース、

氷の瀧を十米登り、

さらにその上の氷の

瀧

(89)

五テントに着く。 上を後にした(一四・二五)。 一二ピッチである。テントに向つてヤッホーをくりかえ テントからも盛んに應答あり重荷を下した氣持で頂 東尾根を下つて一六・四 B點から

て遂に頂上の雪にとびだした(一四・二〇)。

#### D t す U

5

ことは限りない喜びとせねばならない。 回の明神合宿に、一應無事故で幕を閉じることが出來た 符をうつことにした。とにかく足かけ三年夏を含めて五 もない相談だと、自からなぐさめ今や完全に明神に終止 數をもつてしては、僥倖でもない限り、とても出來そう に四五月交りとなつてしまつた。私達の限られた山行日 出來れば嚴多期にと思つて努力した明神五峯東壁も遂

前穗高北尾根四拳正面岩壁

A

之

が

き

挑み、 くまでも謙虚に、正しくうけつぎ、しかも限りなく努力 の岩登技術の向上を目指す者にとつて、それらの水準に することによつてのみ、始めて結實の可能性があると思 から生れるのではなくて、先輩が残した偉大な傳統をあ して私達を睥睨している。 先輩が血と汗とできづきあげた技術の最高峯が嚴然と あるいはぬこうとする努力は、單に先輩との競 か細いながらスポーツとして

自然の推移となつたように思われた。 ともに、今や四峯正面を私達の目標におくということは ィの結束にも、はつきりとした形が現われ、 的にもまた各人夫々異つた個性の上にまとまつたパーテ なつた五回にわたる明神合宿の體驗は、技術的にも精神 されたのである。しかしながら、失敗と苦しみの連續と にするに至るには二、三年の自己批判の期間を餘儀なく 氏の報告は私達を戦慄せしめ、はつきりとこのことを口 められた最終の目標であつた。 四峯正面岩壁の積雪期は、私達にとつて心の底深く秘 とはいえ、 松高及び新村 明神終了と

思われる。

强いていえば、 トを含む)

ルンゼ

 $R_1$ 

 $R_2$ 

 $R_3$ 

のうち

2

ように

甲南ルー

n

らのルンゼは積雪期には明瞭である)Rから垂れ下つ

#### $\widehat{\mathbf{B}}$ 岩 場 槪 說

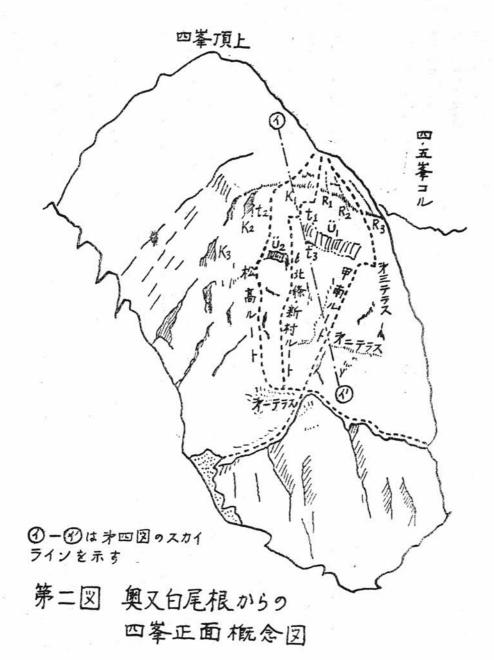
顔にも 以上を經過している現在の立場から、 今さら屋上屋を重ねる必要は毛頭ないが、 のびつく綜合的にまた積雪期の狀態を合はせ考慮して厚 四 峯 概説を試みることとする。 正面岩壁については、 またすでに幾多の文献で盡くされているので わずか三シーズンの經驗し 諸先輩の業蹟をし 初登以來一昔

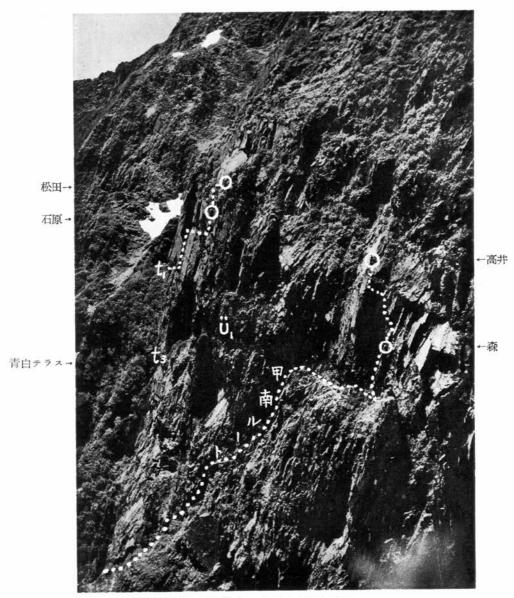
折れ目とすることに問題はないが、 を第二圖においてカンテ2及び3 ないように思う。 闘する四つのル トと區別出來るが他の三ルートの間には、 1 まづ正面岩壁の範圍について考えてみる。 のうち、 明大ル ート即ち明大、 卽ち正面岩壁の ートは地形の上で明らか との區別は明らかでな 甲南、 明大ル  $\widehat{\mathbf{K}}_{2}$ 正面岩壁と五峯側 松高  $\mathbb{K}_3$ 1 明確な區別 を含 新村の各ル 從來四峯に よりの限界 に他のル む壁の 壁 力多 1

を登つたというようには記されていない。)

甲南ル と甲南 P トを別個に考える必要はないように思う。 ことは無理のように思はれる。 池及び梓川から眺めても兩者を別の岩壁として區分する とはないが、 た部分(Ric粉雪雪崩が起つた場合、通路となる部分) いわゆる正面岩壁の真の初登攀者とみられる北條理 (寫眞一参照)壁の高さも同じくらいであり、 自己の登つたルートを四峯又白側バットレ ートに比し三峯寄りだというだけで、 ルートの下半分のガリーとで境界をつくれないこ 兩者は岩場の形狀にいささかの區別なく、 從つてこれら三つのル (後述の 特別 スのうち また又白 0 部分 如く 氏

十米 部分、 明の る 理 今、 由 正 便宜上甲南ルートを正面岩壁に含めておくこととす から 面岩壁を特徴づけるものは、 (その部分での壁の幅は約百米、 これらの論議は別として、 壁の幅のほぼ中央に位する高さ約二十米、 區別するにしてもその境が分らないから、 壁の中央よりや 私達としては、 幅約五 や高 上記 說 0





I 前穗高北尾根五峰頂上から見た四峰岩壁 (1951.夏)

石岡繁雄



■ 前穗高北尾根四·五峰の鞍部から見た四峰岩壁 (1952.5) 石岡繁雄

いる。 條ルート \$ のバ にもオーバーハングは至る所にあるが、 その代りこれを越してからの上の は登攀は比較的容易である。 さらに左にさけている)甲南ルートは五峯よりにさけて 寸越えられる性質のものではないように思われる。 部分的 2 を三峯寄りにさけ グを交え、 他 ンドをさける部分では、 また各ルートとも、 のルートではそれほど困難ということはないが、 (後述)、 のものである)。 甚だ困! 松高ルー (松高 難である。 このバ またこの大オーバ ル 甲南ルートではむつかし しかしこのオーバーハング ŀ, ートはUから分離したUの フ 新村ルートはこのバ ンドの高さに至るまで ı 1 それらはいづれ ス が小オーバー ーハングは 北 2

白

いかオ

1

バー

ハングのバ

ンドである(もちろん他の部分

える。 の下の 黑としている。 あり、 なる第 記錄があるが、 岩壁の高さを三○○米とか、或は六○○米とか書かれ ーハングのバンドの左よりの部分 がつきやすい。 雪雪崩を落し、 あるのと、壁がほぼ東南に面するので雪はつきにくく黑 高さのあることを考えれば二百米を越すことはあり得な いと思う)、 壁の大きさは第一テラスから高さ百五十米以内 R<sub>1</sub> 例えば又白池から前穗頂上までが五百米足らずで  $R_2$ 壁が終つてから四峯頂上までの主稜でもかなりの ーテラスから百米、  $t_3$  $R_3$ テラ 傾斜約七十度である。 の雪どけ水で岩場にシ 前記 ス 上部はつららが垂れ下りその下部は雪片 私達はいろいろ考察の結果、 各偃松テラスには雪が には晩春まで残雪を置いている。  $R_1$  $R_2$ 世  $R_3$ いぜい百二十米ぐらいと考 ル 2 (約百十度、二十米) 積雪期 ٠ ゼ のり、 ワーのように水を からはしばしば粉 は傾斜が急 登攀開始と 特にオーバ (正面 春に

#### 登 小 史

c

に都

合の良

いものである。

このような顯著な優松テラス

自己の位置を決定するの

降らしている所もある。

正

面岩壁を特徴づけるものと考える。

登攀中のよき憩い場所となり、

偃松のテラスで、

これ等はルートの

偵察に役立ち、

は

二圖で

t<sub>1</sub>

 $t_2$ 

 $t_3$ テラ

スは

(その他にも數多く存在す

疑問を生じ、諏訪多氏にお願いして調べていただいた結本項は諏訪多榮藏氏『穗高岳』による。尚※印は最近

果にもとずくもので、この經過は後述する。

1 一九三二年 七月二〇日一二一日

甲南 近藤實、山口貞夫、甲南ルート初登攀。

2 一九三三年 八月

日本登高會 海野治良、萩原寛、甲南ルート第二登。

3※一九三三年 八月二〇日

O・K・T(大阪) 北條理一、後藤武四郎、オーバーハングの

**3A** 一九三四年 八月八日

登 (一九三六年 八月 明大、人見卯八郎、小國達雄、明大ル大阪藥專 野口榮一、谷岡正夫、福田源五郎、甲南ルート第三

1 ト初登攀)。

4 一九三七年 八月三日

りとりつき左へきれオーバーハングの手前より明大ルートへ。東京商大、小谷部全助、森川眞三郎、日江井正己、四峯正面よ

(一九三八年一月 中大、永井憲治、上條孫人、明大ルート

5 一九三八年 十月六日

三年のリングハーケンを發見したことから、そのリングハーケ

根の突端からとつた寫眞(寫眞一)を考察した結果と、新村ル

ートを登攀したパーティが、上記のハーケンと思われる一九三

冬期初登攀)

松高山崎次夫、松森富夫、松高ルート初登攀。

6 一九四一年 六月上旬

大阪山岳會 新村正一、長谷川靜子、松高ルート第二登。

7 一九四一年 十月十日

大阪商大 入江康行、新村正一、新村ルート登攀。

8

一九四三年八月

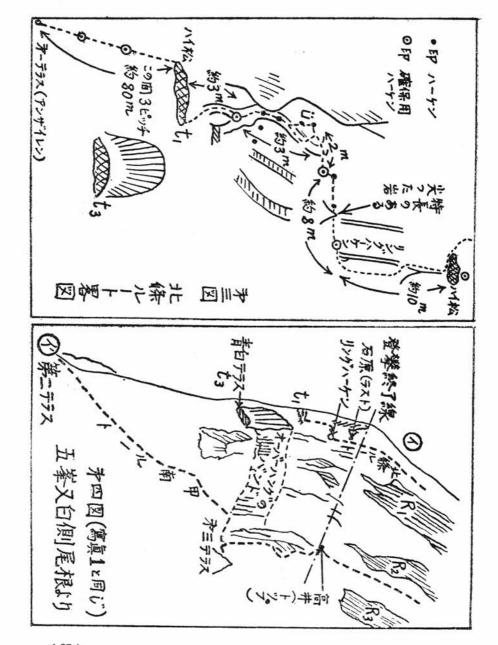
關學、井上獎はか新村ルートの第二登。

廣瀬文雄、林氏、

北條ルートより右を登る。

北條ルートの記錄について

新村、甲南兩ルートを同時に登攀したが、その時五峯又白側尾雪線十八號に「右側には幾本ものリッジが背を並べて頂上に向って走つている。この偃松テラスから十三米ほど右のリッジにつきかつて使われたリングハーケンが 一本岩から生えたようにつき出していた。おそらく甲南ルートのトレースに 北條理一氏が使用したものだろう」との記載がある。 私達は勿論そのまゝ讀み開した。しかし、私達のパーティが一九五一年七月二十七日、遇した。しかし、私達のパーティが一九五一年七月二十七日、過した。しかし、私達のパーティが一九五一年七月二十七日、過した。しかし、私達のパーティが一九五一年七月二十七日、



登つてくることは不可能と思われること (寫眞一及び四圖參照) ンは甲南ルートの上にはなく、また甲南ルートからこの位置に

同じと確信する)を登つたのではないかと考え、この旨諏訪多りて打つたのでなければ私達と同じルート (新村氏のルートとが判明し、このハーケンを打つた人は何かの理由で 上から 下

が甲南ルートでない部分を完登されているととが分つた。北係いたとのことであつたがその後文献を發見され、北條氏他一名祭蔵氏にお願いして調査していただいた。諏訪多氏も初耳で驚

トは圖では説明出來ないが、五峯叉白側尾根からみて、ほぼスにさけて登つたが、我々は左にさけて登つた。问 我々のルー氏はその記事で、(イイ)甲南高校はオーバーハングのバンドを右

覺である。以上の理由から北條氏のルートが私達の登つたルーが新村ルートを登つたつもりの石原、松田のそれと全く同じ感からとりつき、ほぼ中央を登つた、と記してあり、その登攀記からとりつき、ほぼ中央を登つた、と記している。(A) 壁の直下カイラインより二〇米ばかり五峯によつている。(A) 壁の直下カイラインより二〇米はかり五峯によっている。(A)

が多く特にフェースの登攀で然りである。私達の場合でも、登どの部分を登つたかということを断定することは、困難なことがの部分を登つたかということを断定することは、困難なことの部分を登つたかということを断定することは、困難なことが多く特にフェースの登攀で然りである。私達の場合でも、登めの部分を登つたかと思うし、新村氏の記事からと全く一致するとみて間違いないと思うし、新村氏の記事からと

甲南兩ルートを同時に登つている [寫真一] がなか つ た なら りかに撮つているのに、自分の登つたのはとこだと別の場所を らかに撮つているのに、自分の登つたのはとこだと別の場所を でも、もし石岡が五峯から眺めておらなかつたならば、壁のどでも、もし石岡が五峯から眺めておらなかつたならば、壁のどの部分を登つたか断定出來ないというのが本當であり、 新村・

## 北條ルートについて 追補

ば、例のリングハーケンに疑問を持つことはなかつたと思う。

である。昨五一年に登つた廣瀬君にきけば、リングのついたア ているが、二本より打つていないようだ。とのハーケンが問題 アルバイト。 時一〇分(石岡君の登攀終了線)、 うつ。それから大オーバーハングを懸命に越す。 付き一一時五分に小オーバーハングに出合つてハーケンを一本 峯頂上より偵察。四五峯のコルより又白側へ下る。 か三名が参加している。 前記でまちがいないと思う。このときの合宿には跡部昌三君ほ 大の大島輝夫君から御教示いただいた。年代は前後より考えて 北條ルートの記錄は石岡君からの疑問で調べたところ、 三四峯コルより涸澤へ下る。 **涸澤池ノ平より五六峯のコルをへて五** 四条頂上七時。一二時間の ハーケン ガラ場午後六 午前九時取 は五本もつ

きにもハーケンが使用されたと思うが詳細は解らない。 ある。 イス る。またこの壁では大阪の東光君の墜死があり、その救助のと も多少の差異はあるだろうが、それは石岡君のいう範圍内であ 言と石岡君のとは若干異り、北條氏と新村・井上氏のルートと は寫眞一の石原君の下左よりにルートをとり苦戦されたそうで 院の井上氏にはお會いしてないので詳細はわからないが、これ てアイスハーケンは一七本目で、廣瀬君は二一本のハーケンが く冬用のために打つたと考えられる。石岡君のいうちから數え ハーケンで、十種ほど岩より出ているそうである。 tから登攀終了線までの距離やハーケン数は、 廣瀬君の (詳細は神戸山岳會々報に出る由)。 關西學 おそら

ている。諏訪多 頁でガリ版刷で、O・K・Tの管見録であることは梶本君も認め にきいても判然としないが、私はアイスハーケンは北條君の打 つたものであると信じ、この記録を肯定したい。なお記録は二 北條君はこの登攀を大して云々しなかつたので跡部、 梶本君

1

#### D 登 鐢 記 錄

(1) 九五 北 條 一年七月二十七日 ル 1 1 (新村ル ト 快晴 第二登または第三登

> 隊員 石原 郎 松田 武雄

ートを選んだ。 さか心もとないのでどちらか一方を登ることとし、 は出來す、他のメンバーでパーティをつくることもいさ ればその夏は終りという狀態なので雨ルートを登ること となる松田が、 は正面の二つのルートを登るべきであるが、 登攀の可能性があるかどうかの偵察にある。 れまで同様休暇の關係で四五月交りとなるであろう) の選擇はパーティにまかせたのであつたが結局新村ル この登攀の目的は、 夏山では毎年一日しか餘裕がなく雨が降 正面岩壁が積雪期 (といつてもこ このため 登攀の主力 K 1

浮石の多い岩場を右上へぐいく、登る。三十米のザ 雪溪を下り第一テラスに達す(○九・○○)。 ンし甲南へゆく二人と別れ石原トップで淺いリンネ狀の る(○七・○○)。四・五の雪溪をつめ、又白側四 甲南ルートに向う高井、森とともに涸澤のテ 4 に登つてセルフビ レー用にハーケンを打つ。 アンザ ントを出 五. 三ピ イル 1

チにして大きな偃松のテラスに達す。

仰げば巨大なカ

ば

松田と交代。 ~ テ 35 頭上にそびえる。 優松の右端より約三米登りオー チョコレートをかじりトップを ,5 ーハング

の下でとまり二人一緒になる。 先人のハーケンをたたきなおして大きくかぶつたオ 確保用のハーケ ンを打

力盡きて約三米落下、しかしカラビナ四ケを經ているの 原に登つてくるように合圖する。石原吊り上げのための カラビナをはずしたため、 ーバーハングを越す。右へ二米トラバースしてとまり石 オーバ ーハングの乗り越しで

岡、 石原、

松田、室、高井、

森の六名、アタッ

クは石原

一行は、石

0 に登る。 突端へ石岡、 再び力をとりなおしてォーバーハングを右からみ 下はすごく切れ落ちている。五峯の又白側尾根 澤田現われて盛に聲援する。 松田立ち上

でトップの松田には殆んどショックなく石原約三十分休

り上へ一米、さらに右へ約八米ハーケン三本打つてトラ

のガ 人と一緒になつて頂上へ向う。 松にもぐりこむ。 バースしリングハーケンの所へ來る。ここで再び集結。 ついで松田高さ約十米のクラッ ラ場でザイルを解き(一二・三〇)甲南ルートの二 傾斜ぐつと弱くなつて壁は終つた。上 ク狀の壁を登り大きな偃

及び自然落石しきりであるが、壁が殆んど垂直のため落

石は空中を飛び去り、危險は少いが氣持は良くない。

H

びて全身ぬれ鼠となり、

今や苦戰を覺悟する。

表層雪崩

#### (2)甲 南 ルート春期初登攀

九五二年五 月二日

をまわつて四、 五月一日、嚴冬のように降りしきる粉雪をおかし酒澤 隊員 松田武雄、 五のコルヘテントをあげる。 高井利

具合悪くアタックを中止、 松田で北條ルートを登る豫定であつたが、 ノビと決める。 その朝石原腹

9 30 え 壁の下でアンザイレンし第二テラスに十一時二十分達 を出發した(一〇・〇〇)。一氣に四・五の雪溪を下り、 ルートにゆくことにする。 しかしあまり天氣が良いので松田は高井とともに甲南 高井ルートをやや誤り、 思わぬ時間を費し、 ŀ ップは終始高井が行うことにしてのんびりテント シャワーのような雪解け水をあ 松田を翌日のア 2 n ーザ n のコースをたど タッ クにそな

松田 上げ う登攀は終つたも同様であるのでホッと一息したのも束 J: 遂に約五米にしてトップをそのまゝ松田と 交 代 たが、今回は岩が完全にぬれており登攀ははかどらない。 れた指先が冷い。 しつ 稜線をそのまったどる。 面 0 を確保する。 を越し雪を交えたブッ K 15 5 間 ハーケンを打ち、 から 0 雪が つかえているため左のスラブに移り、 リスから右のカンテに出、 ランスの登攀となりハーケン二本を使う。 松田强引 によって、 めているので、 夏ガレ狀の いよく、難關にかかる。 ル ンゼ に引き上げやつと危機を脱す。 高井チムニ 再びせまいチム の途中から切れ落ち、 第三テラスの雪の上でチ  $R_2$ どちらへもゆかれず定められた狭 鐙をつかつてこれを乗り R<sub>3</sub> ٧ 1 尾根はか ルンゼは、 2 の中で力盡き、吊り上げ出來 の尾根に馬のりとなり、 これを登り數 = 高井昨夏は簡單に登つ 1 ぶり氣味となり、 板狀雪崩のように 狀のリスにもどる。 Ľ 力 水の流れる岩 切 夏ならばも コ 口 折から暗 b V 0 0 す 氷が張 1 吊 る。 苦し 高井 1 惡場 b 30 表 しつ

~

チ狹 中に突き出たナイフリツジの岩稜に達す。 こたらず益々慎重そのもの」登攀をつづけ 壁をふるわす。 くなり三日月が不氣味な光をはなち、 かかか い雪稜となり、これをつめ終るとやつとトラバ る 歩一歩固くなつた氷雪の急斜面に しかし容易な場所でもセ 烈し ルフビ さらに る 4. 突風 松田 逐 V が に雪 1 ピ かかお 時折 は終 1 0 ス

始あくことなくピッケルをふるう。

10

が陰るとともに急に温度が下り、

手袋をはめられ

な

12 82

松田 えない部分に堅雪がつまつていたこと等であつた。 であつて岩のぬれていることに氣づかなかつたこと、 ŀ 思 やつと出向えのパーティと一緒になつて二〇・〇〇 は 4 に歸着した。 が いささかの疲れもみせず危げなく完登した。 けぬ苦戦となつたのは、 五峯からの偵察が また休暇 併し 輕

あ ح が き

E

となったので、

いささか未練も

あつたが北條ルートを中

翌日も快晴であ

0

たが石原恢復せず、

6

日日

止して上高地へ引きあげた。

(99)

る れなかつた。がこれは決して出來ないというものではな 四峯正面を積雪期に登ろうという所期の目的は達せら この理由は困難な場所が、短いという點にあると思 むしろ明神五峯東壁に比し輕いという感 じをうけ

5

階を終ることにしていたので、五月三日は雪の五峯頂上 で誠にささやかながら終業式なるものを行つた。 ることが出來た。かねてこの四峯をもつて、一應第一段 の被護の下、一名の犠牲者もなく、まがりなりにも達す 明神、四峯とかつて夢に畫いたあこがれの目標は、先輩 れない。今や屛風岩正面岩壁初登以來滿五年を經過し、 信をもつてとりつける者は、松田一人だけであるかも知 た。とはいえ私達の仲間で、積雪期の正面フェースに自 峯正面岩壁は、今や親しみをもつて呼べるよう になっ いづれにしても私達にとつて、かつての恐怖の對象四

ながら今それらの苦しみの思い出は、限りなき友情の結 思い起せば敗戰後の過去六年半の登攀はすべて苦しか 何度も泣き、また山を止めようと思つた。しかし

> て涙の流れるのをどうすることも出來なかつた。 けることの出來ない瞳から、眞黑にひやけした頬を傳つ んで聞いてくれるであろうと思つた。まぶしくて目もあ 根尾根も、穂高をこよなく愛した諸先輩の靈とともに喜 の聲を、屛風岩も明神岳も、四峯の壁も、また瀧谷の尾 束を通じて、すべてが無限の樂しさとかわる。萬歲三唱

## Щ 岳 ガッグー

年

四 四

號

五. 〇圓

Ŧī. 0 圓

四

四 年

= 號

(二冊同時に御申込の場合は二八○圓、送料二冊

四三年、四五年は共に賣切れ絶版です

迄二四圓)

#### 春 0 自 馬 岳 以 北 0 縱 走

和二十七年四月二十七日 五月二日

パ 昭

1

ティ

津田康祐・岸田權二・竹中茂・馬場太

郎

參考地圖 (五萬分ノ一) 白馬岳、 黒部、 泊、 小流

波の源は、 子不知の險であろう。日本海の荒波に屹立しつらなる山 波は、こゝで斷崖となり完全に海中に没し去る。 北陸線で昔から險岨として知られているのは親不知、 北の名峰白馬岳に發している。すなわち、 その山

馬岳の稜線を真北に北上すれば、 犬ヶ岳、 白鳥山より親不知に續くのである。 雪倉、赤男、 朝日、 この支 長 白

脈中にも大きなものもあるが主脈ではない。

私

達の白馬岳以北親不知までの縦走は、

三月の五龍

1

昭和

岸 田 權

To 鹿島樹の失敗から計畫され、 山岳雜誌「岳人」第四〇號によれば、 その知識も極めて少なか 谷博氏は北ア

0

谷氏の女の發表の前に、 スの未踏ルートの一つに入れられている。もつとも われわれの仲間の諏訪多、

ルプ

種の不都合のために、 兩氏はこの縱走の計畫をもち、 計畫を行えなかつた。 昨年五月出かけたが、

種

ブッシ このルートの朝日、 ュで通過が困難であることは今回の踏査 長栂以北は積雪期以外には猛烈な によって

も頷かれた。 日―長栂―黑負―小瀧があり(註一)、また昭和四年三月、 五年五月上旬に薔浪高の盛岡英次郎氏の白馬ー朝 この ル ートに關係のある今までの踏査 は

(101)

更田、大久保兩氏が小川温泉より尾安谷と相ノ又谷の間

を、卽ち今回のルートに對してはトラバースになる踏査の尾根より初雪山、犬ケ岳を經て東へ明星山へ續く尾根

てあり、これに對して塚本繁松 氏の もの(註三) は夏期の文獻のうち盛岡氏の論文は主として積雪期を中心としの主稜は未踏のまゝ殘されていたものである。旣發表をしいてる(註三)。即ち黑岩山より犬ケ岳、白鳥山と北

(主として谷)で兩者を併讀されることがのぞまれる。

大型圓匙と米軍放出グランドシーツなどをもつた。 大型圓匙と米軍放出グランドシーツなどをもつた。 接備としては特筆するものはないが、雪洞前進のためにしたが、五月上旬では携行しなかつたのは幸であつた。 したが、五月上旬では携行しなかつたのは幸であつた。 したが、五月上旬では携行しなかったのは幸であつた。 大型圓匙と米軍放出グランドシーツなどをもつた。

#### 錄

記

四月二十七日 暗

細野發一一・一五――二俣一一・五五―― 發電所取入口小屋

三・○○晝食——猿倉一五・四五

れ朝日に輝いてわれわれを迎えてくれた。 に出る人々がちらほらと目に入り、山は未だ白雪に蔽わわれていた田畑も黑々とした肌を見せ、春の芽生に野良られた七分咲の櫻は旅情をそゝり、ひと月前には雪で蔽られた七分咲の櫻は旅情をそゝり、ひと月前には雪で蔽大町を經て四ツ谷に下車、九時細野に着いた。車中眺め大町を經て四ツ谷に下車、九時細野に着いた。車中眺め

晝食にした。こゝより完全に雪に蔽われ地下足袋もスキ 雪も多くなり、 所を過ぎ、そろそろ殘雪もあり、 道、快晴で相當な暑さを感じ、 とは春山の名残を一層深める。造林小屋のあたりより残 躍出發した。 二俣までは松川にそつた平凡な トラ 慮して、おいてゆくスキーの返送を依賴、十一時すぎ勇 め、たのんであつた食糧をルックにつめ、 週間の食糧と裝具はやはり肩にこたえる。 細野では大谷袈裟義氏宅にて準備、夜汽車の疲れを休 昔日の山行を偲びながら取入小屋の前 スキーなきルックながら 若葉の綠と北股の水音 雪の狀態を考 二俣の發電 ック

く嚴とし、

小蓮華も美しく朝日に映えてい

る

朝

の雪

面

0

だ

から

明

H より

北へ

の長い縦走に備え今日使つたヱ

ディウスの快音に夕食準備。

は適度に締りアイゼンも氣持よくきしむ。

馬尻よりの上

ギ

ーをとりもどすため御馳走することにした。

夕食をは

直ぐ進 の登高を考慮し、 道の橋を渡つて十六時前に猿倉に着いた。 6 1 をたのしみながら直ちにねむりに入つた。 直ちに夕食準備、 ぶん變つていて一寸あわてた。 一日で休養をとる必要もあり小屋を借りることとし、 に變る。 はおだやか んで左に入りすぎ中山澤の右岸に出あわてる。 中山平は戰時中に相當伐採されたらしくす 馬尻までと豫定はしていたのであるが で滿天の星座は輝き、 十九時頃温いうどんに舌ず 鬼が時々飛び出す。 明 今日は大雪溪 日よりの行動 0 2 をう 夏 眞

ル

## 四 猿倉發五・○○─白馬尻六・三○─村營小屋一五・○○ 月二十八日 快晴

られた。白馬尻まで大體豫定通り、白馬主稜は威壓する如 走澤落口より杓子東尾根、 ゼ が ンにて五時出發、 起床がおくれ、 大雪溪の登りに雪崩を考慮し早朝出發の豫定であつた 朝食のあべ川をのみこみ小屋よりアイ 早い夜明けで明るく快晴である。 小日向方面が白く輝いて眺め 長

止する。 も一層强く、 面は堅く、踏み込むと膝までもぐり輪か りに肩の荷もこたえだした頃より、 押し出していた。 途中晝食、二合雪溪より相當大きいのが出て中央部まで 崩が出るが大きいものはなく大雪溪に押し出してすぐ停 がんがん照る太陽に雪もゆるみ、 ば西に立山、 9 して中央を直登、 ることにした。ほとんど雪がはいつていず快適、 れの疲れをふつとばしてくれる。 の黑部側よりの國境風もなく陽光に輝く杓子が するも大した效果なく結局アイゼンのまく前進する。 白馬鑓より南 ラッ 暑さに汗が流れ出した。 劍、 セ ルと暑さにばて氣味でのんびりと登る。 これ 十五時村營小屋に着く。 旭と雄姿を現し白馬の威容も、 へ後立山連峰がそれに連り、 75 番大きく、 一應こゝでのぼりは終つた 杓子側より時々表層雪 こゝでも小屋を拜借す 雪面 雪質も大分變り表 小雪溪をやゝ警戒 んにかえラッ に反射する陽光 國境稜線特 少し登れ 眼 われわ 早 前 速ラ K -t

ーネル

せるだけとばさねばならぬので早く就接。 大層美しかつた。 じめた頃外では杓子がアーベントグリューエンに輝いて 時間はまだ多少早かつたが明日はとば

#### 四月二十九日 風雨 滞在

にか」つた。 過しとび起きたのが五時、 るが、居住性のよかつたせいと昨日の疲れで不覺にも寢 いよく〜今日から北に向つて目的の行動に入るのであ 外は明るくあわてて出發準備

7

ケルで保ちつ」白馬頂上に向う。

ちらりと見えるのみで一日中荒れ狂つていた。 見えない。ときたまガスの晴間より窓ごしに前の尾根が ないぼつり~~と降り出したかと思うと、ものすごい風 とにしたところ、六時過ぎより黑雲に蔽われ、 日にのびた行動を考え充分休養した。外界は荒れて何も 雨化し、停滯休養をとることにしラディウスの整備等明 然し空模様悪く雲行も相當悪いため暫時様子を見るこ 風をとも

### 月三十日 曇強風時々暗

村營小屋發八・三〇 -白馬頂上九・二〇——三國境鉢ヶ岳

ではスキーどころではない。

細野で捨てたスキーに多少の未練はあつたが、

この狀

ル 0・10 鉢ヶ岳、雪倉岳コルーー・二〇――雪倉

コ

の肩 三三 泊場一五 · 二 五

見合す。 切つて小屋をとび出す。風は相當强く失うバランスをピ 附近は雪煙を吹き上げている。 ないがまだ見透がつかない。 四 時起床昨日よりの荒天もおとろえ、 八時頃やつと見透がついたので直ちに出發と張 外は相當な强風で白馬頂上 朝食をすまし出發は少し 雨こそ降つてい

非常に强いので直ちに三國境に下る。 が朝日に映えて實に壯觀だ。三國境手前から左にまいて 朝日岳その右肩に長栂と比較的明瞭に眺 れから行く北方の山を見る。 ともに大部分雪が消えて、まつたく夏山の感じだ。 一氣に鉢ケ岳とのコ 頂上では白馬中心の山岳標示臺にかじりつきながらこ ルに出る。 鉢、雪倉と一段大きい 驚いたことには鉢 北面より見る主稜 められた。 これ 雪倉 風が のが

り込み、 部側 ゆるく、 をまくことにした。 1 この行で最も悪い條件になつてきたので偃松の中にもぐ 過 事を考えブッ しいと思いながらガスのため地圖と首つ引きでついまく 0 しかしガスはなか まで上り、 コ 出たが白高地 もぐり 眼 にとつてブ ゼ 北側 ルに着いた。 前 ケルンをたよりに前進する。 からガ に赤男がびよこんと鎮座し、 北側 の肩に着く。 ガス 雪がくさつて足首まで沈む。 オ 地圖上の夏道通り左へまく、 ス I " のコブの手前に出る。 が舞い上つてきた。 の消えるのを待つことにして晝食をとる。 シ シ 澤側は雪庇が出て深く切れており、 100 眼前に雪倉が見える。 ュの中に入る。 2 〈消えそうもない。 0 大所川源流に落ち込む斜面は傾斜も ューをぬぎ、 ガスはいよく、濃く何も見えない。 中にもぐり、 僅かな落葉松、 右へ卷き氣味に稜線上に 多少まきすぎたが正午 夏山氣分で鉢ヶ岳の右 足もとは岩場になつて やつと見透がつ 赤男にしては一寸おか 頂上に向つて中程 なんなく雪倉との そのころより黑 時々現れる夏道 栂の また左 いた頃 林を

態を眺

8

ては未練どころかかえつて安心した。

こゝでア

#

かり下つたがそれより下は瀧狀で、急に落ち込んで雪崩 はいて少し下つたが岩が脆く、 ことに決定、 の危険も多分にあり時間も十五時を過ぎていたので泊る も相當急な傾斜であつたが、 のでこゝをさけ赤男谷側にまき雪溪に出た。 ツを敷いてもぐり込んだ。 栂の小枝を切つて相當厚くおき、 高さ約一米二〇廣さ約二平方米の四人用の雪 すつもりがガスのためにとんだところで泊つ み上げ舊軍隊の携天で蔽うた。 滿天星がきらめき明日の天氣を裏付けてくれる様だ。 で非常に居住性よく暖かい。 ルに落ち込んでいる。 空腹に熱いぞう煮が非常にうまい。 階段狀になつて栂林に向つている急斜面に 下降できそうなのでアイゼ 入口には前方をブロッ 下ることに決め一五〇米ば 今日は長栂あたりまでとば +11\* 栂の枝葉を厚くお その上にグ イルを携行しなかつた 外は風があるが しかしこと ラ 洞を掘り、 7 ンドシ しま クで積 いた ンを 雪 1 0

五月 H 晴 一時曇小雪 見つゝ八

時就瘦

洞内は靜かでラデ

1 ウ ス

の快音のみ、

明 日の

12

ートを夢

た

(105)

泊場發五・一○──朝日のコルス・一○──朝日岳 | ○・○ ──一六一二・八米ピーク泊場一四・四○ 

快適な雪洞で充分睡眠をとることができた。

第一回の晝食をとる。一寸寒

落石とスノーボールのシ て赤男山のコルに出る。斜面はところぐ〜龜裂を生じ、 に出ている尾根を下り、左へ相當長いトラヴァースをし る。二四〇〇米ぐらいの處で地圖の夏道に沿い白高地澤 ケが氣持よくきく。自重して引返すことにし急斜面を上 今朝はまつたく快晴。雪はしまつてアイゼンのツァ ュプールがありあまり感じがよ 9

又谷に落ち込んでいる。 離れのした容姿をはつきりと見せ、清水、猫又と連り柳 て昨日の泊場を見たが相當悪い。 となり赤男山をほゞ水平に左側小櫻平をまく。ふり返つ 朝日のコルより東へは白高地澤 その右肩に旭岳が日本

くなかつた。コルには點々とケルンが目に着く。再び雪

ぞいに約四○○米上りきつたころより吹雪となつてしま 憩 つた。雨よりはましだとばかり落葉松の中にもぐり込み 逃げみちも考えておいて、とにかく上ることにし、 まつた。だん~~悪くなつてきたので一應蓮華温泉への その頃急に黑部側より雲行が變り黑雲に蔽われてし 稜線

三米)に向う。途中恰好な泊場が二三箇所ある。 どこが頂上かわからぬまゝに過ぎ雷鳥夫婦の出迎をうけ つとばせばと想像しつ」くさつた雪上を黑岩山 實に廣いあやめ平、黑岩平とつゞくところをスキーでぶ がのびている。こゝからしばらく下り一方だ。長栂山 三角點近くに新しい道標がたつていた。 る。長栂より北東へ五輪、黑負と盛岡氏の下られた稜線 は實にはつきりして地形と地圖が實にびつたりと合致す 小川温泉への道が西へ走つている。 天候もどうやらもちそうになつてきたので出發する。 太陽も再び輝き視界 前朝日イブリと 二六二 絕好

スキー場であるが遺憾ながらアプロー 黑岩山頂上は草が出て夏山氣分だ。黒岩平以南は塚本 チが長すぎる。

快適だろう。遠く妙高、

戸隱が眺められる、コルにて小

が相當廣く蓮華温泉へ續いている。スキーで下るならば

を中央に左に初雪山 岩峰を嚴と現し毛勝三山が北へ走って に續いている 鋸と燒山の噴煙が眺められ、 質に廣く長く續いている。 五九五 西には遠く雄峰 • 七米) 目的の北方には犬ケ岳 4. 右は長く明星 る。 東には雨 劒がその 山

氏

冠氏が北又谷より歩いておられる。

ふり返れば朝日

C;

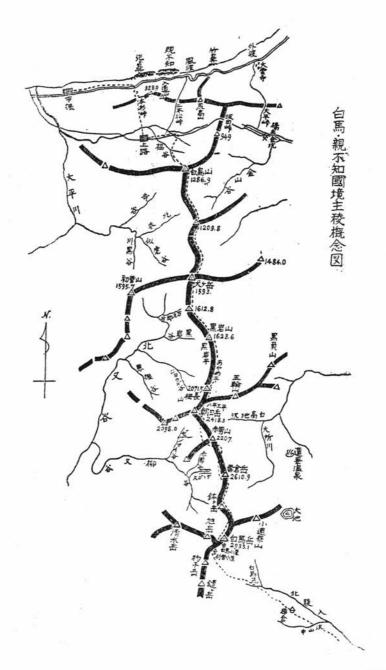
側で、 東面した雪に雪洞を掘ることにした。 うか となり、 過ぎ次のピークで稜線上の雪はきれて完全なブッシ 次のピークにて二回目の晝食をとる。 れている。 も消えているようである。 ٧ いて處々大きく割れ、 から 黑岩よりはほとんど雪庇の上を歩いた。 雪が大きく割れ稜線側に残つた丁度垂直に割れた 一般き、 からぬ から尾根 相當な時間を要するのと恰好な泊場があるかど いよく〜目的のルートに第一歩を踏み出す。 ので、 右は小瀧川 も痩せ左は北又谷に落ち、 時間は少し早かつたが泊ることにし 犬ヶ岳手前は稜線は黑く大分雪 0 目標の白鳥山は犬ケ岳にかく 源流に急に落ち込み、 一六一二・八米を まつたくおあつら **濶葉樹** 泊場は小瀧 雪庇が のブッ ュ帶

> がけぬ美聲にわれわれはなぐさめられた。 バイトを强要しそうだ。 え向である。 の見透もついたようだ。 明日の快晴を祈りつく二十一時就變 優松・石楠花・落葉松・濶葉樹と密生し相當なア この地點より犬ケ岳までは約一・ 北又谷よりガスが 近くで鶯の鳴聲が聞える、 4. あ よし 办言 五粁ぐら 0 て 思 3

五. 月二日 快晴 7:

1 泊湯發五・五〇 7 親不知海岸線一九・一〇 == 大ケ岳 白鳥山一五・四〇 100.00 市振驛一九・五〇 上路村一八・三〇 一二〇九・八米ピ

好くしてブッ たが、 す た處に落ちていた。 察に出てブッ だつたので一寸冷えた。 昨夜は雪上にグランドシーツ二枚を重ねて敷いただけ 昨日三 今朝は運よくすぐ見つかつた。 一時間ばかりさがしたがわからずあきらめて シュに飛び込む、 シュの中で地圖と時計を落した 地圖はどこかえとんだらしい。氣を 今日はまつたく快晴だ。 相當なアルバ 一寸ルートをか イトだ。 0 を 昨日偵 さが



斷

下のブッシ

ュの中に消える。またそこに獵師の足跡

コルで、

大きな羚羊が一匹飛び出し矢の様

10 澤 を横 渡り苦闘だ。 らさがりトラヴァース、またステップをきりブリッヂを 0 をさがすがすぐブッシュになる。二つ目のこぶより危な いとは思いながら小瀧川西俣谷に落ち込んでいる急斜面 ルンドを雪におさえられて谷側にねている枝にぶ

だ。一寸下つた處で相當大きな熊の足跡が、生々しくつ 倍程とり、 いており一寸びつくりする。一二〇九・八米ピーク手前 のどかにわれわれの疲れを癒してくれる。バターの量も あきのきそうなビスケットも實にうまい。 白鳥は指呼の間に見え心配していた雪も白鳥まで續いて 間の悪戰苦闘の末一〇時犬ケ岳の三角點に出た。目的 に黑姫 いる。もうしめたものだ。左に大平川が見下ろされ、 れてブッシュとそれをたよりに雪の急斜面を上り、 やつと最後のコルに出る。 の巨體が眺められる。三角點にて第一回の晝食、 張切つて白鳥に向う。 それより上も同様、一息い 肩の荷も輕くなつた様 篇の鳴き聲も 四時 右 0

消えて海に入つている。

豫定の坂田峠、

は緑の前山を控えて日本海が美しく、大平川が海岸線で にからんで一五時四〇分白鳥山の頂上にたつた。 バイケイソウがところべくにあたまを出している。 二回目の晝食、汗にびつしよりぬれたシャツを干す。 なる急な斜面を、 ←最後の登り、雪が完全に腐つてアイゼンがだんごに も相當焼けて眞黑である。一二〇九・八米ピークにて第 つける太陽の光熱と雪面の輻射に身體もだれて來た。顔 らしいものが一つ目についた。 ステップをきりながら頂上手前より右 この頃よりがんく、照り 眼前 t =

える。 夏道がはつきり見え、 n ートは北東へ長く續いている。 長い下りをふり返り遙か長栂、 山姥洞のある北へ下りている尾根の末端にS字狀の 上路の部落は左へのびている尾根の末 橋立金坑、大平峠を經て大雲寺への 麥田が青々と見下ろせる。 鳥居杉が眼下に七八本見 朝日と白馬方面を眺 端 K か 4 ル

ートを變更して眞直ぐ榀谷に下る。 ると感新たなものあり、 記念寫眞を撮り一六時豫定の 白鳥山の日本海側 は ル

(109)

8

ぎ、落ちかゝつた丸木橋を渡つて上より見えたS字狀の やつと坂田峠に通ずる本道に出た。湯の谷の橋下で野良 くらいの立派なものとなり、一面の草と兩側のブナ・柳 道に出た。道は尾根の末端を右にまき、少し下ると二米 仕事を終えた村人達が馬の手入をし家路につくに忙し の若葉が夕陽に映え目にしみる緑をたゝえ質に美しい。 が、汽車の時間にまにあうというので、とにかくとばす うので知つているのか知らないのか、とにかくたまげて 眼を向ける。道で出會つたおばさんは白馬から來たとい を一氣に下り海岸線に出た。先ケ鼻の嶮はすぐ右手にあ 香が暮色とともに何ともいえない風情だ。暮れゆく峠道 直ぐ下れる。 ことにし、 いた様だ。部落に入り學校で泊めていたゞく豫定だつた 本杉の峠道を急ぐ。右手の入道山を越せば親不知に眞 でつかい荷を肩に眞黑に雪燒した顔の我々に奇異の 部落の子供達に見送られながら、上路を後に 峠に出た時眼下に青々とした日本海、

通過した。細長い市振村を過ぎ一九時五〇分 驛に 着 いに急ぐ。海岸に沿つたトンネルを列車が煙につゝまれてに急ぐ。海岸に沿つたトンネルを列車が煙につゝまれてり、そのむこうが親不知の嶮崖である。

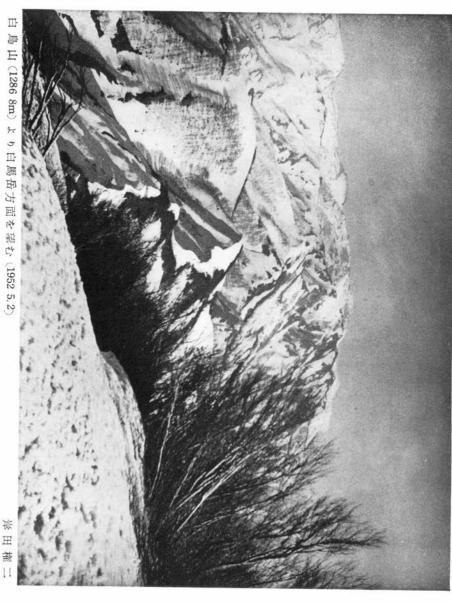
た。

である。榀谷の分岐點(約四〇〇米)にてアイゼンをぬ緩急さまざまで雪さえよければ實に廣い立派なスキー場

註23 山岳三六年第一號 塚本繁松「白馬三山とその以北補及び「春の白馬岳より糸魚川へ」

遺

H 山 本 Щ 岳 會 E 編 + 記 月 中 刊 一九五三年版 行 豫 定



仁田河内岳附近から見た聖岳 (1952. 7.22)

# ź

石 南半の 覺

沼

井

鐵

太

郎

人H 7: つていさゝか書き改めたといふ程度のものである。 まゝ埋れてしまつてゐたものを、 木暮理太郎氏の教示に從つて計畫を樹て、後から來る友 出した頃でもあつた。私は中村氏に次いで入山された故 出した頃で、 に牧載されてから、 大井川奥山の旅」なる麗筆が「山岳」(第八年第二號) 年の 昔となるが、此の方面の 先騙者 中村清太郎氏の 私が赤石山脈の南半に入つたのは大正七年で、最早三 この一文は當時何かに投稿するつもりで書いてその 君の事を危ぶみながら一人で大井川奥の夏山を訪ね 同時に又、其の綠の寶庫に伐採の手がつき 一部の登山家にその地域が注目され 最近取り出して塵を拂

> 水源。 田代。 聖澤水源。 小無間山に登る。 内入り、伐採小屋泊。十三日、仁田河内岳―上河内岳 大宮泊、其より靜岡を經て油島泊。 り富士登山、 旅程は、七月三十一日一八月三日、 奥西河内岳、魚無河内岳、悪澤岳より井川本流奥西 五日—十日、 十五日、赤石岳を越え大聖寺平下岩小屋泊。 十四日、 同行會員高畑良材君、 十一日、 聖岳— 田代滯在、天候定まるを待つ、六日 東岳―圓山―大澤岳―赤石澤 田代一土平。 八月四日、大日峠 五合五勺の 東京發、 十二日、仁田河 小屋及び 吉田口よ

河内落合に遠する尾根を下り海抜約二千米の所に泊。

七日、

田代川谷に下り、下のナリアヒ

(赤石澤・本流

H

滯在。二十日、靜岡に出で歸京。 本合)附近小屋泊。十八日、田代迄强行。十九日、田代

朝六時に出發、午後七時頃田代に着いた。
は常になった。私は油島(通稱六番)に泊つて、次の日ちと無理で、往道には大抵汽車の都合で途中一泊して行ちと無理で、往道には大抵汽車の都合で途中一泊して行ちと無理で、

は

お定まりのますや事瀧浪盆次郎方に草鞋をぬ

靜 は貴重なものだつた。 かない道ださうであつた。大日峠は恐しく暑い峠で僅か 里としてある所、 成りよかつたが、上落合と口坂本の間は里人が五十町一 中村さんの行かれた頃と違つて長い橋がかくつた。 には朝日館といふ宿屋がある。 上落合迄漸く倬が通る。 かに目的の谷に下る事が出來る。 里の上りに二時間半も費した。 先づ靜岡の井 ノ宮から牛妻迄輕便で一時間、 何分豫想外長いので、人夫等も餘り好 峠の西側は少しは木蔭もあつて心 尤も油島迄は平坦で、安倍川も 之から上落合迄は道も可 其だけ水吞茶屋の清水 峠續きの勘行峰 其から先 油島

TU

〇五米)

は矢張伐採の最中で、

「事務所近道」等と建

にあつて、大日峠を下り終る頃容易に眼に入る。田代でく。此間は中村さん當時と變つてもゐない様だつたが、く。此間は中村さん當時と變つてもゐない様だつたが、井川の部落に郵便局と測候所の建つた事は新しい事であれした小徑が幾つも北の方へ隱れて行くのを見受けた。

に於て、井川の谷のあの翠緑の底知れぬ處女林も、 0 の品は谷を去らずとも辨ぜられた。 も醒ましたものだつた。そして山には相應しない酒屋だ 嘩する騒ぎに、 なると歸つて來た連中が飲む、 が泊つてゐて、日中は働きに出るから靜かだが、 などばつくしと出來て行く様子であつた。 行く人夫達の爲に、善い意味では多少開けて、 つた。人間を中心として觀た田代は森林伐採に雇は 田代に六日間の滯在は天候其他の事情で止 化粧品店だのまで出來て、怪しげ乍ら、 屢と聖あたりにさまよふ夢心を意地悪く 唄ふ、 上高地とは別 叫ぶ、たまには喧 宿屋にも日雇 日用一 むを得なか 新し 夜分に 通 れて い店 b

H 地方の K 極 夫 荷 して道 いと廣言してゐた程である。 度も案内し、 介して置いた様な人物で、 士太郎一人であつた。 行かれた望月勇吉は山林に入り、 松次郎 どなか 3 林 去となり 製が 量に カ 小 たから、 0 荷 日雇 强力に殆ど見る事の出來ない位な抵抗力を以 か」つた場合には減食して、 河 0 かけてはひどくやかまし ったの 樂の片手間案内もせうと言つて呉れ は 内 老 は つ」ある狀況で 減を主張した。 當時 瀧浪清音) 其後も田代開發の爲に登山案内者を辭 て沼平の自家に蟄居し、 は當然であつた。 一較的苦しい登山旅行に同行を申出る者が殆 萬 H に三圓 天候不良其他 彼は大體本誌の案内者欄 の三人で八日 あつた。 以前横濱の平沼 から 例を學 然し勞働が職業でない丈に 嘗て中村さんを案内した い男で、 4. 只 7 私の場合としては、 \_ 0 げると、 0 事情 H 間 自ら山が 木暮さんの連れて は 0 私一人に彼と人 0 Ŧi, 内に幾度に で豫定より Ш たの 大三郎氏を二 圓 歩きに 食糧は絕對 から 位も取 は瀧 に嘗て紹 好きと稱 て 他 さな 浪富 0 8 0 伐 T

2

カン

彼を雇用した經驗によると、 ゐた様に思ふ。 信國境上 にして旅程が だからたまらない、 シャ は紐 ふ事に定るまでには可 にしても一日一人一足平均と見積つて携帶し、 分けて腹に入れ露命をつなぐとい 忘 つた様である。) n ツでも引裂いて修繕して濟まさうとい (之も何かの附屬品で餘分でない)か其もなけ 1: が駿河 0 悲 喜 順番に捗つた爲米も草鞋も餘つたので、 其後大正九年になつて會員岩永信 の草 劇は上演 鞋 採集植物壓搾用の は信州の 成り談判 0 機會を失つたわけである。(言 私 の時程やか よりは大體丈夫に出 に骨 ふやり方で から 折 野 れた。 冊を持つてもら まし あ 萬事 屋 然し幸 切 で 雄 n は 氏 來 此 n た 草 駿 から ひ ば 所 鞋

犬の

様な獣で

あるかと奇問を發した住民の氣分も、

過

時計 百米許り上るとたるんだ尾根の形となつて、 行かうといつて、 は風 動 いてゐた。 田 代滯在 屋 から 0 强 前の横路 3 0 風が 間 小 に小 河 を入つて直ちに急な山 午前七時富士太郎と一 止 内 無間 8 0 ば 谷 雨だとい 0 山に登つた事が 上には 悠黒雲が ふが、 脚 緒 兎も角行ける丈 笠に である。 K ic 其處には作 出 なっ 取 付 其日 かけ 7 0

畑 なく山ノ神に着いて一休みした。 右に尾根の上を栂、 の中に 軒の小屋がある。 樅、 夏椿等の間 大無間山行の小徑は之より 此處には檜が數本立 を縫ふて行く。 間 0 \$

7: 0 と傾斜が 南のガレ 此頭から徑は尾根通りイヅワ 0 旦 頭に達した。 緩んで再び上りとなり、 白峰山脈の笊ケ岳 澤の頭に向 九時にはイヅ つて から 望 る まる n 澤 6 n

て居た。

一體大井川谷には檜の純林は見ない。

少し進む

7-

も見ないでしまつた。 經 験が ので兩手で食り乍ら、 あるきりで記憶の朧げな所からたうとう水は 其代りクマイチゴが盛になつてゐ 向側 の尾根に出て、 大鳥澤、 セ 滴

を踏み分けて行つた、

處が案内は十六年前たつた一

度の Ш

から

水を得たかつたので、

左方、

大鳥澤水源の

方に

腹

上り 7: 七九六米のイヅワ澤の頭に出たのはもう十一 草本とが滅茶 0 + 處に貂を取る仕掛だといふツブシ ノ澤の 此から小無間山まで二粁位のもので、高さも三百五 伐木の 乗越の鞍部からイヅワ 倒 × れたのとクマ K 搦みあつてゐて、 イチゴ 澤 の頭に上つた。 等 から 手 の刺の あつた。 間取つた爲、 時で ある灌木狀 此 此鞍部 からの to 0

> 歯の難所がひかへてゐるので、 十米の差だが、 未だ喬木帶の尾根に持つて行つて大ギ 先づ第一回の中食を取

大きな側に が きいギリ歯の形を見たのであつた。 石の南尾根と六十度位の角度を以て西方信州 のないギリバが可 側には小さなガレ 茂つてゐる處は、 C 大ギリ齒といつても、實際歩いて見ると鋸の齒でもな 成程赤石山脈の大きな側尾根だと思は 何處迄も南の山らしく丸味を失はないで眞黑に樹 尾根 には、 から 成ある事と思ふ。 探険家には物足りないかも 小 ある。 無間 のものより そして赤石南半には 例 更 へば大澤岳から赤 K ス せ ケ 0 30 知 側 1 和 未 K ル 但 な 0 向 だ名 大 2 兩 60

く午後二時頃小無間山の頂上に着いた。 E チバナ、マヒヅルサウ、 花を咲かせてゐた。 ら植物分布の様子が變つて來てミヤマウヅラ、 7 イヅ F y 子 澤 カ 0 ンバ・ 頭から三つ四つこの小突起を越す。 道の姿も怪しい乍ら大した苦勞もな 11 ヤ 7 ソタカラカウ等が 1 V ノキ 其他 すでに大ギリバ の根元に淋し タウ 4 ı, 此邊 ゼ e ラ Ŋ かっ

から下る尾根を探すのに一寸困つた。

地

形圖に記入はな

かつた。

がトヤマ澤の上の方は可成崩れた處があるので、先づ

紛 K なしには難しい。 であるにしろ以前と違つてヤブや倒木がひどいから一泊 と思つた。 n か」る頃から霧雨となつて襲つて來た奴が、 のない雨となって、 此ぢや勿論大無間山まで行けないが、よし晴天 小無間山の頂上はミヤマハンノキ よく

く

閉でなければ登る山ぢやない 着茣蓙は忽ち水膨れになつてし の間に三角

此時は

點標石のある他何等奇抜な所はなかつた。

直ちに下山。 分する。 だ道の名残であらうか。 35 7 寸急であつたが、 あつたが、 雨 澤と明神谷を分つ尾根に下つた。 の中に立ん坊をして大急ぎで食事と喫煙をすまして 千八百米の一角に來るまでは容易であつたが、之 地圖で等高線に數字を記した長い方の尾根をと 時々道らしいものがあつたが、 往路に比して稍樂であつた。 倒木や藪を嫌つて元來た方に歸らずに、 直ちに平坦な尾根の上を歩いて行く 此二千米程の平尾根もやがて二 此尾根も可成倒木 初めの下りは 伐木の際踏ん 1

> 中の一番短い、そして急な尾根を、 尾根を離れない事が肝心だつた。 處である。田代に着いたのが六時四十分であつた。 苺にひつかられたりして下つたが、 ら急に縮まつて、 の中から大井川が一寸見えたので、間違ひない事が分つ つた。かうして道に出たのが五時十五分過、 が、 地形圏にもある如くこの尾根も谷近くなつて 同時に三分する。 段々下つてゆくと雨脚 **随分いやな思ひで** 木の中にもぐつたり 私達は的をつけて真 熊水とい

をめいく一枚宛持つて行く事にした。 たので、多少心配でもあつたが、仕方がないから大油 後から送つて來る筈の天幕其他 雨水は容赦なく全身に沁み渡つてゐた。 つたのに、 十一日から奥山入り。 まだ其年は此方面から赤石山脈に入る者がな 同行の約の友人は終に來らず、 の品が未だ到着しなかつ 八月も中 旬

し又近いといふ。 の道を通る。 午前六時半に田代を後にして小河内に渡 東河内迄は此方が左岸の道よりも道もい 谷を上るものは異様な三人の姿の他 b 谷の 右岸 は

**此側は距離を短縮出來るので、人々は主として東側の道** 日には見上げる様な高い所から石礫が落ちて來る。 いふ澤の落ちこむ事が多い。水は飛瀑をなし、 る。總じて大井川の谷は東側即ち白峰山脈の方から斯う 小ブチ澤で一休、 で湯治に行くといふ女にも出逢ふ。 仁田河内、ガッチ河内等の山が見えた。九時四十分 ばかりで、中には東河内の温泉に小屋掛け 山ぬけしたばかりの様な急 途中ちよい人人上河 な澤 風の强い

持子 (人夫)

を奥山への往來として居る。

字の方が適當、ウハンザウリ、シモ て山葵畑で叉中食。 大井川は遙か下にあつて水のしぶきも見る事がない、下 ノ島へ下る所の林の小徑が如何にも凉しい、左手へ入つ になる。漸く出發して右岸を地圖の路通り傳つて行つた。 から暑さで苦しむ、其丈弱い富士太郎の休憩は延び勝ち 下ろす。谷と云つても日中は日が照るし手ぶらではない 釣橋を渡つて向岸の橋の傍で清水湧く所に中食の爲荷を 十時二十五分東河内落合着、 午後三時十五分上草里 七八箇の小屋があつた。 ンザウリ、ハネンザウ (上草履の宛

然し であ ら坂を一つ越して次第に下つて行くと終に信濃俣の落合 の作畑小屋に入つたのは午後五時四十五分であつた。 に出た。さうして河原傳ひに土平(信濃俣から數町上流) 様の高臺となつて森はその上緣を圍つてゐる。信濃俣に リなどの地名はザウリ郎草鞋の切れ方で里程の概念を示 入る道はこの所から別れて山膝の方へ向つてゐた。之か した名稱であると云)に道が上ると、 珍らしくもテレ

は畑ナギと云つてゐる)の下にある伐採事務所へ着いた 人は別にかう云つてる譯ではない、然し山 あるばかり、 ッチ河内、 重い我々の足は一向捗らない。四邊は平凡で仰ぎ見るガ りる様になつた。昨日と違つて登りが多いから未だ荷の ゐる尾根の鼻を越して仁田河内(地形圖の仁田澤)に下 に登つて行つた。(午前七時)。路は仁田河内岳から出て で、一枚の名刺に禮を述べておいて、小屋の背後から山 屋の主人(安竹作次郎)はたうとう歸つて來なかつたの 十二日は仁田河内を上つた。 仁田河内の岳は針葉樹の色濃く澄ましこんで 別に奇抜な事もない。斯くして畑薙山 昨夕から不在であつた小 0 南面 0 ナギ <sub>山</sub>

仁田 5 チ 7: 間を木馬道や材木落し場などが縦横してゐる。 ら來るものである。 岸斷崖の所は難なく通れて暫く行くと澤が二つに分岐す 時間許して仁田 るとガ 人の家に類似してゐたので珍らしく思つた。 夫に建ててある。 る 上つて行くと、 らカケスの子が寄つて來た。 劇開演中であつたし、 河 れない程伐り盡されてしまつて、 河内は廢殘の姿であり、 後で聞くとこの木馬道を何處迄も右に上つて行くと 右は仁田 内といふのもこの鳥が多いから云ふのださうだ。 務所で茶をもらつて中食をしてゐると、 聖澤と奥西河内は未だ手が付かない様であつた。 " チ 河 内側 河 内岳 所々殆ど水平な例の木馬道に 河内の澤を上つた。 その建て方が寫眞で見たカラフト 0 私達は路 尾根殊に畑薙山 から來るもの、 赤石澤の密林も既に處女でなか 上河内は紙料會社の手で悲 のあるま」に左 カケス即ちガッチで、 左はガッチ 地 僅かに残る栂や樅の 0 圖に記號のある兩 山腹は二目とは見 室の一 此處から見 横 の澤寄り 河 かうして 切ら 内岳 ガ の露 隅 礼 K か " カン 0

> うだ。 聞くと静岡の小料理屋に女中 最中であつた。 入つて行つた。 く遠廻りして來た事が分かつたが、 きにぐんし、上つて行つた。 考へるのも面倒臭いからホツ 仁田河内岳の直下に出られると云つた。 的な氣分を醸してゐたのは事質である。 ふ女達が中心となつて善かれ悪しか は見も付かない一寸仇つぼい若い女が二人ゐたが、 は手を休めて茶など沸して呉れた。 ので、食事をとるべくす」められるま」に左の澤の 大井川一 圓 珍らし 其處は崖に臨んで新しい小屋を建ててる 伐林事業の生活の裏面には又斯うい い客だといふので 軈て三人の人夫に逢つて漸 (?) をしてみたもの (狭 い尾根の事)を午蒡抜 彼等の内には山人と 早午後二時頃だつた n 南 が る種 働 いてゐた人達 其時は の最も人間 ださ 後で 方に **一**

0

は午前十時であつた。

流石に木は惜氣もなく使つて丈

來る。 は五時頃であつた。 て道を歩いた。 の道に出て、之からも一つ上の小屋に泊つたと 時間の長休みの後元のホッに歸つて右方の澤に向 かうして度々休 又一つ 富士太郎は前の年には例 廢小屋が んで最後の二軒 である。 丁度小 0 小屋に着 0 雨 水 から " 3 ふが から 7-0 ٤ 0

2

の常として、情けない様な有難いやうな複雑な感情に捉れてもらつたといふ事は、霧を思ひ岩を臥床と考へる人約二千百米附近である。そして此程高い所迄來て湯に入り役に立たなくなつたといふ。私達の泊つた小屋は海抜

かうして木を伐つてしまふと以前の記憶といふものが餘

はれたのであつた。

からいふ譯で十三日からほんとの山旅が始まつた。午

は三十度以上もあつてしまつたが、どうせ分らないなら出て、夢を渡り山腹に取付いて登むと、あやしげな小徑は遂に消えてしまつた。案内の富む三十度以上もあつて上るに從ひ急になる。石にはべつは三十度以上もあつて上るに從ひ急になる。石にはべつたり藻類が附着してゐてつる / 滑るしうす氣味が悪かたり藻類が附着してゐてつる / 滑るしうす氣味が悪かた。高山植物の花が谷地のやうにじく / (した水上に吹いてゐる。終に偃松が現れて水にも離れると、もう我々いてゐる。終に偃松が現れて水にも離れると、もう我々いてゐる。終に偃松が現れて水にも離れると、もう我々にてゐる。終に偃松が現れて水にも離れると、もう我々にてゐる。終に偃松が現れて水にも離れると、もう我々に

其處は仁田河内からは信州へ越す乗越の様な所でガッ

野は感心した。丁度蚊取線香がリュックサックの中に入いる。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いふ。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いか。よくこんな低い木で首がくゝれたもんだと富士太いからに見まはする。

ひいき眼にも言はれない。其邊はニッカウキスゲの花がつたものである。どんよりと濁つた水は山上の小湖とはた。仁田ノ池とは假名であるが徑四五間の凹みに水が溜た。仁田ノ池とは假名であるが徑四五間の凹みに水が溜

つてゐたので、取り出して墓前に立ててやつた。

2

は都合よし、 叉ギャ そこで輕い中食をとつた。 ウジャニンニクが一杯生えてゐて飯の菜に

0

上る頃から赤石山脈名物の霧が襲來したので、 脈より て高原性の山背を持つてゐて、 ひ易 は上河内岳に於て殊に著しい)。 は て上河内岳との間にある二五五四米の山を越える。 一寸立止つたきりで通過した。 び崛起する模様もない。 と、この山の根はする~~と霧の谷に下りてしまつて再 ひどい様子だ。 Щ から 午 龜 腹を歩いて行くと、 の二つの人魂式山稜の間がノタ場と云つて一寸高原性 我 前十時に池畔を獲して同二十分仁田河内岳の頂上。 の背に似て尾根と見るべき突起が十分でないので迷 い。なまじ一米でも上るのは損だとあつて信州側の 々に向つて來て、此も低く信州側に落ちてしまふ。 それといふのも一體赤石山脈殊に南半の山相は主 離れて最高點がある所が少くないか 再び元へ戻つて今度は正直に山上を越す 其處に稍 叉、 上河内岳からは一條の山脚 うつかり誘惑されさうに 頂から大井川 と深 北に向つて百米許下り い澤 が現 らだ。 0 れて 山頂には 方へかけ ヤブも (此例 此 Ш

> で くとどの案内でも此處を巧みに通りぬけた者 た。私達が兎も角そのヤニの海を泳ぎ下つてノタ場に出 てからよく見ると、もつと南に切開の跡があつた。 窪であるが、 それとい ふのも偃松の 之を通過するのは厄介であつた。 切開 が明かでないからであ は 無 噂 4. rc 樣

許して上河内岳を間近かに仰ぐ谷地に出た。 に採集する。 食をやつてあたり一面に生えたギャウジャ 霧は再び下つて上河内の岳はピラミ = 此處で又中 1 = クを盛 F

ノタ場に着いたのが午前十一

時五十分で、

其から十分

にありくくと其の赤兀の岩面を見せた。

午後一時二十分出發、

復た十分許で岳のま下に來たの

で荷は人夫に預け、一人で頂上さして駈け登る。 うつすらと空をぼかしてゐたが、 十五分には絕頂の三角點に立つた。しつこい霧は、 石 右に鼠色の富士が氣高い姿を現はす。 が見えた。 悪澤等はよく見えたが、 白峰山脈の笊ヶ岳は殊によく晴れてゐた。 肝心の聖は更に晴 周圍は打開けてよく山 鬼、大澤の圓 れない。 山、赤 まだ 時五 其

(119)

光の大岳も惜しい哉量つてしまつた。

大井川の谷はしか

しよく見えた。 面には「白雲と今われ別る悲しくも蒼き白檜よなれ ふと氣が付くと三角點の傍に木片があつ

の旅であつたのだらう。 つて水氣にこもる山の風にだまつて吹かれてゐた。さて もしぬらむ、 大正戌年夏」と書いてある。 蒼き白檜は其時も岳の上に縮ま 中村さんの霧

蔭の草地に寢そべつた。 通り 眺望も濟ましてしまつてから岩の間を下つて、岩

見ると、 危險な所があると木暮さんにおどされて來たが、通つて ら軈ての 此 0 日は聖澤の水源に泊る豫定とすると餘裕もないか 採集胴籃が岩につかへて當惑した事の他、 慥か其前であつたと思ふ。駿州側に二ケ所一寸 事に立上つて、三時三十分には御料局の標石に 大し

底が 境を離れて、 聖澤水源の 稜が餘程西に廻つて來ると、 て困難を感する所でも無かつた。尤も霧の日にはガレの 打連る。 知れないからさう思はれたかも知れな で、二千四百米許の小隆起を越した所から國 小流と其側の破れかりつた小さな小屋とが現 森の中へ入つて行くと、 北側には美しい白檜の森林 間もなく潺湲たる 43 國境の Щ

沙

れた。 (午後五時三十分)。

り落ちる清水はナイーヴな愛らしい聲にさいやく。 を遮り、 者にとつては成程尤もであつた。四方程よく山 は他に求められまいと聞いて來たが、森林の山を愛する 恐らく日本アルプス中か程に安全な、 白檜はすく/~と立ち列び、赤く青き岩間を滑 感じのよい宿

のせが

る 行手を見ると直きに左に折れこんで傾斜を増す 様 なると、 い水音がする。 あるのであつた。耳をすませばたう人へと遠 らず廣からぬ高原の森の樹蔭、 焚いた火がぼうくくと燃へて人の顔が猿の様に赤 總ては原始に歸つて苦もなく笑もなく永劫の自 聖の大ダルはずつと下であらうが、 其處に信州の釣師小屋が い然も力强 で 3 あ

十分といふに出發。 ある。氣温は攝氏十二度。 カラ澤にか」る。 石が落ちさうで危なかつたが、 小屋から澤を四五町も上つて、 支度もそこ (に午前六時二 石床

遙する。空は晴れたが多少雲行が早くて少し怪し

然に其儘溶けこんでゆくのであった。

久戀の聖に登るといふ日、

勿論早く起上つて林中を逍

0

て來る。 此 點に着 出られた。 り反つた胸に隱れて見えない。 まへて水に唇あてる事も面白かつた。 0 1 偃松の海は正に二十八分で通過して間も無く國境のゴト 大無間に續く大根澤岳も見えた。 岳迄よく見える。 七時四十分第一の段に着、 約である事が證明された。 るかであつたが、この岩兀を通過すれば凡そ一時間の節 もので、此迄は小屋のすぐ後を上るか又は國境を迂廻す つけてあつた。 間唯 點は地形圖に三〇一一米と記した處で、 其から頂上迄礐落たる大岩の累壁を攀ぢ登る。 の下に着 0 いたっ 終に午前十時二十分となつて聖岳の御料局三角 水 此は前日尾根から聖澤水源に下る時注意した いたっ 丁度小屋から四時間を費したわけである。 の出る所である。 ヤブは直きに切れて一所岩の兀げた所に 惠那や富士、 此所は例 休。 の小屋 富士太郎は鼻高 白峰南半も晴々とした。 光 眺望は次第に雄大となつ 心もとなく揺ぐ岩片を踏 八時五分出發、 から聖の頂上に到る迄 イザ ル 僅かの距離を 々で ケ其他上河内 あ 目前 頂はそ った。 0

> 所は、 思つた。聖の山頂は三千米にも及んでゐるが植生 らしいものを見た。 な事又驚く許りで、 るにも拘らずぐつと半圓を描いて迂廻した所は珍し 石へ連る山稜で、 とは全部曇つた。 をとつてゐると、 し下りて見ると、 垣を圍らした野營の跡が 米は東北東へ時間にして十五分許の處にある。 隔てて二つの高所が ザラく の石原、 二三十米下の所に中村さんの野營 赤石と聖の裾がすぐ眼の前に接して 北の方はあけてゐたが、 霧が舞上つて南方の 寄りあつて縮まる様な偃松の開 最高所へ歸つたのが十一時で、 ある。 あり、 御花畑など薬にしたくも 陸地測量部の三角點二九 なほ三角點から東方 Щ と和 於 いた 田 此間 方 一の貧弱 のは赤 面 食事 へ少 七八 いた いと 0 0 K る 谷 跡 石

は間もなく盡きて、

疎らな灌木林に入つた。

羚羊の道

205

Щ しく咲いてゐた。其から徐々に上つて午後二時鬼岳 十分避難が出來る。 て恐しい絶壁で 午前十一時三十五分出發、 午後零時半聖鬼間 あるが、 経壁の緣には濃厚なビランジ の最低所、 駿州側は密林になつてゐ 國境通 此邊信州側は例 り南々西に向つて下 によっ 草 3 から 頂 で

チャウ

ノスケサウは何處にも見付からなかつた。

した に云ふが、鬼といふ名は岳の頂が鬼の三ツ口の様に見え しかゝるや直ちに右に折れて登ると間違なく最高點に達 あ 箇 0 Ŀ に着 つてうつかり其方へ行きたくなる。で、この廣場にさ の突起が見える。 η のである。 廣い山巓であつて、 いた。 其處はಒから向つて行くと南アルブス特有 三角點は西方へ十分位で往復出來る。 其下に例のノク場の様な平底の凹が 可成複雑な地形を呈した處へ數 因

るからさらいふのだと聞いた。

漸く鬼に來たと思ふと又々霧がまいて來て大澤岳は勿

見えた。 が ぐに消えて空は暗澹となる。 霧に包まれるとさつばり位置が分らなくなる。三時半出 に到る尾根 とする所の窪で食事、ちらと大澤の圓山が見えたが、 山背を北進すると十分の後に鞍部着。三時一峰を越えん 復た 狭い掘れ溝があつたり野陣場があつたりして、 鞍部すら見えなくなつた。二時十五分發のびやかな 四時三十分圓山頂上、此の登りは滅法急で、 一寸霽れて丸く尖つた大澤の圓山、 も妙な處で、 地形圖で見ると何の事は 兎岳から二八○六米の圓山 赤石岳等が 殊に ts 直 40

ほ

太郎の記憶にある鞍部に着いた。

ので、 を振り返ると、圓山と同じ様な尖峰がぬつと現 はないといふ。暫く左寄りに歩くと國境の標木が見える りかけると、富士太郎はどうも變だこんな所は通つ では尾根の方向も判然しない。で、注意して左向きに下 上は到つて狭く、 の一小突起と思つて行くと中々馬鹿には出來な しめたと之を辿る事物の二三十分ばかり、ふと後 山は名の示す通りまン丸だから霧の中 n た事 頂

無い。 たといふ。三人は天狗にさらはれた時の様に間 俺が切つたあとがある」と案内が叫ぶので見ると、生 から左程左にも折れず急斜面を下ると、果せる哉、 て、再び圓山頂上に着いたのが六時十分。登つて來た道 あつた。時間は晩い、 てみると、この迷ひも一種のリングワンデルングの例 面を突き合せて「何ーんだ」と自らしかつた。 しくも切開けた偃松、 「あツしまつた。元の所へ來てしまつた、なア、こゝに 其處でいまくしさが手傳つてぐん 道理で先から風向が變つたと思つ 今日の泊りは大澤澤の 〈歩を進 北 後年考 端 のぬけた の他 8 は 0

h

く所 處だ。 分。近道しようとして又峰を一つ勘定に入れなかつた すぐ上つて、十二時就床の時は心地よく晴れてゐた。 が失敗であつた。今夜こそ眞の野宿で、 の澤を數町溯つて漸く野營地に着、正に午後八時十五 り添ひ、 折柄弦月は今下つた峰の上にさしかくつて宵の明星も照 にして下りて、七時五十分赤石澤水源の本澤に合した。 に眞闇であつた。提灯をともして連續するタルを滑る様 木帶で大いに苦心して漸く一つの小澤を見付けた時は旣 物音に驚 青天井を眞上にして寝た。 は分明でなくて、其儘丸山(二三七四米)の方へ大 體此野營地は吹きさらしで木も稀であるし、 が、縦走に富つては聖と赤石の間に水の出る所は いので止むを得ない。 水は淙々として青銀色に碎けるのであつた。 いて雷鳥がバターへと飛び出した、 大澤岳の尾根は赤石岳と續 食後一寸雨が降つたが、 大油紙を身に纏 松の下の灌 いやな ۲ 0

> ると、 **殘雪の塊も見えた。其より大した上りもなく容易に大赤** 原とはいふものの短いハヒマツのはびこつた、駄々つ 乗らない内に時間は過ぎてしまつた。 い所に過ぎない。 き出して、偃松の林を通つて赤石西南の高原に出る。 十五日、未明の雨も六時には止んだが、 リバ式尾根を派出して信州領分に曲つてしまふ。かう ふ連り方が亦赤石山脈の特徴でもある。 聖の大鎌は名残なく晴れて、 十一時四十五分其北端に到つて振 山腹の細かい澤には 十時半のこく〜歩 雨上りで気も り返 廣

點の一つ先の峰から近道をして急斜の偃松帶を滑走する この頂は二三の峻峰に分れて西側は皆絶壁である。三角

休みもせず登つて六時四十五分大澤岳頂上、

ギ 4.

休んで三角點を踏み、 藥師に着いた。此時氣温は攝氏十二度であつた。一頻 る 私達は所謂午蒡抜きに邁進して、二時五十分赤石 三時半に頂上を出發した。之から

が

たうとう姿を見失つたと一時間の後に歸つて來た。

富士太郎はステッキ銃を取り上げて追駈けて行つた

午後二時出發、

ゴトー

は所々崩

n

るから注

意 老 要

3

る。

氣付くとゴトーの西の斜面巉岩の上に羚羊が

立つ

て

ら始まる。中食してゐる内又も霧が立ちこめたが、ふと 石の麓に着く、十二時三十分。名にし負ふゴトーは之か

(123)

で、山容も山の南北で大分違つて、大聖寺平から赤石山頂迄の山背が美しい斜面をなし、五彩の花も咲き鬩れて優美な感がするに反し、南方は物凄いゴトー、寂寞たる高原が打連つて自然の力の荒々しさを感ずる。私は知る高原が打連つて自然の力の荒々しさを感ずる。私は知る高原が打連つて自然の力の荒々しさを感が似てゐるさうだ。

北は信州から登山者の多くある事とて道がよくつけてあ

四時に小赤石荒、少時休憩して富士太郎や清音に草の名を教へ乍ら至極否氣に斜面を下つて、五時岩小屋着。前日は上下動の最も烈しい日で然も霧に迷つて困難したが、此日は距離も短かし、上りも赤石岳一つきりで大變が、此日は距離も短かし、上りも赤石岳一つきりで大變が、此日は距離も短かし、上りも赤石岳一つきりで大變が、此日は距離も短かし、上りも赤石岳一つきりで大變が、此日は距離も短かし、上りも素に違って、五時岩小屋着。

けて谷に下りちまはうといふ計畫。五時起床、氣温攝氏の三山(田代の者は總稱して地藏岳と云つてゐる)を駈十六日は元氣にまかせて奥西河内、無無河内、悪澤岳

全な岩小屋であった。

望は素敵にいゝ。二十分もかゝ らな いで魚無河内岳頂であつた。國境に向つて斜に山腹を上る。七時四十分奥であつた。國境に向つて斜に山腹を上る。七時四十分奥であつた。國境に向つて斜に山腹を上る。七時四十分奥であつた。國境に向つて斜に山腹を上る。七時四十分奥であつた。國境に向つて斜に山腹を上る。七時四十分奥であつた。「一人」

ら山腹をめぐつて採集して見たくなる。チャウノスケサ透は到る處高山植物の珍品に富んでゐて、餘裕があつたに見える。赤石は叠つたが聖の姿は拜む事が出來た。此上。風少しく强く北方が晴れた。近くは小河内岳、鹽見上。風少しく强く北方が晴れた。近くは小河内岳、鹽見上。風少しく強く北方が晴れた。近くは小河内岳、鹽見

ウなどはやたらに岩の間を這つてゐた。

時十分悪澤の頂上に着いたとする。この 頂も 駄々つ廣出發。悪澤岳の急峻な上りとなる。一面のお花畑。此邊出發。悪澤岳の急峻な上りとなる。一面のお花畑。此邊出

南

側

0 ザ

7

を下りる時、

木の枯れた所が眼に入つたが

臆測も根據にしたのであつた。

其邊から下がワラビ平であるといふ。

ザ

クから偃松、

其

四方は晴れて雲間に出没する南アルプスの高峰は大方望 北 側 三角點 0 澤 からの上り道に小さい池の水が光つて見えた。 の東に記 念碑のやうな一枚岩が立つてゐる。

まれた。

Ш

が曇つて來たので、

愈々此の山旅最後最高の靈場を

に入つた事があつたから多分切開けてあるだらうといふ はワラビ段)といふ所があつて、 とした。然し此は此の長大な尾根の中段にワラビ平 士太郎にも初足の奥西河内、 河内の谷へ下りてもい」が、 山植物の珍品にも乏しくなかつた。この三角點から奥西 く登山者で此方面に來た者は殆ど無 て、一ケ所など岩が落ちるので中々危険であつた。 時五十分。 午後一時十五分。三角點二八七九・八米着午後二 此間は偃松は少いが小規模の尖峰が數個あつ 本澤間の長い尾根を下る事 澤筋が悪いといふので、富 其處迄は可成以前伐木 いであらうが、 叉高 恐ら 豆

て、

道をつたふと、其は崖の上か倒木の中へか潰えてしまつ ( と立ち列んだ白檜の林は、 を下つてたるんだ山の背の北端に來て見ると、 空の光はうすれてゆく。 疲勞した。其間、 自分が一體何處に居るんだか見當も付かな を引掻く、其の大敵がない所も皆目先の分からぬ高藪で と跳び下りるとクマイチゴや何々イチゴ のが午後五時十分で其先は前にも増して悪戰苦闘を續 やがて白槍帶に入つてワラビ平に着く。 から灌木のしげみに入つて身をもがき乍ら下つて行く。 ンまと外れて道らしいものは更に無かつた。 僅か十間許も進むのに數時間の勞働にも比し得る程 倒木は丈よりも高く横はり、 時は遠慮なく過ぎ去つて七時となると 水の音は更に聞えない。 下草もなく 危く其上を渡つてとん 此を出 の大剌が身體中 63 蘚苔の毛 偶 豫想は × 2 サ ょ L デ 5 0

夫達がいびきをかいてゐる際に凡そ二時間半ばかり、 をしきつめて心地よささうだつたので、 の顔を赤く照したが、水が絶無では仕様がない。 の野營と決めた。 枯れたシラベは丈餘の火焰をあげて人 遂に此 處に 私は

十七日、

飯がたけないと見ると一刻もぢつとしてゐら

出てゐるので大に喜んで飯をたく事にした。空腹に暖い 側に古い小屋を發見した。駈け下つて見ると清水も湧き 折ら道らしいものに出あつたが直きに杜絶えて、十二時 三角點下迄來たが、谷は未だ~~遠かつた。この邊から のた。倒木を乗りこえ/ 、漸く十一時に一五八六米の となつた。結束して立つたが、藪は依然として密集して 飯と汁を詰めこんでうと~~してゐるひまにも早九時半 れない、午前五時半出發して四十五分ばかり歩むと、西 だ。そしてつくぐ~と長い尾根だと呆れて見上げるので 十五分の事である。私達は實に美味しくその水を飲ん 心があせらざるを得なかつた。最後の下りは道 となつて來る。私達は近く唸る様な流れの音を耳にして た。然し木賊から椹島に通する路は山の下から漸く分明 畫食の箸を取つたのは矢張木に跨つて行つた ので あつ 崖を飛び下り、奥西河内の河原に立つた。午後二時 を離 n

あつた。

ども見えて來た。道は益とよく、小屋も可成多く建てら らか細い道に辿るとやがて椹島の小屋に着いた。 を忘れる事は出來ない。右岸をしばし徒渉して岩の間 た。私はそのぢつと考へさせる様な深い水の色と動く形 水を覗きこんで言ひ知れぬ物の氣が私達を襲ふのであつ の穗波のやうに靜かに流れてゐる。立ち盡した森の綠は と、青黑いしかも明徹な水は岸の岩壁を軟かにもんで麥 うといふ處へ、森につくまれた岩かげから聖澤の清冽な 休んだ。赤石澤がうねくくと曲つて之から急に左旋しや ٤ 夢を貪つてゐた。 木の香も新しく建てられて、中には二三人の男が泰平の の小屋に泊れといふのをいゝ事にして、 あつたが丁度連れになつた釣桿の男が、その直ぐ下の俺 れてあつた。上ノナリアヒに着いたのが五時三十五分で 午後二時五十分に出發して本流との落合に進んで見る 赤石澤の緣を歩く樣になつて、行きかふ山人の姿な 一時間許休憩の後之を出て峠を越える 私達はゆつくり 小屋は

水が落合つて來る。黑部や高瀨や梓川などのやうにドウ

7:

6

てゐたが、

乳吞兒が泣き出すと三味線をおいて貧相

に疲れたといひたさうな表情を動かして 二つ 三つ語つ

その女房らしい連れの女は破れ三味線をボコ

~

な乳房を子供の口に當てたりした。

そんな情景は殊更私

大井川、 み渡つてゐる事は否むに由なかつた。 して安心して水と樂しむ事が出來るものであつた。 ふものを見出し得ない程の 然し其處には昔と違つて人間の匂 わけても上ノナリアヒから受けた印 調和を形作つてゐるのが、 (女性もの)が沁 象で あ 奇と 0

沫とはならず、

ふつと入つて見たくなる程の魅惑的なそ

何處迄も餘裕を示して碧い波も飛

0

と落合ふのではない。

近所 水に漬かつた。 浪花節語りが稼ぎに來てゐて、 恐らくついたものだつたらう。 の下にだにが食下がつてゐた。 に泊つた。 私達は落合の下四 の小屋から押しかけて來る。へボ雲右衞門はさも生 飯の出來る迄汗によごれた身體をどつぷりと シャ 五町 ツをぬぐ時氣がついて見ると右の肩 の河原に接して建てられた小屋 其は前夜の水無の野營で 夜になると、 小屋では私達珍客の他 どやくしと K

> 二四〇 奥山中での都となつてゐた。 左岸にある。 いふに出發する。 十八日、 心を山の姿から引放してしまつた 五米の山から井川 朝飯には椎茸の汁を御馳走になつて、 中村さんの行かれた頃と違つて、 六時五十分中ノ宿着、 に流 立派な事務所が れ落ちる澤の 0 で 此は青薙山 )附近で、 あり、 中ノ宿は

谷の

五時と

0

北

更に臭くなつて、 村さんを懐かしがつてゐた。 着いたのは九時三十五分であつた。 が際どいからかひ方などをやつて見せた。 は見る事が出來なかつた。 色の白い山稼ぎの若い女に對して人夫 此邊りまで下ると人間味は 沼平の松爺さんの 爺さんはしきり 時間後 屋に に出 K

も中ノ宿以下は左岸に通じてゐるので、

有名なカ

ラ 0 道

丰

F 路

Щ

間

0

瀧

や越されぬ」大井川の上流とも思はれない。

販賣所もあつて、

到底

「箱根八里は馬でもこすが越

すに

神谷 見ると靜岡縣の役人で、 の澤合の道六神の傍で洋服姿の登山客に逢つた。 の落合附近でも親子らしい二人に出會つた。 休暇を利用して奥西河内から赤 聞 叉 明

發して下ノ島に着いたのは十二時十分過である。

その先

(127)

**蔭で腰の冷えるのがすつかりよくなつたといつて、私をさんは私達が行く時呉れてやつた高麗人参のエキスのおさんは私達が行く時呉れてやつた高麗人参のエキスのおたりした。その人達にも別れて午後三時東河内の落合な** 

石へ登るつもりですと言つた。案内者は中ノ宿の人夫取

た。かうして漸く八日目に田代のますやに着いたのは夕の胡瓜をもぎとつて味噌を添へてすゝめ た り し て呉れ三拜九拜せんばかりであつた。そしていゝといふのに畑

昭和二十三年五月三十一日前k 大正十年一月三十一日脱稿、 暮が闇に變らうとする間際の事であつた。

## ネパール・ヒマラヤ登山計畫

ある。

通しを得るに至つた。

本年四月、日本山岳會はネパール・ヒマラヤへの登山計畫が實現の見年、マナスルウ――ヒマル・チュリ山群への登山計畫が實現の見進捗に努力を盡してきたが、幸いに毎日新聞社の絕大 な後 援を進捗に努力を盡してきたが、幸いに毎日新聞社の絕大 な後 援を進捗に努力を盡してきたが、幸いに毎日新聞社の絕大 な後 援を進捗に努力を譲して計畫のり上げることに決定し、直ちにヒマラヤへの登山計畫を取るした。

無事カルカッタに到着、ダーデリンを經てカトマンダへ赴く筈でた、今西錦司氏を隊長とし田口二郎、高木正孝、中尾佐助、林一彦等五氏よりなる先發隊を組織し、短期間に急速な準備を整え彦等五氏よりなる先發隊を組織し、短期間に急速な準備を整え彦等五氏よりなる先發隊を組織し、短期間に急速な準備を整えるのが、一次のでは明年の登山隊のため登路の發見を主たる目的としよつて會は明年の登山隊のため登路の發見を主たる目的とし

を東へ乘越してサマに下り、この間北面を、更に東面を偵察しつルナ™峰をうかゞい更に引返してマナスルウの西面を偵察、主稜面をしらべた後、一旦マナングボトに西折して北側からアンナブ面をしらべた後、一旦マナングボトに西折して北側からアンナブールを膨胀のコースはマルシャンデイ川を溯上し、マナスルウの南

先發隊の報告は「山岳」次號に收載の豫定である。 がール・ヒマラヤへ入るということは從來もなかつたことで、そ がール・ヒマラヤへ入るということは從來もなかつたことで、そ の結果は夫々に多くの期待がもたれると云つても過言で はなか の結果は夫々に多くの期待がもたれると云つても過言で はなか の結果は夫々に多くの期待がもたれると云つても過言で はなか のお果は夫々に多くの期待がもたれると云つても過言で はなか のお果は夫々に多くの期待がもたれると云つても過言で はなか のお果は夫々に多くの期待がもたれると云つても過言で はなか のお果は夫々に多くの期待がもたれると云つても過言で はなか のお果は夫々に多くの期待がもたれると云つても過言ではなか とび、そ **着し、同月末歸京の豫定である。** 

つブリ・ガンダキ川を下つて十二月中旬迄にはカトマンダへ歸

Ш 0 周 邊

歐 米 と ろべ

松 方 Ξ

グリンデルワルト

郎

げたり、白くなつたりしている、といつた人間社會の何 三十だつた青年が今日では五十五になつている、頭がは を骨格にして出來上つた國柄であり、こつちがまた、スイ の少いのに驚いたことだつた。そもくへがアルプスの山 とも出來ない移り變りをどけては、これはまた、變り方 いうことを見るのがひどく樂しみではあつたが、その昔 に至つては二十五年ぶりだつたからどうなつているかと もアメリカでも隨分變つていると思つた。ことにスイス さすがに十五年餘りも間をおいて行つて見ると英國で

> かしこのペント二世はなかく一立派なピッケルを作つて もつばら息子のペントが作つているとのことだつた。し が、今ではもうそのペントもあまりピッケルを作らず、 六年だつたと思うから、その方はぼくなどのまだョ い方だから、一層そうした感じをもつたのでもあろう。 ッパにいる間に代は替つてペントの時代になつてはいた ピッケル作りのシェンク老人が亡くなつたのは一九二 1

最期だつたということだろう。 氣の毒といえば氣の毒、 彼らしいといえば彼らしい フリッツは子供は皆んな

され病院に担ぎこまれて、ついに相果てたというのだか

外をうろつく病氣があつて最後はそのミッテレギーを頭 の上に見るメンリッヘンの山の中で倒れているのを發見

大分近所の人々に心配をかけたらしいが、夜中になると

何かにつけ常軌を逸したような傾向もあつて

はげしく、

ッテレギーの主ともいうべきアマッテルは晩年は老衰が ツ・シトイリもこの數年の間に亡くなつてしまつた。ミ おり、立派に名譽あるグリンデルワルトのピッケル鍛冶

の傳統を守つている。

肉屋のアマッテルも牡牛のフリッ

スとはい」ながら山以外の方面にはあまり關心を持たな

ら、その腕を思いのまゝに振うことが出來ないというこに人前に育ち次男のヘルマンの如きは田口君や高木君の通りだ。しかし昔と違つて今日ではかつての英國の旦の通りだ。しかし昔と違つて今日ではかつての英國の旦の通りだ。しかし昔と違つて今日ではかつての英國の旦の通りだ。しかし昔と違つて今日ではかつての英國の旦の通りだ。しかし昔と違つて今日ではかつての英國の旦の通りだ。しかした。

政府のレギールングスラート(閣僚)で天下の要人。ピンテの大將で村長、ザミ・ブラヴァントはベルンの州ルワルトの眞中に進出して昔のボーレンの居酒屋兼旅籠ルワルトの眞中に進出して昔のボーレンの居酒屋兼旅籠

のである。

大いに繁昌しているようでもなく、かといつて落ちぶれ變らず、二十五年前にもそうだつたが、鞄屋の店は別段少し年をとつたくらい。オットセイのような風貌は昔とらあんまり水々しい方でもなかつたが、まずそのまゝで驚いたのはルックサック屋のキスリングだつた。昔か

てもいず、暫く會わなかつたが、どこに行つていたといったような話。冗談じやない、二十五年振りだよ、第一つたような話。冗談じやない、二十五年振りだよ、第一でもない。靴屋のアマッヘルも代が變つたらしいが、近頃はもつばらヴィブラムのゴム底で山靴を作つているとが、つまり底のゴム――イクリア製がヴィブラム、スイス製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がドゥフール(スイス國内で一番高いモンテ・ロース製がアラム・第一

まつた。もつともホテル・ベアは當時われわれが泊るにて自動車の置き場になつていること、アードラーが持主が人達が泊つていた宿は大概持主が代るかなくなつてした人達が泊つていた宿は大概持主が代るかなくなつてした人達が泊つていた宿は大概持主が代るかなくなつてした人達が泊つていた宿は大概持主が代るかなくなつてした人達が泊つていた宿は大概持主が代るかなくなつてした人達が泊つていた宿は大概持主が代るかなくなつていることもホテル・ベアは當時われわれが泊るに

抱え、 テラールホルンに引つばり出したころはザミやエミール かいうのだから、 点にレストランを經營し、メンリッヘンも兼業してると だろう。變らないのは驛の前のテルミヌス、グシタイガ に子供扱いされていたが、今日ではどうして村の名流婦 して一切を切廻している。十六かを頭に何人かの子供を ないということだつた。御土産物の賣行にも關係するの たゞし、あれがなくなつたので何百人分かの宿泊能力が 人である。 ー老夫妻はもう故人となつたが二番目のマルタが依然と 度に低下し、村としては何か對策を講じなくてはなら 大體がこんな調子だから、二十五年振りに行つて見て ぼくにとつてまるで新しいことというものはあまり ファウルホルンへ登る側のフィルストのリフト終 堂々たるお女將さんである。 フィンシ

やはり、廿五年前そのまゝの、温い人の心だつたのかもら、ぼくに頭からこうした錯覺を起させた一番の原因はない。しかしそういゝながらもよく見れば人の 顔 も變ない。しかしそういゝながらもよく見れば人の 顔 も變

うな醜悪な煉瓦建がグリンデルワルトの風景から消えた感を持つていたのだから、あの拜金主義のシムボルのよ

しては少し豪勢すぎて、敬遠というよりは、

積極的な反

ことはまことに御同慶にたえないといったいところだ。

知れない。

の驚きや悲しみは何となく蒸發して、われわれの親しいに相違ない。これだけの時間が經つて見ると、そのころととだろう。戰爭中のことだからもう十年は經つているめてのものだ。一郎が異境に逝つてからもう何年になる

方だが、今こうやつて一郎の墓を見ていると、ふらくないものがある。辻村さんではないけれども、ぼくも墓をいものがある。辻村さんではないけれども、ぼくも墓をいものがある。辻村さんではないけれども、ぼくも墓をいるのがある。辻村さんではないけれども、ぼくも墓をいると、事實、あの教會の裏に美しい花に取卷かれ、朝かじだ。事實、あの教會の裏に美しい花に取卷かれ、朝か

う事實だけが嚴然としてわれわれの前にあるといつた感山の仲間の一人が、この谷に靜かに眠つているのだとい

(131)

一郎が、東京の大學に入つた頃、日本山岳會は虎の門と、これなら一寸い」ななどと思いそうになる。

御馳走になつたことだけははつきり憶えている。 父さんの心配も一方ならず、一郎の學校の先輩である伊 したかは憶えていないが、日比谷の山水樓で北京料理を ろうと相談をうけたことだつた。ぼく達が當時何と應待 藤愿とぼくとは、お父さんに招ばれて、どうしたものだ で滑つて一郎が胸をひどく打つたりした時には、そのお る。正にこれは日本山岳會初まつて以來の大事件だっ 常識だつたのだから、この鄭重な挨拶でわれわれは恐縮 た。しかし、東京に來て最初の冬、富士山の八合あたり したというよりは、まず第一に驚いて しまつたので あ が、おやじは山登りに反對する動物だというのが當時の 岳會の皆さんよろしくたのみますという挨拶だ。 このたび息子の一郎が東京の大學に入つたからどうか山 士が現れ、ちようど理事會をやつていたその皆んなに、 にあつた。ある夕方ヘルメットとカーキの半ずぼんの紳 大體

山もよくやつたが、一郎は山岳會でも色々仕事をやつ

だてられた位いでは動かない一郎も、日本山岳會のため會ほど人使いの荒いところも少いだろうが、長男で多分をといくながら、會のためによく働いた。事實日本山岳でといくながら、會のためによく働いた。事實日本山岳

には結構働いたのだつた。

エミールの家で花を用意して、それをかゝえて村の道を教會の方に上つて行きながら、ぼくは何となくそんな在りし頃の一郎のことを憶い出していた。教會のわきのザミのおふくろのところで花を入れる壺をかり墓地に入つて行くと、あたりは紅や黄色の花の眞盛りだ。墓はエミールが案内してくれたのですぐわかったが、それが、一口にいえば、こんなところに埋めてくれるのならば、死んでもいゝなと思わず考えるような場所にある。ば、死んでもいゝなと思わず考えるような場所にある。ば、死んでもいゝなと思わず考えるような場所にある。ば、死んでもいゝなと思わず考えるような場所にある。は、死んでもいゝなと思わず考えるような場所にある。は、死んでもいゝなと思わず考えるような場所にある。は、死んでもいゝなと思わず考えるような場所にある。は、死んでもいゝなと思わず考えるような場所にある。は、死んでもいゝなと思わず考えるような場所にある。

V 郎にやられた、といつたものがあつたことは否定出來な がと」で默りこんでしまつた氣持のどこかには、 逐に一 伊藤愿の兩君だつたことも因緣といえば因緣だが、

三人

なのである。 來永劫とけることのないものとなつた。これだけは確か こうして一郎がこ」に永久にといまることによつて、 ンデルワル 槇さんのアイガー東山稜の初登攀にはじまつたこのグ トの村とわれわれ日本人との結びつきは、 未

#### ルン、 チューリヒなど

いろし な變化もあるのだろう。 十五年前そのまゝだといつてもいゝだろう。細く見れば 争の慘禍をまぬかれた都會だから、まず見たところは二 てもアメリカのドルよりはスイスのフランの方が羽振が ~ ルンもジュネーヴもチューリヒも、どれもこれも戦 變化があり、また目に見えないところには大き 何といっても大陸のどこへ行つ

> はいくら飛脚旅行でもわかる。 の英國などから御客が來られるわけがない。こんなこと

1

は

ルンのシャウブラッツガッセあたりのトンネル横丁を歩 を出しているが、ビョルン ていたものだが、 運動具屋として二十年前には日本までその名が鳴り響い チ 2 1 リヒのフリッ フリッチの方は立派に驛前通りに看板 チとベル 2 タットの方はうろ憶えにべ ンの ピ 3 ル 2 2 A ッ

院一帶の古い町の一角は昔と少しも變らず、 うから、 川魚屋は昔の通り繁昌しているが、どうも味の方が昔の たキルヘンフェルトの橋の下のシヴェレンマッテリなる いて見たがついに見當らなかつた。 酒家の如きも、老いてます~~旺んは少し妙ないゝ廻し 舌のせいかも知れない。心配している人もあろうかと思 如く思えない。もつともこれは、半分はこつちの胃袋と 附け加えておくが、 チューリヒはペーテルス寺 橋本屋の名で知られ カイゼ ル

して、 だが、

ふきこんだ羽目板やテーブル

がいよいよ貫碌を出

よいのだから萬事は推して知るべしだ。これでは貧乏國

エムメンタールをかじりながら平氣で一、二時間過し 由來アルコールには緣のないぼくなどでもサラミや 例のガラスの徳利入りで出すというのだか

てしまう。

をひかれる人があるかも知れない。受附のお婆さんに賴 を知る人の中には、あるいは昔のそれの方により多く心 ガ るものだ。陳列された品數も到底往年の薄暗い小さな幾 るスイスの山岳會の博物館といわれるに相應しい堂々た 明るくいかにもアルプスをホーム・グラウンドとしてい だからもう建つてから二十年近くなる。廣々としていて を述べておく。新しい博物館は一九三四年に建つたもの 要があると思う。とゝにはその新しい博物館の印象だけ が、この博物館については別の機會に詳しく報告する必 んで歸りがけに古い來館者名簿を出しても らって 例の の比ではないのであろう。しかし、 つかの部屋に何から何まで雑然とおしこめられていた頃 ッセの二階に間借りしていた古色蒼然たるあの陳列室 ルンではスイス山岳博物館がぼくには始めてだつた 昔のツォイクハウス

P

外國人が知らないから恥もかっず叱られずにもすん

に新聞の紙面に現れるわが

富士山のケーブル問題など

十五年前の貧弱極りない自分の署名を見たりしたのは飛 「ゴチック・スタイル」の加賀さんの署名を見たり、二

の博物館の玄關でゝあつた。かつてマッターホルンに鐵 んだひろいものだつた。

る。 印象に残つているのであつたが、博物館に入ろうとする 燃料大臣ノエル・バーカーのものなどがあつて、ことに 叉、同じような計畫があるということはロンドンで聞い 道をかけようという計畫があり、それが各国登山家仲間 たことはいうまでもない。もう思い切つたのかと思う頃 **扉にはつてある。反對署名運動のための刷出しなのであ** と「マックーホルン危し」という大きなビラが眼の前 中にはイランの石油問題で大いに眼を廻しているはずの たことだつた。當時タイムスなどに二三投書が出、その の猛反對でついに立消になったことは識っていたが、 マッターホルン登山鐵道反對運動のビラを見たのもこ ぼく達が博物館を出る前に、自分達の名を書いて來

+

2 ス

ーリセ、ベルン、ジュネーヴの三つの町を風のよう イスに行つたとはいつても質は名ばかりで、七月に うした反對運動の火の手が上つて、 出來事であったならば、地元の知事などは、四方八方にこ でいるようなもの」、これがヨーロッパかアメリカでの 面喰うに相違ない。

も印象に残る。 るという事實には深く心を打たれるものがある。 フトの驛などに高山植物愛護のビラが出ていること 高山植物の保護については歴史も遙に古

喫つてもそのすい殼をすてるわけに行かない程、 はり手をかえ品をかえて自然愛護のために力を盡してい またその實行も遙に徹底しているスイスで、今日や 隅から 煙草を

自轉車というものは街に乗りすてたま」で、自轉車に鍵 隅まで奇麗になつているスイス、國のはじからはじまで

をかけるなどと聞いたら、多分腰をぬかしてしまうであ 續けているという事實は、 保護とかいうことについては一日も怠らずに啓蒙運動を ろうようなスイスでも、やはり自然愛護とか高山植物の おく値打があるようだ。 確かにわれわれも肝に銘じて

にかすめ、八月にグリンデルワルトに前後四日ばかり暮

昔なじみの山の間を走り廻れたということは何とも有難 飛行機でアルプス越えをやつたというだけではいよいよ しただけだというのだから、まるで話にならない。 もつて頼りないことだ。そう思えばたとえ二、三日でも が、どれ程大きな喜びであつたかは、 いことだつた。ことに昔の山仲間の誰彼に會えたこと 空から見るアルプスは世にも立派な眺めではあるが、 山の友達ならばよ

#### K >

くわかつてくれることだと思う。

とが當時のアルパイン・ジャーナルに出ているから、日 ロンドンにおられた秩父宮が名譽會員として出られたこ レイ街の建物に引越した。 も少かつたから、 その頃はもう日本の山仲間で外國をうろついている連中 本人としては宮様が最初に見ておられることになるが、 アルパイン・クラブは われわれ大多数のものにとつてはこの 一九三七年の春現在の南 最初の會合の晩に、 オ

憶えのあるものばかりだ。 サヴィル・ロウのクラブからこつちの新しいところに繪 おかれた場所とそは違うが、よく見ればどれもこれも見 も圖書も置物も運んで來たのだから、かけられた場所、 が出來たろうと思うと一しお殘念な氣がするのである。 さんの藏書が焼けていなければ、われわれもあの豪勢な で出ていたから記憶している人もあるかと思うが、木暮 の繪は丸善の山岳圖書展覽會の時の「學鐙」の表紙に色刷 ギントワイトのあの大きな繪は確かに見届けて來た。あ でクラブに行つても集りもなく、書記補佐のB氏に會え ただけだつたが、B氏の背中の壁にかゝつているシラー ルなど一流の仕立屋はもとのまゝだ。夏の最中だつたの その通りそのものは残つているのだからヘンリー・プー つて、今その場所に行つて見ても昔の面影はない。 ヴェレストの色刷りをわれわれの圖書室にかけること サヴィル・ロウの古いクラブは市區改正で取拂いとな たゞ

> のでお墓の場所や、藏書の行方など質ねて見たが、何し る夏の最中で連絡が一向つかず、ついにロンドンにいる 間には判らなかつた。いずれその中わかることだろう。 間には判らなかつた。いずれその中わかることだろう。 をれなどは記念に會として保存したいものもあつた。ピッケルなどは記念に會として保存したいものもあつた。ピッ 方も世の中がすつかりがた/ となつていたしロンドン には郵便一つ出すのにも大騒ぎだつたもので、その頃は には郵便一つ出すのにも大騒ぎだつたもので、その頃は でこうした年來の宿望は達したいものだと思うのである。ちようど東京から送つて來た上高地のウェストンさ るの像に新しく銘の入つた寫真が間に合つたので、記念 神復元のいきさつを説明したり、戦後毎年七月にウェス トン祭をやつていることなどを話したら非常な喜びだつ

グローヴナー・スクエアーの西側を南に下つた通りで、ド・ストリートを隔てゝ西よりで、ハイドパークに近く、南ォードレイ街というのは前のクラブからするとボン

た

ウ

ェストンさんのあとがどうなつているか知り度いも

10 に出 たから、 クラブは獨立家屋で地下室に番人がいて一階だけが つた所のホールは二階三階の住いと共通のようで あつ いか何かに だから る 仕 玄闘からいきなり階段を上るとクラブの讀書室 組になつていたが、 何時行つて見ても至極靜かなところだ。 なつていて、二階三階はクラブに屬して 今度のクラブは玄關と入 他 前 0 0

前

の場所とは違つて店などは殆んどなく住宅ばかりの

通

納

どが變化といえば變化であつた。二階の廊下に多分ポン 角の部屋に二階にあつた喫茶室がおりて來ていることな とかけてあつたのが、 物がいたんだという風もない。 0 ずばなるまいと、 つていること」、 ていたホ 1 方は前の通りケンジント 王立地學協會もロンドンに行けば是非額を出しておか I の作かと思うが、大きな富士の寫眞が、からつ ル の壁にゴールドメダリ 前にカウンシル 例によつて島田君と行つて見 どこにやつたのかすつかりなくな ン・ゴア たゞ前には陳列室になつ ・ルームになっていた スト VC あつて戦争で建 の肖像がずらり た から ح

窓においてあつたエヴェレ

スト隊の使つた酸素吸入器

か

たことは大きな喜びでもあり激勵でもあつた。 こうした偉大な業蹟が光つているのだということを知 のものゝ遙か上に、また時代の幾變遷をこえて、先人の 争とかい 説明してくれた。 が、 つているのだ。 と、何とその號に伊能 よく來たといつていろく、協會の近況など係の人が もちろんフェロ さらにまた、その結果の勝敗とか、そうした一切 國境とか國籍とか、 最近の雑誌をもらって手にとって見る 1 忠敬の實測圖についての研究が の資格も自然消滅してい 國家間 の對立とか戰 る 0 だ

ゥ・ソ 時間をつぶしたものだつた。 前にロ シュール、モン・ブラン登山之圖」とか、 ンドンに暮していた頃は、よくこ」に 喫煙室にかりつていた 階子段 來 7 F は

のスケッチやコムパスなど、天下の寶物といいたい 時のインク・スタンド カウンシル・ルームにあつたラッサ條約を調印した とかリヴィ ング ス 1 やス = 1

く先生が小學校の子供をつれて見學に來ているのを見 ので、何かというと遊びに來たものだつた。その頃もよ がさりげなくかけたりおいてあるのが、 何 ともいえない

ていることも昔と變らない。ぼくなどは戰爭で會費滯

(137)

究させたりするのだから、貧乏になつたとはいえ、もと 協會)といつたようなものがあるということだ。十六歳 もと貧乏な上に一層貧乏になつた國とはさすがに話が違 イス・ランドなどにつれていつていろくへ訓練したり研 から十八歳位の間の子供數十人を組織して夏の休みにア

が、今、英國には子供のための探檢協會(英國學校探檢

がいるに相違ない。 ンドンの話を書いて本屋のことに觸れないと怒る人

うようだ**。** 

轉りこんだのはわれわれがはじめてらしく、戰爭前のお 賣は繁昌するのだろう。しかし、さすがに戰後日本人が 偏在してるんじやないかと思うが、ふら~~歩いて來る ずすこぶる多いので驚いたが、今だに日本人にはコンウ 客の誰彼の消息をきいていた。 客などは最初から問題にしていないのだろうから結構商 はいよく一立派になる一方、場所はわれわれから見ると かといわぬばかりで、少からず意外なようだつた。 イだのクーリッジだのといつて喜んでいるのがいるの 山の本では昔からおなじみのフランシス・エドワード 山の本の手持も相かわら

ほど驚くべきことを發見する町だが、わがガストン書店

配はないというのだからわがガストン書店はよく~ の番地を紙に書いて聞いて歩いても、決して見つかる心 トランドの一九〇番、正にロンドンのど真中、しかしそ

それは早合點というものだ。もつとも一流二流は店の構 くべき本屋だ。諸君が若しガストン書店の出しているあ ない日本山岳會員でも、これにはちよつと敬意を表せざ 共同の仕事場にしているのだから、大概のことには驚 る。それに三人の本屋さんがその一つの部屋を自分達の 場で、看板もろくに出ていなければ陳列棚もないのであ 屋の態をなしていないのだから驚く他はないのである。 えの問題ではないから、どうでもい」が、大體とれが本 タログを見て、これ天下の大書店ならんと思つたならば のウォルフの石版畫の山の繪などが表紙についているカ はないだろうか。由來ロンドンという町は、知れば知る 本を知つていることにかけては、やはり當代一流なので るを得ないのである。しかし山の本の好きなこと、 つまりたずねたずねて行きついた先は本屋の倉庫兼發送 場所がらからいえばフリート・ストリートに續いたス Щ 0 か

については島田君の方がつきあいが長いし深いから、 からと」に書いておくのである。しかしこの驚くべき店 してこの本屋の發見を數え上げなければなるまいと思う れたわけではないが、ぼくは今度の旅行の一つの收穫と ところなどは世界の都ロンドンなればこそだ。別段頼ま と思うが、今だに山の本を表看板にしている本屋がある の本屋さんとしてはガストン書店の名はあまり古くない 「山岳」の編集者は島田君に何か書いてもらうといゝと

Ļ

その翌日であつたかタイムスにブランデンさんを訪

問

近所の古い飯屋で午の御馳走になつた時プランデン

の如き、

正にその中の優なるものだといつてもい」。山

あるマ ンド レー・ウォルトン師のことに觸れないわけに行か ンの報告を書いてわれわれの古い會員の一人で

二度目に(一九三三)

思うのである。

の後アルパイン・クラブの會員にもなつている。 去つてからもう二十年餘りになるのである。 英國に行った時にはもう英國に歸っていたから、日本を ンの郊外のブロ ルトンさんはぼくがこの前、 ムレーという町の坊さんである。そ 現在はロン 郊外だ

からバスでも行けるが、距離としてはロンドンの眞中か

英國の登山界でわれわれの持つ少數の友人の一人だが、 本についての闘心だけはいよく、深いようだつた。玄闘 ところでしつかりしたものだ。ウェストンさん亡き後、 のホールに切支丹の禁札がか」つていたり、言葉にした ろう。さすがに頭もはげ上つて年もとつて見えたが、日 ら十哩近くもあろう、市川とか國府臺といつたところだ

わればかりで、ブランデンさんなども日本を知る一人と から、すべては後の祭りである。もつとも知らぬはわれ が、當の御本人がわれわれを前にして何もいわないのだ ていられたそうだ。そんなことを知つていたら會つた時 さんから聞いたところによると、 に何か一こと御禮の言葉も述べたのにと残念で あつ た とくために、新聞に投書したりして一方ならず骨を折つ ルトンさんは何かにつけて日本や日本人に對する誤解を あの戦争の最中、ウォ

けて、日本が國際聯盟で袋たゝきにあつたりしたあの時 して何かと心配してくれられたのだろう。 亡くなつたウェストンさんも滿洲事變からその後にか

さんの話をきいてそんなことも思い出すのであつた。國の田舍をよく講演などに出ていられたが、ウォルトン

### アメリ・

D

ドンから大西洋を渡る飛行機の旅は、機械の具合

いたことがないのだつた。

らいに冷たかつた。グリーンランドの上を飛んだなどと 夏の盛りだというのにアイスランドの空氣は蒙古の秋く るほどこれが大昔の氷河の仕業かとわれわれで も思う びたゞしくたてこんだカナダの地形も空から見ると、 北の天地を思わせる寒々としたものがあつた。 い で北に廻つてアイスランドに渡り、それからグリーンラ で、氷河こそは見えなかつたが、山の姿には何となく極 おく。しかしそれでもグリーンランドには間違いないの の端を見おろしたに過ぎなかつたということを白狀して いるかと思うから、ぼくは飛行機の上から、ほんのその南 いうとジーノ・ワトキンスなどを連想する氣の早い人も ンドの南の端をかすめてカナダに入り、そのま」海岸沿 にニューヨークに行くという北廻りルートをとつた。 湖水のお な

生だがまだそのアガシ博物館を知らず、アガシの名も聞た若い友人を驚かせた。この友人、ハーヴァードの大學シ・ミューゼアムを是非見たいといつて、案内してくればずつと發達していたに相違ない。こんなことを考えなばずつと發達していたに相違ない。こんなことを考えない。がある、地形學なども、もつと早く飛行機があつたならのだが、地形學なども、もつと早く飛行機があつたならのだが、地形學なども、もつと早く飛行機があつたならのだが、地形學なども、もつと早く飛行機があつたなら

のは一八四六年のことだつた。そして一八四八年ハーヴゃの名を知らない人は山の仲間にはまずないだろう。フシの名を知らない人は山の仲間にはまずないだろう。フシの名を知らない人は山の仲間にはまずないだろう。フシの名を知らない人は山の仲間にはまずないだろう。フシの高名の學者を記念する名がついている鞍部があるこの高名の學者を記念する名がついている鞍部があるこの上の常識だ。このアガシがはじめてアメリカに渡つたの上の常識だ。このアガシがはじめてアメリカに渡つたの名を知らない人は山の仲間にはまずないだろう。フシの名を知らない人は山の仲間にはまずないだろう。フシの名を知らない人は山の仲間にはまずない人としてルイ・アガンの名を知らない人としていている。

ァード大學の動物學と地質學の教授になり、一八七三年

も廣くその創立者の名をもつて知られているのだ。された比較動物學博物館の大きくなつたもので、今日で

ねられない。私は幸福過ぎる。 私の方を向いて小さな聲でいうのだつた。 光の下でハンモックにゆられていた。その夜、彼は のデッキの上で、まるでおとぎばなしのような月の お ことのように憶い出すのだ。 時に彼の仲間に入れてもらうという幸運にめぐりあ 美事な質例だつた。私はブラジルのセイヤー探檢の をつぶすようなことを決してしないといった性質の 「ジェイムス。君は起きているのかね つたが、私は今でもその時のアガシのことを昨日の くことがなく、 ムわれたアマゾンの奥深くさかのぼつて行く汽船 い アガシはいつでも前を見ていて決して後を振りむ 計畫を頭の中で考えているのだ。」 取返しのつかないことを悔んで時間 私達は兩側が深い森で 私はこれからの素晴 私は到底

引きしたのだが、アガシという自然科學者の面目が實にらA・ランが彼の『アルプス』に引用したものを、またの引用はウイリアム・ジェイムスの『想い出と研究』かを持つ人は確かに幸福だといわねばならないだろう。こ

六十近くになつてなおかつ自然探究に對しそれ程の熱情

自分で見、自分で觀察するのだ。

よく出ている。

の初期に日本に招かれて來ていた『日本その日~~』の祖石川千代松博士だが、その石川先生のまた先生が明治日本山岳會の石川欣一先輩の父上は日本の生物學の開

同じジェイムスが書いているそうだ。

7

ガシはいつもこういつて弟子達を鞭撻していたと

一人なのだから、アガシは日本の動物學界から いつ てエドワード・モースであり、このモースがアガシ門下の

象の骨があつたり、鯨の剝製があつたり、も、やはり記憶さるべき人だろう。

とも一様――何しろこつちが素人だから――だが、そのと列んでいたり、こうしたことはどこでみる科學博物館

年にかけてのものだつた。アガシは當時五十八だつた。

をもつて呼ばれるそのブラジル探検は一八六五年

から翌

この探檢の後援者であつたナサニエル・セイヤーの名

化石が色

は将來を推すことにあるということを會得したのだ、といた、現實に自分の眼の前にある現象をつかみ、不不の上にアガシは自分の筆で、私はそのウンテラール水河の提供自分の筆で、私はそのウンテラール水河の上で水河の觀測をしている間に、宇宙の發展を理水河の上で水河の觀測をしている間に、宇宙の發展を理水河の上で水河の觀測をしている間に、宇宙の發展を理水河の上で水河の觀測をしている間に、宇宙の發展を理水河の上で水河の觀測をしている間に、宇宙の發展を理水河の上で水河の觀測をしている間に、宇宙の發展を理水河の上で水河の觀測をしている間に、宇宙の發展を理水河の上で水河の観測をしていると、

ニューヨークでアメリカ山岳會を訪問したことはいう枚の額の前を離れることが出來なかつた。は思つていなかつただけに、ぼくは暫くその古ぼけた一は思つていなかっただけに、ぼくは暫くその古ぼけた一

いつたような言葉を書そえている。

岳會に護られた因緣が書かれていた。

博士が自分の診療所につかつていた家なので、九十丁目たことをこゝで知つた。實はこのクラブはその故ラッド九三三年に來た時に會つたラッド博士が旣に故人となつこのクラブもぼくにとつてははじめてのものだが、一

でわきの壁にこの家がラッド博士の志によつて、米國山で大きなアパートにはさまれた、この邊には珍しい小さな三階建の煉瓦造りなのである。ラッド博士は實に立派な無士だつたが、その郊外の邸は多分へドソン河に臨むれたものだつた。だからもちろん一通りの竹庵ではなかったに相違ないが、死んでからも山岳會のために自分のつたに相違ないが、死んでからも山岳會のために自分のつたに相違ないが、死んでからも山岳會のために自分のつたに相違ないが、死んでからも山岳會のために自分のつたに相違ないが、死んでからも山岳會のために自分のつたに相違ないが、死んでからも山岳會の玄関を入るとすな人の人となりを偲ぶのであつた。會の玄関を入るとすない。

て、この交渉は不調に終つたとかいうととだつた。 地階は陳列室兼講堂、二階が圖書室になつているが、同じかあのピッケルはカナダにくれと交渉があつたが、同じかあのピッケルはカナダにくれと交渉があつたが、同じかあのピッケルはカナダにくれと交渉があつたが、同じかあのピッケルはカナダにくれと交渉があつたが、同じからはは陳列室兼講堂、二階が圖書室になつているが、

表を作つて來たが、どうかすると本がさかさまに綴じて 圖書室では「山岳」の整理を志願して一應欠號などの い風だつた。第一場所が日本橋の眞中みたいなところ

U

かの女事務員が忙しそうにタイプライダーをたゝいては

無性ひげをはやした山男などは一切よりつかな

るが、

あつたりして間ごついた。 シントンについては ナショ

ナ

ル・ジオグラフィカ

ないのである。

P

た方が遙かに有益で樂しいということだけを書いて お ンを見に行くよりはこの地學協會で 同 じ 時 間をつぶし ンを訪れる人があるならば、 とは縁が遠くなるから省略する。しかし、若しワシント サエテ ィーのことを書くべきかと思うが、 ホワイトハウスやペンタゴ 多少 Ш

3

ろハイカラで整つた登山案内所といつたところで、何人 サン・フランシスコはジョン・ミュアーのシエラ・クラ が横濱正金銀行の支店長で長く滯在されたところだ。 めたりするのにはやはり、何といつてもこ」が一番だろ ブの御膝元だし、アメリカの山についての本を見たり集 としてはわれわれにそれ以上大した意味がない。しかし シエラ・クラブにも行つて見たが、見た感じはむし フラ ンシスコやロサ ンジェルスは小島烏水先生 町

> だから、 で、えらく立派ななんとかビルの何十階かの上にあるの 間違つてもドク靴などでは罷り出るわけにゆか

らの知合いだというわけだ。もちろん話は山のことばか ている。だからドーソン君の妻君よりはぼくの方が昔 ことがある。 本に來て當時の會の若い連中と一緒に鎗や穗高を歩い 憶えている人がいるかと思うが、ドーソン君は る。日本山岳會の山仲間にはまだこのドーソ 一九三六年の某月某日に松方と午めしをくつたなどと出 その中に次のような愉快なのがあつた。 サンジェルスにはグレ 午めしにうちに招ばれ當時 ン・ドーソン君の古本屋が の日記を見ると ン君の名を かつて日 あ か

青年からの返事に曰く パケジというやつだ。するとあに圖らんや、そのドイツ 本にもよくアメリカの友人達から送つて來たり つて、何か食糧でも送ろうかと聞いてやつた。一頃は日 すんでから便りがあつたのでさぞ困つているだろうと思 F ープを送れ」。ドーノン君がナイロ ーソン君の山の友人でドイツの青年がいた。 「食糧はいらぬからナイ ン・ロープを送つた IJ 戦争が 7.

ことはいうまでもない。

定に入れておかないといけないとのことだつた。が難點だということだつた。それに延びるからそれを勘でマニラ・ローブより優れているが、値段の高いのだけで、コラ・ローブより優れているが、値段の高いのだけ

を を を を を である。よくいわれる英國の耐乏生活の一面がこゝにも を を である。よくいわれる英國の耐乏生活の一面がこゝにも である。よくいわれる英國の耐乏生活の一面がこゝにも である。よくいわれる英國の耐乏生活の一面がこゝにも である。よくいわれる英國の耐乏生活の一面がこゝにも である。よくいわれる英國の耐乏生活の一面がこゝにも である。よくいわれる英國の耐乏生活の一面がこゝにも である。よくいわれる英國の耐乏生活の一面がこゝにも である。よくいわれる英國の耐乏生活の一面がこゝにも

のところに明々とついて、その下に大きなテーブルが出ると、夜だから店はもちろん閉めてあるが、電燈がその表の夜のことであつたか宿のすぐわきの 彼の 店 の前を通間にドーソン君とまる半日暮せたことは幸いだつた。そのロサンジェルスには二日ばかりの滯在だつたが、そのロサンジェルスには二日ばかりの滯在だつたが、その

く深いものがあつた。

浮世繪』等々日本の本も少くない。かと思えば、あちら ろうとは想像もしていなかつただけにぼくの感嘆は大き 思わないが、 ろうと入るまいと店の運命に大したかゝわりがあるとは カタログを出したりしている。だから二十五セントが入 の珍本稀書の類にかけても相當なものらしく、堂々たる もとよりだが、『北越雪譜』や小島さんの『江戸末期の 代からの老舗で、扱つている本の範圍も廣く、山の本は きもしなかつた。もちろんドーソン君の店はお父さんの である。一晩に二十五セントの本がどれ程賣れるかは聞 でも比較的近年に開けた太平洋岸の大都會での事實なの が、特にころに書いておくのだが、これがアメリカの中 員などはもちろんいない。アメリカというと素町人の國 れるようになつている。本を見ている客こそいるが、店 ろということになりがちだから、山とは何も關係な で、生馬の眼を抜く國で、夜はギャングが横行するとこ ていて一杯に古本がならんでいる。掲示して二十五セ ト均一とある。そしてその下に小さな箱があつて金を入 ロサンジェルスに來てこんな風景にぶつか

年、

#### 白 馬 岳 志 雜 攷 宁

中

島

IF.

文

花 銀 Щ 考

蓮

1:

がないので、

畢竟これは、

蓮花温泉なり、

蓮花銀山なりの由緒を、

然し上杉謙信の此の採鑛の事質は、

上杉關係古文書にも、

又彼の正史にも乗せて居らず、

地元大所村にも其の

傳承

重からしめる爲の宣傳が、

たまく、世の好事家の

蓮花銀山は、 戦國時代上杉謙信に依つて採掘せられたといふ傳説が、 可なり古くから越後頸城郡地方に傳播して居

興趣に投じて、傳播したものと解し得ぬでもない。 だが、戰國末葉から徳川初期にかけての、旺盛なる武將の鑛山熱を考ふる時、 此の傳說も敢て一笑に附す譯にも行

かず、謙信は兎も角として彼の部將あたりが、採鑛に手を附けて居たのではないかとも考へられる。 あつて遂に中止したものである。元和三年といへば、高田藩主越後中將忠輝が、 蓮花銀山の最初の着目者は、越後高田藩主であることは、 高田藩主は蓮花銀山に着目し、 見分登山せしめて採鑛に着手せんとしたが、 地元大所村に遺存する古文書が物語る所である。 大阪陣の懈怠から領知没收の憂き目 深山幽谷で、 經費倒れとなる危惧も 元和三

を見た年であるから、内質の銀山調査は、 尙ほ溯るものといへよう。

とでも云ふか天變地異相次ぎ地元では三箇年の不作が續くといふ不運に見舞はれてしまつた。 して效なく費用倒れとなつて、万藏は夜逃するといふ失態を仕出かした。事態は夫れだけで濟まず、靈山を汚した罪 次いで、此の銀山に手を着けたものは、大和國万藏と云ふ金山師であつた。万藏は銀山に着手すると同時に村人を 村民一日の日當は、米一升に錢百五十文といふ約束であつたが、何しろ萬年雪の埋むる處だけに、 勞多く

かかる銀山なればこそ、大所村では當時は厄介山の如く目して居たやうである。

る

寛政十二年、銀山に於いて、高田藩から諮問を受けて、差出した回答文書も、言外に此の意味を洩して居るのであ

大所村支配深山。字蓮花山 山岸文書)寛政十二年三月、 御尋二付乍恐以書付奉申上候。 山岸七兵衞

銀山

日程之内雪掘すかし候得共迚蔵寒山之場所故難出來與相心得候哉夜逃仕候ニ付賃銀は村損いたし剩へ深山入込荒 村百姓之内六拾以下拾五以上之もの登人賃米壹升錢百五拾文宛之積ニ而被請取六月下旬より七月下旬迄日數三拾 先年より村方申傳候得共一向古キ書付等無御座候、其後七十七年以前享保九申辰大和國杉村万藏と申山師罷越當 是者百八拾四年以前元和三巳年松平越後守樣御領分之節銀山與御見立被遊候,付御出役御見分御座候得共深山故 |而雪深ニ有之何頃之年ニモ消拂候與申儀無御座六月土用ニモ極寒同様之場所ニ候得ハ御見立斗ニ而相 止申候由

to

修

し候上剰

へ其年より三ヶ年間不時二大風雨仕至而近鄕共二諸作實法不申長困窮ニ而甚が難避仕候由申

傅

御

座

其後へ山師ニ至迄一向取懸リ不申候。

右 ハ御尋ニ付往古より村方聞傳之趣書付ヲ以奉申上候通小茂相違無御座候以上。

寛政十二申年三月

越後國頸城郡大所村

庄 屋 七

兵衞

組 頭 所左衞門

百姓代 新左衞門

重田叉兵衞樣

新井御役所

が續いてはといふ危惧から地元では、右のやうに婉曲に、 を投げて居る狀態を上申して居るのである。かくて、再三見分を重ねたが、 蓮花銀山が、 深山幽谷の間にあるので、假令着手しても永續せず、 「其後は山師共一向取懸不申候」と其の道の専門家達も匙 其の爲地方村方が騒がせられ、 蓮花銀山は實現せず、數年を經てしまつ 却つて天變地異

は幕府より上地を命ぜられ、 左衞門の手に移り、 其 の後文化年中、越後灰塚村庄屋庄兵衞が見立して、金山師新助に試掘させたが續かず、文政十一年同國門前村 次いで天保六年稻塚村彦左衞門の手に歸して、 高田藩の手から江戸幕府勘定奉行の支配に移つて居た。 休山となつて居たものである。之より先き、 鑛山 源

(147)

(新助口書)天保十一年 橋立村新助。

越後國金山御見分爲御用被成御越銅山其外相稼候始末御尋『御座候。

御座候二付休山二罷成無據橋立村人別二相成住居仕候處文政十一子年當領御預所門前村源左衞門儀御領主樣御願 國同郡橋立村地内前坂銅山丼長尻金山共試掘之止於高田表ニ吹様シ仕引續前坂銅山掘方仕居候得共其後差支之儀 高田御領分金銀銅山見立被申付同國同郡大所村地内蓮花山見立之上試掘仕右出高ヲ以高田表ニ而吹様シ仕猶又同 又蓮花山之儀へ高山深谷手遠之場所故源左衞門彦左衞門手廻り兼是迄掘方不仕候右御尋ニ付申上候通り相違無御 新田彦左衞門右 共同様之儀に而引合不申當時相残り候舗口凡貳拾三間程掘込候處是又同様ニ付源左衞門儀力不及天保六未年稻塚 立候越ヲ以同人江被相雇前坂銅山相稼候得共舗ロ取建拾五間又へ貳拾間程掘込候得へ本鏈筋ニ無之中絶仕數ケ所 私儀年來金掘渡世仕信務松代領赤柴銅山相稼罷在候處文化之度越後國頸城郡灰塚村庄屋庄兵衞方より被相賴 引請同人江被相雇長尻金山江引移相稼申候同所之儀へ喜久蔵文蔵より申上候通相違無御座候且

天保十一年子九月

座候以上

越後頸城郡橋立村百姓 新助 印

着手した處、運よく多少の銀鑛を採掘したので、力を得て本腰に取掛ることになつた。 出願して來たので、 此に天保十一年、 詮議の結果、兎も角試掘を許可することになつた。依つて幕府金座手代や職人も入山して試掘に 越後國寶野村和右衞門外四名が金主となつて、 豐後國金山師善九郎が蓮花銀山採掘を勘定奉行

山岸文書) 天保十二年 山岸七兵衞

御尋ニ付左ニ御答奉申上候(中略)職人共内稼いたし右吹目銀之儀内稼喜久蔵より先殺當村銀山爲再御見分御越 去子年大所村銀山爲御見分御越被遊候御普請役樣御兩人後藤御手代等より御引拂後銀山内稼方等被仰渡候趣 百姓代

新左衞門殿 所左衞門殿

組

頭

大所村庄屋七兵衞殿

被成候御役人上川傳一郎樣江相納候儀二御座候(下略)。

當時、 この試掘に際し、 蓮花山並に雪倉嶽に三ケ所の舗りを見立て、盛んに掘出したところ、相當の出鑛を見て關係者を喜ばせた。 高田春日町の高橋孫左衞門が、諸物資仕送りを引き受けたのであるが、彼が後年長く蓮花銀山に

山岸文書)天保十三年寅八月 金山師善九郎

關係することとなつた因由であつた。

越後國頸城郡大所村地内連花山雪倉嶽共當寅年より辰迄三ヶ年之間試堀稼方被仰渡候ニ付小屋普請並 相渡申一札之事

右之通對談取極候二付以來毛頭相違無之候爲御證一札相渡申處如件。

割合ヲ以高ニ應シ年々村方江致助成可申候。

留木共外入用之竹木山中字瀬古太郎川舗口迄之間爲代貰度然ル上へ山内より銀鑛出高御買上代金千兩二付拾兩之

= 舗 口

天保十三年寅八月

豐後國大分郡府内西小路町

金山師 善九郎

(149)

豊箇所を見立て、試掘した所多少の出鑛を見たので、翌年から大いに努力しようと意氣込んで居た。折しも善九郎 を失つてしまひ、 「九郎等の三ケ年試掘も、翌天保十四年他國御用に依つて、善九郎が代理人を殘して他國へ出張するや、 出鑛も振はなくなつた。そこで高橋孫左衞門が立上つた譯である。彼は雪倉嶽銀山に着目し、 俄然活氣 舗口

3 善九郎には多額の貸付をして居る孫左衞門は、其の爲彼の事業を否でも繼續せねばならぬ破目に立ち至つたの であ

不届が發覺し、彼の銀山採掘權は没收といふことになつた

此の音吉も弘化二年一杯で引込んでしまつたので、後は孫左衞門獨り舞臺となつたのである。 弘化二年、武蔵國中野村金山師音吉なるものを引張つて來て、改めて勘定奉行へ願出して事業繼續の認可を得た。

# (高橋文書) 明治十七年八月、高橋孫左衞門

店致居候ニ付父孫左衞門も倶々稼方被仰付候樣相願候手續左之通。 上、
・・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・・
・
・・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・

<p 形捨置候而へ困却仕候得共稼人無之儀ニ付入山裝鑛不相成處兼而孫左衞門儀從來商業上ニ付江戸近在江忰成者出 所掘入せ申候處出鑛も御座候ニ付明年稼方ニ而裝鑛可致之處弘化元辰年ニ至リ善九郎儀不行屆之廉有之稼方御免 振れ奉恐入候ニ付亡孫左衞門發意ニ而御出役江御伺之上同所雪倉嶽鏈筋之内江舗口壹ケ所見立則字申五舗與申同 力人共之儀も出精稼方不仕小手なる稼方致し然ルに善九郎儀へ盛大の見込ニ而上申仕置候得へ最初之申立にも相 相成申候、就而ハ亡孫左衞門より善九郎江繰り金穀其他貸分有之候得共前件之始末ニ付同人ヨリ辨金可被致 翌卯年善九郎儀他國御用有之蓮花山之儀ハ代理として召仕清兵衞與申者差遣し置候處如何なる故にや助

並 御代官平岡文次郎樣青山九八郎樣御立會當分御預所武刕東多摩郡中野村百姓音吉なる者より河原善九郎 仕旨を以御勝手御勘定御奉行松平河内守様江奉願上候處追々御吟味之上音吉孫左衞門俱々入山稼方可 同 人より父孫左衛門 引 請置候鑛製造雪倉嶽銀山間掘中二ケ年季稼方之儀壹ケ年御冥加永豐貫文宛年 致樣右 稼方模樣 御 Ŀ

に乗り 左 衛門は、江戸の出店の主人である息子孫八を呼び迎へて、 出した。 蓮花銀山の責任者として入山せしめ本腰を入れて採

蓮花山を含む廣大なもので、 0 區 は 九郎 の分を繼承したのであるが、 其の繪圖は前章に於て、 北 は山山 「蓮花山等大所村領繪圖」として部分圖を掲げてお の坊村 との境 M 東は瀬古太郎 III 區切 られ 7: 帶 0 大

# (山岸文書) 弘化三年三月 金山師孫八

歩内ニ 付山御 間 古太郎川より南東西當村地境限リ間歩内迄舗口矢木留木炭木取稼方致候依之今般拙者稼申先例 仰付候處音吉儀八煩 歩内 當村地内雪倉嶽銀山之儀去巳年十二月より當年十一月迄中壹ケ年間武劦中野村音吉と拙者兩人江試掘 而雪倉ケ嶽銀山付之樹木類伐取銀山稼方障之節金掘職人共ニ木細工爲致候共又ハ致木山 引渡被下置候 相成候而も迷惑筋無之哉之旨相尋候處聊迷惑之筋無之旨一統被申候故右川境迄と御引渡御 ハバ 二付當所江罷越兼依之同人代兼拙者壹人二 私稼中銀鑛出高御買上ケ代銀千兩ニ付拾兩宛樹木代と村方江差出し可申候然 而引請 稼方仕候夫ニ付先年金山 高 通瀬 師善 田糸魚川 九郎 願 古太郎川 ル 可 申上 稼中字 E 何 稼方被 右間 右 賣

出候共勝手次第可爲旨村方一統御承知被下義定取極候上へ當年山仕舞之節御買上代銀ヲ以前書之分合金爲山

**慶差田可申候右之通相定候上へ銀山稼方繼年御願候へバ永々右振合ニ而可致候爲後日一札差田申處仍而如件。** 

高田春

日町町

金山師

孫

印

弘化三午年三月

大所村庄屋七兵衞殿

百姓代 組 頭 新左衞門殿 所左衞門殿

孫八の抜け目の無い商才にも感歎出來るのである。 前記文書に依れば、 村方の利益は申す迄もないが、冬期休鑛の折は、 鑛區内の竹木伐採の代償として、 大所村 鑛區の竹木を伐採して、高田・糸魚川方面 へ採掘の銀鑛千兩に付いて十兩宛支拂 へ賣出すとい ふとい 2 ので 2

されて、 鳳ノ木銀山、金山銀山等の四ケ所に、手を擴げて試掘する有様であつた。 其の後蓮花銀山・雪倉嶽銀山は、共に相當の出鑛を見て居たのであるが、何分深山の嶮岨な場所に經營するのであ 孫八の採鑛事業は、 謙信の採掘説や、 爾後順調に進んだものの如く、翌弘化四年には大所村に屬する小澤龍銀山、 孫左衞門が靈夢に依つて開拓したといふ説などが、 この當時の盛況は銀山の様子が、 生れたものと推察せられ 登根嵐 魚止 四方に噂 IJ 銀 Ш

が は一大頓挫を來し、遂に事業繼續の見込なく休山するに至つたのである。 幾許もなく文久二年七月、行年六十歳で江戸に於て歿した。 永元年十二月、孫左衞門死去し、孫八家業を繼いで孫左衞門と稱し、 かくて鑛山の柱石である孫八の死去に由つて、採掘 依然蓮花・雪倉銀山の採鑛に努力して居た

經濟的には頗る困難を嘗めたものの如くである。

、高橋文書) 明治十七年八月 高橋孫左衞門

を以繼年季稼方奉願上去ル文久元丙年迄年々入山稼方仕候 蓮花山之儀 八御冥加永壹 ケ年五百文宛雪倉嶽之儀へ永壹貫文宛兩山 = 而都合永豐貫五百文宛年々御 上納

仕

山吹銀之儀へ其都度銀座御役所に稼人より相納直チへ代金奉請取候事

n 明治二年舊高田藩に依つて採掘が試みられたが、 の後明治維新に際會し、 當時鼓吹せられた文明開化、産業開發の聲に應じて、 何しろ日本屈指の高所嶮岨 の場所だけに、 蓮花雪倉兩銀山の採鑛も着目せら

高橋家文書) 明治十七年八月 高橋孫左衛門

蓮花山雪倉嶽之儀は天保度御見分之頃及開候ニハ政府御手山を除き國中ニ三ケ山共有間敷與申御寶山に

は御

採

掘

K

經費三千圓も費すといふ相償はね事業に堕し、

遂に又もや放棄せられてしまつた。

銀党貫目鉛百貫目の

共出方ニ 明治二巳年中高田御舊藩において蓮花山雪倉嶽兩山御見分之上雪倉嶽相願居候鏈筋新規四ケ所間掘被成候處銀鉛 Щ 座候得共深山積雪既に七月中に漸く消拂每歲秋分ニ到リ候へバ絕頂は雪降積リ朝夕へ水氷笊板等之水仕事 .内運送等ニ至ル迄不都合生ジ何分稼方之日數なく夫故徴力ニては容易ニ不行屆殊念之至リ奉存候。 相 成申候而同三午 年御掘立二 而銀壹貫目餘鉛百貫目餘出方御座候得共物價沸騰之時節柄兩年 而

千圓 [程御入用相掛申候。

其の後の蓮花・雪倉兩銀山は度々試掘せられた様であるが、

詳細は定かにし得ない。

上巴には、 明治三十九年八月、高頭・志村の兩氏が大連花へ登山せられた折は、 事務所一棟・飯場二棟あり、約半里上方の坑口へも新道が出來て居て、登山者には頗る便宜を與へて居た 蓮花鑛山が既に二三年前より開鑛し、 大所村

終りに、 西頸城郡志に記載されて居る、 蓮花鑛山の記事を揚げて参考に供する。

由である。

### (西頸城郡志)

を得しも、 蓮花鑛山は豐臣氏時代より着目せられたり。 銀銅亞鉛等の採掘を目的とせり。 現今は平岡定太郎氏櫹利を獲得し、 大正五年五月より道路を造りて採鑛の準備せり。 今より(昭和五年)二十年前、 富山縣人佐伯氏 (宗則) 之が特許 鍍區百萬坪にし

## 蓮花温泉の開湯

銀山を採掘すると同時に、 場として、此の温泉を利用したことは當然であるし、又特效を知つて各地から秘かに入湯を試みた者もあつたらう。 たと想像されるのである。 間道が、戰國時代から開かれて居たと推定さる」ので、 蓮花温泉は、餘程古くから知られて居た如くである。越中小川温泉から南下し、 故に此の温泉の發見から、 蓮花温泉を開き、傷病兵の寮養と採鑛夫の休養に當てたといふ傳説は、今尚ほ多くの人々 幕政時代に至つて鑓ケ嶽道が閉塞されても、 蓮花銀山の發見となり採鑛といふことに進展したものであらうと思ふ。上杉謙信が蓮花 此の温泉も當時の間道利用者達に知られ、利用もせられて居 山麓大所村の獵夫や杣人足達の秘かなる休息 鑓ケ嶽を越えて、大所村へ通ずる

縁起で、然もまた一面の真實をも物語つて居るものである。 に信ぜられ、温泉自身も之を開湯緣起にして宣傳して居るのであるが、これは何處の温泉にも附きものの常套手段の

### (西頸城郡志) 昭和五年

入浴シタリシニ其後上杉景勝慶長年中奥羽へ國移ノ時止ミタリシヲ、文化三年高田住高橋孫左衞門ナル者靈夢ニ 蓮花温泉。 戰國ノ世上杉謙信ノ配下蓮花山ョリ金銀ヲ採掘ナシ其疲勞ヲ慰スル爲 メ神告アリテ黄金 ノ湯ヲ發見シ

天保十三年高橋孫左衞門浴場ヲ開ケリト。

依リテ再ビ發見ス。

時に野宿入場者に便宜を取計つたことは想像出來るのである。 場を置いて浴場を設けたに端を發して居るのである。勿論この時は一般人を入浴せしめる準備はなかつたのであるが 蓮花温泉の始りは天保十二年、越後國寶野村和右衞門外四名が、 蓮花銀山採鑛の金主となった時、 此處に事務所飯

## (山岸文書) 天保十二年五月

爲被替申一札之事。

反別、百八拾四步。

字并湯

字湯之平

反別、三拾五歩。

貳百拾七歩。此地子米壹斗四升壹合四夕。年々可相斗定。

右者別紙爲被替之通蓮花銀山預上候ニ付稼方相始候節ハ書面之地子米仲間より差出右場所雪積りも薄く辨理之儀 こ御座候間世話人居小屋相建可申尤沸湯も有之儀こ付往 < 温泉相開候節ハ御地頭様江御運上承上納可仕依之爲被

替置申處仍如件。

天保十二丑年五月

大所村新右衛門殿

同 同 所左衛門殿 兵 衞殿

(山岸文書) 天保十三寅年四月、 山岸七兵衛

一、錢八百四拾八文

右者字湯之平丼湯地子米代書面之通慥二受取申候以上。

天保十三寅年四月

寶野村

和右衞門殿

大所村庄屋七兵衞

と同様であつたらう。然し、當時世上には、蓮花銀山の噂高く、上杉謙信開湯の傳説も行はれ、難病に特效あること 次いで弘化二年、蓮花銀山經營に乗り出した髙橋孫八も、早急には温泉開發に着手出來なかつたことは、和右衞門

寶野村 和右衛門 印

外四名

(156)

したのである。 た如くである。 から 喧傳せられて居たので、 この機運を摑んだ孫八は、弘化三年、銀山經營と並行して温泉をも開湯し、 秘かに登山して入湯を希望する人もあり、 地元は勿論、 鑛山關係の人達も、 硫黄採取をも併行せんと 開湯を切望し

(山岸文書) 弘化三年三月、 高橋孫八

申候尤右場所ニ小屋掛ケ入湯相成候樣可候致夫ニ付銀山緣人ハ勿論村方之面々入湯致候共湯錢ハ貰申間敷候入湯 當村地内乘鞍山温泉場之儀當年より拙者致請山候處實正ニ御座候右趣意へ年貢米壹斗也年々村方江差出し 相渡申議定書之事。

前書之通取極候上ハ永々右議定遠變仕間敷候爲後證引受一札相渡申處仍而如件。 候殘而壹歩へ拙者貰請湯船普請等可致候且硫黃取出候ハバ四拾貫目壹結ニ付銀三匁宛村方江差出可申候。 人御座候ハバ壹人ニ付一日湯錢三歩宛取之内壹歩ハ御上機江爲御冥加御上納可仕候壹歩ハ村方江爲助成差出可申

可

弘化午三年三月三日

大所村庄屋七兵衞殿

組 頭 所左衛門殿

百姓代 新左衞門殿

> 高田春日町 孫八

も知らずと、危惧する村民の猛烈な反對に依つて中止のやむなきに至つた。 然し、 此の硫黄は乘鞍嶽山腹の 地嶽から採取するもので、 神聖な地嶽を荒しては、如何なる天變地異に見舞るるや

翌弘化四年には、孫八から硫黄採取中止の一札を入れて、温泉開湯にまで難色を示す村民と融和したのである。

### (山岸文書) 弘化四年、 高橋孫八

焚故障申立之儀へ無之樣昨年之通御願申上候處御承知被下願筋相立置儀』御座候 有之趣:候得共左樣相成候而八御上樣江不都合之願立:相成彼是心配致候:付硫黃焚之儀へ決而致聞敷候間硫黃 (前略) 其御村丼近村故障等無之哉之趣御尋こ相成聊故障無之段被申上候得共硫貴煎方之儀へ兼而村方故障筋も (下略)

かくて、温泉は翌嘉永元年より、孫八に依つて浴舎の設備も整へられ、 一般に開湯せられて、 遠近の人々の入湯を

其の後文久二年、 當時の温泉場の狀態、 蓮花、 雪倉兩銀山の休山にも拘らず、温泉は依然高橋家に經營せられて繁昌し、

見ることになった。

並に入湯人の模様は、 孫左衞門から新潟縣租稅方へ提出した明治六年の文書があつて、詳

明治維新を迎

細が推知し得られるのである。

尚、

當時は噴出口が乘鞍ケ嶽の中腹にあるので、乘鞍ケ嶽温泉と呼ばれて居た。

(高橋文書) 明治六年八月 高橋孫左衞門

乍恐以書付奉申上候

無御座候間更ニ相譯リ不申候尤往古上杉家當國在城之頃當山續蓮華雪倉兩銀山見分御手入ニ相成其節温泉之儀も 當御管下同國同郡新八大區拾五小區大所村地内乘鞍嶽温泉涌出し申候年號干支之儀へ地元村方ニテ蔵記錄申傳共 藥師湯

但

湯床七

尺五

寸四分、

深サ

貮尺壹寸五分,

出

П

硫

黄明

禁氣

儀 群 開發并硫黄湯 屋 道 味之上嘉永元 も年 橋 掛 集 六月中旬迄 仕 小屋普請等 ケ - 久敷中 湯 候哉之由、 治 致 絕仕 相 花 庚申年七月十九日右願之通稼方御 2 掛申 來リ候者も御 行屆候半 賣捌稼方之儀御冥加永壹貫文宛年々上 居 然ル所慶長度奥為會津表江御岡替後 候處 候秋分ニ 稀代 ハ群集可仕と奉存候。 座候 0 相成候得八蓮花山絕頂 妙湯 = 付 ニ付瘡毒等 養父亡孫左衞門地元村方江對談議定爲取 相 何分嶮岨 聞 濟 煩ひ數年醫療手を盡候ても難 = ハ雪降申 相 納可仕旨ヲ以御勘定御奉行松平 八金銀山共御廢止二 之深山 成リ 候故寒 依之湯 = 而 舟湯 强ク湯治 五月下旬湯開 小屋等普請仕 相成候哉深山故自然 致銀是迄舊曆中八月中二 形 癒病人右温泉 仕候得共湯 E 仕 上候處追 IJ 河内守樣江 ・去ル弘 江 元迄之途中雪消 2 化 龍 湯 ヨリ 四丁 治 越手 奉願上候處御 通 人も 未年中 引拂申 作 路絕温 有 IJ 之此 = 候糸 温 而 岭 候 J: 泉 小

魚川 湯底之儀 乘鞍嶽 より 大所 华東西六 1 砂 村 地 迄 石敷板 凡 道 拾 間程 0 張 b 南 共都 Ŧi. 北六 里大所村 前 拾 六ケ所御座候得共洪水山貫ヶ等 間 より ノ間 湯 \_ 元迄 圓 燒山 凡三 = 里 テ 常 华 程 = 烟 = 吹出 御 座 ノ妨息更 候 2 居

申

候其 =

内三ケ

所

ノ原

泉

有

無御

座

候

右者湯床 素湯 戌 の方向 但 湯 舟 丰 八尺五 小屋場 寸 地 14 方深サ 形 ノ眞中ニテ 武尺 壹寸五分、 M 方 3 リ入湯便 底板、 利 味 ノ温床 硫 黄氣 也。 强 原泉 ク明礬氣 3 IJ 六拾間 小 2 有之 程燒 Щ ノ内ヲ

惣湯

=

而

相

成

右温床

後

ナ

N

段高

丰

所

=

而

溜

黑 湯

1

所

=

相

成

瀧

=

テ

落入

申

候

通

水仕

終

• 素湯 右者温床戍之方向素湯 黑湯 1 " = 但 温床 相成湯床 八尺五寸四方深サ 1 瀧 双 方原泉 落入申 3 IJ 武尺壹寸五分、 候 七十 腫 間程 物 流 宜 水致候内黑キ土目之燒穴有之則 味 ٤ 硫 黄氣 强ク明礬氣少し 湯坪 也是

=

耐

猶以熱

湯

右者素湯 3 IJ 拾六間隔テ辰 ノ方ニ當リ原泉シ儀者湯床より七拾間程山上ヨリ 沸出申 候。 功能、 志やく。 0 か 47

元黄金湯 但湯舟なく七尺四方バカリ深サ貳尺餘ノ出穴ニ相成居、底へ土砂ニ而金箔ニ似タル箔アリ

右者素湯より五拾五間程隔テ未ノ方ニ當リ極清泉ニテ至テヌルク味甚酸ク又其穴ニ涌出候儀ニ而湯 ニ雪消シ水氣含居候内而已ニテ每歲六七月天氣相續候得へ涌出無之止リ申候然共好湯故蓮華黄金湯ト

ル所ニ御座候。 功能。

のぼせ引さげ、

新黄金湯 但湯床者七尺四方深サ貳尺壹寸五分、 其他諸病二宜。

右者素湯より亥之方ニ當リ百貳間下リ申候又原泉之儀ハ土中をくぐり沸出候儀ニ而其場ニ湯床へ入置申候。

底石板、

出口味ひ黄金湯ニひとし

功

能 元黄金湯ニ等シ。

右者素湯より六拾六間下リ丑ノ方ニ當リ又原泉之儀へ確ト相譯リ不申沸出 三國湯 但湯床七尺四方深サ貳尺壹寸五分、 底板張リ味大ニ澁酸

ク明禁强

キ事ト奉存候。

ロニ温床入置申候。

功能主治第一麻病其他諸病ニ功有由從來土人之傳い申所ニ御座候得共例年六七月中天氣相續候節ハ湯口止リ 申

右六ケ所何れも原泉細ク御座候得共黄金三國之外は留リ不申候。

居小屋

同

. 同

> 三間 質間 **演聞半、**

二三間半 一豊間半

九間

同

同

預間 三四間

**貳間半二六間** 

壹棟

壹 棟 登棟 登棟 壹棟

口

細 ク山向

申請人知

(160)

六月中

貳拾三人

明治五申年入湯病客員數

七月中

百拾七人

六拾九人

七月中 六月中 五月中 、明治四未年入湯病客員數 八月中 八月中 七月中 六月中 五月中 明治三午年入湯病客員數 四ケ月總計 四ケ月總計 **演百八人** 十三人 九十五人 四拾七人 九人 三拾九人 九十三人 百拾三人 拾八人

八月中

拾三人

四ケ月總計 **演百演計演人** 

三ケ年總計 温泉廢止 ノケ所無御座候。 五百四拾三人

分折之儀ハ未ダ不仕候。

税金之儀へ貳圓壹錢五厘年々御上納仕候。

右ハ今般御尋ニ 付前書細 = 取

治

六年八月

調奉申上候處聊相違無御座候以上。

新潟縣管下頸城郡第七大區十二小區五番 右温泉稼人 高橋孫左衛門 組

印

新 潟縣和稅方御役所

に歸した。 蓮花温泉は、 其の後間もなく乘鞍嶽の大噴出に依つて壞滅したが、 明治十年に高橋氏の手を離れて、長野縣飯山の人丸山氏に移り、 明治二十八年頃再建した。 次いで千國氏の經營を經て、 當時は客舎木造四棟で、 田原氏

況は今日に至つて益々繁昌の甚しさを加へて居ることは、各位も知らるる通りである。 一棟の中に總湯・仙氣湯があり、他は露天で黄金湯・蒸湯・目ノ湯等があつた。客舍には疊など無く、 自炊生活であつて、 七月より八九月の入湯の最盛期には、 數百人雲集して、不潔極はまるといはれた。 板間に茣蓙を 此の景

敷き、

衙門は、 さて蓮花銀山を開き、 越後少將忠輝の遺臣として越前福井に移り、 蓮花温泉を開湯した高橋孫八とは如何なる家系の人か。遠く家祖を尋ね 宰相忠昌に仕へたが、のち刀槍を鋤鍬に更へ、故山なる越後高 れば、 五世 0

祖 孫

(162)

成功し其の聲價は遠く江戸・京師にまで響いたものである。 田町に來つて耕作の傍ら菓子商を營んだのである。此の子孫には、代々商才に優れた人物輩出し、 表に支店を構へ、子息の孫八を出張させ、 家業の擴張を計つたのが圖に當り、 第五代孫左衞門に至つて、 頓に豪富を致した。 家運いよいよ目出度 早く粟飴の精製に この孫八こそ、父 江戸

孫左衞門と計つて、蓮花銀山採鑛を目論見、 蓮花温泉の開湯に手をそめた人である。

當時の高橋家の飴店の繁昌ぶりを、 十返舍 一九の「金の鞋」に、

て製したる水飴、至つて上品にて風味よく、ところの名物なり。 『高田の御城下に至る。 當國一の御城下にて繁昌の所なり、石灰屋といふ宿にとまる。 評判は高田のまちに年を經てゆたかにすめる水 横春日町とい ふんに

0 光榮を得て居られる。

飴の店

とある。 現在も當主第九代孫左衞門氏は舊春日町の店舗を益々繁昌して續けられ、 屢々高貴の方の台臨あり、

御用命

白馬鑓 ケ嶽温泉と白馬銅山

が 0 止 鑓 むなきに至つたので、 却つて其の採取にむづかしく、 數少き信劦側の白馬關係文献として敢て其大概を掲げて見た。 ケ嶽温泉の開發と、 白馬銅山の採掘は、 年月事態に多少の誤りなきを保し難い。 遂に有力文書の一覧をも得ず、 何れも明治以降の出來事であつて、本文より省略すべき事柄か 單なる聞書きと讀書よりの抜き書を以て記述する だが、 明治とはい 此の關係文献は、 古文書 も知れ

82

## 白馬鎗ケ嶽温泉

館ケ嶽温泉は、

浴槽より直ちに白馬連峰の大觀を恣に出來る快適の場所で、白馬連峰縱走者の絕好の休息所である。 つかの岩風呂を穿つて流下して居る。現在は山小屋を建てて登山者の入浴宿泊に便して居るが、此處は半ば露天で、 中部山岳の中でも最も高い所に湧出して居る温泉の一つで、鎗ケ嶽東尾根の懷の岩屋に湧出し、

懐なので、誰あつて利用する者もなく、徒らに打棄てられて居たものである。然るに、明治維新となつて、 し處も文明開化の風が漲り、産業開發の聲が盛んになつたので、此の温泉開發も頓に着目され、 此の温泉は、早くから山麓細野村の人達に知られて居たが、何分湧出口が海抜二千百米もあるといふ鎗ケ嶽南股 何處もか

一と儲け組の對象と

引湯して此處に浴舍を建設し、浴室を蒐める計畫であつた。 の主唱に依つて、鎗ケ嶽温泉開湯實現の一歩を踏み出した。 明治五・六年頃から、 細野村の人達の話題に上り、 明治八年いよいよ細野村丸山九一、丸山盛代、丸山幸吉の三名 即ち温泉湧出口から竹樋五千三百間を布設し、二股まで

なつて居たものである。

(丸山記錄) 明治九年十二月 丸山彌左衞門

信濃國安曇郡鎗ヶ嶽温泉引下ヶ積書

地元北城村之内細野耕地

竹樋五千三百四十 此代金四百圓 五拾錢 間 湯元より字二股迄里程貳里拾七丁

ツギテ木貳千六百七拾口

但し壹間ニ付代金七錢五厘

の吾人でさへ一目判然たるものである。 さて、 嶮岨なる鎗ケ嶽中腹の湧出口から二股まで、二里半を引湯する如上の計畫は、 人足六千人 此賃金四拾九圓八拾錢 此代金三拾貳圓

大工三百九拾五人 此賃金七百五拾圓 但し受人ニ付拾貳錢 但し壹人二付壹間八

五厘

錢 九厘 繩五百三拾四·

四

錢

但壹東ニ付代六錢

此代金三拾貳圓四

錢

但し党ロニ付代壹錢

流運

並人足四百九拾八人 此賃金四拾九圓四拾貳錢五厘 但し竹樋繼手木繩持運人足 但し受人ニ付拾貳錢五 厘

合計金 千三百拾三圓八拾四錢五厘

但し登人二付拾錢

きは、幾許を保ち得べきや、 誠に危惧に堪へないものである。 この地は冬期積雪深く雪崩の危險多かるべきに、

頗る幼稚なものであることは、

原始的な竹樋の送湯管の如

たが、 次いで起つた大雪崩の爲に、 此の年の舊九月は、 明治九年七月いよいよ實行に着手した。二十餘名の大工と多數の人足を發して、 寒氣强く早くも新雪を見た。夫れが又意外の大量であつた爲。 工事は根本的に破壞され、 丸山以下多大の損害を被つて、温泉引湯事業は挫折してしま 工事は全面的に阻 山中深く引湯の工事を進 害され、

(165)

當時里人說を爲して曰く、 白馬岳には古來人跡なく、猥りに人々山中に入る時は、 山神の怒りに會ひ、 岳暴を起し

人畜を害することあり、此の工事も山神の怒りに觸れたものであると。

鄕 假小屋に在つた二十一名の大工人足を埋没して、 倉に運び來り、 當日は陰曆九月二十三日、夜半白馬岳連山鳴動して、 檢死を了へたといはれる。 非業の最後を遂げしめたのである。 鎗ケ嶽二子岩の上部雪溪より、 此の死骸は菰包みとして四ケ城 大雪崩が落ち、 當時入山して

から、特にこの傾向が高まつたと噂されるのである。 明 治中降、 白馬岳に登る者は、 山麓細野村民等の不興を買ひ、 妨害を加へられたこと一再ではないが、 此の悲惨事

と北城村細野區の將來』と題する一文で明かである。 木檢事並に地方の有力者横澤本衞氏に計つて村民を說得し、 白馬登山者に協力せしめたものは城敷馬氏の力であつた。氏は日本山岳會の依賴を受けて明治三十九年長野地檢の鈴 頂上を徘徊するに非ずやと、見分人を發して追ひ降したといふことである。 尤も山麓では、 古來雨を祈り風を避くるに、 必ず此の岳神に祈る風あり、 將來を誓はしめられたことは「山岳」創刊號に この地方人士の蒙を啓き細野村民をして 雨天續きの折などは、 誰か拔け 『白馬山 山 して、

休息に備へることとなつたのである。 2 の後 誰あつて温泉引湯を試みる者もなく、 大正の登山流行時代に入つて、 漸く現場に浴舍を造つて、 登山者の

### 一、白馬銅山

せしめて採鑛に努力せしめた。出銅を見たのは明治三十六年であつた。銅鑛は、當時の大黑銅山のよりは、素人目に 白馬銅山は、 明治三十四年頃から試掘に着手し、 三十五年には白馬尻・葱平等に小屋掛を爲し、 多數の人夫を入山

丸山嘉吉や丸山博太郎と、畫策大いに努めたが、 修築され利便を加へたが、 と決つた。 も劣つて居たが、 銅山經營者は東京市魏町の人菅原氏で、按師長格の佐藤工學士は、 關係者は大滿悦で、力を入れて居たものである。 皮肉にも銅價が低落し始め、 出鑛意の如くならず、 經營が引き合はず、 此の年四ツ屋より細野を經て白馬尻 如何とも出來なかつた。 不振を續けて、 細野の事務所に頑張り、 遂に明治四十年 まで、 地元の協力者 K は放棄 道

の後舊坑に鍬を入れた者も二三あつたが、 遂に物にならず、今日に至つて居る。

坑口は、 其 白馬尻近く登山道より瞥見出來る處にある。品位が低級でも、大量の出鑛を見れば、 大黒銅山などと違

交通線に程近く、 一時の鑛山人夫賃は、 國益に貢献すること大なるべきに、 一日五十錢であつて、 白馬登山の人夫賃は此の標準で要求せられた。 何とも残念干萬であつた。 對山館主百瀬愼太郎氏

が、十五歳で白馬岳初登山の折もこの五十錢を要求せられたといはれ 3

「山岳」創刊時代の紙上に見られる所である。 C の銅山 .の佐藤工學士が白馬登山者に山中の宿泊や食糧に付いて便宜を呈供すると屢々言明して居られ 叉白馬銅山のことも二三登山者の見聞記が掲載せられて居て以つて

る

こと

は

考とするに足るものであ

何 n にせよ白馬 銅 Щ の命脈が 水 ンの短日時にして終焉を告げたことは岳人のみならず國益的にも殘念千萬に存する

次第である。

結

び

白馬岳群峰は、 前章に縷々記述した如く、 古來より越中、 越後、 信濃の三ケ國に於て、 夫々三様に仰望し、 登山

られて居たので、三ケ國の記録も各々異なる委曲を傳へ、 後世人士に全然別箇の三つの大岳の如き感想を與へて來た

排して、脈絡を立てる等の努力を費す者もなかつた。此の三ケ國に於て、各々別箇の山岳なりと想像された大岳が、 のである。 されば山名といひ、 地境といひ、史料といひ、三ケ國三樣で、箇々別々の記述に止まり、 古來敢て隣國の史料を按

名稱史實が、 合して一箇の白馬岳なりと、世上に認識されたのは、 其の後三ヶ國の多數の人士には、依然三様の觀念が割り切れずに殘存して居た樣であるが、 世に喧傳して來るので、知らず識らず在來の史實は閑却され、世上一般には、 明治も中葉の頃であつたらう。 次第に信濃側 白馬岳の

白馬岳の山名が覺え込ま

中部山岳連峰中でも、 然るに越中越後方面の古記錄舊記を繙けば、遠く戰國時代より徳川初期に亙る白馬岳登山史料も發見さるるので、 立山御嶽に吹ぐ古い歴史を有する山岳なることが知悉され、一驚を喫するのである。

れ近世登山家に依つて開山された如く流布することになつたのである。

つては最も興趣ある題目といはねばならぬ。 此 の一面多分に清新味を持ち、 他面古典に乏しからざる白馬岳の史料を探り、史實を闡明にすることは、 岳 人に

考へて居る次第である。 ものである。 前章に記述した數項の白馬岳史料は、甚だ貧困なもので滿足すべきではないが、 唯信濃方面 (昭和一九・一〇・二〇・於越中杏子文庫 の史料の寡少は、遺憾な極で陳するの辭もないが、 將來の採取研究を待つて、 一應白馬岳に關する概略を記した 増補したいと

書舊記を惜みなく閲覧貨與せられ御雕援を賜りたる御好意に對し此處に厚く感謝を捧ぐるものである。 本稿執筆に際し大町管林署、 本稿中で蓮花と蓮華、 鎗と鑓等の文字の別は其の使用せられた時代記錄の鹼で混用した。御諒察ありたい。 北城村横澤家、 野 口村西澤家、 大所村山岸家、 千國村栗岩家、 高田市高橋家等の各名家秘藏の古文

迫

### 追悼

# 信州の地質學者八木貞助氏

## 村太郎

辻

なりあたつて居る批評を下した由である。これは頂門の一針で あつて、ただ苦笑するより外なかつた次第である。 ると、八木さんがそれを讀んで、辻村という男は何でもないこ なつて居た時、 雜誌で日本アルプスの氷河地形を論じて、内心おほいに得意に 正三年のころ地質學科の學生になつた私が、無鐵砲にも地質學 であるかは八年ばかり後まで少しも知らなかつた。ところが大 まだなつていない博物の先生であつた筈であるが、如何なる人 生であつた。八木さんは十七歳の私より十ばかり上で、三十に 知り、その年の七月には木曾駒に登つた私は、開成中學の五年 博物同志會の雑誌博物之友の廣告で小島鳥水氏の日本山水論を ふ方の名まえが見えた。從兄の內田清之助に紹介されて入つた 會員番號21になつた私の名にならんで、長野縣の八木貞助とい 明治三十九年に出た「山岳」の第一年第一號を見ると、 むずかしく書く人間だと、甚だ辛らつであつて、實はか 一高の同級生で植物に居た恩田經介君の話によ 後に

> となり、最近には私達三人ばかり地質の委員となつている文化 であつた霰石を産出する湯股の噴湯丘は、球狀石灰 財保護の會で、第一着に特別天然記念物として、國寶なみに取 いえばマンガン方解石――として、八木さんの力で天然記念物 氏の面目が躍如として現われて居る。善光寺名所圖繪以來有名 た八木氏が、高瀬の急流を渡る時の勇猛ぶりなど、勝氣である 念號に寄せた文章によると、霰石の産地まで案内役を勤められ をしている渡邊博士が、去年でた雜誌「信濃」の八木貞助氏紀 れ、私達をして嘆賞させたものである。今東北大學で理學部長 し、その結果を採錄したノートは談話會の席上で廻覽に供せら ある――は當時東北大學の學生であつた渡邊萬次郎君が 主人から、私は明治四十二年の夏にその時の話を聞いたことが な記事を載せた、 ろに蹈査して、地質學雑誌の雑録に、今讀んでもすこぶる愉快 木貞助氏の名がしばしば語られた。先生御自身が明治三十年ご 奇行をもつて知られた、 談話會の席上で、 そのころ東京大學の山上御殿で月曜の夜ごとに開かれる地質 湯股の霰石――この時に隨行した葛湯溫泉の 鑛物の神保小虎教授から、 保科百助氏以後の篤學な人として、八 信州の郷土學者で 一正確に 研究

と専門の違はあつても、同じ信州の教育家であり研究者であつ矢澤米三郎、河野鰶藏兩氏の如き先覺者に次いで、植物と鑛物矢澤米三郎、河野鰶藏兩氏の如き先覺者に次いで、植物と鑛物

扱われることになつた。

るが、私などこそ正銘まがいなしの弱蟲であるが、健脚自慢で 行かない話である。同じような言ひ傳えは長野中學の志村寛氏 あつた鳥嶺學人などには、何か人夫達が話を誇張させるよう に就ても耳に入つて居た。それらは妙に學校の先生の場合であ のことだが、これは一時の不健康ならば格別、ちよつと合點が 者の噂ばなしによると、この時は大變に疲勞のていであつたと が、北岳から間ノ岳農鳥の縦走も試みられたようである。 つたと思ふ。模型製作者の西村健三氏からのまた聞きで ことがある。この山脈の上部に残る準平原面に關する問題であ た氏の足跡は、 心理的作用が原因となつたかも知れない。 私は木曾山脈の中腹に見出された円礫に就て質問を受けた 日本アルプスの高山全部に及んだと想 像 案內 ある 3 九

ず、後に種々研究の結果黑岳とせりと言つた、今から考えると 情がどうも不明である。案内者は獵師の横澤類藏であつた。 つたが、 寫し出され、たしかアセチレンが足りなくなつて 最後の圖とな いだろうか。それは兎も角この寫眞は山岳大會の幻燈で大きく 不思議な文字も見えるが、なにか行きちがいが有つたのではな 頭に掲げたコロタイプの黒岳に就ては、 岳を目前に見て引きかえす無念さが語られて居る。この間の事 **餘談になるが「山岳」四年に載せられた 志村氏の紀行を讀む** 烏帽子岳から五郎岳を經て雲ノ平邊まで行き、 残雲のしまを装つた屛風たちになつた岩壁の姿に接し 類職もその名を知ら 外戀の鷲羽 朱

かつた。

て、私どもは思わず息を飲んだものである。

ごとが悉く懐しい。その次の年の大會には赤石山脈の縦走談 す。智識に乏しい時代に育つた我われは、必ずしも不幸では無 撮影者三枝名譽會員が紅顔の學生で、一橋大學の前身高商の制 當時の感激を四十年後の今なお鮮やかに思ひ起すことが出來、 山の東面である。 劒岳の岩峰も驚異であつたが、雄山から別山 らせたのは、三枝威之助氏が初めて五龍岳の邊から撮影した立 う分であつた。<br />
大會の壁間に<br />
揚げられた<br />
寫眞で、<br />
私の眼を見張 ら見ると、齒がゆい筈の寫眞であるが、私達胸を躍らすにじゆ げた案内者、その後に白服の鳥水氏など、映畫の自由な今日か を登る一行の姿が映り、先登には今と違つて大びらに鐵砲を提 の中の白雪にあるが、遠い歳月の霞をとおすと、これらの出來 黒部谷に降りられる話をして居るのを 聞いた 驚きをも思い出 服を着て寫眞を指しながら、室堂から劒谷、仙人山、を通つて にかけてのカール群が私に新しい世界の存在を知らせた。私は あつて、講演者は小島鳥水氏であつたと思うが、 黑岳の美しさは東澤をへだてて 五郎岳から見たカール群とそ 悪澤岳の雪溪

ながら遂に訪問する機會を失した。この時は大町から木崎湖畔 は大正八年の七月に東京高師の生徒を連れて、 るが隱栖する時にも、 長野高等女學校に教鞭をとつた八木氏は、 同じ長野市狐池を居住の地とされた。 後に名だけでは ここの岡まで來

迫

がら、齒ぎれのいい口調でせかせかと話し、少し重要な事柄に つた。四十代で働きざかりの八木さんは、相手の額を見すえな が花をつけ、杏などの樹々の梢をさわやかな風が渡る季節であ を仰ぐという見當ちがいの晝題の油畫があつたのを怪しんで、 ら歸つて最初に描いた風景畫の一つとして、木崎湖から乘鞍岳 前の年の二科會に義兄の正宗得三郎が、フランスか

まで行き、

行つて見ると小熊山の鞍部から僅かに顔を出す鹿島槍の峰頭で

話で、大正十年の五月伊那高等女學校に、三日ばかり講習會を 郭公が叫び簡鳥が呼んで居た。この時に知つた橋本福松氏の世 なる常念缶から白馬岳にいたる雪の山を見渡すと、森の中では 新綠の間から、安曇野の蓮華草に彩られた田と、その上につら を見おろす所に、未だ滿一歳にならない子供をつれて、唐松の 氏に招かれて、産れて初めての講演をした。城山に登つて犀川 あることがわかつた。翌年の五月末に松本女子師範の校長矢澤

八木さんと落ちついて話をすることが出來たのは、大正十二 仙丈の雪を仰ぎ見たりしただけで歸京した。

未だゆつくり話をする暇はなく、櫻が花 ざかりの高遠城趾か 開くことになつた。そこの校長が八木氏であつたが、この時は

野の犀北館に二晩ばかり泊つた。庭に幹のよじれた石榴の老木 あつたと思う。またしても敷え年五つになつた子供づれで、長 る。客氣にかられて書きあげた地形學の本が出版された直後で

年の七月はじめ長野の高等女學校で地理の講習をした時であ

好い加減に聞き流さず、少しでも新しそうな智識があれば、取 り返す癖があつた。それは若輩の私たちが持ち出す意見でも、 なると、復誦するような具合に、こちらの話を反響のごとく繰

者であつた。ちなみに記せばこの學者の名はジュース、デーヴ れた。このときにスタンフォード大學のウィリス教授は最年長 諸國の地質學者が集まり、日本全國に わたる 見學旅行が催さ り入れようとする用意を示すものであつた。 大正十五年には東京に第三回の汎太平洋學術會議があつて、

した時に臺灣の合歡山を霧社から東に越えたこともあり、先年 のいい童顔のウィリス博士はこのとき七十歳ぐらい、八十をこ 因という文章の終りにちやんと擧げられて居る。白髪白髯で品 ィス、ベンクと共に、構造や地形の學門に貢献した人として、 「山岳」第一年第一號に小川琢二理學士が掲載した、 山岳の成

の立派な寫眞が澤山ある。またリヴィング・アフリカと題した の結果はカーネギー研究所の出版物となつて、中には火山など 後してアフリカのグレート・リフト・ヴァレー地方を調べ、そ 九十餘歳で沒するまで、講演などやつて居たと聞く。これと前

の山腹であつたか、この碩學がこれこそ典型的なフォー これは何といつても快心な出來ごとであつたに違ない。白馬岳 ニアの紀行文が刊行されている筈であるがまだ見ていない。 面白い旅行記が出ている。最後の調査旅行に關しては、バタゴ 八木さんはウィリスの案内をして飛驒山脈の麓を歩かれた。 ル

(171)

を聞いたのであるが、信州の中部に於けるこの種の形態は複雑 らしく、當時の貧弱な智惠では、なかなか眞意が汲み取れなか 想したものらしい。千曲川の谷に沿う斷層地形に就ても、說明 あたりの嶂壁を仰いで、さしずめシェラ・ネヴァダの東側を連 スカーブ(斷層崖)であると折紙をつけたという話を、八木さ んは目を輝しながら傳えて臭れた。 米國のジオロジストはこの

つた。

に立派な天狗原のロッシュ・ムートンネが未だ指定にならず八 燒走の熔岩流、 魚津中學の 會員吉澤庄作氏と 調査した薬師岳の に出來ていたのである。盛岡師範の初鳥氏と登つた岩手山では を氷河關係の天然記念物にしようとの相談が、八木さんとの問 酸表され、映畫にまでなつて廣く、一般に紹介されたので、 これ 岳の天狗原で見事な羊群岩を發見し、摩術報告は地理學評論に み、黄色を帶びた噴煙が天に沖する壯觀に接したのを景物にし た日に電車のプラットフォームで、偶然にも淺間山の爆發を望 町からたのまれて調べに行つた、洞窟の中にある池というもの 圏谷群は、いづれも特別天然記念物の中に入つたのに、日本一 て空しく歸つた本意なさを味わつた。その中に田中薫氏が槍ケ も、撥坑のあとと判つて遂に手續きが出來ず、五月のよく晴れ は、信州で指定の所まで漕ぎつけたことが一度もなく、臼田の 脇水鐵五郎博士の下で天然記念物の調査委員をして いた 私

木さんと槍ヶ岳に登る幸運をつかみそこなつたのは、かえすが

層などと、極めて類似した地變であつたと思われる。

えすも残念である。

の記事は特に興味があり、鬼押出のラーヴァを流すに先だち、 け詳しく記載した書物は絕無である。天明年間に起つた大噴火 究所長石本巳四雄博士が記した如く、一つの火山に就てこれだ 究を堂々たる著書として公にし、その序文に當時の東大地震研 この間に五十代になつて圓熟された八木さんは、淺間山

飛ばされて、山腹を轉落しながら圓味を帶びた形になつたもの された。察するにこれは新らしいラーヴァの破片が斜めに吹き 絕頂の火口から火山彈流という噴出物が、東の裾野に蒔き散ら

現象の發見者である八木さんの名を想起すべきである。 に積みかさなつている。その奇妙な景色に注意した人は、 方言が示すとおり、赤褐色の玉石になり、累々として草原の間 らしく、峰の茶屋から鬼押出に行く自動車道の兩側に、黑豆の

が出て、諸外國地質學者の眼に觸れている筈である。長野盆地 したことも、學界に重要な事實を提供した結果となり、善光寺 地盤の變位を見るのは、 に載る箇所も多く、西側の階段斷層崖に沿つて、大地震に伴う から北方の豐野にかけて、信濃川の礫層が傾いて小高い岡の上 は斷層でできたグラーベン狀の地形を示し、現に長野市の附近 地震の際に起つた地變に就ては、帝國學士院記事に短かい報告 千曲川の流域にある洪積期の地層から、舊象の化石を採し出 横手盆地で陸羽地震の時に生じた小断

悼

せた地塊が、地溝の中に落ちこんだとする可能性も無いではな い。小林國夫會員も似よつた考をもつて居るようである。 正しかつたらしく思われて來た。しかし新らしい鐘狀火山を載 岸段丘が發達し、湖面が低下したことを語る。やはり八木説が 頂丘を造る岩石によく似ている。その麓には敷米の高さに、湖 紋岩は多孔質で伊豆の新島や神津島で見るような、新らしい圓 學教室の見學旅行で、湖畔を觀察することが出來た。北岸の流 の説に疑問を挿んでいた。しかし昭和十七年の九月に東大地理 在することは、諏訪湖と同様であると考えていた私は、最初こ に堪えられ、フォッサ・マグナの西界にならぶ陷落帶の中に存 湖水の堰堤になつたと説明される。仁科の三湖は狭い地溝の中 北岸には佐野坂の附近に流紋岩の小火山體が噴き出し、それが

は耳新らしい事柄が澤山あつた。高社山の火山構造と土地利用 見つけ出したことから、高原一帶の火山形態の話になり、私に 構成する巴形の熔岩流を、私の教室の佐藤久講師が空中寫眞で に一泊した折である。十年ほど相見なかつた八木翁は、病氣の り、またそんな時代になつて居たのである。志賀山の火山體を つた。氷河問題のいきさつなども御互に笑つて話せる年にもな 回復後であつたにも拘らず、少しも當年の意氣を失つて居なか 四月であつた。上信越國立公園の視察という役目で、上林溫泉 私が八木さんに最後に御目にかかつたのは、昭和二十四年の

> は、見ていても心もちの良いものであつた。 もなく、天眞爛漫の態度で話された時にあらわれた滿面の喜色 アルカリ岩石の研究で學位を得た悦びを、むやみに謙遜するで しそうであつた。特に令息健三君が東北大學の助教授となり、 る八木さんの談ぶりは、全く老の至るを知らない人のように樂 の關係など、地理學者の興味をそそる事實も多く、それらを語

青木湖の成因に關する八木さんの解釋は獨特であつて、

湖の

望むのも無理であろうと思われる。 報も耳にして居たことであるから、この上のめでたい大往生を 歸國に先だつて長逝されたことは遺憾であるが、<br />
教授内定の快 い日の八木さんを思わせる精悍な風貌を見せて居るのである。 ジオフィジカル・ラボラトリーで勉强中の小壯岩石學者は、若 た。東大地質教室の須藤助教授が撮影した天然色幻燈の中に、 息子さんに關する消息を報じた葉書に對するあいさつで あつ どの勢であつた。私が最近に受けとつた手紙は米國に留學中の に基づく災害の對策を立てるために、野外調査に從事されたほ まで、縣の委囑で裾花川沿岸の山崩れや土壌の流亡など、地質 **橙橋芳馨ナリ」の趣きがあつた。 二十六年六月に世を去る直前** り「日旣に暮レテ猶ホ煙霞絢爛タリ。 歳將ニ晩レントシテ更 八木さんの晩年は全く惠まれた生活であつた。正に文字どお

昭和廿六年六月廿日 明治三十九年二月 日本山岳會入會(會員番號第二十二番)。 長野市狐池にて逝去さる。行年七十才。

## 百瀨愼太郎さんを憶う

## 有恒

槇

医車に揺られて大町に入るのであつたが、馬車が街の中頃を通馬車に揺られて大町に入るのであつたが、馬車が街の中頃を通馬車に揺られて大町に入るのであつたが、馬車が街の中頃を通ぎて急に西に折れると、對山館の三階建の白壁が家並の上に高ぎて急に西に折れると、對山館の三階建の白曜さんが走り出て中から長髪を眞中から分けた美しい容貌の百瀬さんが走り出て中から長髪を眞中から分けた美しい容貌の百瀬さんが走り出てら下りて來た隊や案內人達と、その人達の荷物などで混難してら下りて來た隊や案內人達と、その人達の荷物などで混難してら下りて來た隊や案內人達と、その人達の荷物などで混難してら下りて來た隊や案內人達と、その人達の荷物などで混難してら下りて來た隊や案內人達と、その人達の荷物などで混難してら下りて來た隊や案內人達と、その人達の荷物などで混難してら下りて來た隊や案內人達と、その人達の荷物などで混難してら下りて來た隊や案內人達と、その人達の荷物などで混難してら下りて來た隊や案內人達と、その人達の荷物などで混難してら下りて來た隊や案內人達のであったが、馬車が街の中頃を通

ないと思うのである。

者を魅了せずにはやまなかつたのである。それに百瀬さんは案んの先代を中心に、愼太郎さんの周到綿密で親切な扱いが登山中心となるには、それだけの理由があつた。というのは百瀬さの中心は對山館であつたのである。そして此のように對山館がの中心は對山館であつたのである。そして此のように對山館がその頃の日本アルブス登山と云えば大町が中心であり、大町その頃の日本アルブス登山と云えば大町が中心であり、大町

であるから私は此の時代の一劃を對山館時代と 稱えても過言で職業上然うであつたというには餘りに大きい 蔭の力であつた。成は又登山案內所を每年開設して便宜を計るという風に、近らしめたのに大きな力となつたのであつた。

幾多の良き案内人を輩出したことも大町をして 登山の中心地たであるとか優れた先達を立てゝ訓練と良き 傳統とを植えられ、内人組合をいちはやく組織して、 大西又吉であるとか傳刀林藏

主でもあつたと思う。
百瀬さんはこのように家業には全たく忠實な人であつたが、一面に自分の考えた道を躊躇なく進むという强い性格の持て戦争の當初その壓力のために遂に家業を廢されたのであつた可能が、

探險的登山も漸く終りを告げようとして年少の後進者達が、そ

の人達の夢を追うて未知の世界へと向うのであつた。

しなうた寂寞の感は身にしみて堪え難いものがある。

さんの生活の静かな營みを寫すかのように迫るものであつた。 簡などにはよく現われて、その美しい細やかな敍述は恰も百瀬 らしかつた。そして和歌に造詣が深かつたのみならず、同じく 自分獨りの道から仰ぎ樂しみ、專ら內面的な幸福に沈潜される 彼のように愛した山々を自由の身となつて、自分の書齋から又 文學にも年少の頃から心を寄せられた教養の高い香は、 華やかな舞臺を去つたのであつた。重荷を下ろした百瀬さんは 命を共にするかのように、我國のホテル・モンテローザもその に其の勢を消して登山の中心は各地に分散した。 恰もこれと運 達や登山方法の進步などにつれて、その役割を終えたかのよう 殊に書

あつたが、その秋を得ずに終つたのは殘念である。 に百瀬さんと往來した幸を持つ者である。 かは貴重な完成された集積として現われることを 期待したので 几帳面な努力は、その他に蒐集された數多の資料と一緒に何時 り、數十年間の友からの來信を凡て 整理しておつた百瀬さんの 私は昭和二十年から二十二年にかけての二ヶ年を毎日のよう 對山館時代の登山者の記錄を缺けるところもなく保存された それだけに老友をう

### 愼 太 鄓 さ ん

彼のように登山の中心地として榮えた大町も、交通機關の發

### 石 JII 欣

しかも最後の三人はすでにあの世で慎太郎さんを迎えているの 之吉にとつて君は親しむべく録敬すべき 慣太郎さんであつた。 辰野隆にとり山田珠樹にとり岡野かをるにとつて、 また茨木猪 百瀬君でも百瀬さんでもない愼太郎さんであつた。

だっ

淋しい思いをした。 ふとその大町にも愼太郎さんがいないことを感じて急にひどく 年ぶりである。私はいつも東山 中を走つて、やがて右前方に大町の東山が見えはじめた。十何 ヤマ――が見えると、家へ歸つたような氣がするのであるが、 の左の肩に燕の尾根がバラ色に輝いていた。電車は凍つた田の 亂れていた。それが一カ所切れて、いつもながら黑ずんだ有<br/> 三月六日、松本から北に向ら電車の中から見た空には朝雲が 

兩方の小舍との關係もあつて 私 た ち の プレイグランドであつ つた空に浮んだ。蓮華から鹿島槍にいたる山々は大澤、針の木 朝の雲はすつかり晴れ上つて午後には驚くべき雪の山が澄き

そして最初に愼太郎さんと私を結びつけた山々を一つ殘らず見 しいことであろう。私は愼太郎さんの死を弔いに大町に來て、 た。恐らくこの季節にこんなに綺麗に山が全貌を示すのは珍ら

などもまぜた一行で白馬に行き雨に降られて下山して來ると、 つた。對山館で一泊か二泊した後今度は愼太郎さんと二人で爺 立山、劒を登り大黑から大町に歸る、當時としては大旅行をや 下りたのだが、たちまち山に夢中になつた私は翌年針の木から 談などした。これは結局實現しなかつたが、その翌年、孝男君 から鹿島槍へ行つた。二人ともまだ若く、ひどく元氣だつた。 もう三十五年もの昔になる。 明科から乘合馬車で 大町に 夏が終えても山の熱はさめず、松崎紙を用いて雑誌を出す相 初めて愼太郎さんにあつた。この時は白馬に登り糸魚川 來

なつかしがつてくれた。春夏秋冬私は大町を訪れた。愼太郎さ はなくなり家のことの相談などもした。 んもまた數回東京や大阪の拙宅に來た。二人は山だけの友達で つたが、愼太郎さんは大町を離れず私の故鄕を守るように私を それから私の外國生活が始まつた。何回かあちらこちらに行 折から雨の上つた空に、雨飾山が夢のように浮んでいた。

ほどではない。第二の故郷というと大げさなようだが、實際そ ることがなくなつてしまつた。大町も勿論變りはしたが、東京 私の生れた東京はいく度か變化にあい、故郷の感じを持たせ

> の附近が年ごに親密感を増して行つた。愼太郎さんはいつでも んな氣がした。山に登ることはすくなくなつたが、大町と大町

私と一緒にいた。

で死んだという噂が立つた。それが無事に歸つたのだから、愼 太郎さんは非常によろこんでくれた。 是非大町へ來いという手 昭和十八年の一月比島へ行つた私は、敗職まぎわのドサク サ

がある。愼太郎さんが危篤で私にあいたがつているという電報 が來たのは四日の晩だつたが、どうしても五日の夜までは東京 たまたま山陰の某地から素晴らしい一級酒を届けてくれた人 後は五十數年の生涯にいまだ經驗したことがない程、仕事の量 機會にめぐまれなかつた。始の間は交通地獄が恐ろしく、その 紙が何通か來た。私も來月は來年はと思いながら、ついにその

が増した。

よう……といつた。そこにその朝逝去したという 電報が居 はその酒を小瓶につめ、これなら慎太郎さんの咽喉を通るでし を立つことが出來ない。病氣の性質はわからなかつたが、家內 父さん」に可愛がられ針の木の小屋で 夏をすごした こと もあ しそうな顔をした。二男と長男とは小學校の頃から「百瀬の小 た。私は啞然とした。折から學校から歸つて來た二男は實に悲 る。家内は家内で慎太郎さんと私の酒のつきあいをよく知つて

私はこの頃死後の生活をちよいちよい考える。どこへ行くの

いる……。

悼

迫

の凡筆には不可能である。

りと、鋭い感受性をもつた登山家の生涯を書き上げる事は、私

を把えたのであろうか。之等を現わすにも、又私の筆は餘りに

いつの日から、又どの様な機轉が主因となつて、山が彼の心

根ざした登山であつてみれば、彼の様に多面的な精神のひろが 昭 明治四十二年八月 オールラウンドなスポーツ、しかもその人の精神生活に深く 和二十四年三月五日 美木富士哉君の追悼 日本山岳會入會(會員番號二一五番)。 食道癌のため大町の自宅で永眠。 名 取三代 治

的な口調で語つた。

だに酒を知らぬはたち代の青年として、二人が山に登る日が來 に晴れて愼太郎さんと私の再會の場所を豫告してくれた。いま か知らぬが、何だかい、所があつて、この世で親しくしていた 人々に再會出來そうな氣がしてならぬ。三月六日、山々は綺麗 問題であろう。 ろうか。それは眞の登山家のみが、語られずして感知する心の も拙い。この種の問題は、何人の筆によつても、時には彼自身 によつてさえ、完全に表現し得ない種類に屬する問題ではなか

るような気がする。

月二十日発行―より転載

(以上二篇共「日本山岳会信濃支部報第三号」─昭和二十四年五

ば、私共をつかまえて尾崎喜八を、エミール・ジャベルを熱狂 附近の樂しい生活を三回にわたつて味わつた。そして歸洛すれ まで足を延し、後年彼の愛する地域の一つとなつた『山の家』 把えられたのであろう。その頃同時に、彼は遠く木曾駒山麓に はしい種々の内面的要素をもつて居た彼の天性が、しつかりと じ様に、之等の山々がもつ何ものかによつて、 旣に登山家に適 又京都の優秀な登山家の多くが、北山や比良から巢立つたと同 良山系や北山に二泊、三泊の山行をしばしば行つて居る。彼も 昭和九年彼の大學二回生の晩秋から、翌年の秋にかけて、比

い横額を見せる秋の爽快な日― 目にしみ込んだ。稜線の岩と新雪が時々雲の間から、その嚴し 印した。『白馬山麓の緩やかな疎林のカラマツの黄色が痛い程 神河内に廻つて燒岳へ登り、十一月には新雪の後立山に足跡を 彼の心の中にわき上つて來たのである。九月には木曾駒から、 のピークハンターの何ものにも屈しない氣迫をもつて涌然と、 進むべき道――より高山へ、雪と氷と岩の世界への憧憬が、 山が心の中で次第に開かれ始めると共に、眞の登山家が當然 -不歸を登り切つて、悠々と一

(177)

が愉しい」と述べて想出を残し、想出を反芻して山を行こう』を活の様にノビノビとしかも急速度に發展して行つた。この事生活の様にノビノビとしかも急速度に發展して行つた。この事生活の様にノビノビとしかも急速度に發展して行つた。この事生活の様にノビノビとしかも急速度に發展して行つた。この事まれた山行が、眞のマウンテニヤーの心をもつでする彼の初めまれた山行が、眞のマウンテニヤーの心をもつでする彼の初め時間ばかり晝寢をやつた。風のない穩かな日であつた。』この惠時間ばかり晝寢をやつた。風のない穩かな日であつた。』この惠時間ばかり晝寢をやつた。風のない穩かな日であつた。』この惠時間ばかり晝寢をやつた。風のない穩かな日であつた。』この惠

あつた。』彼もその紀行を以上の様に結んで居る。

と結んで居る。

の間にこんなに上手になつて居たのか。又必ずやつて來る』とえつた昭和十一年一月、氷ノ山では素晴しい粉雪に『俺はいつえの背後に常に嚴然と山を感じて居たのである。西穗高から歸なったのであろう。彼はスキー徳をマスターしようと云うスキーを樂しみ味わいつ」、スキー徳をマスターしようと云うなはスキー練習と云う言葉をきらつたが、その眞意は、山野

スキーを覆いて居た様な男』に出會つて、眼を丸くした。大氣焰をあげた直後、二月には打見峠で『オギァと言つてから

あまり遊び呆けて叱られそうな氣がした程に充ち足りた山行であるまり遊び呆けて叱られそうな氣がした程に充ち足りた山行で高のプリズムを透つて、そのさわやかな辯舌で表現され、再結晶のプリズムを透つて、そのさわやかな辯舌で表現され、再結晶のプリズムを透つて、そのさわやかな辯舌で表現され、再結晶のた山々が、如何に私共の山を深く美しくしてくれた事であろり。この大澤小舍での生活も又そう云つた山行の一つであった。『毎朝、私共は駒鳥の際に限を覺す。唐松の若芽は柔く、五月の空と黒い岩とは、てもなく我々をロマンチックにさせた。 同の空と黒い岩とは、てもなく我々をロマンチックにさせた。 この大澤小舎での生活も又そうな気がした程に充ち足りた山行である。

この年の一學期は殆んど毎日曜日比良の私達の小舍へ、岩登として(この岩峰は初登攀者である彼と私の名を冠せて命名さとして(この岩峰は初登攀者である彼と私の名を冠せて命名された)附近のかくれた岩場は、谷先輩と彼を中心として、くまれた)附近のかくれた岩場は、谷先輩と彼を中心として、くまれた)附近のかられた岩場は、谷先輩と彼を中心として、くまれた)附近のかられた岩場は、谷先輩と彼を中心として、くまれた)対近のかられた岩壁とは、神経の小舎へ、岩登とする、語り盡した夜が、幾夜とあつた事であろう。

しは幾多の困難なルートを開拓した。岩登りのみならずあらゆ岩登りに於ても、彼の鋭い頭腦と勘の良さ、器用な體のこな

追

撻と鼓舞を與ふる事の逞しきを思へ』と。 專一に登り行く岩壁の上より、諸兄等が曾つて覺えざる深き鞭 山行く諸兄よ。妖しくも强き登高の意慾は、うつろなる心もて 託するもよし。されど常に若き血潮に馳られ激しき生の慾求に 兄よ、麗朗と晴れし晩春の高原に憩ひて、想ひを白雲の彼方に 登れり。一時間有半の忍耐と努力もて吾等遂に登り到りぬ。諸 日、彼は小舎日誌に記して居る。『――我等二人の山男は遂に 彼の心を把えずに居るだろうか。彼の名を冠した岩峰に登つた 身に流れる冷い岩の觸感が、どうして能動的な山の幸をねがう ずに居るだろうか。ザイルと岩苔のかすかな香り、指尖から全 なより高い山を、心の中に築こうと努める彼を、 どうして把え 行爲する者にのみあたえられる山の崇高な感銘が、より全面的 充ちた態度で、屢々パーテイーを正確に且安全に導いてくれた。

私共は彼の美しい唄に聽き惚れたが、小槍西壁の新しいバリエ 的で荒凉とした世界のもつ雰圍氣は、後年彼をしてドフィーネ 活は、彼の想出と共に、同行した人々の心から永遠に消え去る 事のない若き日の一コマであつた。特に月光に輝く岩壁の壓迫 壁と北尾根に續く岩稜や岩壁。之等に取圍まれた私共だけの生 Щ その夏は岩登りを中心とした千丈澤生活が行われた。小槍西 ョンル 、々を憧れしめた原因の一つではなかつただろうか。 1トの登攀途上、 私の肩にのつて、蛇の様にオーバ 夜每、

> 郎君(京大旅行部) 十月には鹿島鎗を目指したが、三ノ澤でパーテイーの足立太 ハングをのり越した彼でもあつた。 遭難の悲劇にあつた。 同月奥穂高を目指し

この時は吹雪に阻まれて登頂を斷念した。

る山にかけて、彼の正確な判斷、鋭いルート發見の勘は自信に

1

ヤン・ジャァナル」は第二卷を缺くのみで、バックナンバー 的であつた。英獨佛の山岳書は學生時代から愛讚し、 十七)を發表して居る。精神科を志すだけに、語學の才は天才 ュの研究を始め、『ラ・メイジュ登攀史』(「探檢」第一號 不足からくる物足りなさを代償してくれる爲』に、ラ・メイ てこの山に挑んだ先人の果敢な戦闘精神が、 る。例えばラ・メイジュは、彼のこの様な『永遠なる山』の一 續け、 れて、有形無形のハイマートベルクが形成されて行つたのであ らなる永い間の思考の集積が、彼の心の中に再結晶され歸納さ は心の中で燃え立つた。蓄積された經驗への回顧と、それにつ つとなり、『この山から受けた壓迫感と、その壓迫をしりぞけ であつた。 ると共に、山から遠ざかる人々は多いが、彼の場合は寧ろ反對 ら母校勝教授の許で「脊髓神經細胞の診透壓」に関する研究を 昭和十二年三月卒業と共に、兵庫縣立精神病院に勤務する傍 昭和二十年醫學博士の學位を授與された。社會生活に入 山行の數こそ幾分は滅じたが、却つて內面的な山 私の日頃の行為の

前記『メ峰登濠史』その他、仲間の研究會で發表した數々の 揃えて居た。『メルクルの生涯』(「山小屋」百十號・昭十五)

しむに充分である。 窓にその日を見るに到らなかつた。この一事だけでも、彼を惜 た。彼は次から次へと行うべき研究の計畫を語つてくれたが、 究は、市井にあつても消える事のなかつた山心の 造作 で あつ

ない己の運命を感じたと告げて居る。その様に彼と山とのつな 死んで行く様に沈む冬の太陽、 ら生れたものであつた。 がりは、嚴肅な、意志的な登行その他一切山での行爲と反省か の白い冷い夜と氷と雪の中から、最早永遠に逃げ出る事の出來 十一月には奥穂高に登頂し、 壓迫的な靜寂と景觀の中で、こ 前穂高頂上のピヴーク場から、

罹り、還送され、內地で勤務中、

島で爆撃にあつて戰死した。

十月、大河原と鎌ケ岳頂上に寢て、愛知川上流を步いたのが、 山系に入つて、毘沙門岳、大日岳に登頂して居る。昭和十五年 入つた爲に、ようやく山行の暇は滅じた。しかし二月には白山 子江岸安慶に流遣されたのである。鎌ヶ岳でのビザークの時、 私と彼との最後の山行となつた。數日後私は召集され直ちに揚 に接し、先輩として、山男として涙ぐましい活動を行つた。 員と共に南アルプス仙丈岳に登頂したが、 流暢な紀行文は前記の樣に發表されて居る。十二月には新進部 た山男は居なかつた。この山行の直後は木曾駒に出掛け、その 美しいポーズであつた。思えば、彼程、とかげ姿のよく似合つ ノンビリと<br />
寒轉んだ彼の<br />
屈託のない安息の姿は、<br />
實に見事な程 昭和十四年には、全く神戸の父母の下に定住して結婚生活に 別動隊の赤石嶽遭難

> であろう諸々の感情がしのばれて悲痛の感にたえない。その年 は、かえつてこの短い言葉の中に、當時彼の心の中に去來した 最後の言著となつた。彼とこの小舍との生活を知るかぎりの者 誌と『山旅』(京都府立醫科大學旅行部々報)に残された、彼 する』と言葉少く小舍日誌に書き込んで行つたが、之が小舍日 の十月、召集されガダルカナールに向つたが、 『學生時代の山が思い出されてなつかしい。 胸のつまる思いが 昭和十八年五月一日、神戸商大生 二名 と、比良山莊を訪ね 昭和二十年一月十三日知多半 悪性マラリヤに

温く見守つて居られる。 彼は私より二級先輩であつたが、私と彼とが、山を通じて交

長男山君が、私共とはまた異つた愛情と想出の中で、彼の靈を

遺された神戸の家庭では、慈愛にみちた兩親と郁子未亡人、

山行に於てのみならず、日常の生活にまで、好き影響と指導を 李の底深くに之等のものをしのばせて歸つたのである。 友をはじめたのは、昭和九年からであつた。山仲間の常として れた事であろう。その想い出の爲だけにも、 友を續けた。私の應召中送つてくれた勝見勝氏の『山に開く窓 業した後も、彼は京都に、私は神戸に訪ね合つて、變りなく交 興えてくれたのは、<br />
谷博先輩と彼の二人であつた。<br />
お互いが卒 シニョルチューの美しい複寫は、如何程私の心を慰めてく 私は還送の際、 行

が、昭和十六年頃上洛のみぎり、旅行部ルームの日誌に書き殘 登り、發表し、批判する事を飽くまでも貴しとしたこの登山家 に、山行がその人の精神生活から根ざして居る限り、 した山への認識を新しくする事によつて、私の追悼を、彼のみ こよなき生活への教訓でもあつた。從つて行動と反省、想い、 もつ教訓は、單に山行のみならず、本文の冒頭にも記した様 次の引用文は『登山意識』と云う題名であるが、この文章の 私には又

魂の前に捧げたい。

有する程度によつて、私達は眞の登山家として、その價値を云 識と云うものは、決してその價値を失うものではない。それを ない。私達がその限界を守り、更に又着實な向上を目指すなら 異がある故である。私達は正統流と否とはさておき、少くとも に足らない。と云うのは、要するに登山意識に於て確然たる差 る發展を爲すとも、それは虞の登山家達にとつては、何等とる 々されるであろう。現在の群小大衆登山家が技術に於て如何な を獲得すべく努力しなくてはならない。』 アカデミーカーである以上、決して大衆登山家に墮してはなら 『登山の様式は進歩し、變轉するが、古來のすぐれた登山意 「山旅」第二號(昭六)の卷頭にもある様に優れてよき魂

昭和十三年五月 昭和十二年三月 日本山岳会入会(会員番号一七三八番)。 京都府立医大卒業。

> 昭和二十年 昭和二十年一月十三日 医学博士の学位授與。 戦殁。

## 入江保太氏を偲ぶ

前 田 光 雄

學に學ばれた。當時三高文科と兩方の入學試驗に合格しながら の片鱗が偲ばれる。 同志社を選んだあたり、ありきたりの經歷を好まなかつた氣性 れ、同地の小學校を經て昭和五年岡山一中を卒業され同志社大 入江保太氏は明治四十五年三月三十日、岡山縣西大寺町に生

を得られた。 たり、その他缺食兒童救濟の助けをしたりして種々様々の經驗 をしたり、大本教でやつていたエスペラント會に入つて勉强し 面に關心を持つた氏は國立長島癩療養所で近頃いうアルバイト た時が氏の社會運動への關心の最初であつたというが、この方 八才にしてその日のおやつ代をドイッ人亡命者救濟に寄附し

岸線は一と通り、それも冒険探検式の無銭旅行をやつたと號す 故岡村正輝氏の紹介であつた由であるが、それまでに日本の海

同志社の山岳部へ入れられたのは昭和七年秋

(豫科三年)で、

の藪をといだとか、日高の海岸線の驛遞をたどつた話とか、仲 境線のワンデルングや、北海道知床半島でうしろ向きに羆の路 無いのは遺憾であるが、よく話題に載せたものだけでも樺太國 るあたり、地道な登山家としてより天來のエクスプロラーであ つたといつた方がふさわしいであらう。この時代の記錄が全く

仲良い經驗を積んだ様子である。

夜道を歩いて下宿に歸るという、「ケタ……桁外れ」の綽名が 座の顔見世興業は缺かした事がないが、芝居がはねれば二里の ようとの考えからであつた。その反面歌舞伎など仲々の通で南 常の生活を極度に切詰めて、學資から休暇中の旅行費を捻出し 校へは歩いて通うという簡單な生活をする無神經さ、それも平 葺山の番小屋と稱せられた別莊番の家を下宿として自炊し、學 生來のボヘミアンであつた氏は、京都においても松ケ崎の松

遠征隊のリーダーとして樺太へ行つた際、連絡が途絶えて遭難 を氣遣われた時も「スキーの下手なのが心配」と現地の新聞に 加したのが始まりで、その後もスキーは大して上達せず、後年 山岳部員としての行動は昭和七年春關溫泉のスキー合宿に参 ぴつたりと合う性行であつた。

したが、二千五百米附近でスリップしたり、スキーの下手なの 勘次氏と早月尾根をアタックし、十七時間のアルバイトで完登 書かれた程度のものであつたらしい。 大きな山行の最初として、昭和八年三月當時のリーダー兒島 を主宰する様になつて以來、ある程度のジャーナリズムの利用 山を各々の主觀に基いて樂しもうとする和かな集りであつたの であるが、昭和八年秋、氏が學生聯盟の常任委員に推され、部

も手傳つてさんんく苦勞したらしい。

棒にも惠まれぬ方であつた。かく正常な過程を經ずしてリー 等と、享樂的なものゝ一切を切捨てようとする理念のため、相 最低限まで引下げ、經費を切詰めて残金は次の山行に宛てよう また洗練された若紳士方の多い同大において、町も山も區別の 無い氏は異端者としてさほど重きを置かれず、更に食糧の質を つた計畫の下に山行をつどけた兒島氏と對蹠的な面もあり、且 員と行を共にする様になつたが、よくトレーニングをし系統立 ともあれこの頃から嚴多期の手强いルートに興味を持ち、部

し、これが氏の病氣になられた遠因となつた樣にも思われる。 感を受けた人も二三に留まらず、又ひいては心臓肥大症を起 むしろ貧弱な體軀に十貫以上の荷を負う事が度々で、傷々しい 力で拮抗しようとしたため、トレーニング不足の氏は小柄な、 が野心的にのし上つて居る樣にも取られ、人に侮られぬ樣精神 信條と一致した行動をとつた譯である。、他からは實力無き者 と同じく一段一段の階梯を經ず常に飛躍を必要とする」という 新人と二人で入るといった様に、その論理たる「人生そのもの **ダーに伍した氏は、**雪崩の巢といわれる六月の黒部へ、全くの それ迄の同大山岳部は全くの合議制ですべてを協議計畫し、

みでなく當時の關西學生登山界の中心を占めて居た。ただ入江

の様な悪場漁り等何の役にもたゝないという見解が、

入江氏の

せようとし、これが同大山岳部の轉換期にあづかつて力あつた と共に、他校と同じく部を一丸とする集中登山の方向に推進さ

の白頭山遠征計畫(京大によつて行われたものと別)によつて の行詰りを打解しようとする氣運が漸く濃く、それが兒島氏等 クロバットを追うか、無意識にマンネリズムに陷つて居り、こ **眞に價値ある僅かの残されたバリエーション以外には極端なア** という事が出來よう。 つのエボックを作つたともいえる狀態であつた。 當時の關西學生登山界は、積雪季初登攀も一段落した時とて

めようとする意向が强く行動に現われて居た。ヒマラヤへのト 登攀の探求であつたが、源を探検旅行に發した事とて未知を求 ス設定までに多大の勞力を拂つた後の登山であるが故に、曲聽 はアルプスの様に汽車、自動車からすぐ入れる山でなく、ベー 様式を變える事によつて價値を見出すという行き方、ヒマラヤ 賢しいバリエーションよりビッグ・クライムの第二、第三登に ネージメントを習得し、また大遠征への動機となる様に邊境登 レーニングはヒマラヤでとの理想が空論に近い以上、遠征のマ のは處女峰、初登攀路、人間の征服領域擴張の意味における初 氏の純正登山に入つてからの掲げた旗幟も、登る價値あるも (當時國內遠征と稱した) に重點を置き、內地での登山は小

> つたかとの疑問も持たれよう。 氏は、國內遠征等に較べ新人育成の面がやくおろそかではなか

ブ

根、カクネ里と東谷―十字峽を一氣に完登すべく計畫され かつた。第二年は更にパーテイを交互にサポートさせて東 定のテントも用いず、早々にキレット小屋を後にせざるを得な 助かつたが、装備の紛失、ザイル火傷、打撲傷で黒部に使ふ豫 として攻撃した。しかし主稜左側二千三百米附近のオーバーハ 錦一氏と八方尾根から國境尾根を經て八峰キレット小屋を根據 月これを計畫した。第一年は北壁登攀後黒部を渡るべく、神野 断の未完登はとりも直さず氏の宿望であり、昭和九・十年の三 スにおける積雪季の問題の二つの焦點、カクネ里北壁と黑部積 ングでスリップし、二十餘米のバーチカルフォールも奇蹟的に それにしても氏の計畫は大きな物が多かつた。當時北アル

みた譯であつた。 う様になり、その大衆を基盤として大衆の後接を得た登山を夢 その結果はジャーナリズムを利用しての大衆への啓蒙宣傳を行 を他人にも傳道宣傳しよう、またそうするのが當然と考えた。 氏は社會運動に關心を持つだけに、自分に與えられた「山」 が、これまた大冷西股小屋で病人續出の爲挫折して居る。

尾

翌十年秋重任して庶務委員(當番校)となるに 及んで氏の政治 的手腕はます~~好え、その多くは流産に終らうとも、華々し

昭和九年秋、氏が推薦されて關西學聯常任委員となり、

馴染の喫茶店も追出される時間になると 委員會はうどんやへ移 つこめるのが常であつたが、いつの委員會も脱線また脱線、 日比野氏と私が止め役に廻ると、案外入江氏は溫和しく案をひ 計畫を神商大の故山本明氏が正面からこれを反駁し、神商大の 昭和十年度の委員會は殆ど大阪で開かれ、入江氏の奇想天外の く合同登山を行おうとした事等特筆すべきものが有つた。その 額

轉し、茶色の古びたソフトをあみだに冠り、ブラシをかけた事

であった。

み易く、事を起し易い所であつたらしい。 島氏の後釜として無條件に敬意を表する大阪は、氏にとつて住 と別行動をとる如く思う人の多い京都に對して、同大の統帥兒 會にも招かれざる客として出席する氏、部のメイン・カレント であつた。他校の情勢を知り悉そうとして、どこの學校の部員 もなさそうな制服にヨタヨタの鋲靴姿の氏の歸洛は終電車が常 當時聯盟內において關學、大阪商大、大阪藥專三校合同のヒ

がつく様になった。との他氏の庶務委員時代は府立京醫大の脱 の後このグループの故福田源五郎氏の同大入學により仲直りも 心とするグループが互に成長しつく對立を深める傾向にあっ マラヤ研究會なるものがあり、これと對應する浪高、 つ込もうとして薬専の故野口榮一氏に手痛く反撃されたが、そ 同時にこのグループの中心であつた山中正之助氏とも連絡 (前者の屋久島、後者の濟州島遠征がその一つの現れであ 例によつて氏は、この、内部情報を摑む爲に前者に首をつ 關大を中

退、盛岡英治郎氏の資格踪失と七人の常任委員が二人まで更迭

われて居たが、それにも増して登山界に旋風を起そうとしたの という藝を持つて居た氏は、記者として變り者ながらかなり買 者として社會への第一歩をふみ出された。「足で話をきゝ出す」 する等、どたどたが續いた時代であつた。 昭和十一年學窓を後にされた氏は、大阪時事新聞社會部の記

50 始めた。折も折、立教大がナンダコートへ遠征隊を送った事 以來の腐れ緣の私等を持つた氏の活躍は、その秋から表面化し という意欲が昻まつて來た事も直接の動機となつたといえよ の持論たる全國民を啓蒙して遠征隊を送出す基盤を作出したい 様なものにしかなり得なかつたという點への忿懣から、かねて た持續性のあるものに對し、「勝てば官軍」式のその場限りの アー、メルクル等の遠征隊の様な國民全般の基盤の上に出され が、氏等にとつて出し拔かれたという氣持や、その遠征がバウ 前に述べた様に事を起し易い大阪、しかも女房役として學聯

力された。氏が閼西の三重點と稱した藤木九三氏(對一般)加 體との間の溝を取除とうとする意向を持つて居た故北條理一氏 および山中正之助氏と協力して、その組織を作り上げようと努 を私に背負い込ませた氏は、當時實業團體と學生およびOB團 既に新しいOBを中心に學聯OB團體を作り上げ、 事務中心

見本の様な「山のつどひ」を他の實業團體、OBの目ぼしい連 わゆるフレームと稱した所の、中心の有つて外郭の無い團體の 岩永教授や小島榮氏といつた知名の士をかつぎ出して、氏の謂 及ばず、得意のジャーナリズムをあふるテクニックで、 納一郎氏(對インテリ)今西錦司氏(對學生)の三氏は申すに 又氏の論理の一つたる「社會と共に山の社會も時代に從つてそ め時勢の波によつて統制團體結成の方向へ動いたが、(これも 中の協力を得て結成した譯であつた。との團體は戰爭勃發のた あらゆる方面に努力した人であつた。 學生時代からの山行を見 が踏襲されて居る程である。とにかく、氏は遠征隊を送る爲に としてかなり長い間関西の岳人に親しまれ、戦後も尚との名前 の內容と型式を變える」と一致しているが)各團體の横の連絡 (大津氏)、同志社高商(竹内氏)等々とバーテイを組んだ記錄 氏、山縣氏、故湯淺氏)、浪高(盛岡氏)、關學(宮內氏)、東齒 が質に多いのに氣がつく。 一校より多數校合同が力が强いとし、自らも立教(小原 阪大の

(赤柴部隊) に召集され、八月九日北支へ出征された。 は相當の打撃を與えた。 輜重輸卒の氏は早速岡山步兵第十聯隊

の便りに交つて、獨特の惡筆の氏のハガキが見出されたのはそ肚な氣持というか、自からのヒロイズムに醉つて出征した連中軍の御先棒をかついだジャーナリズムにあふられて、一種悲

その後西日本山岳聯盟―日本山岳聯盟と 次第に後退しつ」もをかたりとも正統的登山を合法化させようとする聯盟派と、行幾分なりとも正統的登山を合法化させようとする聯盟派と、行幾分なりとも正統的登山を合法化させようとする聯盟派と、行後のたが、常に政治的手腕を揮う氏は殊に何でも人に押しつけなつたが、常に政治的手腕を揮う氏は殊に何でも人に押しつけなつたが、常に政治的手腕を揮う氏は殊に何でも人に押しつけなったが、常に政治的手腕を揮う氏は殊に何でも人に押しつける點から相當の敵を持たざるを得なかつた。

に轉じ體力部に籍を持たれたが、この新家庭も長く續かず、十信子さんと藤木九三氏の媒酌で結婚され、間もなく朝日新聞社昭和十六年四月、クラブ・エーデルワイスの頑張り屋、佐伯

憧れた蘭州の西にあるという 雪嶺と 似て 奇しき 偶然と いえよ **藝多才の人であつた。雄心院蘭岳清澄居士の戒名は、氏の生前** て、涿に十九年三月五日逝去された。誠に惜みても餘りある多 たが、あのタフな 氣力の强い 氏も 度々の大喀血に 衰弱し切つ える。夫人の他所目にも羨しい程の御看病は三年目の春を迎え の東上や、十六年二月の大山錬成會も發病の一因であつたと思 て十五年暮から十六年にかけての日本山岳聯盟結成の爲の度々 六年夏の再度の召集には病氣の爲即日歸鄕となり、八月福泉園 療養所に入られた。新聞社の非健康的な勤務時間、それに加え

## 略歷並登山年譜

七年十二月 昭和七年入部までの記錄は全く不明 關温泉スキー合宿と菅平

Ξ Ŧi. 月 月 穗高逆縱走、小槍、 劔岳早月尾根

八年

臺灣—南湖大山、新高主山 南山東山(臺灣山岳會、 立教大と合同)

臺灣紅頭嶼、能高越、タロコ淡

大米下コンゴ谷(同高商と合同)

十二月 富士山 十一月

と合同)

十二月

九年

Ξ

月

鹿島槍カクネ里北壁

白峯北岳バットレス(第六尾根) (立教大

> 七月一八月 Ŧî. 月

アゾ原一劔岳 ジャバ及び英領スマトラ

月 鹿島槍カマ尾根

十年

四月一五月 月 白馬岳、朝日岳

小長白山脈、冠帽峰 太郎兵衛平

十二月 一月 金剛 (集仙条)・赴戦高原 樺太東北山脈

(浪高と合同)

立山温泉一館ヶ岳 北千島阿賴度島幌莚島

十二年五

十一年五

利尻島 (足立源一郎氏と同行)

十五年十一月 常念岳

十六年二 华四 大山

十九年三月五日

病歿 日本山岳會入會(會員番號第一九〇六番)

(186)

# ヒマラヤン・ノーツ

# マウント・エヴェレスト

ション 一九五一年——

一九二一年」に記されてゐる。"terribly cold and forbidd-九二一年」に記されてゐる。"terribly cold and forbidd-九二十年」に記されてゐる。"terribly cold and forbidd-九二十年」に記されてゐる。"terribly cold and forbidd-九二十年」に記されてゐる。"terribly cold and forbidd-九二十年」。

隊員は左の通りである。

トンは述べてゐる。

登山を始め、アルプスにも多くの經驗を持つてゐるが、ことにW.H. Murray(マリ)――一九三五年(當時二十二歲)から

ing under the shadow of Everest ..... to traverse into the

スコットランドの冬期登山に經驗の深いことは、その著書"Mountaineering in Scotland", "Undiscovered Scotland"によつても知る事が出來る。一九五○年のガルワァル・ヒマラヤへのスコットランド・パアテイのリーダーであつた。ヒマラヤへのスコットランド・パアテイのリーダーであつた。

 ray; Dent, 1951——「山岳」本號、次項参照)

T. Bourdillon (ボアディラン) (バディリアン等の酸み方もジョオンズの酸音解書にある)。アルプスでは 三シイズン登らジョオンズの酸音解書にある)。アルプスでは 三シイズン登ってある。身長六呎以上、體重十五ストオンなので今度の度々のてある。身長六呎以上、體重十五ストオンなので今度の度々のである。身長六呎以上、體重十五ストオンなので今度の酸み方十七歳。

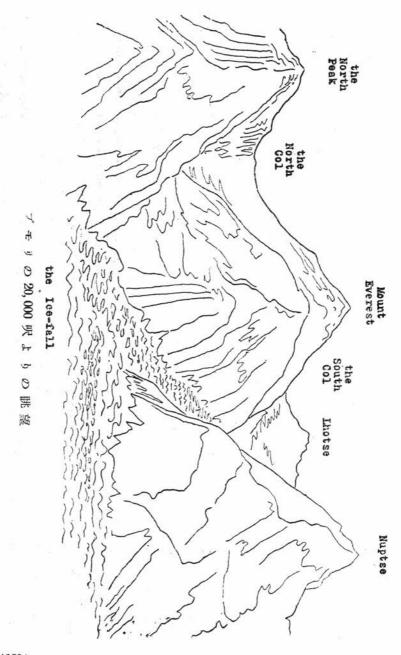
ラムも多く步いてゐることはその著書が語つてゐる。一九四九のエヴェレスト・エクスピデイションに加つてゐる。カラコオのエヴェレスト・エクスピデイションに加つてゐる。カラコオー九三三年、一九三五年(リーダー)、一九三六年、一九三八年のカメット登頂に、

年以來 Kunming の總領事であるが、その前、一九四〇一四二年、一九四六一四八年の四年間 Kashgar の總領事であつた。一九〇七年に生れた。 著書—— "Nanda Devi", 1986; "Black on the Map", 1988; "Upon that Mountain", 1943; "Mountains of Tartary", 1951.

Riddiford (リディフォド) と E. P. Hillary (ヒラリイ) とが Riddiford (リディフォド) と E. P. Hillary (ヒラリイ) とが 参加してゐる。シブトンがロンドンをたつ數目前に、ニュージ ーランド・アルパイン・クラブの 會長から同じ年の夏ガルワァ ル・ヒマラヤへ入つてゐた四人のニュージーランドのアルピニ スッの內のとの二人の参加の申込があつたのだが、シブトンは スッの內のとの一人の参加の申込があつたのだが、シブトンは これを快諾したので、九月八日にネパルのディングラ (Dingla) でイギリスの連中に追つき、それで、一行は六人となつたので あつた。

## ×

數を要した。途中のディングラを出たのは九月十日で、そこか別を要した。途中のディングラを出たのは九月十日で、そこかのようでであり、「Jogbari」に着いた。ジョグバリからナムチェ週にジョグバリ(Jogbari)に着いた。ジョグバリからナムチェ週にジョグバリ(Jogbari)に着いた。ジョグバリからナムチェ週にジョグバリ(Jogbari)に着いた。ジョグバリからナムチェ週にジョグバリ(Jogbari)に着いた。ジョグバリからナムチェ週にジョグバリの大は八月の最終でリ、ワアド、ボアディラン、シプトンの四人は八月の最終でリ、ワアド、ボアディラン、シプトンの四人は八月の最終である。



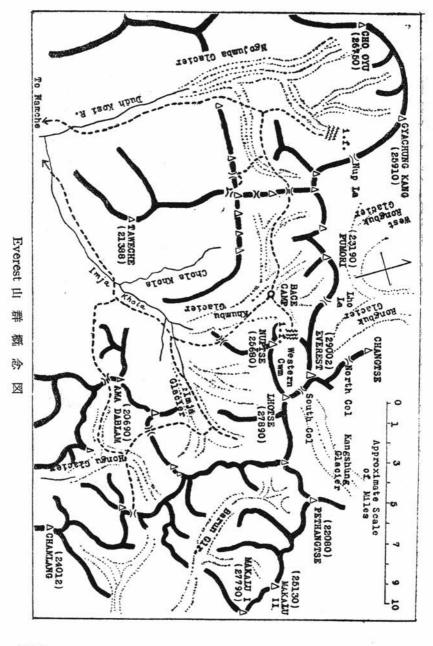
らは、四十二名の地方のクーリーズと十二人のシェルバスをついは彼等にその家郷で會ふ事を大變 たのしみにしてゐたのだつと。そして、その風景の美しさに打たれた事よりも更に、多くの舊友に會ひ、そのシエルバたちの心のこもつた歡迎を受けたの舊友に會ひ、そのシエルバたちの心のこもつた歡迎を受けたの舊友に含ひ、その無景の美しさに打たれた事よりも更に、多くの舊友に含ひ、その無景の美しさに打たれた事よりも更に、多くの舊友に含ひ、その無景の美しさに打たれた事よりも更に、多くたちうちする事は到底出來ないだらう)とシブトンは書いてゐたちうちする事は到底出來ないだらう)とシブトンは書いてゐたちうちする事は到底出來ないだらう)とシブトンは書いてゐたちうちする事は到底出來ないだらう)とシブトンは書いてゐたちうちする事は到底出來ないだらう)とシブトンは書いてゐ

たのは二十九日であつた。河の調査を先づ行つたので、その頭にベイス・キャンプを設け持つてザ・ウエスタアン・クウムの踏査に入つた。クウムブ氷井ンスチェに二日滯在。九月二十五日から、十七日間の食糧をナムチェに二日滯在

九月三十日にリディフォドとパサン (Passang) とはアイス・フォル (the ice-fall) の下部の半分までの調査に成功。ヒラリフォル (the ice-fall) の下部の半分までの調査に成功。ヒラリフィン・ロース・フォルのに表している。

の狀態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。の状態の悪い時には非常な注意を要するものと思はれた。

未だとの高度での仕事にアクライマタイズしてゐないものがあれた。三日は惡天候、四日は好天氣、そとから二千呎上の上部アイス・フォルの殆んど頭にまで登り得た。この登りは雪の狀態が悪く困難だつた。頭から三十呎に滿たない處まで登つた時に、悪く困難だつた。頭から三十呎に滿たない處まで登つた時に、小さい雪のアヴァランシュに遭つた。幸ひ被害はなかつたが。一まづ、此の方面を退いて、今度はエヴェレストの西部及び一まづ、此の方面を退いて、今度はエヴェレストの西部及び一まづ、此の方面を退いて、今度はエヴェレストの西部及び一まづ、此の方面を退いて、今度はエヴェレストの西部及び一まで、此の方面を得になると、もう一つは一行のうちに雪の狀態の改善を待たうとしたのと、もう一つは一行のうちに雪の狀態の改善を待たうとしたのと、もう一つは一行のうちに



ブ氷河のベイス・キャンプに戻つて來た。 つたからだつた。ヒラリイとシブトンとは 九月十七日にクウム

るのを見たばかりであつた。軽装のクライマアの一隊が長いロ 火を浴びる事になる。それでは、右方はとさぐつて見たが、た やうに思はれたのだつた。それに上部のクリッフの氷塔も今に だが、この希望も短命であつた、といふのは、まるで地震でも この日こそグレイト・クウムに入り得るといら期待を抱いたの 千呎を一時間二十分で登り得た。天候は良く、希望は湧いた。 仕事は始められた。二十三日にアイス・フォルの半分にあたる い事は確かであつた。最後の斷定は他の隊員の歸來後の相談に いが、荷をもつたボーターの一隊をつれて行くことの正しくな も崩落ちかかつて來そうだ。左方へ避けることは氷河からの砲 てクライマーズの立つてゐる全地面が底知れぬ奈落へ顧落する 氷塊を碎いてクレヴァスに落した時すさまじい地ひょきが續い た。それらの横斷にひまもかかつたが、ヒラリイが、たまたま 起つたかのやうに著しい變化が、そこに起つてゐたからであつ ープを使つてこのアイス・フォルを横切る事は可能かもしれな ×ひどく破壞された地帶が、豫期の出來ない深さへ落込んであ アイス・フォルのフットに再びキャンプを設け二十二日から

日に 今 度は 全隊員が三人の シエルバ Angtarkay, Passang,

Nima を伴れて再びアイス・フォルの上部は荷を持つた人々の侵すべた。三ッの別々のロープによつて登攀、シャタード・ベルトを通過、アイス・フォルの頭に到達した。そこからクウムの床がゆるやかにローツェのフットにまで、つながつてゐるのを見上ゆるやかにローツェのフットにまで、つながつてゐるのを見上がるだい。三ッの別々のロープによつて登攀、シャタード・ベルトを通過、アイス・フォルとタックルする為に出發し

き處ではなかつた。

以上の如く、このグレイト・アイス・フォルに安全な登路を

沿つて入つて行った。一つの高いパスを越えてチョ・オュースンプを設ける事も出來なかつた事には落膽したが、他方、これを充分償ふ事があつた。即ち、エヴェレストの周圍の素晴らしい地域を廣汎園にわたつて採る事が出來たからである。

十月にアイス・フォルへの二回の訪問の間に、それらの仕事は行はれた。マリ、ボアデイラン、リディフォド、ワアドはクロムブ氷河の西方未踏調地域を通りプモリ・レインジの南側になって、the Western Cwm そのものにキャンプを設ける事も出來なかつた事には落膽したが、他方、これを充分償ふ事があった。

は甚だ困難なものであつた。ヌブ・ラにまだ三日を要する處でら落ちてゐる犯し難いアイス・フォルに挑みかかつたが、それ(圓谷)に入る事に成功した。そこからヌブ・ラ(Nup La) かかのはだ。の南方絶壁によつて 抱かれてゐる大きな「シルク」

(Cho Oyu, 26750 ft.) とガチュン・カン (Gyachung Kang,

食糧の不足をきたして退いたのであつた。とのコルを越せば東

のコルへ登つて來てゐるが越してはゐない。ロンプク氷河が行手にある。一九二一年にもチベット側からと

ド測量部の Dr. Dutt が廣汎園の測量を爲し得たのも大きな收めるイムジア・コラ (Imja Khora) (河)の上部床からホングウ氷のるイムジア・コラ (Imja Khora) (河)の上部床からホングウ氷の信はで)へ達するバスを見出した。又、九月に隊に加つたイン時を同じくして、ヒラリイとシプトンとはエヴェレスト・マード測量部の Dr. Dutt が廣汎園の測量を爲し得たのも大きな收りを同じくして、ヒラリイとシプトンとはエヴェレスト・マード測量部の Dr. Dutt が廣汎園の測量を爲し得たのも大きな収りが可能を同じくして、ヒラリイとシプトンとはエヴェレスト・マード測量部の Dr. Dutt が廣汎園の測量を爲し得たのも大きな収ります。

の全部を見せたのだつた。

穫であつた。

ラブチャ (Tesi Lapcha)(峠)を越してレインジの西方 Rolw-のの一つに相違ない。ヒラリイ、リディフォド、ダットはテシ・のの一つに相違ない。ヒラリイ、リディフォド、ダットはテシ・で去ってゴリ・サンカア (Gauri Sankar) レインジをロンシャル・チュ (Rongshar Chu)(河)の方にまで全域を探る計畫に移い。この河はアルン (Arun)(河)と同じやうにヒマラヤの主のた。この河はアルン (Arun)(河)と同じやうにヒマラヤの主のた。この河はアルン (Arun)(河)の方にまで全域を探る計畫に移い、その一つに相違ない。ヒラリイ、リディフォド、ダットはテシ・スイス・キャンプからナムチエに戻つたのは十月三十一日でベイス・キャンプからナムチエに戻ったのは十月三十一日で、イス・キャンプからナムチエに戻ったのは十月三十一日で

ン、エヴェレスト、ローツェそしてマカルが惜氣もなくその姿眺望は誠に素晴しいものであつた。チョ・オユ、ガチュン・カー月六日約一八、六〇〇呎の一峰に登つたが、その頂上からのヴァレイ(Pangbuk Valley)に入つたワードとシブトンは十ベットへ出るトレイド・ルートはこゝを越してゐる。バンブクベットへ出るトレイド・ルートはこゝを越してゐる。バンブク

十一月八日にシェルバ Sen Tensing をつれ、七日の食糧と一テントを持つてメンルン・ラ (Menlung La) を越えて他の側の氷河に降りたが、從來、"adminable snowman"として我々に知られてゐる、未だ實體を確められない、あの生物の奇怪な足跡を見たのはそこであつた。メンルン・ラを越えて來た他の隊員及び殘るシェルバスと合して十一月十四日にラモバガルの隊員及び殘るシェルバスと合して十一月十四日にラモバガルの隊員及び殘るシェルバスと合して十一月十四日にラモバガルの隊員及び殘るシェルバスと合して十一月十四日にラモバガルの隊員及び殘るシェルバスと合して十一月十四日にラモバガルの隊員及び殘るシェルバスと合して十一月八日にシェルバ Sen Tensing をつれ、七日の食糧と中デぶ事にした。高度は二三、五六〇呎である。

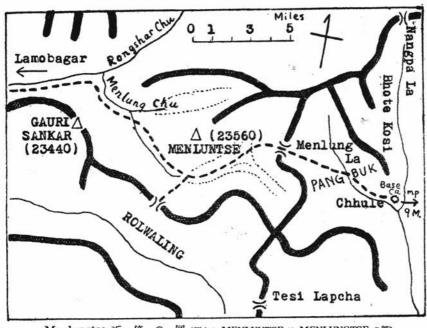
Lamobagar から Charikoh を經て一行が無事にカトマンド

×

ゥに歸着いたのは、一週間後であつた。

との部分はローツエ――ヌブツェの巨大な壁並にエヴェレスト的はエヴェレストへの南西からの登路を探し出す事にあつた。記述を最初に戻して、今度のエクスビデイションの主要な目

O呎以上)へ向つた。ソラ・クウムブ (Sola Khumbu) からチ四日の食糧を持つてナンバ・ラ (Nangpa La)(高度一九、○○(河)に沿つて Chlule に到着。そこからボアデイランとマリは



Menlungtse 近 傍 0 図 (圖中の MENLUNTSE は MENLUNGTSE の課)

狭い谷が隱されてゐる。一九三五年のリコニサンス、 0 の所まで入つてゐる。ウエスターン・クウムには入れなかつ る事が出來たのであつた。右のヒマラヤ に西方にある Lingtren へ登り、そこからクウムの入口と、 ン・クウムの全貌は眺められる事だつたらう。その代り、 惡天候によつて爲し得なかつたが、その頂からはウエスタア Journal, Vol. VIII. 1936)。そして、一九三五年の夏ウエス ウム」である」とシプトンは書いてゐる。(The Himalayan 谷の奥にある今まで殆んど未知であつた『ウエスターン・ク するノース・ウエスト・リッデ、他は、 れてゐた。 な目的の一つとされてゐた。「二つの新しいルートが擧げら ビデイションには從來の登路に代る西からの登路の調査が **値が掲載されてゐる。** 一千呎下方クウムブ氷河へ落ちる巨大なアイス・フォルを見 ト・ロンブック氷河を登つたのであつた。プモリへの登攀が 「ヌプツェの北面とザ・ウェスターン・クウムの一部」の寫 九二一年リコニサンスで the Western Cwm と呼ばれた 南西面それ自體によつてさへぎられてゐる。その中に 1 九五〇年の秋に Oscar Houston (ハウストン) ストンと共に、クウンブ氷河を北にロ・ラから四マイル に参加をするめられたテルマンはドクタア・チアルス・ 一つはセントラル・ロンブク氷河の頭部から隆起 クウムブ氷河を含む · ジァナルには のパ 工 7

更

のと考へなければならない。今度のアイス・フォルが正にそれ

びエヴェレストの南側について』)(ヒーウマストンーセンシン)といった。 でアルーーー 九五一年五月號記載『アンナブルナ・ヒマル及ス』な箇所であらうと私は思ふ」と書いてゐる。 (アルバインがあるならば、ウエスト・クウムからであるがアドヴァンスドがあるならば、ウエスト・クウムからであるがアドヴァンスド

ある。

「ザ・サウス・コルへ到達する唯一の登路は、もし可能性

今度のエクスビディションの収穫として次のやうな事をシブトンは記してゐる。第一にウエスターン・クウムからエヴェレカサイティング・サアプライズ」であつたと書いてゐる。このクサイティング・サアプライズ」であつたと書いてゐる。このクサイティング・サアプライズ」であつたと書いてゐる。このクサイティング・サアプライズ」であつたと書いてゐる。このクサイティング・サアプライズ」であつたと書いてゐる。このクサイティング・サアプライズ」であつたと書いてゐる。このクライマーたちに有利らしい事。等であるが、しかし、ローマニの山面からサウス・コルへ移る時の長いトラヴァスのある事。この箇所が、雪の狀態如何によつて甚だ危險なものとなる事が不利な點である。ウエスターン・クウムに入るに當つてアイス・フォルを乗り越え得るかは大きな問題である。かりに一イス・フォルを乗り越え得るかは大きな問題である。かりに一イス・フォルを乗り越え得るかは大きな問題である。かりに一クカーに入るに當つてアイス・フォルを乗り越え得るかは大きな問題である。かりに一ク大・フォルを乗り越え得るかは大きな問題である。かりに一くなる。この箇別は記述している。それをキャンプとキャンプとの間の連度通過し得たとしても、それをキャンプとキャンプとの間の連度通過し得たとして更々通るといふ事は危険を百重するも、

もモンスウン前の春が適當と考へられる、とシプトンは書いてだといつていゝだらう。從つてウエスターン・クウムに入るのだつたのである。又上部の雪の狀態のいゝのは一年中で春だけ

ther in North Wales or in the Himalaya, should be た。しかも、其の多くは今まで人々に全く知られなかつたもの 々は三ヶ月を此の上もなく、美しい 又變化に富んだ 國に過し しば(いや常に)密接に連結されてゐるのだ。)そして彼は「我 れてい」のだ。とはいえ、勿論、樂しみと事の成就とは、しば ト)の如何によつて、全く、その山登り(のねうち)は判定さ れようが、その山登りから與へられる樂しみ(エンジョイメン ノース・ウエルスでなされようが、あるひは、ヒマラヤでなさ だ。そして、私は信じるのだ、どんな山登りに於ても、それが linked"(われく、は山へ行く、それは、山が好きだからなの of course, enjoyment and achievement are often closely judged very largely by the enjoyment it affords, though, it; and I belive that any mountaineering venture, whe-に記してゐる。"We go to the mountains because we like シプトンは報告の終りに「今度の收穫のうちの一つ――しか 我々にとつては最も大切なものなのだが」として次のやう

誰でも、これ以上の事を望む事は出來ない」と述べてゐる。であつた。我々の仕事は探險し登驟する事にあつた。山登りは

×

又そのアイディアを起した頃から算へれば五十年の歳月はたつ が實際にこの山を目ざした一九二一年から三十一年を、そして 或ひは頂上へ達するかもしれないと思はれる。イギリスの人々 目ざしてゐる。いろ~~の山での狀態が彼等に味方をすれば、 のシプトン一行の入つたウエスターン・クウムからその頂上を 現在スウイッアランドの登山隊はエヴェレスへ――この昨年

てゐる。それについて、シブトンは、スイス・バァティの好運

の努力をした事自體充分に意義のある事である事を書いてゐる をねがい、同時に、イギリスが今までエヴェレストについて多年

のを私は他の所で贖んだ。(「會報」第一六二號望月氏記事参照)

イダマの了解を得られず、中止。 ・一八九三年と一九〇六年とにプロジェクトされたものはダラ

ラシアを通つてノース・コルへ達した。 Bury) ラクバラ・バス(22,000 ft.) 及イースト・ロンブク・グ ・一九二一年 (リコニサンス)——(リーダー Colonel Howard

Finch. 五月十九日にノース・コルの上 二五、〇〇〇呎にキャ Major E. F. Norton, Dr. T. H. Somervelle, Captain G. I. G. Bruce)。 クライミング・パァティ G. Leigh Mallory, ・一九二二年——(リーダー Brigadier-General the Hon. C.

ンプを設け、五月二十日に Mallory, Norton, Somervelle は

した。最後の六月七日の登攀はノース・コルに達する前に雪崩 はオキシジェン・エキップメントを使つて 二七、三〇〇呎に幸 二六、九八五呎に達し、五月二十五、二十七日に Finch, Bruce

によつて七人のボーターを失つて中止。

Odell. 六月二日に Mallory と J. G. Bruce が二五、〇〇〇 を使つて頂上に向つたま」歸つて來ない。 八日に Mallory と Irvine とがオキシジェン・エキプメント に達した。六月六日に Mallory, Irvine, Odell, Hazard が最 二六、八〇〇呎にキャンプを設けて六月四日に約二八、一二〇呎 呎にキャンプを設け、六月三日に Norton ≥ Somervelle が ain J. G. Bruce, J. de V. Hazard, A. C. Irvine, N.E. Lieut-Colonel Norton) Mallory, Dr. Somervelle, Capt 後のアタックを試み 二七、〇〇〇呎にキャンプを設けた後 六月 ・一九二四年——(リーダー Brigadier-General Bruce 後に

and. F. S. Smythe, P. Wyn Harris, L. R. Wager, J. L. Longl-・一九三三年——(リーダー Hugh Ruttledge) Eric Shipton,

イス・アックスを見つけたのだつた。 二人は二八、一〇〇呎に land が二七、四〇〇呎にキャンプを設けた。五月三十日 Harris と Wager が頂上に向つた。そこで Mallory か Irvine のア に渉る烈風に會ひ、五月二十九日 Wyn Harris, Wager, Long. 五月二十二日に 二五、七〇〇呎にキャンプを設けたが 一週間

遊した、十二時である。 六月一日に Smythe は一人で登攀、 め追ひかへされた。

- ・一九三五年(リコニサンス)──(リーダー Eric Shipton) Nyonno Ri range を十日間調査。西方からのエヴェレストへの途をさぐり、ノース・コル 二三、○○○呎 に達した。 二萬呎
- ・一九三六年(リーダー Hugh Ruttledge) 惡天候の ために二三、○○○呎以上に登れなかつた。F. S. Smythe, Eric Shipton, Wyn Harris.
- ・一九三八年――(リーダー W. H. Tilman)。Odell, Oliver, つた。 フルモンスウンのコンデイションの中で 二七、二〇〇呎つた。 フルモンスウンのコンデイションの中で 二七、二〇〇呎にまで登つた。

(以上の隊員の名前は全員のそれではない)

×

Expedition, 1951" (一九五一年十二月刊。十六頁。一シリン Byecial Supplement "Mount Everest: Reconnaissance Special Supplement "Mount Everest: Reconnaissance Special Supplement "Mount Everest: Reconnaissance Special Supplement" (一九五一年十二月刊。十六頁。一シリン

が)に據つたものである。地圖もその中のものに據つた。マリグ)に據つたものである。は圖もその中のものに據つた。写真がの記述の箇所以外殆んど全文シブトンが執筆してゐる。寫真が二十六出てゐるが、八、九頁にまたがる、ブモリの二萬呎から見たバノラマ・ヴュウ――左からノース・ピーク、ノース・コル、マウント・エヴェレスト、ローツエ、ヌブツェそして前面にアイス・フオルのある大きな寫真は正に "The Grandeur of Everest"である。(こゝにある挿繪はその寫真によつて山の輪廓を簡單に寫しとつたものである)。

島田氏を通じて、朝日新聞東京本社から了解を與へられた。當つて、記事の引用、原文の轉載又は地圖の模寫等については回に渉つて發表されたが、とゝに、それを要約して發表するに回に渉つを發表されたが、とゝに、それを要約して發表するに有の記事は朝日新聞社が、ジ・タイムズとの特約によつて昨

明日新聞の六月四日夕刊に「チョウ・ウョー峰を目指して」で出發する豫定とあり、隊員の中に再びボアディラン、リディフォドの名前が見える。これらの人々は明年一九五三年再びエヴェレストへ向う計畫である事もそこに記されてゐる。今年のスイス・パァティと此のシプトンのパァティとの詳しい報告にいづれ接する事を我々は樂しみにしてゐる。(一九五、二年六月)

## アンナブルナの初登頂

(一九五〇年)

職後のヒマラヤ登山界にエボック・メイキングなことは、ネスの登山者によつて初登頂されたことであろう。由來フランススの登山者によつて初登頂されたことであろう。由來フランススの登山者によったピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。職後フランスム遠征(ヒドゥン・ピーク)があるのみである。

「一大変に、本社のである。」である。

「中である」である。

「中である」では、本に若いる。

「中である」である。

「中である。

「中である。

「中である。

「中である。

「中である。

「中である。

「中である。

「中であ

ある。

かゝつてから餘り時日を費しすぎると云うのが彼らの得た結論の方法が眞劍に檢討された。そして、 從來の缺點は目的の山に三ケ月に亘る準備期間に、過去の三十に餘るヒマラヤ 遠征隊

たつた。そこで彼らは高處キャンブから一擧に登攀を試み、出たい、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したい、この第異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したい、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、この驚異的な成果に投ずる唯一の暗影は、登頂に成功したが、

ともかく戦前イギリスがエヴェレストで展開したような、多人數の比較的長期に亘る登山方法と全く 對蹠的なこの遠征のラッシュ・タクティックスが、登頂の重要な鍵であつたかどうか、またラッシュ・タクティックスが、登頂の重要な鍵であつたかどうか、またラッシュ・タクティックスが、登頂の重要な鍵であつたかどうか、またラッシュ・タクティックスが、登頂の重要な鍵であつたかどうか、されら新らしい問題を提供する 意味からもアンナブルどうか、これら新らしい問題を提供する 意味からもアンナブルとうか、これら新らしいの意味が、多種によって、その概要を記りです。 (挿入の 折込寫真と概念論はフランス山岳してみたいと思う。 (挿入の 折込寫真と概念論はフランス山岳してみたいと思う。 (挿入の 折込寫真と概念論はフランス山岳してみたいと思う。 (挿入の 折込寫真と概念論はフランス山岳

のシェルパを伴つた。
本ルの九人のフランス登山者からなり、アンタルキイ以下八名テレイ、クーツゥイ、ルビュファ、イシャク、ウドオ、ノワイテレイ、クーツゥイ、ルビュファ、イシャク、ウドオ、ノワイのシェルバを除し

だつた。

四月五日、主力は空路ラクノーへ飛び、荷物の再整備を行つ道の終點である Nautanwa へ輸送する準備が整えられた。 すっシス大使の厚意の下に舊デリーの驛頭に集積され、印度鐵一九五〇年四月四日、達征隊の貨物は一切、印度外務省と在印

PF3F ヨフィをよう。 ファラフィー・ファラファー・ファラファー・ファラファー・ファラファー・ファラファー・ファック山脈の裾に沿つて行くもので、途次 Butwal の村で彼ら境通過の旅の準備がなされた。それはヒマラヤの前山であるシワリク山脈の裾に沿つて行くもので、途次 Butwal の村で彼らは、ネパール政府から特派された G. B. Rana 氏に迎えられ案は、ネパール政府から特派された G. B. Rana 氏に迎えられ案け、ネパール政府から特派された G. B. Rana 氏に迎えられ案け、ネパール政府から特派された G. B. Rana 氏に迎えられ案

想像に絕した光景に驚倒された。 想像に絕した光景に驚倒された。 な長大なキャラバンとなつて Tansing へ向つた。Tansing 上れ、九人のフランス人、八人のシェルバ、一六○人のクーリーれ、九人の背によらねばならない。六噸に餘る隊貨は素早く分散さは人の背によらねばならない。六噸に餘る隊貨は素早く分散さ

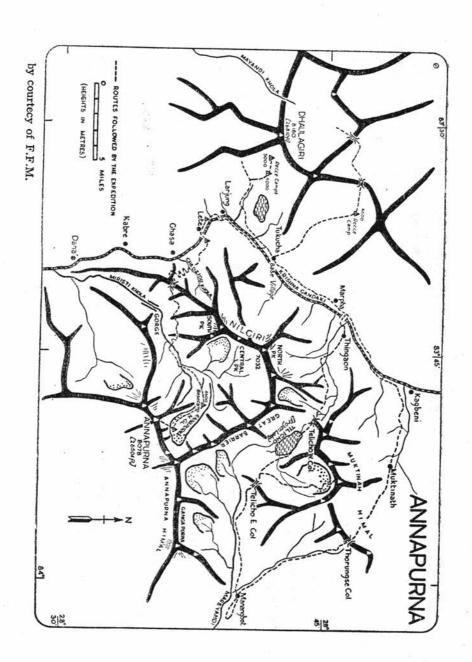
Butwal 迄はジープなどを用いたが、こゝからいよいよ荷物

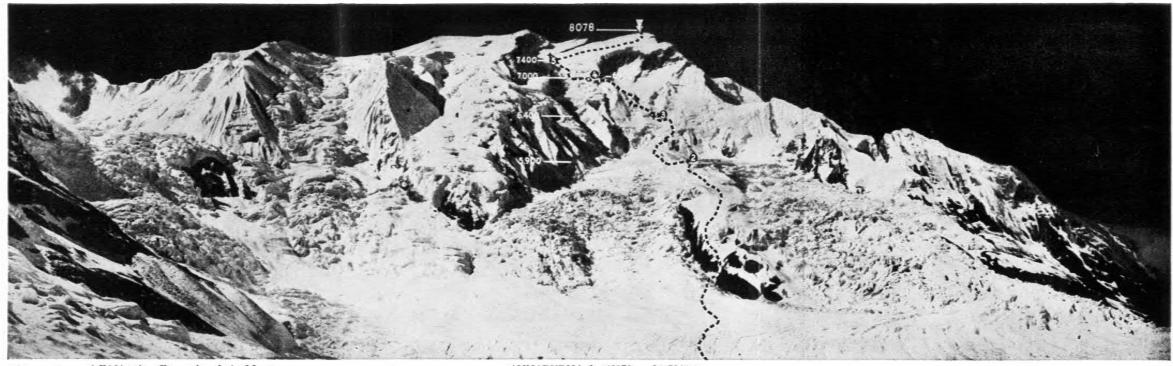
十二日、Kali-Krishna-Gandaki 川の廣々とした沖積土の高原それから二日間勞多い旅を續けて Tukucha へ向い、四月二

た。彼らが根據地と定めたのは Tukucha の部落の佛寺の近くへ達し、初めてダウラギリ(八一八〇米)の巨大な山容に接し

五月十五日迄の期間を踏査並びにダウラギリ若しくはアンナブルナの可能ルートの發見に充てた。この間、ダウラギリ及びアンナブルナの北及東山側を踏査し、ダウラギリの北には未知の谷があること、Tilicho の鞍部には長さ五粁の湖が存在することなどをたしかめた。從つて從來未知のまゝ放置されていたことなどをたしかめた。從つて從來未知のまゝ放置されていた此の地域の概觀がかなり正確に判つてきた。

策ではないので、十分な準備をもつたパーティに分れ、必要に 策ではないので、十分な準備をもつたパーティに分れ、必要に 策ではないので、十分な準備をもつたパーティに分れ、必要に まので、これを目標とした。だが全員が一遍に敗北するのは上 たので、これを目標とした。だが全員が一遍に敗北するのは上 たので、これを目標とした。だが全員が一遍に敗北するのは上 たので、これを目標とした。だが全員が一遍に敗北するのは上 たので、これを目標とした。だが全員が一遍に敗北するのは上





by courtecy of Fédération Française de la Montagne

ANNAPURNA 1 (8078m - 26, 504ft.)

by M. Marcel Ichac

		-2.5
**		

應じて山頂攻撃に移行し得る態勢がとられた。第一隊ラシュナで控え、第四隊は征頂の擧がおこつた時、隊長の指令で出發すて控え、第四隊は征頂の擧がおこつた時、隊長の指令で出發と、應じて山頂攻撃に移行し得る態勢がとられた。第一隊ラシュナ

とを追つた。アンナブルナ北面の壯觀はこの世のものとも思わ 出かけ、エルツォーグとテレイはサルキ(シエルパ)を伴つてあ に放棄した。一方ラシュナルとルビュファは北方の氷河偵察に し自ら登つて檢べたところ相當危險なことがわかつたので直ち は、これが可能性あると斷じたが、ついでエルツォーグが到着 河を越えて最高點へ達するものである。 氷壁やクレバスの迷路を經て 尾根にとりつく・最後に鎌型の氷 た)へ續く岩と氷の突起・急峻で崩落しそうな雪斜面を横切り い臺地・次の臺地(實際は下から見たより餘程大きい臺地だつ あつたからだ。想定されたルートは次の通りである。敷粁の廣 能性あるルートと決定した。それは最も短時日に登る可能性が れず、文字通り瞠目に價したが、四人は此の氷河こそ唯一の可 レイは、まづアンナプルナの北西山稜に 取り 付き 偵察の結果 つた雪を踏んで、 惡天候の四日間を一行は雲につゝまれ、滑りやすい足場に積 森林に路を拓きつゝ進んだ。ラシュナルとテ

エルツォーグは直ちにサルキを使者とし、「一日否一時間と

彼のこのような努力が並々ならぬ要素となつた。 芝の距離を僅か一日半で走りつゞけた。この遠征成功の蔭には番信賴に足る强者で、普通ならゆうに四日はかゝる Tukucha 番信賴に足る强者で、普通ならゆうに四日はかゝる Tukucha

ある。 CIを設置した。とゝからいよいよ技術的な困難が始まるので である。これが一番迅速確實な方法であると考えられたからで 間あとの四人は自力で各キャンプ用の食料備品を搬び上げるの あげてある天幕を上方へ搬んで次々とキャンプを設置し、 は四人で一班となる。エルッォーグとテレイの班は現在C■に 二班を作り、クーツゥイ、ラシュナル、ルビュファ、 け、エルツォーグとテレイとは各々二人宛のシエルパを伴つて 末、次の方法が最善であろうと断定した。 隊員の健康、 CIを前進根據地として、ついでエルツォーグは隊の装備食料 出來るだけ急速に登高をつゞけ、 るため、天幕二張と各自一五一二〇旺の荷をもつて出發した。 行はアンナブルナの基部高度約六○○○米にC■を設置す 登纂の困難と危險、時日の稀少性等を彼我熟慮の 例の廣い臺地へ達して素早く まづ隊を三班に分

り越える時もあつた。技術的には驚ろくにあたらなかつたが高かに急で、巨大なセラックがびつしり林立し、時にはこれを乗四日間で高處キャンプが設置された。傾斜は想像したより遙

を過ぎると天候はきまつて惡化し、新雪が前の足跡を消してし箇所は腰まで埋り百米を行くに何時間もかゝつたり、午後二時度のため非常な時間がかゝり且勞力は大きかつた。荷を負つた

まつた。

粉雪にとざされたクレバス中に設置された C■へは全員が疲労困憊して到着した。高度に馴れているシエルバさえ、六五○ 今な反應が現われた。或る者は激烈な頭痛になやまされ夜通し 存な反應が現われた。或る者は激烈な頭痛になやまされ夜通し 保られなかつた。これには醫者の任務をもつていたウドオが準 にした鎮静劑を與えた。食欲は全く減退し少量の食物を採るに さえ意志の力が必要だつた。夜分はヴィタミンB・C、アスピ リン、鎮静劑等の丸薬を多量に服用した。高處キャンプではシ エルバにも常時丸薬を與えたが、彼らの頭痛はなおらず、何も 食べられなかつた。

その兄弟アイラを伴つた。

C■へは難なく達せられた。CNは一旦引き拂われ急斜面と長い鎌尾根をかけて搬ばれ、新たに鎌型の氷河の發端にあるセラックの蔭に設置された(CNbis と呼ばれた)。セラックに四周をかとまれた新らしいCNは後日下降時に容易に發見され四周をかとまれた新らしいCNは後日下降時に容易に發見され四周をかとまれた新らしいCNは後日下降時に容易に發見されいてNの地點に引返し、其處に發した天幕に一泊して翌早は古いCNの地點に引返し、其處に發した天幕に一泊して翌早は古いCNの地點に引返し、其處に發した天幕に一泊して翌早は古いCNの地點に引返し、其處に發した天幕に一泊して翌早は古いCNの地點に引返し、其處に發した天幕に一泊して翌早

目指す左手への長いトラバースを終りCVの豫定地へ導く凹み 進まず、斜面は急で一足毎に崩雪を心配せねばならなかつた。 岩峰にCVを設置することだつた。雪は深く登高は遅々として よりも遅く着いた。その日の目的は、CIから見定めておいた とつたょけだ。早朝の凍結のため登路が悪くてサーダーは豫定 とつた。対だ。早朝の凍結のため登路が悪くてサーダーは豫定 とのため登路が悪くでサーダーは豫定 なかつた)。

目的の岩峰に近づいた時は今迄にない激しい疲勞を覺えた。 さいギリの山群も足下に沈み、「大 防 壁」の彼方にはチベットの高原が望まれ、ひとりダウラギリだけが高聳するだけとないのた。彼らは疲勞のため屢々足を休め、先頭を交替した。 つた。彼らは疲勞のため屢々足を休め、先頭を交替した。

た。

通らなかつた。あるだけの衣類をまとい、靴はしつかり抱いてでりやつと天幕を張つてCVを設けた。二人のシェルバはCN作りやつと天幕を張つてCVを設けた。二人のシェルバはCN作りやつと天幕を張つてCVを設けた。二人のシェルバはCNの下つたのでエルツォーグとラシュナルは唯二人だけとなった。苦勞してお茶を沸かし丸薬を服用した。岩場は氷にとざされしかも彼らを迎えたのは失望だけだつた。岩場は氷にとざされしかも彼らを迎えたのは失望だけだつた。岩場は氷にとざされ

度袋にもぐり込んだ。

をルックサックに入れた(不幸にもカメラは故障して用をなさて安眠出來なかつた。朝が訪れても疲勞は一向に回復せず、温いて、履くのにえらい努力を要した。出發に先立つて、チューかい飲物を作る元氣すらなかつた。 靴は蹇袋へ入れたが凍りつかい飲物を作る元氣すらなかつた。 靴は蹇袋へ入れたが凍りつかい飲物を作る元氣すらなかった。 単は蹇袋は一向に回復せず、温

時々堅いクラストを踏み破つて粉雪の中へ深く足を つゝ 込んつた。輕質金屬のクランポンの爪はよく堅雪に喰いこんだが、のでローブは用いなかつた。天氣は晴朗だつたが寒氣は凛烈だした。廣い鎌型の氷河は急ではあつたが、クレバスが餘りない

に出て左へトラバースしアンナブルナの絶饋に立つた。に出て左へトラバースしアンナブルナの絶饋に立つた。 窓に出頂の稜線が望まれ、急な頂に續いているかつたからだ。 窓に出頂の稜線が望まれ、急な頂に續いているの斜面が現われた。 それはまことに夢としか思われなかつた。 の斜面が現われた。 それはまことに夢としか思われなかつた。 の斜面が現われた。 それはまことに夢としか思われなかつた。 の斜面が現われた。 それはまことに夢としか思われなかつた。 なく締つていたのである。エルツォーグとラシュナルは 相接しよく締つていたのである。エルツォーグとラシュナルは 相接しよく締つていたのである。エルツォーグとラシュナルは 相接して喘ぎ喘ぎ時々息を入れながら苦しい 登りをつよけ、澄に尾根 て喘ぎ喘ぎ時々息を入れながら苦しい登りをつよけ、澄に尾根 ている はいま はいました。

を関し山頂からの展望を恣にし、寫眞をとるのに思わざる勞力を思わせた。 雲の切れ目からC∇がちらつと見えたが、直ぐ見候は惡化し、風がつき出し 雲がまきはじめてモンスーンの接近候は惡化し、風がつき出し 雲がまきはじめてモンスーンの接近を思わせた。 雲の切れ目からC∇がちらつと見えたが、直ぐ見をとわせた。 雲眞をとるのに思わざる勞力を思わせた。 雲眞をとるのに思わざる勞力をなくなつてしまつた。 やつとC∇へ着いたがエルツォーグの

手の指は白蠟のように白かつた。併しCVにはルビュファとテ

CVで二度目の夜を迎えたが、この夜もまた恐ろしい一夜だった。テレイとラシュナルが前の天幕に、ルビュファとエルッった。テレイとラシュナルが前の天幕に、ルビュファとエルッった。テレイとラシュナルが前の天幕に、ルビュファとエルッった。テレイとラシュナルが前の天幕に、ルビュファとエルッス無味に下降して仲間の援助を求める必要があつた。六月四日の朝速に下降して仲間の援助を求める必要があつた。六月四日の朝速に下降して仲間の援助を確認しながらCNへ向つて左へトラバース無味に下つた。午後の大部分は深雪の中を泳ぐようにしてCス無味に下った。午後の大部分は深雪の中を泳ぐようにしてCス無味に下った。午後の大部分は深雪の中を泳ぐようにしてC、無いで見ることが表したが、この夜もまた恐ろしい一夜だが記れていたので完全に雪眼にやられた。

ではなったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を をになったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を ではなったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を ではなったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を ではなったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を ではなったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を ではなったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を ではなったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を をになったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を をになったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を をになったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を をになったがCNは依然發見されず、附近のセラックの酸を

ていた。ラシュナルは裸足のまゝ下ろうと云い出し、少々いら立こうしてエルツォーグが穴の外へ出てみると 空はすつかり晴れた。靴がなければこれから先の下降は思いも及ばない。 約一時就等手素足で雪の中をさがした末やつと 二人の靴を發見した。 わられてみると 空はすつかり晴れるのを探すため暫く穴の中へ留まつた。 特にラシュナルと彼のものを探すため暫く穴の中へ留まつた。 特にラシュナルと彼の

前にシャッツが表われ、とれによつて四人の下降者は完全に死 型の氷河の頂にかゝりはじめたが、二百米も下ると突然彼らの その征服者に對して無慈悲な復讐をはじめていたのだ。霧が鎌 生死の境の彷徨以外のなにものでもなかつた。 アンナブルナは どうやら出發し得る態勢がとゝのつた。併しこの行進はまさに 論これに應じはしなかつた。彼らはCNにもしやシャッツかク らなかつた。エルツォーグは隊員の全滅を救わんため自分一人 の超人的な努力でエルツォーグの足がやつと靴に入つたので、 ーツゥイでもいればと大陸で叫んだが返事はなかつた。テレイ が残り他の三人だけで下るようテレイに命じたが、テレイは勿 たが、エルツォーグの固く凍結した足はどうしても靴の中へ入 行くにはまづ靴を履かねばならない。 ラシュナルはうまく履け 左手にあたつてCIVの天幕を見出すことに成功したが、其處へ に凍傷にやられていた。エルツォーグは周圍の地形をたしかめ に冒され、ラシュナルの足指とエルツォーグの手足の指は完全 ていた。ラシュナルは裸足のまゝ下ろうと云い出し、少々いら立 とうしてエルツォーグが穴の外へ出てみると空はすつかり晴れ つて足もとがふらついていた。テレイもルビュファも酷い雪眼

から解放された。

CN bis へ下るとクーツゥイも待機していたし、更に下のCN bis へ下るとクーツゥイも待機していたし、更に下のCりつくとが出來た。

以上はエルツォーグの筆になる報告を相當忠實に記したもの以上はエルツォーグの筆になる報告を相當忠實に記したもの以上はエルツォーグの筆になる報告を相當忠實に記したもの以上はエルツォーグの筆になる報告を相當忠實に記したもの以上はエルツォーグの筆になる報告を相當忠實に記したもの以上はエルツォーグの筆になる報告を相當忠實に記したもの以上はエルツォーグの筆になる報告を相當忠實に記したもの

氏の紹介がある。 氏の紹介がある。 氏の紹介がある。 氏の紹介がある。

- 《Annapurna, Premier 8,000》 par Maurice Herzog.
   (Préface de Lucien Devies) Paris: Éditions B. Arthaud. 1952. p. 300. 32 illus. Carte.
- 2. «Regards vers L'Annapurna» par M. Herzog et Marcel Ichac. (Préface de L. Devies). Paris: Éditions B. Arthaud. 1951. p. 97 [Photographies] carte.

望月達夫

## スコッ トランド隊の

## ガルワール遠征

一九五〇年 Scottish Mountaineering Club が初めてヒマー九五〇年 Scottish Mountaineering Club が初めてヒマールは、特に顯著な登頂の記錄とそ残さなかつたけれども、ヒマッは、特に顯著な登頂の記錄とそ残さなかつたけれども、ヒマッヤに未經驗な登山者にとつて特に重視されるべき 旅の 要素を、その計畫中に多くとり入れ、またモンスーンを巧みに回避を、その計畫中に多くとり入れ、またモンスーンを巧みに回避を、その計畫中に多くとり入れ、またモンスーンを巧みに回避を、その計畫中に多くとり入れ、またモンスーンを巧みに回避を、その計畫中に多くとり入れ、またモンスーンを巧みに回避を、その計畫中に多くとり入れ、またモンスーンを巧みに回避を、その計畫中に多くとり入れ、またモンスーンを明めている。

(Scottish Garhwal and Kumaon Expedition; by W.H. Murray——A.J. vol. LVIII. May 1951, No.282 pp. 49~66 ビルや。)

な小さい成功に憧れるような傾向が微塵も表われていないことことから、計畫自體が極めて慎重であり控え目であつて、速かの遠征隊のメンバーが總て初めてヒマラヤへ入る人々であつたに許價されているのだが、同じイギリス人でありながら、ことから、計畫自體が極めて関重であり控え目であって、連かにかける過去の質費から云ってイギリスの登山界は

反映しているようにも思われ、外面上の結果如何に拘らず、こは、slow but steady とも云う可きイギリス人の性格を如實に

の點は十二分に咀嚼してみる必要があろう。 速征隊は四人からなり、隊長の W.H. Murray は當時三十七 速征隊は四人からなり、隊長の W.H. Murray は當時三十七 でotland; Undiscovered Scotland の二著を世におくり且 アルプスの經驗も深かつた。彼はこの遠征の翌年シプトンに隨 アルプスの經驗も深かつた。彼はこの遠征の翌年シプトンに隨 アルプスの經驗も深かつた。彼はこの遠征の翌年シプトンに隨 アルプスの經驗も深かつた。 がはこの遠征の翌年シプトンに隨 アルプスの經驗も深かつた。 がはこの遠征の翌年シプトンに隨 アルプスの經驗も深かつた。 がはこの遠征の翌年シプトンに隨 アルプスの經驗も深かつた。 がはこの遠征の翌年シプトンに隨 アルプスの經驗も深かつた。 がはこの遠征の翌年シプトンに隨

計畫は次の六つの段階にわかたれた。

- (一) Rishiganga 及び Trisul Nalla を登路としてベタートリ・ヒマル (Bethartoli Himal, 20,840 ft.) に登撃を試みる。
- 「二) Dunagiri 部落の北東に位する Lampak 山群を偵察
- を登纂する。 を登纂する。
- (四) Girthi の峽谷をつめて Dhauli の谷から Gori の谷
- (五) ゴリの谷から Ralam Pass を越えて Darmaganga へ達する。

(六) パンチ・チュリを偵察する。

量の少い主脈の北側へ逃げ込むため(三)(四)の計畫がたてら(二)はモンスーン期の前に完了し、モンスーン期中は比較的雨ダウリの谷ではモンスーンの到來が六月末であつたから(一)

れ、(五)(六)はモンスーン期後に實施する豫定だつた。

与借用、一八ポンド)、一張はBC用の大型(一八ポンド)で、 大名を選拔した。(日給三ルービー、山では四ルービー)。 彼 八名を選拔した。(日給三ルービー、山では四ルービー)。 彼 本ンドの食料を携行したに過ぎず、テントは四張で内二張は高 地補給を建前としたから、高所キャンプ用として僅かに四四○ 地補給を建前としたから、高所キャンプ用として僅かに四四○ 地補給を建前としたから、高所キャンプ用として僅かに四四○ 地補給を建前としたから、高所キャンプ用として僅かに四四○

## ) ベタートリ・ヒマルとハヌマン

四ヶ月間の装備食料の全重量は約一、〇〇〇ボンドだつた。

行きその北側のコルから登頂を試みることゝした。 リの二峠を越えて九日目にダウリ河畔の Tapoban に着いた。 リの二峠を越えて九日目にダウリ河畔の Tapoban に着いた。 リの二峠を越えて九日目にダウリ河畔の Tapoban に着いた。 リの二峠を越えて九日目にダウリ河畔の Tapoban に着いた。 一九三四年シブトンがラタ峠(一四、〇〇〇呎)を越えた時も苦しい一日となつた程の深雪中の登りだつたが、その為めにも苦しい一日となつた程の深雪中の登りだつたが、その為めにも苦しい一日となつた程の深雪中の登りだつたが、その為めにも苦しい一日となつた程の深雪中の登りだつたが、その為めには追いなく一日でクーリーを Durashi へ導くことが出來た。

「を落したので爾後の行程を幾分變更しなければならなかった。デュラシから更に一四、〇〇〇呎の峠を越え、Dibrughetaた。デュラシから更に一四、〇〇〇呎の峠を越え、Dibrughetaた。デュラシから更に一四、〇〇〇呎の峠を越え、Dibrughetaた。デュラシから更に一四、〇〇〇呎の峠を越え、Dibrughetaた。デュラシから更に一四、〇〇〇呎の峠を越え、Dibrughetaた。デュラシから更に一四、〇〇〇呎の峠を越え、Dibrughetaた。デュラシから更に一四、〇〇〇呎の峠を越え、Dibrughetaた。デュラシから更に一四、〇〇〇呎の峠を越え、Dibrughetaた。であって、O〇〇呎の Dutiに達してクーリーの中から特に優秀なバス今後の旅行に連れること」した。彼ら六名はすべて西部ネバン今後の旅行に連れること」した。彼ら六名はすべて西部ネバン今後の旅行に連れることと、

次いでリシの難場を架橋で越え、トリズル・ナラを溯行して でルタートリ氷河のほとり高度 一二、○○○呎に BCを設置した。北面を眞近から偵察すると、例の北側のコルへ一本の大きな岩稜が延び上り北面を落下するアイス・アバランシュに對して保護の役割をしている。この岩稜こそまさに天興のルートであつた。彼らはCHをその基部に近く一四、五○○呎においた。あつた。彼らはCHをその基部に近く一四、五○○呎においた。 は Changabang, Rishi kot Dunagiri の巨峰が鮫の齒のように立ち並んでいた。その夜は降雪をみた。

五月三十一日、三人のクーリーを連れてその岩稜に登路を求めた。雪を冠つた岩尾根は重荷を持つたクーリーには困難であり、且高度馴致の不足が早速あらわれだした。 一七、○○○吹り、且高度馴致の不足が早速あらわれだした。 一七、○○○吹り、且高度馴致の不足が早速あらわれだした。 一七、○○○吹り、且高度馴致の不足が早速あらわれだした。 一七、○○○吹り、且高度馴致の不足が早速あらわれだした。 一七、○○○吹り、且高度馴致の不足が早速あらわれだした。 一七、○○○吹り、且高度馴致の不足が早速あらわれだした。 一七、八○○吹の鞍部に □を設置した。ワイアーとマッキンノンが森營の準備をしている間、マーリイとスコットは前方の偵察に向つたが、直ぐ前の尖塔を越した。ワイアーとマッキンノンが森營の準備をしている間、マーリイとスコットは前方の偵察に向つたが、直ぐ前の尖塔を越したの登響を思い止まつた。マーリイの言葉によるとモン・ブランの Col de la Fourche を思い出したそうだ。だがモン・ブラン南面の方がまだしも傾斜が緩いと云う。

にぶつかつたが、それを越えると今度は急峻な切れ込みに進路にぶつかつたが、それを越えると今度は急峻な切れ込みに進路を登つて韓線に達した。 次いで一、○○○呎登ると垂直の尖塔をつて稜線に達した。 次いで一、○○○呎登ると垂直の尖塔をつて稜線に達した。 次いで一、○○○呎登ると垂直の尖塔をつて稜線に達した。 次いで一、○○○呎登ると垂直の尖塔をつて稜線に達した。 次いで一、○○○呎登ると垂直の尖塔を

とゝから引返した。天候は再び悪化した。を阻まれた。それは山頂から僅か九○○呎の所だつたが彼らは

完全に歸路を見失つたが、かすかな焚火の臭いで漸く無事にBて二時間以上もBCをたづね歩いた。 夕闇に加えて降雪のためつさえこの東面の錯綜した地形のため 磁石を唯一のたよりにし午後四時半彼らが山稜を下り切つた頃は旣に霧が深く、あま

## 二) ランパク山群をうかょう

大月十日、一行は再びダウリ河畔のタボバンへ舞い戻つた。 アタの値段は六哩はなれたジョシマートの約半額で、鹽、グー アタの値段は六哩はなれたジョシマートの約半額で、鹽、グー アタの値段は六哩はなれたジョシマートの約半額で、鹽、グー アルと仲の良いチームをつくつた。

それから三日間一行はチベットの國境から南四十哩を流れるとっている路をとつて一一、八〇〇呎のデュナギリの部落へ達茂つている路をとつて一一、八〇〇呎のデュナギリの部落へ達して、彼らの目的はこの部落の北東に約十座の未登峰を擁してした。彼らの目的はこの部落の北東に約十座の未登峰を擁しているランパク山群を踏査することだつた。

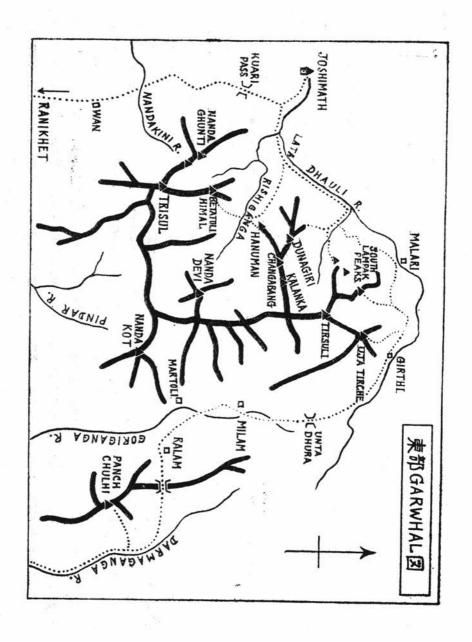
マーリイは直ちに食料とクーリーを村長にたのんだところ早

デュラの方面は一〇、〇〇〇呎の峻わしい北尾根となつている。

に決め、六月十九日、二十日に一三、六二〇呎と一四、七九〇呎に決め、六月十九日、二十日に一三、六二〇呎と一四、七九〇呎峰の初登頂をなした(六月十六日)。 では大きな障碍となつた。併しマーリイとワイアーは北東に位する一七、三八〇呎峰の初登頂を、スコットとマッキンノンはする一七、三八〇呎峰の初登頂を、スコットとマッキンノンはする一七、三八〇呎峰の初登頂をなした(六月十六日)。 彼らはモンスーンを避けるために根據地を更に北へ移すとと 彼らはモンスーンを避けるために根據地を更に北へ移すとと 彼らはモンスーンを避けるために根據地を更に北へ移すとと ならはモンスーンを避けるために根據地を更に北へ移すとと で決め、六月十九日、二十日に一三、六二〇呎と一四、七九〇呎と、村の背後の森連騰諾してくれたので、ラタのクーリーを返し、村の背後の森

## (三) ウジャ・ティルチェの登攀

の二峠を越えて美しい山路を北進してマラリの部落へ行つた。



返してヒナクルを越え最後のバットレスもチムニーを利して登アーとマッキンノンの二組に分れて綱を結び、快的な岩登を繰いるが、それが越せればあとは雪の山稜が續いているだけだ。彼いるが、それが越せればあとは雪の山稜が續いているだけだ。彼いるが、それが越せればあとは雪の山稜が續いているだけだ。彼との尾根の西面にルートを求めれば一八、〇〇呎で稜線にこの尾根の西面にルートを求めれば一八、〇〇〇呎で稜線に

**敞**に立つことができた。 **職**に立つことができた。 **職**に立つことができた。 **は**に立つことができた。 **は**に立つことができた。

「頂はせまく四人がやつと立てる廣さがあるだけだつた。下降時の腐雪を心配しながら二時十分頂上を去りマーリイが先頭になって下つた。太陽の熱がひどいため雪ばかりでなく氷の箇所なつて下つた。太陽の熱がひどいため雪ばかりでなく氷の箇所なって下降を續けると雪はもつと悪化してシュタイクアイゼンに塊となつて附着したので、マッキンノンを除いた三人はアンに塊となつて附着したので、マッキンノンを除いた三人はアンに塊となつて附着したので、マッキンノンを除いた三人はアンに塊となって附着したので、マッキンノンを除いた三人はアンをはづした。そして困難と緊張の後下の氷壁に着いたの様になっている。

は四時三十分だつた。それからは往路が危險なため一部ルートを變更し、丁度日沒質に最後のトラバースを了つて北山稜上の好全な地點に達した時は、空は冷え冷えと晴れ上り、西方には安全な地點に達した時は、空は冷え冷えと晴れ上り、西方には好別ででいた。皎々たる月光をあびて下りを急ぎCⅡに歸着したのは午後十一時十五分だつたが、岩と氷の尾根に十八時間のたのは午後十一時十五分だつたが、岩と氷の尾根に十八時間のたのは午後十一時十五分だつたが、岩と氷の尾根に十八時間の方を振りかえると、山體は月光に輝き雄大な北山稜は星につ方を振りかえると、山體は月光に輝き雄大な北山稜は星に向つて躍り上つているように見えた。

## (四) ギィルティの峽谷

に撃退され、ランバクのBCへ歸還したのは七月九日だつた。に撃退され、ランバクのBCへ歸還したのは七月九日だつた。一間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたが、二日間の悪天候にぶ吹のバットレスの眞下にC■を構えたが、二日間の悪天候にぶ吹のバットレスの眞下にC■を構えたが、二日間の悪天候にぶ吹のバットレスの眞下にC■を構えたが、二日間の悪天候にぶいのかつてテントに釘附けされ遂に退却を餘儀なくされた。一週間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びC■へ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びCーへ登り更に上方へ向つたがバットレスの脆い岩間後に再びCーへの買したの方に、ウジャ、ティルチウジャ・ティルチェの方に、ウジャ、ティルチウジャ・ティルチェの方に、ウジャ、ティルチウジャ・ティルチェの方に、ウジャ・ディルチェの方にありた。

物が咲き観れ、その芳香が満ちあふれていた。

・・ファルを發ち、輝く陽光の中を步き續けたが山腹には一面高山植を脈を越え、輝く陽光の中を歩き續けたが山腹には一面高山植を水りマルを發ち、マラリから十一名のクーリーと七頭の山羊を水里東のゴリガンガのミラムへ旅をすることだつた。七月十日ベ

一行の次の計畫はギルティガンガを通つてマラリを去る三八

一つの鞍部を越えると景觀は一變しキュオ・ガァドの流れが ギルテュに合流し、ランバ・コォト(一七、〇〇〇呎)が峨々とし た。しかし断崖と云つてもその所々には高山植物が咲き Hanging Garden of Himachal と呼ぶに相應しかつた。第一日に は四哩を行進し二日目には八つの支谷を渡つた。その一つには 、南から急奔する氷河の流れを渉ることだつたが、主脈の北 は、南から急奔する氷河の流れを渉ることだつたが、主脈の北 は、南から急奔する氷河の流れを渉ることだつたが、主脈の北 第に「山羊の路」になつたが、大した困難もなく日の終りには 第に「山羊の路」になつたが、大した困難もなく日の終りには

一四、〇〇〇呎に高まつた。 五日目にウンタ・デュラ(一七、六くなつたが氷河の流れが障碍に なつ たからだ。 併し高度は続く二日間に彼らは七哩半しか前進出來なかつた。 峽谷は廣許りだつた。

沙つて遂にサムゴンに辿り着いて其處に幕營した。 とがひしめいていた。峠を南へ 五、○○○呎 下り二つの氷河をとがひしめいていた。峠を南へ 五、○○○呎 下り二つの氷河をの残つた路にはチベット人に率いられた ヤクや羊や山羊や馬なの残つた路にはチベットからのかすかな 交易路に合したが、雪かつて遂にサムゴンに辿り着いて其處に幕營した。 途上ギルティの四○呎)を越えた時は雨や霙になやまされた。途上ギルティの四○呎)を越えた時は雨や霙になやまされた。途上ギルティの四○呎)を越えた時は雨や霙になやまされた。

翌七月十八日彼らは三哩を歩いて漸くミラムへ達したのである。

ッキンノンの休暇が終りをつげたので爾後の行動は殘りの三人い。一八九三年の昔、Kurt Boeckh 博士が歩いた記錄が唯一い。一八九三年の昔、Kurt Boeckh 博士が歩いた記錄が唯一開したのであつた。 開したのであつた。

(五) モンスーン中のララム・パス

が遂行すること」なった。

が、そのためには九月下旬の快晴が續く季節まで待たねばならのだつた。その峠からはバンチ・チュリを十分偵察出來るのだ八、四七〇呎)の六日の行程は、最初から彼らが幾分危惧したもミラムからダルマ溪谷のシブウへ越えるララム・デュラ(一

なかつた。併し高價な食料や人夫賃のためにこの遅延は許され

四○の未登峰に圍繞され接近が容易でない。しく勿論未だに未登峰である。しかもこの山群は更に三○乃至バンチ・チュリは莊麗無比の山群で、その登纂は極めて難か

し、又知る限りに於てはモンスーン期前にこれを越えた記錄は伴う。最近九年間と云うものララム・デュラを越えた者はないと四つの氷河があり、モンスーン期にはルート發見の困難性がゴリとダルマの分水嶺を越える三二哩の行程中には三つの峠

不とで彼らはララム・デュラのルートを放棄して南方のマンキリ及びソバラを迂回することにきめたが、増水のため橋がシャリ及びソバラを迂回することにきめたが、増水のため橋がに峠を越えたことのあるボーティア人 Delib Singh を連れることができたことだ。彼らは十一人のミラム・デュラを越えるることができたことだ。彼らは十一人のミラムのクーリーを雇ることができたことだ。彼らは十一人のミラムのクーリーを雇ることができたことだ。彼らは十一人のミラムのアンリーを放棄して南方のマンエ目に出發した。

つた。

翌朝それを越えて次の氷河まで進んで 一五、○○○呎の地點にで悪天候の中を Yankchar Pass (16,500 ft.) の下に暮營し、折れて一五、○○○呎の峠を越えララムの小村へ齎いた。 次い最初の日はゴリを九哩程下つてトラの部落へ行き、翌日東に

の夜天候が激變して霙は雷鳴を伴い雪崩が頻發したが、幸い夜暮營した。ララム・デュラはそこから二哩牛の地點だつた。そ

きた。それは約二〇、〇〇〇呎の二つの山と山との間のコルだ手に容易なルートを見出して正午には 峠の上に達することがであち半時間以上も立派にステップを切つた。四時間の後一行はもち半時間以上も立派にステップを切つた。四時間の後一行はもち半時間以上も立派にステップを切つた。四時間の後一行はもち半時間以上も立派にステップを切つた。四時間の後一行はもち半時間以上も立派にステップを切った。四時間の後一行はもち半時間以上も立派にステップを切った。四時間の道があったが左手に容易なルートを見出して正午には 中の上に達することができた。それは約二〇、〇〇〇呎の二つの山と山との間のコルだります。

着き彼らの計畫の最後の段階に入つたのである。 といこと屯していた雲霧が南西から波立ちはじめたが彼らは 下度良い時にとゝ迄達していたのである。向い側は遙か下の方 で達して、この牧地に休息の二日を避した。翌日更に花の咲き は Nipchukang 氷河のほとりに幕營した。翌日更に花の咲き なだれた草地を下つて Lassar Yankti (11,200ft.) のシブゥ みだれた草地を下つて Lassar Yankti (11,200ft.) のシブゥ なだれた草地を下つて Lassar Yankti (11,200ft.) のシブゥ なだれた草地を下つて Lassar Yankti (11,200ft.) のシブゥ なだれた草地を下つて Lassar Yankti (11,200ft.) のシブゥ は Nipchukang 氷河のほとりに幕營した。翌日更に花の咲き は Nipchukang 氷河のほとりに幕營した。 でパンチ・チュリの東麓にあたるダルマガンガ 畔のソナに辿り でパンチ・チュリの東麓にあたるダルマガンガ 畔のソナに辿り でパンチ・チュリの東麓にあたるダルマガンガ 畔のソナに辿り

### (六) パンチ・チュリ

彼らはソナ・ガァドを四分の一哩上つた流水の左岸にBCをとにせめてもの希望をいだいた。

● 次の日は雲上高く四座の雪嶺が望見され二二、六五〇呎の主峰は、その頂の兩側が何れも氷河となつて垂下していた。左手峰は、その頂の兩側が何れも氷河となつて垂下していた。左手は Meola 右手は Sona と呼ばれる氷河で下方は大きなアイス・フォールとなつて落ちていた。ルートはこの二つの氷河の何たら其の稜線迄とりつくことが出來るだろうか。よく見ると二つの氷河の間は巨大な絶壁なつている。若しこの棚に取り付たらアイス・フォールを巧みに避けて一六、○○○呎附近のソナ氷河に出ることが出來るだろう。そして更に約二〇、○○ワの北のコルへ達することは可能であろう。

いる小さな草地、高度 一二、二○○呎に C■を張つた。六日、八月五日、彼らはソナ・ガァドを三哩登り絕壁にくつゝいて

ールには左側稜に近く可能なルートが見出された。 間には木苺や草花が多かつた。 一六、○○○呎の雪原にCた。棚には木苺や草花が多かつた。 一六、○○○呎の雪原にCた。棚には木苺や草花が多かつた。 一六、○○○呎の雪原にC

は到る所に落石の跡があつた。彼らはこの光景を前にして遂に そこから岩場へは三〇〇呎許り氷壁がのし上つている。 氷面に る絶壁が彼らの眼前にはつきりと現われた。それは高さ約一、〇 はその日の午後おそく偵察に出かけた。程なくコルを衛つてい 三人だけで荷を負つて登り續け高度一九、〇〇〇呎のクレバス 注意が要求された。最後のアイス・フォールの上でドテイアル じめたが太陽の熱は强く一行は熱氣にすつかり元氣をそがれ **呎許り崩れた岩を登つて綱を結び、支氷河の中心へむかつてク** ○○呎の垂直の壁で、下方にはベルグシュルンドが口を開き、 コルへCVをうちたてる豫定だつたので、マーリイとスコット に近い小平地にCIVを設置した。彼らの計畫では翌日更に北の は遂にこれ以上の登攀に堪えなくなつたのでC■へ下山させ、 た。氷河には雪が積つていたのでかくれたクレバスには細心の のアイス・フォールは中心を樂に乗りきつた。雲が再び捲きは 直登し右手のクレバスを避けて左手よりに一哩程登つた。途中 レバスを縫いつ、長い間ステップを切つた。それから主氷河に 八月七日、雲と霙のために出發は七時半となった。一、五〇〇

退却を決意せざるを得なかつた。

未熟だからこの山にはシェルバやボーティアを使う可きだとも またドティアルのクーリーは岩場には優秀だが、氷雪の經験が チ・チュリは登頂の可能性が大きいとマーリイは云つている。 ルの城壁程には悪そうではなかつた。このルートによればパン れて見えなかつたが、附近の傾斜や角度から判断すると北のコ の氷河はそれ程困難ではなかつた。南のコルは一部分さえぎら 點に達した。これがメオラへ入る唯一のルートであろう。上部 とスコットは中央の絶壁にルートをとつて一六、〇〇〇呎の地 た。そこでワイアーはクーリーをつれてBCへ下り、マーリイ フォールの上部約一六、〇〇〇呎に取り付き、そこから南のコ が前に作つておいてスケッチによると、メオラ氷河のアイス・ 云つている。 ルへ出てバンチ・チュリの南山稜を登る別のルートが考えられ 八月八日は終日CVで過し、九日にCⅡ迄下つた。マーリイ

なれたアルモラ迄は十三日を要する。そして二十七日にラニケ ートへ歸還することが出來た。 八月十三日一行はダルマガンガを下りはじめた。一三〇哩は

pp.282. with 38 illus. and 11 maps. 1951, Dent, London. W.H. Murray: The Scottish Himalayan Expedition. 尙本遠征に關しては次のような書物が刊行されている。

望 月

#### 圖 書室使用規定

九五二年五月一部改正九五一年四月制

二、會員は會員證(當該年度)を呈示すること。 一、圖書室の利用は會員に限る。

四、開室日時 三、會員以外の者は、會員の紹介又は同伴の場合に限る。 五、休室日 日曜祭日及毎年十二月三十日より 翌年一月五 火木土 午後一時より午後六時迄。

六、圖書の閱覽は、備付の閱覽票に記入し 係員に呈示して 日迄。

圖書を受取り、閱覽後は閱覽票を添えて返還すること。

岡書は貸出をしない。

七、團體の會合に利用する場合は左による。 使用者は本會々員の所屬する山岳關係團體たること。

2 人員等を申出て承認を受けること。 使用者は豫め總務擔當理事に使用日時、

目的、

使用料 使用後は直ちに使用料を納入すること。 十人以下一回一五〇圓、 十人を超過するとき

冬季ストーヴ使用期間中は一回につき 五〇圓の燃料費 を納入すること。 一人を増す毎に一五圓を加える。

八、宿泊は當分之を中止する。 使用日時 火木土 午後六時より九時迄。

以

上

理理會

庸之<sup>和</sup>爾三

入島伊藤神佐高石村千林堀松慎 澤田秀 島谷野木原木谷 五敏 勇正 明巽郎男恭一孝嚴盆助夫一郎恒 灘 今 小 鈴 谷 藤 井 波 田 野 木 口 井

山今三沼 崎 西 田 <sup>井</sup> 春錦幸太 雄司失郎

篠成津辻

一郎幸俊吉平

後田織村辰望 藤口內山沼月

清 研 正 現 運

幹二信雅廣達 次 郎 彦 美 吉 夫

軍岩周莊 治雄二

堀 紫 秀 玉

田瀬田

三太

一收郎郎

池貴尾伊

知武喜十

理理會

主監

主 監 專

治

屋

教

李 事 石 原 金 唐 原 全 金 三太

教治一收郎郎

枚 (山梨) 屋 健池中高伊 一田田川藤 知勇四十

幸吉郎郎 (富山 (信濃)

西山伊藤神安加金高千林谷堀松旗 郎雌郎男恭郎安郎孝助夫吉一郎恒

篠今三沼渡杉山田村織藤成 田西田并邊本田口木內井瀬 軍錦幸太公義二二庸信運岩 治司夫郎平信郎郎盆意平雄 沼舟辰後村望伊 入島津辻 倉橋沼藤山月藤 澤田田 文 周 莊 二明廣幹雅達 明巽二一 郎賢吉次美夫愿



絲



#### 明治八雪一

明乳ペニシリン 明 治 乳 業



あなたの"時"が とび去つていきます

保險は 今日の問題です

三井の保険は あなたの日常生活に 安心を與え よりよき明日をお約束 いたします

當社では 皆様の御希望に應するため 尤も新しい仕組で 夫々特長をもつた 掛金のやすい生命保険を 下記の通り 販賣しております

> 満期の自由な……希望保險 老後のために……養 老 保 險 お子様のために……愛 兒 保 險

不時の災害に備え……定 期 保 險 (特約)

御家庭むきな……月掛保險

なお お勤めの皆様には掛け易い "團體月掛保險" の 制度もあります 詳しいことは何なりとお氣輕に最寄 りの支針へ お尋ね下さい

東京・日本橋



相互組織



## 群小を指数指令留野

ウキスキーの酸造に最も適した氣溫、濕度の 北の國余市で よい水・よい麦・よい空氣 がしつくりと鎏合して酸され更にウオークの 樽で数年間熟成した本格酒です



角壜 至1250 ★ 新角ビン 至380 ★ ポケツト爆 至150

資本金五億二十万円

原締役社長 高田 五郎 東京都港区芝海岸通 — — 五郎 一二五郎



責出し中



「ロ 5000円期間2年5年最高利廻り元本確実無記名

案內書進呈

三并信託銀行

#### スキー靴 登山靴

#### 專門製造

#### 森田靴店

東京都文京區湯島天神町三の十九

東京都千代田區神田神保町三ノ一二 電 話 九 段 (33) 6696 (呼出) 専 修 大 學 前

電話下谷(83)1794番

キスリング型ザツク		
No. 3 小型 1.66×2.3····································	.00	
No. 4 中型 1.8 ×2.5····································		
No.5 大型 2.0 ×2.8····································	.00	
No. 6 特 大 2.2 ×2.8····································	.00	
ウインドヤツケ A¥ 3,000		
B ·················¥ 2,300.	.00	
ハイサツク		
キスリング兩側ポケツト付	1,800.00	
// D 式··································	1,500.00	
ピッケル札幌門田作		
尺 モ ノ ¥ 3,300.00 尺1寸モノ ¥	3,400.00	
リ ン グ 辛 250.00 皮サック 辛	450.00	
アイゼン門田作		
各號共八本爪¥	3,300.00	
登 山 靴		
最優秀品A	7,500.00	(金元別)
鋲 1 足分約 — — — — — — — — — — — — — — — — — —		(201)37
山とスキー用具は全般に御用命承ります		



Jamamoto

#### 山とスキー用品

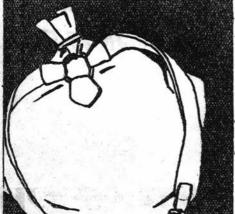
(カタログ贈呈)

#### 山本運動具店

京都市中京區柳馬場四條上 TEL.本局 2298

キスリング サブザツク





#### 一澤帆布加工所

京都市東山區東大路 古門前上ル西側 電話祇園 (6) 2502



頂上を征服する 最後の頑張りは 心臓です。

2~3 時間前に 3~6 錠をのんで 置けば疲れを知 らずに登ることが 出來ます。

(詳細説明書進呈)

東京日本橋・大阪・福岡



心

臓

藥

(製法特許

B66 1○○園・1006 1○○園

Sedteer Uodt .

# HOS ONO



# R. H. Migues Go., LTD. OSAKA-TOKYO R. TRADE MARK

支店・東京 神田小川町



本店・大阪 淀屋橋

#### 50年奉仕の歴史!

第一相互は 明治 35 年 9 月 首唱者 矢野恒太により わが國最初の相互組織 の保険會社として設立されました

「第一」という名は一最初のもの一という意味でつけられました

自來50年 契約者すなわち「社員」の利益を第一として經營を行い 常に「量より質」・「確實・低廉・親切」をモットーとして同業の刺激となり模範となることを心掛けて來たのであります 幸いにして廣く各方面の御共鳴と御支援をいただき計型は發展の一途をたどり 今日ではわが國の代表的保険會社としてその名を知られるにいたりました

☆ と き も 保 険☆ ☆ 新 種 特 別 養 老 保 険 ☆

第一生命

★3月より保険料を引下げて奉仕しております (案内書贈呈) 本社・東京・日比谷

#### すべての御會合に! 御 宴 會 に!

御婚禮はゼピ富國で神殿式場、衣裳、鹭等すべて完備

日本料理北京料理

ズス都電東京港下車

2



四 町 下 車

電話三田 (45) 3125~6

#### 創業 50 年

あなたの將來と御家庭のため 生命保險のお加入をおすすめいたします 當社では新種保險を發賣いたしまして 引下げた安い保險料で奉仕しております

堅 實 主 義 加入者本位の



本 社 大阪 土佐堀東京總局 東京 日本橋

PRICELIST進呈 登山汉华一县

京中央区日本橋区户稿17至523

#### 天 幕 (夏,冬用各種)

リュックサック マット(ヘヤーロック) シュラーフサック ウインドヤッケ オーバーシュー 等

#### 製造販賣

日本山岳會ネパールヒマラヤ登山隊 先發隊の天幕その他は全部弊店にて 製作納入致しました

各大學實業山岳部御用

#### 吉田喜義商店

東京都杉並區中通町一(荻窪驛北口下車)電話 荻窪(39)0990番(呼出)

定評ある

型数 PRICELIST進呈 ヒマラヤ遠征隊湖用 山友社



スポーツ用品

IL	愛	4	1	良	V
て	用	な	b	N	つ
居	を	ざ	そ	運	て
b	御	Ē	ろ	動	8
ま	待	0	之	具	11
す	5	御	7	を	

スポーツはあなたを健康にします

)po2\$5

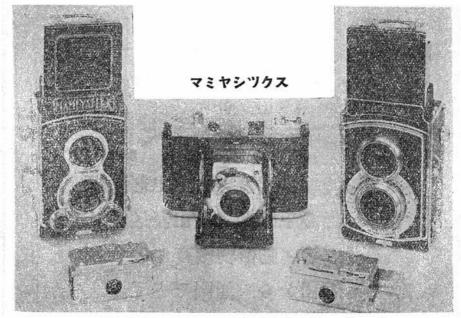
- 本 店 東京都中央区日本橋通二丁目四番地 T E L 日 本 橋 (24) 6 9 9 4
- 工 場東京都台東区松葉町七番地 TEL淺草(84)6868

00°

# 信頼の出来すてくや製品

マミヤフレツクス オートマツト

マミヤフレツクス II 型



マミヤ16

マミヤスーパー 16







## 沙留航空營業所?

電話一つで!

丁寧。スピーディー

航空に關する一切の御相談は

### 汐留へ

旅客 - 渡航手續から羽田出發迄親切に 賃物 - 通關手續から輸出發送迄迅速に 其の他!動植物檢查なども行ひます 輸入 - 羽田から - 通關そして皆様のお 店迄。迅速に

東京都港區芝汐留無番地日本通運株式會社汐留支店

#### 汐留航空營業所

代表番號 4916—(5)

電話銀座 (57) " 5176—(5) 直通 (57) 4029

" 5786-(5)

神

田

龍 名 館 本 店 吳服橋

館

新

業

東 京 築 驛 開

八 重 洲 口 1 b Ŧ. 分

小宴會

中央區日本橋具服橋際

電

話

日

本

←橋 (24) 二〇一一

0 御 相 談

1=

ま

應

日本橋吳服橋二ノ三 電話日本橋4分〇六五

#### PROVISIONS & WINES

贈って喜ばれる.... 外國商品のお買物なら

### 明治屋~

各國有名商品が皆様の御用命を お待ち申上げてをります

> 食料品 洋酒類 化粧品繊維品 雑貨等

又テイータイム お食事には是非 スナツクバーを御利用下さい

本支店所在地

東京(京橋、丸ノ内、銀座)横濱、名古屋、京都 大阪、神戸、門司、福岡、仙臺、札幌

本 社: 東京都中央區京橋2の4 TEL (56) 6111~8

MEDIMAOSS

火災、 硝子、 船舶、 貨物、 信用、 勞災、 運送、 航空、 自動車、 保證の各種保險 傷 害、

盗

難

店 東京 都 干 代 田區 大 手町 目 番 地

店 電 札 話 丸 函館 0 金澤、 秋田 内 (23)仙臺、 代 前橋、 京都、 横濱 大阪、 靜岡

高松、

福尚、

熊本

支

月刊山岳雜誌

- 1. 一番氣のきいた山の雑誌です
- 2. 内容は一番良心的で既に定評があります
- 3. 毎月月始めに正確に発行されています
- 4. 定価 65 円は内容体載に逆比例の値 段です
- 5. 名書店,百貨店,運動具店,登 山用具店などで売つています
- 売切のとき、バックナンバーのご注文は本社へ直接申込んで下さい
- 7. 確實に月々入手されますには、月極めで本社出版業務 課へ申込んで下さい。振替 用紙を差上げます

発 行 所

中部日本新聞社

名古屋市中区御 本町通 2の24 電話本局1291-6番 振替名古屋58**54**3番



#### Щ 投 稿規 定

はない。 投稿は誰でも自由である。日本山岳會員である必要

原稿の採否は山岳編集委員會で決定する。

原稿は返却しない。

紀行には成る可く概念園を添付すること。 研究並に紀行にはその概要を付けること。

寫眞は光澤印畫紙に燒付け、必ず説明を付けること。

編集者は原稿の一部を削除又は訂正することが 地名、人名、數字、外國語は特に明確に記し、特殊 な地名、人名等には必ず振假名を付けること。 あ

校正は編集者に一任されたい。

る。

東京都千代田區神田駿河臺四 日本山岳會「山岳」編集部 ノナ

> 發 賣

> 所

會株 社式

茗

送 b

先

望 田 月 躙 辺 達 岩 主 夫 雄 計

本號編集委員

九五二年十月二十日発行

定

価

四

0

O 円

東京都千代田區神田駿河合四ノ六

發

行 所

日 本

Щ

本 望 Щ 岳 會 内

H

月 達

夫

發編

行集

者兼

報

印

刷

者

株

式 港 會 DE.

社 赤

技

東 京 都

坂

溜

池

Ŧi.

堂

東京都千代田區神田駿河臺ニノー

堂

溪

振替口座東京二四、七二三番電話神田(25)二、○四四番

本誌掲載の記事、 寫眞及地圖の無斷轉載を禁ずる。





The Journal of
The Japanese Alpine Club

#### SANGAKU

Vol. XLVI-XLVII 1951-2